

Oracle® Hyperion Planning

管理者ガイド

リリース 11.2

F28874-04

2020年3月

Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド、リリース 11.2

F28874-04

Copyright © 2001、2020、Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

[コピーライト文](#)

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて.....	xv
ドキュメントのフィードバック.....	xvii
1 Planning の使用	
Planning について	1-1
Planning の機能	1-1
新機能に関する重要な情報	1-2
Smart View	1-2
Planning Web クライアント	1-2
EPM Workspace	1-2
ライフサイクル管理	1-2
Essbase	1-3
Financial Reporting	1-3
ビジネス・ルール	1-4
予測プランニング	1-4
サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス	1-4
2 Planning スタート・ガイド	
Planning アプリケーションについて	2-1
Essbase の開始	2-2
Essbase の操作の考慮事項	2-2
Planning フォームでの暗黙的な共有の理解	2-3
Essbase の複数のサーバーへの接続	2-3
リレーショナル・データベースの起動	2-4
SQL リレーショナル・データベースの最適化.....	2-4
アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定	2-4
JDBC ドライバの変更	2-7
JDBC 接続プールの構成	2-8
Smart View メッセージの制御.....	2-8
新しい Planning メンバーを Smart View で表示	2-9
アプリケーション・ホーム・ページの設定.....	2-9

バックグラウンド処理の設定	2-10
ビジネス・ルール of 起動ログ・プロパティの設定	2-11
データ検証プロパティの設定	2-12
セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定	2-13
Planning フォームでの Smart View セル・フォーマットの制御	2-14
アプリケーションのしきい値の制限の設定	2-14
EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス	2-17
Planning ユーティリティの操作	2-18
Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制	2-19
Planning ユーティリティのテキスト・ファイルについて	2-20
UNIX での Planning ユーティリティの実行	2-20
EPM Oracle インスタンスについて	2-20
アプリケーション・サーバーの使用	2-21
インスタンスとクラスタの更新について	2-21
Planning および Essbase を閉じる	2-21

3 アクセス権限の設定

アクセス権限のレベル	3-1
アクセス権の割当てが可能な Planning のアーティファクト	3-1
アクセス権限タイプ	3-2
ディメンションのアクセス権限の使用可能	3-3
メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て	3-4
アクセス権の追加、編集および削除	3-4
共有メンバーへの有効なアクセス権限について	3-6
フォームとフォルダへのアクセス権の管理	3-7
フォームとフォルダへのアクセス権の割当て	3-7
フォームおよびフォルダへのアクセス権の追加、変更および削除	3-8
アクセス権限のインポート	3-10
アクセス権限をインポートする場合のパフォーマンス向上	3-13
アクセス権限のエクスポート	3-14
アクセス権限のレポート	3-17
レポート・オブジェクトの選択	3-18
レポート・オプションの選択	3-18
アクセス権限レポートの操作	3-19
監査証跡の設定	3-19
追跡されたアクションの例	3-21
監査レポートの表示とクリア	3-21
セキュリティ・フィルタの管理	3-21
プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期	3-22
ユーザーとグループ・アイデンティティの移行	3-24
ビジネス・ルール・セキュリティの移行	3-24
古いユーザー記録の削除	3-26
Financial Reporting でのアクセス権限の設定	3-26

4 Planning データベースの管理

アプリケーションのロック解除	4-1
ブロードキャスト・メッセージの使用	4-1
使用統計の表示	4-2
アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ	4-3
為替レートの管理	4-6
為替レート表の作成	4-6
為替レート表の編集	4-6
為替レート表の削除	4-8
通貨換算の管理	4-8
通貨換算計算スクリプトの操作	4-8
パフォーマンスの最適化	4-9
ディメンションの順序変更について	4-9
サポート詳細キャッシュのメモリー割当て	4-10
データおよびインデックス・キャッシュ・サイズの構成	4-10
その他の最適化のヒント	4-10
アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ	4-11

5 データとメタデータのインポートおよびエクスポート

概要	5-1
動的メンバーのロードについて	5-1
ロード・ツール	5-2
アウトライン・ロード・ユーティリティの操作	5-2
コマンド・プロパティ・ファイル	5-3
ロード・ファイルの生成	5-4
フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート	5-9
リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート	5-12
Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエク スポート	5-18
Planning アプリケーションからリレーショナル・データ・ソースへのメタデータのエク スポート	5-21
アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ	5-24
ディメンション・プロパティ	5-37
Planning インポートおよびエクスポートの操作	5-58
Planning インポートおよびエクスポートの実行	5-58
ファイルからのメタデータのインポート	5-60
ファイルからのデータのインポート	5-62
ファイルへのメタデータのエクスポート	5-64
ファイルへのデータのエクスポート	5-65
EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリのファイルのクリア	5-65
Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする	5-65
Administration Services からロード	5-66

ファイルの例.....	5-67
6 フォームの管理	
フォームについて.....	6-1
フォーム・コンポーネント.....	6-1
フォームの設計に関する考慮事項.....	6-2
単一のフォームの作成.....	6-3
フォーム・レイアウトの設定.....	6-4
フォームの精度およびその他オプションの設定.....	6-13
非対称の行と列の作成.....	6-14
式の行と列の追加.....	6-15
単一のフォーム・ページと視点の定義.....	6-16
フォーム定義のインポート.....	6-17
複合フォームの作成.....	6-20
複合フォームのレイアウトの設定.....	6-20
複合フォームのセクション・プロパティの設定.....	6-23
複合フォームの視点およびページ・ディメンションの設定.....	6-25
マスター複合フォームの作成.....	6-25
複合フォームの埋込みチャート.....	6-27
特定のタイプのフォームの設計.....	6-29
複数通貨のフォームの設計.....	6-29
ドリルスルー情報に使用するフォームの設計.....	6-29
式の行と列を使用したフォームの設計.....	6-30
データ検証を使用したフォームの設計.....	6-30
グローバル仮定を使用したフォームの設計.....	6-30
ローリング予測のフォームの設計.....	6-30
フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作.....	6-33
フォームとフォルダの選択および表示.....	6-33
フォームのプレビュー.....	6-34
フォーム定義の印刷.....	6-34
フォームの検索.....	6-35
フォームの編集.....	6-36
フォームの移動、削除および名前変更.....	6-37
フォーム定義のインポートとエクスポート.....	6-37
ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定.....	6-39
グリッド診断の使用.....	6-40
ビジネス・ルールの使用.....	6-40
Smart View でのセル・フォーマットが Planning で持続する方法.....	6-52
代替変数の操作.....	6-53
ユーザー変数の操作.....	6-53
7 メンバー・セレクタの使用	
メンバーの操作について.....	7-1

メンバーの選択	7-1
ワイルドカードを使用した検索	7-4
メンバーとしての属性値の選択について	7-5
フォームのメンバーの選択について	7-7
メンバーとしての代替変数の選択について	7-8
メンバーとしてのユーザー変数の選択について	7-10
8 データ検証の管理	
データ検証ルールの作成および更新	8-1
セルのフォーマットと移動パスの設定	8-4
データ検証ルールの表示	8-5
データ検証ルールの評価および実行の順序	8-5
ルール・ビルダーによってサポートされている条件	8-6
IF 条件値	8-7
THEN 条件値	8-14
RANGE 条件値	8-15
データ検証の条件演算子	8-16
データ検証ルールのシナリオ	8-18
シナリオ 1	8-18
シナリオ 2	8-19
シナリオ 3	8-20
シナリオ 4	8-21
シナリオ 5	8-22
9 予算編成プロセスの管理	
予算編成プロセスについて	9-1
プランニング・ユニット	9-1
レビュー・プロセス	9-1
プランニング・ユニット階層	9-2
データ検証ルール	9-2
タスク・リスト	9-2
承認通知用電子メールの設定	9-2
予算策定プロセスの定義	9-3
承認の役割	9-3
承認プロセス	9-4
承認操作およびデータ検証	9-4
レビュー・プロセスの開始とサポート	9-4
プランニング・ユニットの注釈の印刷	9-5
プランニング・ユニット階層の管理	9-6
プランニング・ユニット階層の作成	9-6
プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て	9-12
プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択	9-13
プランニング・ユニット階層の編集	9-13

プランニング・ユニット階層の削除および名前変更.....	9-14
プランニング・ユニット階層の使用状況の表示.....	9-15
プランニング・ユニット階層の同期.....	9-15
プランニング・ユニット階層のエクスポート.....	9-16
プランニング・ユニット階層のインポート.....	9-17
プランニング・ユニットの移動パス.....	9-18
プランニング・ユニットの移動パスの変更.....	9-18
プランニング・ユニットの移動パスのデータ検証ルール設計の考慮事項.....	9-20
タスク・リストの管理.....	9-20
タスク・リスト・フォルダの操作.....	9-21
タスク・リストの操作.....	9-21
タスク・リストへの指示の追加.....	9-22
タスクの追加と定義.....	9-22
タスク・リストへのタスクの追加.....	9-22
タスク・リストの編集.....	9-25
Planning ページへのタスクのリンク.....	9-27
タスク・リストへのアクセス権の割当て.....	9-28
タスク・リストのインポートとエクスポート.....	9-30
データのコピー.....	9-31
セル詳細のクリア.....	9-32

10 アプリケーションの操作

フォームとフォルダの管理.....	10-1
フォルダの作成.....	10-1
フォルダの操作.....	10-2
プリファレンスの設定について.....	10-2
個人プリファレンスの設定.....	10-3
アプリケーション・デフォルトの設定.....	10-4
システム設定の指定.....	10-5
Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て.....	10-6
メンテナンス中のアプリケーションの使用制限.....	10-6
MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限.....	10-7
カスタム・ツールの指定.....	10-9
表示オプションの設定.....	10-9
印刷オプションの設定.....	10-9
レポート用のアプリケーションのマッピング.....	10-9
レポート・アプリケーションについて.....	10-10
レポート・アプリケーションの作成.....	10-10
レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング.....	10-11
アプリケーション・マッピングの定義.....	10-11
ディメンション・マッピングの定義.....	10-12
視点の設定.....	10-13
データ・オプションの設定.....	10-14

デフォルト・メンバーの検証ルール	10-14
データのプッシュ	10-15
マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能	10-17
マッピング・アプリケーションと代替変数	10-18
レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加	10-18
レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集	10-19
レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除	10-20
SQL を使用してアプリケーション情報を削除	10-20
勘定科目注釈の削除	10-20
シナリオに関するサポート詳細を削除	10-21

11 メニューの操作

メニューの作成と更新	11-1
メニュー・アイテムの操作	11-1
メニュー・アイテムの追加または変更	11-2

12 Planning アプリケーション管理の操作

Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの作成について	12-1
Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定	12-1
アプリケーションの管理	12-1
データ・ソースの管理	12-7
アップグレードの管理	12-10
アプリケーション・モニターを使用したパフォーマンスのモニタリングおよび最適化について	12-13
仮定	12-14
アプリケーション・モニターの機能	12-14
アプリケーション・モニター・グラフの使用	12-14
アプリケーション・モニターの警告およびエラーしきい値の制限の設定	12-15
アプリケーション・モニターの起動	12-16
最適なパフォーマンスのためのアーティファクトの変更	12-16
別名表の操作	12-17
別名表について	12-17
別名表の作成	12-18
別名表の編集または名前変更	12-18
別名表の削除	12-18
別名表のクリア	12-19
別名表のコピー	12-19
デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定	12-19
ディメンションの操作	12-20
ディメンションの概要	12-20
ディメンション階層の操作	12-21
メンバーの祖先の表示	12-24
アプリケーション内でメンバーが使用される場所の判別	12-24

カスタム・ディメンションについて.....	12-24
エンティティについて.....	12-26
基本通貨.....	12-27
勘定科目について.....	12-27
勘定科目、エンティティ、プラン・タイプ.....	12-30
ユーザー定義のカスタム・ディメンションについて.....	12-31
ユーザー定義カスタム・ディメンションの追加または編集.....	12-31
メンバーの操作.....	12-33
属性の操作.....	12-42
属性値の操作.....	12-44
カレンダーのカスタマイズ.....	12-46
通貨の設定.....	12-50
複数通貨の有効化.....	12-50
為替レートの指定.....	12-56
シナリオの設定.....	12-57
バージョンの指定.....	12-60
バージョンとシナリオ・メンバーのソート.....	12-62
ディメンション階層内でシナリオとバージョン・メンバーを移動.....	12-63
Planning アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加.....	12-63
集約ストレージについて.....	12-63
集約ストレージ・アウトラインのプラン・タイプの特性.....	12-64
Planning アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するプロセス.....	12-64
プラン・タイプの追加.....	12-64
動的時系列メンバーの設定.....	12-65
サポートされる追加の Planning アプリケーションの機能.....	12-67
期間ディメンションの代替階層の考慮事項.....	12-68
Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作.....	12-68
ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュする.....	12-68
レベル0 メンバーが動的計算に設定されたデータベースのリフレッシュ.....	12-70
Essbase パーティションの操作.....	12-70
ユーティリティを使用してメンバーをソート.....	12-70
ユーティリティを使用して共有子孫を削除.....	12-71
スマート・リスト、UDA およびメンバー式の使用.....	12-72
スマート・リストの操作.....	12-72
UDA の操作.....	12-77
メンバー式の操作.....	12-79

13 Planning Web クライアントのカスタマイズ

レポートのカスタマイズ.....	13-1
Planning ツール・ページのカスタマイズ.....	13-3
カスケード・スタイルシートのカスタマイズ.....	13-3
カスケード・スタイルシート・ファイルの場所.....	13-5
カスケード・スタイル・シートの変更.....	13-5

カスタマイズの例.....	13-5
フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ	13-6
フォームでのヘッダー・セルのスタイルのカスタマイズ	13-7
すべてのフォームへの太字の適用	13-7
1つのフォームへの太字の適用	13-7
スキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加	13-8
カスタマイズしたスキンの登録	13-8
ADF コンポーネントのカスタマイズについて	13-9
テキスト、色および画像のカスタマイズについて	13-9
テキスト、色および画像のカスタマイズ	13-9
非ラテン言語でテキストをカスタマイズ	13-11
カスタマイズされたメッセージで制限されている文字	13-12
プロセス・ステータス用に色、状態、アクションをカスタマイズ	13-12
色のカスタマイズ	13-13
状態のカスタマイズ	13-13
アクションのカスタマイズ	13-14
分散パターンの作成	13-15
分散パターンの例	13-16
プランナのための指示の作成	13-17

14 トラブルシューティング

計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎる	14-1
メンバーが見つからない	14-1
要求を処理できない	14-2
ユーザーによる変更の競合	14-2
バージョンのコピー・エラー	14-2
通貨換算計算スクリプトの失敗	14-3
フォームのエラー・メッセージ	14-3
データベースが別の管理者によってロックされる	14-3
500 エラー・メッセージ	14-3
暗黙的な共有の問題	14-4
データベースの管理エラー	14-5
最大数のアプリケーションがすでに接続されているか、データベースがロックされている ..	14-6
WebLogic Server パラメータの最適化	14-7
Windows ネットワーク・パラメータの最適化	14-8
Planning での復元アプリケーションの登録	14-8
セッションのタイムアウト	14-9
ダイアルアップ接続でフォームを開くとパフォーマンスが低下する	14-9
「アプリケーションを作成できません」エラー	14-10
アプリケーション・エラーがリフレッシュできない	14-11
ログオンできない	14-12

A	命名規則	
	アプリケーションとデータベースの命名規則	A-1
	ディメンション、メンバー、別名、フォームの命名規則	A-2
	計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値でのディメンション とメンバー名	A-5
	ユーザー名の命名規則	A-6
B	フォームの式関数	
	式および式の関数の使用	B-1
	式の作成	B-1
	式の編集	B-1
	式の削除	B-2
	式の関数	B-2
	引数	B-3
	Abs	B-8
	Average	B-9
	AverageA	B-10
	Count	B-10
	CountA	B-11
	Difference	B-12
	Eval	B-13
	IfThen、If	B-13
	Max	B-26
	Min	B-27
	Mod	B-27
	PercentOfTotal	B-28
	Pi	B-29
	Product	B-29
	Random	B-30
	Rank	B-30
	Round	B-32
	Sqrt	B-33
	Sum	B-34
	Truncate/Trunc	B-35
	Variance/Var	B-36
	VariancePercent/VarPer	B-37
C	カスタム定義関数	
	@HspNumToString	C-1
	@HspDateDiff	C-1
	@HspDateRoll	C-2
	@HspDateToString	C-2

@HspGetMbrCount.....	C-3
@HspGetMbrIndex.....	C-3
@HspNthMbr	C-4
@HspStringCompare.....	C-4
@HspOffsetIdx	C-5
@HspStringCompareArray	C-5
@HspConcat	C-6
D Smart View を使用した Planning メタデータのインポートおよび編集	
Smart View での Planning デイメンションのインポート	D-1
Smart View のデイメンションのインポート	D-2
Smart View グリッドの使用	D-2
Smart View でのメンバーの編集	D-3
Smart View での Planning メンバーの追加	D-4
Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択.....	D-4
Smart View でのメンバーの追加	D-5
Smart View でのメンバーの追加のガイドライン	D-6
Smart View でのメンバーの移動	D-7
Smart View でのメンバーの移動のガイドライン	D-7
Smart View での共有メンバーの指定	D-7
Smart View でのキューブのリフレッシュと作成	D-8

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Oracle サポートへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>、聴覚に障害があるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。
epmdoc_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

Planning の使用

次も参照:

[Planning について](#)

[Planning の機能](#)

[新機能に関する重要な情報](#)

[Smart View](#)

[Planning Web クライアント](#)

[EPM Workspace](#)

[ライフサイクル管理](#)

[Essbase](#)

[Financial Reporting](#)

[ビジネス・ルール](#)

[予測プランニング](#)

[サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス](#)

Planning について

Oracle Hyperion Planning を使用して、共同のイベントベースの運営プランニング・プロセスを促進します。意思決定者およびマネージャは、予算ホルダーと共同で、迅速に対応し最適なプランを確保して、プランニング・プロセスを最適化します。

Planning の機能

Oracle Hyperion Planning:

- 世界的規模の企業の複数の事業部にわたる協力、情報伝達および管理を促進します。
- 変動に応じて頻繁に行うプランニング・サイクルを管理し、絶え間ないプランニングを行うためのフレーム・ワークを提供します。
- Web または Oracle Smart View for Office により使い勝手の良さと、デプロイメントのしやすさを実現します
- より短期間でアプリケーションを作成して導入でき、アプリケーションの保守も容易になるので、総所有コストを削減できます
- レポート作成、分析およびプランニングにより、意志決定プロセスが改善されます。

- 複雑なビジネス・ルールや割当てを組み込むことができ、モデリングを推進します。
- 他のシステムと統合してデータをロードできます。

新機能に関する重要な情報

Oracle Hyperion Planning の新機能を使用する際の重要な情報は、現在のリリースの *Oracle Hyperion Planning* の新機能を参照してください。

ノート:

Planning ではクラシック・ユーザー・インタフェース(Planning リリース 11.1.2.1 以前)はサポートされなくなりました。

Smart View

Oracle Smart View for Office は、Oracle Hyperion Planning への Microsoft Office のインタフェースで、これにより、ユーザーは計画および予測アクティビティを実行できるようになります。これらにより、Planning データを Microsoft Outlook、Excel、Word および PowerPoint で分析することができます。

Smart View のアド・ホック・グリッドにより、Planning ユーザーは Smart View または Planning で頻繁にアクセスし、お互いに共有する選択されたデータ・スライスのカスタマイズできます。Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドおよび Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイドのアド・ホック・グリッドの操作の章を参照してください。

Planning Web クライアント

Oracle Hyperion Planning は Web ユーザーに完全な機能を提供します。Web インタフェースを使用し、クライアント・コンピュータにソフトウェアをインストールせずにアプリケーションを大規模で分散型の組織にロールアウトできます。すべてのソフトウェアはサーバーに存在します。以前 Planning デスクトップにあった多くの管理機能は、現在 Planning Web を通して使用できます。

EPM Workspace

Oracle Hyperion Planning は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で使用できます。EPM Workspace のプリファレンスなどの EPM Workspace 機能の詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイドまたは Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace 管理者ガイドを参照してください。EPM Workspace にログオンするには、[EPM Workspace へのログオン](#)および [Planning へのアクセス](#)を参照してください。

ライフサイクル管理

ライフサイクル管理では、製品環境およびオペレーティング・システム間で、EPM System 製品のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーチファクトを移行するための一貫性のある方法を提供します。一般的には、Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースは、ライフサイクル管理をサポートするすべての EPM System 製品に対して一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理インタフェースで、様々なアーチファクトのリストおよびエクスポートとインポートのオプションが表示されます。

ライフサイクル管理には、次の機能があります:

- アプリケーションおよびフォルダの表示
- アーティファクト検索
- アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行
- ファイル・システム間の移行
- 移行定義ファイルの保存およびロード
- 選択されたアーティファクトの表示
- 移行の監査
- 移行ステータスの表示
- ファイル・システム上で変更をすばやく行うための、個々のアーティファクトのインポートおよびエクスポート

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースに加え、ライフサイクル管理ユーティリティと呼ばれるコマンドライン・ユーティリティには、ソースから移行先にアーティファクトを移行させる代替方法を備えています。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windows タスク・スケジューラや Oracle Enterprise Manager などのサードパーティ製のスケジューリング・サービスと併用できます。

最後に、ユーザーがライフサイクル管理機能をカスタマイズして拡張できる、ライフサイクル管理アプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)があります。

ライフサイクル管理の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド*を参照してください。

Essbase

Oracle Hyperion Planning では、Oracle Essbase 解析および計算機能、セキュリティ・フィルタ、API、ビルト済金融情報、計算関数および複数データベース・アプリケーション・サポートが活用されます。Planning では、リレーショナル・データベースにアプリケーション定義が保管され、アプリケーションの Essbase データベースおよびセキュリティ特権が作成されます。

リレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーへのリンクにはデータ・ソースが使用されこれらは各 Planning アプリケーションに関連付けられます。Planning アプリケーション管理用のデータ・ソースの作成の詳細は、[データ・ソースの管理](#)を参照してください。

Financial Reporting

Oracle Hyperion Financial Reporting は、高度にフォーマットされたレポートを通してデータを重要なビジネス情報に変換する管理レポート・ツールです。Oracle Hyperion Planning ユーザーは Financial Reporting を使用してレポート・タスクを管理し、プランのレビューおよび分析を行うことができます。ユーザーはテキスト、データのグリッド、チャート、グラフおよびイメージを盛り込んだレポートを作成できます。リアルタイムのアドホック差異レポートを使用し、オンラインでの表示または高性能な形式での印刷が可能な、高度な Financial Reporting を作成できます。

ビジネス・ルール

ビジネス・ルールは、事前定義済みの式、変数、計算スクリプト、マクロ、ルールセットおよびテンプレートを使用して、複雑な計算を実行します。[ビジネス・ルールの使用](#)を参照してください。

予測プランニング

予測プランニングを使用して、ユーザーは **Oracle Hyperion Planning** フォームを操作し、履歴データに基づいてパフォーマンスを予測することができます。予測プランニングは高度な時系列および自己回帰和分移動平均(ARIMA)統計テクニックを使用して、他の予測手法に基づいて **Planning** に入力された予測を確認および検証します。この機能を使用するには、管理者は『*Oracle Hyperion Planning 予測プランニング・ユーザー・ガイド*』に記載のとおり、フォームを設計する必要があります。その後、有効な **Planning** フォームが **Oracle Smart View for Office** にロードされたら、ユーザーは「プランニング」リボンから予測プランニング機能にアクセスできます。(インストール手順は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド*を参照してください。)

サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス

Oracle Hyperion Planning を使用するには、リレーショナル・データベースまたは Web アプリケーション・サーバーなどのライセンスをサードパーティのベンダーから購入する必要があります。

Planning スタート・ガイド

次も参照:

- [Planning アプリケーションについて](#)
- [Essbase の開始](#)
- [Essbase の操作の考慮事項](#)
- [Planning フォームでの暗黙的な共有の理解](#)
- [Essbase の複数のインスタンスへの接続](#)
- [リレーショナル・データベースの起動](#)
- [SQL リレーショナル・データベースの最適化](#)
- [アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定](#)
- [EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス](#)
- [Planning ユーティリティの操作](#)
- [アプリケーション・サーバーの使用](#)
- [インスタンスとクラスターの更新について](#)
- [Planning および Essbase を閉じる](#)

Planning アプリケーションについて

Oracle Hyperion Planning アプリケーションは、プランニングのニーズを満たすために使用される、関連したディメンションのセットとディメンション・メンバーです。各アプリケーションにはそれ自体の勘定科目、エンティティ、シナリオおよび他のデータ要素があります。

このガイドでは、次のような Planning アプリケーション管理タスクの実行について説明します:

- Planning アプリケーションの作成、削除および登録。
- フォーム、タスク・リストおよびメニューの作成。
- ディメンション・メンバー、タスク・リスト、フォームおよびフォーム・フォルダのアクセス権限の割当て。 [アクセス権限の設定](#)および *Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイド* の Planning に関する情報を参照してください。
- 通貨換算レートと為替レートの表の管理。
- レビューと承認のプロセス、要件、参加者の識別や予算プロセスの管理。

Planning のインストールおよび構成の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドを参照してください。

Essbase の開始

Oracle Hyperion Planning アプリケーションのデータは Oracle Essbase サーバーにあります。Essbase は、Planning アプリケーションを開く前に実行する必要があります。Essbase を起動した後に最小化し、バックグラウンドでまたはサービスとして実行できます。

Essbase の操作の考慮事項

「データベースの管理」ページ上の作成およびリフレッシュは Oracle Essbase データベースのデータに影響します。「作成」をクリックすると、データが削除され、Oracle Hyperion Planning プラン・タイプが再構築されます。「リフレッシュ」をクリックするとデータが置き換えられることがあります。重要な情報は、[アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ](#)を参照してください。

Planning アプリケーションをリフレッシュすると、Essbase データベースで次の点が変わります。

- Planning リレーショナル・データベースにメンバーが存在しない場合、メンバーとメンバーのプロパティ、属性、ユーザー定義の属性(UDA)は、「リフレッシュ」すると Essbase に保持されません。
- Planning で Essbase に存在するすべてのメンバーのプロパティが取得されてから、Planning で定義可能なメンバーのプロパティが設定され書き込まれます。

この動作は、以前のリリースと異なります。以前のリリースでは、リフレッシュのプロセスは付加的であり、Planning にメンバー、属性、UDA が存在していなくても、Essbase のアウトラインに直接変更されました。

HSP_UDF の UDA では、Planning 以外で定義されたメンバー式は保持されます。この UDA を Planning 内からメンバーへ割り当てることができます。Planning のリフレッシュによるメンバーの割当て解除によって、Essbase アウトラインのメンバーからの UDA は割当て解除にされません。HSP_UDF UDA を持つメンバーが、直接 Essbase に追加されている場合、データベースをリフレッシュすると、Essbase でこのメンバー上の式がすべて保持され、レベル・ゼロと動的計算のメンバーに対する式のプレースホルダ(:)が生成されません。カスタム UDA や HSP_NOLINK UDA などのその他の UDA は、Planning アプリケーション管理で定義された場合にのみ保持されます。UDA を作成および更新するには、[UDA の操作](#)を参照してください。

Planning アプリケーション管理でメンバー式のサポートを使用できるので、HSP_UDF UDA の必要性はあまりありません。UDA の定義は、Planning アプリケーション管理で行うようにしてください。

@XREF 機能により、別のデータベースからのデータ値が調べられ、現在のデータベースからの値が計算されます。HSP_NOLINK の UDA をメンバーに加えて、@XREF 機能が、そのメンバーに指定されたソース・プラン・タイプではないすべてのプラン・タイプに作成されるのを防ぐことができます。UDA および機能の詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

Essbase アウトラインを最も使用される Essbase のメンバー・プロパティのために変更する必要はありません。Planning では、「期間」ディメンションの動的時系列、「期間」ディメンションの代替階層、「シナリオ」ディメンションと「バージョン」ディメンションの階層、属性ディメンションの階層および別名をサポートしています。

スーパーバイザかアプリケーション管理者として Essbase にログオンした場合、次のガイドラインに従って操作してください。

- Essbase の密・疎ディメンション設定やディメンションの順序を変更しないでください。
- テキスト、ブール式、数値、日付など、どの属性ディメンション・タイプでも使用できます。
- リンクされたレポート・オブジェクト(LRO)は使用しないでください。
- タイム・バランスのデフォルト設定を変更しないでください。デフォルトは「残高」で「末尾」、「フロー」で「なし」です。
- 差異レポートの設定を変更しないでください。「保存された仮定」以外のすべての勘定科目タイプにプリセットされています。「保存された仮定」の勘定科目タイプでは、「費用」および「費用外」が有効に設定されています。
- リフレッシュする前にデータベースをバックアップしてください。[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)を参照してください。

Planning フォームでの暗黙的な共有の理解

Oracle Essbase 暗黙的な共有を使用すると、一部のメンバーは、明示的に共有として設定しなくても共有されます。これらのメンバーが暗黙的な共有メンバーです。

暗黙的な共有関係が作成されると、各暗黙的なメンバーは他のメンバーの値であるとみなされます。Oracle Hyperion Planning は次の状況でメンバーの共有関係を想定(または暗示)します:

- 親が1つの子のみを持っています
- 親が親に連結される1つの子のみを持っています
- 親のデータ・タイプは「ラベルのみ」です(この場合、親は子に使用される集約設定にかかわらず最初の子の値を継承します)

暗黙的な共有関係を持つメンバーを含む Planning フォームでは、親に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、子はそれと同じ値を想定します。同様に、子に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、親は通常同じ値を想定します。

たとえば、計算スクリプトまたはロード・ルールが暗黙的な共有メンバーを移入する場合、その他の暗黙的な共有メンバーは計算スクリプトまたはロード・ルールにより移入されたメンバーの値を想定します。計算されたまたはインポートされた最後の値が優先されます。計算スクリプトの変数として親または子のどちらを参照しても結果は同じです。

必要な場合、Planning フォームで暗黙的な共有を回避できます。[暗黙的な共有の問題](#)を参照してください。

Essbase の複数のサーバーへの接続

ポート番号を指定することで、Oracle Hyperion Planning アプリケーションから Oracle Essbase の複数のインスタンスに同時に接続できます:

- Planning アプリケーション・ウィザードを使用して Planning アプリケーションを作成するとき(データ・ソース名ごとに繰り返します)。
- HSPSYS_DATASOURCE データベース表の ESS_SERVER プロパティの値として。

同じコンピュータ上で Essbase の複数のインスタンスをインストールする手順は、[Oracle Essbase データベース管理者ガイド](#)を参照してください。

リレーショナル・データベースの起動

Oracle Hyperion Planning アプリケーションを開く前にリレーショナル・データベースを起動する必要があります。リレーショナル・データベースが起動した後、最小化してバックグラウンドで実行させるか、サービスとして稼働します。

SQL リレーショナル・データベースの最適化

「タイムアウト」レジストリのキー設定によって、タイムアウト値を構成できます。Oracle Hyperion Planning から発行される一部の SQL 問合せには、使用しているデータベースのレコードのサイズによって、デフォルト設定で 30 秒の ADO タイムアウトより長く実行される場合もあり得ます。これによって、アプリケーション・データベースのリフレッシュが失敗する原因となる場合があります。タイムアウト値を増やして(例: 180 秒)、リフレッシュの失敗を減らすことができます。

タイムアウト値を最適化するには:

1. 「レジストリ・エディタ」を開きます。
2. 次の場所にナビゲートします。

HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/HyperionSolutions/Planning

「タイムアウト」レジストリ・キーが右側のペインに存在する場合、タイムアウト値は対応する値に設定されます。キーが無い場合、値はデフォルトに設定されます。タイプは DWORD である必要があります。

アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定

アプリケーションやシステム・プロパティを追加または変更して、外部認証の構成ファイルへのパスとして、該当するアスペクトをカスタマイズできます。

表 2-1 構成可能なプロパティの例

PROPERTY_NAME 列	説明
RDB_DRIVER	JDBC ドライバの変更を参照してください。
RDB_SERVER_URL	
JDBC_MIN_CONNECTIONS	JDBC 接続プールの構成を参照してください。
JDCB_MAX_CONNECTIONS	
SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE	サポート詳細キャッシュのメモリー割当てを参照してください。
SUBST_VAR_CACHE_LIFETIME	メンバーとしての代替変数の選択についてを参照してください。
DIRECT_DATA_LOAD	データのロードを参照してください。
DATA_LOAD_FILE_PATH	
OLAP_MAX_CONNECTIONS	パフォーマンスの最適化を参照してください。
SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING	Smart View メッセージの制御を参照してください。

表 2-1 (続き) 構成可能なプロパティの例

PROPERTY_NAME 列	説明
SMART_VIEW_MD_NEW_MEMBER_SUFFIX	Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択を参照してください。
SMART_VIEW_MERGE_FORMATTING	Planning フォームでの Smart View セル・フォーマットの制御を参照してください。
HOME_PAGE	アプリケーション・ホーム・ページの設定を参照してください。
RULE_MAX_WAIT、 RULE_MONITOR_DELAY、 CLR_CELL_MAX_WAIT、 CLR_CELL_MONITOR_DELAY、 COPY_DATA_MAX_WAIT、 COPY_DATA_MONITOR_DELAY、 PUSH_DATA_MONITOR_DELAY、 PUSH_DATA_MAX_WAIT JOB_STATUS_MAX_AGE	バックグラウンド処理の設定を参照してください。
BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT	ビジネス・ルールの起動ログ・プロパティの設定を参照してください。
CAPTURE_RTP_ON_JOB_CONSOLE	実行時プロンプトについてを参照してください。
MAX_VALIDATION_RECORDS VALIDATION_CACHE_SIZE	データ検証プロパティの設定を参照してください。
MAX_CELL_TEXT、MAX_CELL_NOTE	セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定を参照してください。
DATA_GRID_CACHE_SIZE	ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定を参照してください。

表 2-1 (続き) 構成可能なプロパティの例

PROPERTY_NAME 列	説明
WARNING_THRESHOLD_NUM_OF_CELLS、 ERROR_THRESHOLD_NUM_OF_CELLS、 WARNING_THRESHOLD_NUM_OF_PUS、 ERROR_THRESHOLD_NUM_OF_PUS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_DIMS、 ERROR_THRESHOLD_FOR_NUM_DIMS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_ACCO UNTS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_ENTITI ES、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_VERSI ONS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_SCEN ARIOS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_YEAR S、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_CURR ENCIES、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_PERIO DS、 WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_CUST OM_DIM_MBRS、 WARNING_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_ BLOCKS、 ERROR_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_BL OCKS、 WARNING_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NU M_BLOCKS、 ERROR_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_B LOCKS、 WARNING_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_ PASSES、 ERROR_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_PA SSES、 WARNING_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NU M_PASSES、 ERROR_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_P ASSES、 WARNING_THRESHOLD_FOR_CUBE_LINK_ NUM_BLOCKS、 ERROR_THRESHOLD_FOR_CUBE_LINK_NU M_BLOCKS	アプリケーションのしきい値の制限の設定を 参照してください。

ノート:

場合によっては、「プロパティ」ページに追加のプロパティが表示されることがあります。次のプロパティは Oracle Hyperion Planning で必要なため、表示可能であっても変更しないでください: SYSTEM_DB_RELEASE および SYSTEM_DB_VERSION。

Planning アプリケーションまたはシステム・プロパティを設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 選択:
 - **アプリケーション・プロパティ**: 現在のアプリケーションのプロパティを設定します。
 - **システム・プロパティ**: すべての Planning アプリケーションのプロパティを設定します。
3. 次を行うには:
 - プロパティを変更するには、「**プロパティ値**」の値を変更します。
 - プロパティを追加するには、「**追加**」をクリックします。プロパティの名前(スペースを入れない)と値を空白行に入力します。
 タブにプロパティが既に入力されていると、名前の色が赤くなり、重複していることが示されます。アプリケーションとシステムタブ間では、プロパティを重複させることができます。
4. 「**保存**」をクリックして、変更を確認します。
5. アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

プロパティは、HSPSYS_PROPERTIES のシステム・データベース表に保存されます。これは、デフォルトでは EPM System コンフィギュレータの Planning で「データベースの構成」タスクの選択時に作成するリレーショナル・データベースにあります。

JDBC ドライバの変更

デフォルトでは、Oracle Hyperion Planning 内蔵の Oracle JDBC ドライバが使用されます。JDBC ドライバを変更するには、次の値で JDBC プロパティを更新します。

表 2-2 JDBC プロパティ値

JDBC ドライバ	RDB_SERVER_URL	RDB_DRIVER
Oracle Thin	jdbc:oracle:thin:@ %SERVER_NAME%: 1521:%DB_NAME%	oracle.jdbc.driver.OracleDriver
DB2 native	jdbc:db2:%DB_NAME%	COM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver
DB2 サーバー用の DB2 native	jdbc:db2:// myhost.mydomain.com: 6789/%DB_NAME"	COM.ibm.db2.jdbc.net.DB2Driver

データベースのドライバ名および URL は、HSPSYS_DATASOURCE データベース表に保管されています。

JDBC プロパティの変更後、必要なサードパーティ製のファイルを Planning のサーバーにアクセス可能にするには:

1. .jar ファイル(Oracle の場合)または.zip ファイル(DB2 の場合)がある場所を検索します。
 - Oracle の場合、classes12.jar は OraHome/jdbc/lib ディレクトリにあります。
 - DB2 の場合、db2java.jar または db2java.zip は /Program Files/sqlllib/java ディレクトリにあります。
2. 前のステップにある.jar または.zip ファイルを Web アプリケーション・サーバーの宛先ディレクトリにコピーします。例:
 - a. .ear ファイルを展開します。
 - b. .jar または.zip ファイルを HPDomain/applications ディレクトリにコピーします。
 - c. このファイルを startHPServer.cmd の CLASSPATH に追加します。
3. Web アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

JDBC 接続プールの構成

JDBC 接続プールの最小数と最大数を設定できます。この構成は、リレーショナル・データベースにアクセスする Oracle Hyperion Planning ユーザー数に大きく依存します。たとえば、JDBC 接続プールの最小接続数を 1 に、最大接続数を 5 に指定できます。そうすることで、ユーザーが Planning にログオンする際、接続が 1 つ作成されます。次の 4 人のユーザーが Planning にログオンすると、さらに接続が作成され、合計 5 つの接続となります。ログオンする他のユーザーは、5 つの接続を共有します。

JDBC 接続設定は、デフォルトで最小が 2、最大が 10 に設定されています。Planning アプリケーションは、最大数 JDBC_MAX_CONNECTIONS を 2 より小さくすると、正常に機能しません。

JDBC 接続プールのパラメータを再構成するには、次のように、最小と最大のプロパティ値を変更します。

- JDBC_MIN_CONNECTIONS
- JDBC_MAX_CONNECTIONS

パフォーマンスを最適化するために、次の設定をお勧めします:

- JDBC_MIN_CONNECTIONS=10
- JDBC_MAX_CONNECTIONS=45

Smart View メッセージの制御

Oracle Smart View for Office および Oracle Hyperion Planning の異なるリリースを使用している場合は、ユーザーが Smart View を起動したときにメッセージが表示されます。このメッセージを表示しないようにするには、SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING のシステム・プロパティを追加します。

Smart View メッセージを制御するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「システム・プロパティ」を選択して、すべての Planning アプリケーションのプロパティに設定します。

3. 「追加」をクリックして、空白行に次のプロパティを入力します。

SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING

4. 「プロパティ値」に次の値を入力します。

- はい: メッセージを表示します。
- いいえ: メッセージを表示しません。

5. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

新しい Planning メンバーを Smart View で表示

Smart View で Oracle Hyperion Planning メタデータをインポートし、編集できます。(Smart View での Planning ディメンションのインポートを参照してください。)Oracle Smart View for Office グリッドで作成された新規メンバーは、デフォルトではグリッドにアスタリスク(*)のマークが付きます。アプリケーション・プロパティを編集して異なる符号を使用できます。

Smart View グリッドでアスタリスク(*)以外の記号が付いた新規 Planning メンバーを表示するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「システム・プロパティ」を選択して、すべての Planning アプリケーションのプロパティに設定します。
3. SMART_VIEW_MD_NEW_MEMBER_SUFFIX をクリックします。
4. 「プロパティ値」に次の値を入力します。
5. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

アプリケーション・ホーム・ページの設定

ユーザーが Oracle Hyperion Planning アプリケーションにログインしたときに表示されるページを指定できるため、ユーザーはフォーム、タスク・リストまたは「承認の管理」ページに直接移動できます。これを行うには、HOME_PAGE アプリケーション・プロパティを設定します。

アプリケーション・ホーム・ページを設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。
 - フォーム
 - タスク・リスト
 - 承認
4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

バックグラウンド処理の設定

構成したしきい値の後にバックグラウンド処理に切り替えるジョブ(ビジネス・ルール、「セル詳細のクリア」、「データのコピー」および「データのプッシュ」)を設定できます。指定した期間の後にジョブをバックグラウンドで実行します。また、Oracle Hyperion Planning でのジョブ・ステータスの確認頻度を設定し、ジョブ・コンソールに表示することもできます(Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照)。

バックグラウンド処理およびステータス確認の頻度を設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。

表 2-3 ジョブ・プロパティ名および値

PROPERTY_NAME 列	プロパティ値	説明
RULE_MAX_WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドでビジネス・ルールを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、この機能は適用されず、バックグラウンドでビジネス・ルールは実行されません。
RULE_MONITOR_DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	ビジネス・ルールのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
CLR_CELL_MAX_WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドで「セル詳細のクリア」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「セル詳細のクリア」ジョブはバックグラウンドで実行されません。
CLR_CELL_MONITOR_DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「セル詳細のクリア」操作のステータスを確認するときのミリ秒の間隔。

ノート:

フォームがロードまたは保存されたときに自動的に実行されるよう設定されたビジネス・ルールはバックグラウンドで実行されません。

表 2-3 (続き) ジョブ・プロパティ名および値

PROPERTY_NAME 列	プロパティ値	説明
COPY_DATA_MAX_WAIT	デフォルトで最小値は 180000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されません。	バックグラウンドで「データのコピー」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「データのコピー」ジョブはバックグラウンドで実行されません。
COPY_DATA_MONITOR_DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「データのコピー」ジョブのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
PUSH_DATA_MONITOR_DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「データのプッシュ」ジョブのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
PUSH_DATA_MAX_WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドで「データのプッシュ」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「データのプッシュ」ジョブはバックグラウンドで実行されません。
JOB_STATUS_MAX_AGE	値をミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 4 日間です(ミリ秒で設定します)。最小値はありません。	Planning によってデータベース表 HSP_JOB_STATUS から削除されるまでの完了ジョブ・レコードの最大残存期間。Planning ではジョブ・レコードを 30 分ごとに確認します。 たとえば、プロパティ値を 60,000 (1 分)に設定していて、ジョブが 3:00 に完了し、Planning でジョブ・レコードが 3:01 に確認された場合、完了ジョブ・レコードは Planning によって削除されます。 完了ジョブ・レコードが除去されると、パフォーマンスが改善されます。

4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

ビジネス・ルールの起動ログ・プロパティの設定

アプリケーション・プロパティを設定して、Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルールを起動したときにロギングを有効にできます。

ノート:

ログに書き込まれるメッセージのレベルは、ODL logging.xml ファイルで指定されているロギング・レベルによって決まります。ODL のメッセージ・タイプおよびロギング・レベルの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド* を参照してください。

ロギングを有効に設定できるアプリケーション・プロパティがあります:

- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED:** Calculation Manager のビジネス・ルールが実行されたときにロギングを有効にし、次の2つのプロパティが **true** に設定されているかどうかを確認します。このプロパティのデフォルト設定は **FALSE** です。
- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES:** **true** に設定すると、ランタイム・プロンプト値がログに記録されます。このプロパティのデフォルト設定は **FALSE** です。
- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT:** **true** に設定されている場合、Oracle Essbase に送信される計算スクリプトがログに記録されます。このプロパティのデフォルト設定は **FALSE** です。

Calculation Manager ビジネス・ルールの起動ロギング・プロパティを設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Oracle Hyperion Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に値(True または False)を入力します:
 - BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED
 - BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES
 - BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT
4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

これらのプロパティでロギングが有効に設定されている場合は、次のファイルがログ・ファイル・ディレクトリに書き込まれます:

- **Planning_CalcLaunch.log** ファイルには、ビジネス・ルール起動の開始時刻および終了時刻、ユーザー、実行時プロンプト値、および計算スクリプトについての情報が記録されます。
- **Planning_CalcExecution.log** ファイルには、ビジネス・ルールの実行中に発生するその他の例外を記録されます。
- **Planning_CalcDeploy.log** ファイルには、デプロイ中に発生するエラーが記録されます。

データ検証プロパティの設定

このアプリケーションで、アプリケーションのデータ検証ルール・プロパティを設定できます。MAX_VALIDATION_RECORDS では、フォームに表示される「データ検証メッセージ」ペインに表示する検証失敗エントリの最大数を指定できます。エラー数がこの制限を超えると、優先度が下位のルールのエントリが削除されます。「移動しない」に設定されたルールなど、優先度が上位のエラーは、残されます。VALIDATION_CACHE_SIZE では、パフォーマンス向上のためにキャッシュするデータ検証ルールの最大数を指定できます。データ検証ルールの作成の詳細は、[データ検証の管理](#)を参照してください。

データ検証のプロパティを設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Oracle Hyperion Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。
 - MAX_VALIDATION_RECORDS: 「データ検証メッセージ」ペインに表示するレコードの最大数。デフォルト設定は 100 です。
 - VALIDATION_CACHE_SIZE: キャッシュできるデータ検証ルールの最大数。デフォルト設定は 10,000 です。
4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定

Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドに説明しているように、ユーザーはセル・テキスト値およびコメントをフォーム・セルに追加できます。デフォルトでは、各セルのテキストに使用できるシングルバイトの最大文字数は 255 で、コメントに使用できる最大文字数は 1,500 です。

ノート:

データベースでは、デフォルトで列データ・タイプが `varchar(255)` および `varchar(2,000)` に設定されます。

セル・テキストまたはコメントに追加の文字を表示する必要がある場合、これらの Oracle Hyperion Planning アプリケーション・プロパティをアプリケーションで必要な最大長に設定できます:

- MAX_CELL_TEXT_SIZE: データ・タイプがテキストに設定されたセル内に入力された値
- MAX_CELL_NOTE_SIZE: セルに追加されたコメント

この設定を 2,000 より大きい値に更新する場合は、データベースに対応する変更を加える必要があります。セル・テキストの最大文字数を大きくする場合、変更後のサイズをサポートするようにデータベースの列サイズまたはタイプを変更する必要があります(大きいセル・テキスト・サイズに合せて列タイプを CLOB、NCLOB、TEXT または NTEXT に変更すると、パフォーマンスに影響を及ぼす場合があります。このような変更は、大きいセル・テキスト・エントリが必要なアプリケーションでのみ実行してください)。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。

セル内のテキスト値およびコメントの最大長を設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行に次のいずれかのプロパティを入力します:
 - MAX_CELL_TEXT_SIZE

- MAX_CELL_NOTE_SIZE
4. 「**プロパティ値**」に各セルのテキスト値またはコメントとして入力できるシングルバイトの最大文字数を示す値を入力します。
 5. **オプション**: 両方のプロパティを更新する場合は、もう一方のプロパティに対して **ステップ 3** および **ステップ 4** を繰り返します。
 6. 「**保存**」をクリックして、変更を確認します。
 7. Planning サーバーを停止して、再起動します。
 8. データベースをバックアップしてから、このプロパティで指定した変更したサイズをサポートするようにデータベースの列サイズまたはタイプを更新します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。

Planning フォームでの Smart View セル・フォーマットの制御

管理者は SMART_VIEW_MERGE_FORMATTING プロパティを設定することにより、管理者が Oracle Smart View for Office で設定したセル・フォーマットと、管理者以外が Smart View で設定したセル・フォーマットをマージするかどうかを制御できます。

SMART_VIEW_MERGE_FORMATTING プロパティを使用するには、[アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定](#)の手順を使用して追加し、その値を次のように設定します:

- true に設定すると、Oracle Hyperion Planning フォームで、管理者以外が Smart View に保存したセル・フォーマットは、管理者が保存したフォーマットとマージされます。
- false (デフォルト)に設定すると、Planning フォームで、管理者以外が Smart View で保存したセル・フォーマットは、管理者がそれらのセルのフォーマットを変更した場合でも持続します。

Smart View で適用されたセル・フォーマットが、どのようにして Planning フォームの同じセルに適用されるのか、その詳細は、[Smart View のセル・フォーマットの Planning での存続](#)を参照してください。

アプリケーションのしきい値の制限の設定

超過した場合にアプリケーション・モニターが警告を発行するアプリケーションのしきい値制限(警告しきい値とエラーしきい値)を設定して、アーティファクトを変更するか実行時にシステム・リクエストを拒否できます。

この項で説明するアプリケーション・プロパティを追加することで、アプリケーションしきい値制限を設定できます。

アプリケーションのしきい値制限を設定するには:

1. 「**管理**」、「**アプリケーション**」、「**プロパティ**」の順に選択します。
2. 「**アプリケーション・プロパティ**」を選択し、Oracle Hyperion Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
3. 「**追加**」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「**プロパティ値**」に次の値を入力します。

表 2-4 しきい値プロパティの名前と説明

PROPERTY_NAME 列	説明
データ入力フォームのセル数のしきい値: WARNING_THRESHOLD_NUM_OF_CELLS ERROR_THRESHOLD_NUM_OF_CELLS	<p>フォームのセル数が警告しきい値を超えた場合、警告が発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色で表示されます。</p> <p>フォームのセル数がエラーしきい値を超えた場合、フォームは開かれません。</p> <p>ヒント: セグメントまたはメンバー、あるいはその両方の数を減らすことによりセル数を削減するようにフォームを再設計することを検討してください。抑制オプションを使用すると、取得されるセルの合計を一時的に減らすことができますが、合計セルはデータの増加に伴ってしきい値を超える可能性があります。</p>
プランニング・ユニット階層内のプランニング・ユニット数のしきい値: WARNING_THRESHOLD_NUM_OF_PUS ERROR_THRESHOLD_NUM_OF_PUS	<p>プランニング・ユニット階層内のプランニング・ユニット数が警告しきい値を超えた場合、警告が発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色で表示されます。</p> <p>プランニング・ユニット階層内のプランニング・ユニット数がエラーしきい値を超えた場合、プランニング・ユニット階層を保存できなくなります。</p> <p>ヒント: 選択したプライマリおよびセカンダリ・メンバーを減らすことにより、プランニング・ユニット数を削減するようにプランニング・ユニット階層を再設計することを検討してください。</p>
アプリケーション内のディメンション数のしきい値: WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_DIMS ERROR_THRESHOLD_FOR_NUM_DIMS	<p>ディメンション数が警告またはエラーしきい値を超えた場合、それぞれ警告またはエラーが発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色または赤で表示されます。</p> <p>ヒント: ディメンションの数を減らしてみてください。</p>

表 2-4 (続き) しきい値プロパティの名前と説明

PROPERTY_NAME 列	説明
各ディメンション内のメンバー数のしきい値: WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_ACCOUNTS WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_ENTITIES WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_VERSIONS WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_SCENARIOS WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_YEARS WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_CURRENCIES WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_PERIODS WARNING_THRESHOLD_FOR_NUM_CUSTOM_DIM_MBRS	ディメンション内のメンバー数(アカウント、エンティティ、バージョン、シナリオなど)が警告しきい値を超えた場合、警告が発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色で表示されます。 ヒント: 計算のパフォーマンスとデータ記憶域を最適化するには、このディメンションのメンバー数を減らしてみてください。履歴データを(対応するメンバーとともに)ページすることを検討してください。
フォームのコンテキストでのビジネス・ルール実行に対するしきい値: WARNING_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_BLOCKS ERROR_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_BLOCKS スタンド・アロンで長時間実行されるビジネス・ルール実行のしきい値: WARNING_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_BLOCKS ERROR_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_BLOCKS	ルールで処理されるブロック数が警告またはエラーしきい値を超えた場合、それぞれ警告またはエラーが発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色または赤で表示されます。 ヒント: 処理されるブロック数を減らすようにビジネス・ルールにスコープを追加することを検討してください。
フォームのコンテキストでのビジネス・ルール実行に対するしきい値: WARNING_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_PASSES ERROR_SYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_PASSES スタンド・アロンで長時間実行されるビジネス・ルール実行のしきい値: WARNING_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_PASSES ERROR_ASYNC_THRESHOLD_FOR_NUM_PASSES	ルールのデータベースを通じて作成されるパス数が警告またはエラーしきい値を超えた場合、それぞれ警告またはエラーが発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色または赤で表示されます。 ヒント: 一連のディメンションを計算する際に可能な限りディメンションをグループ化することを検討してください。一連の式を計算する際には、不要なカッコの使用を避けてください。計算スクリプトでの CALCMODE および CREATENONMISSINGBLK オプションの使用を再検討することが必要な場合があります。

表 2-4 (続き) しきい値プロパティの名前と説明

PROPERTY_NAME 列	説明
レポート・マッピングの実行中のソースからのデータ・エクスポートのしきい値: WARNING_THRESHOLD_FOR_CUBE_LINK_NUM_BLOCKS	データがエクスポートされるブロックの数が警告しきい値を超えた場合、警告が発行され、アプリケーション・モニターにアーティファクトが黄色で表示されます。
ERROR_THRESHOLD_FOR_CUBE_LINK_NUM_BLOCKS	データがエクスポートされるブロックの数がエラーしきい値を超えた場合、実行時にレポート・マッピングは実行されません。
	ヒント: 処理されるブロック数を減らすようにマッピングにスコープを追加することを検討してください。

4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。

EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace 環境の Oracle Hyperion Planning を操作します。デフォルトの EPM Workspace URL は、`http://web server:port/workspace/`で、`web server` は Web サーバー・マシン・ホスト名、`port` は Web サーバー・ポート番号です。たとえば、EPM System Configurator で構成した Oracle HTTP サーバー・インスタンスを使用する場合は 19000 になります。URL をすべての Planning ユーザーに通信して EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセスを可能にします。

EPM Workspace のインストールおよび構成の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド*を参照してください。

EPM Workspace へログオンし、Planning へアクセスするには:

1. Web サーバーが開始され、Web アプリケーション・サーバーがサービス・パネルで実行中であることを確認します。
2. ブラウザで、EPM Workspace ログオンページへの URL を入力します。
3. ユーザー名を入力します。
4. パスワードを入力します。
5. 「ログオン」をクリックします。
6. EPM Workspace で、「ナビゲート」、「アプリケーション」、「Planning」の順に選択します。Planning アプリケーションを選択します。プロンプト表示された場合は、ログオン情報を入力します。Planning では、パスワードの非 ASCII 文字はサポートされません。

複数の Planning アプリケーションへ同時にログオンし、EPM Workspace のタブでアプリケーション間を移動できます。アプリケーション名はウィンドウの下にタブとして表示され、タブをクリックすることでアプリケーション間を移動できます。また、EPM Workspace のタブで同じアプリケーションを 2 つ表示することもできます。2 つ以上のブラウザのインスタンスを開いて EPM Workspace にログオンする場合、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace ユーザー・ガイド*の説明に従い、EPM Workspace URL を追加する必要があります。

Planning はさまざまなネットワーク回線容量のユーザーをサポートします。56K ダイアルアップ接続は、Planning サーバーの HTTP 圧縮を使用することで強化できます。

ノート:

この手順に従って、Planning には EPM Workspace の URL からのみアクセスしてください。

Planning ユーティリティの操作

管理者は、Oracle Hyperion Planning で次のユーティリティを使用できます。

ノート:

これらのユーティリティは Planning サーバー上のファイルを必要とするので、ユーティリティをクライアントからではなく Planning サーバーから実行する必要があります。

表 2-5 Planning ユーティリティ

ユーティリティ	説明	参照
BroadcastMessage	ブロードキャスト・メッセージを使用して、現在アプリケーションにログオンしているすべての Planning ユーザーにテキスト・メッセージを送信します。	ブロードキャスト・メッセージの使用
CalcMgrCmdLineLauncher	Oracle Hyperion Calculation Manager で作成されたビジネス・ルールを起動します。	ユーティリティによるビジネス・ルールの起動
CubeRefresh	アプリケーションの各プラン・タイプに対して Oracle Essbase にデータを保管するために使用されるアプリケーション・データベースを作成およびリフレッシュします。	Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作
DeleteSharedDescendant	指定したメンバーの子孫である共有ディメンション・メンバーを削除します。	Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作
ExportSecurity	ファイルへの Planning アクセス権限をエクスポートして、アプリケーション間でのアクセス権限のエクスポートおよびインポートを可能にします。	アクセス権限のエクスポート
FormDefUtil	Planning アプリケーション間でエクスポートまたはインポートにより、あるいは XML ファイルからフォーム定義を移動します。	フォーム定義のインポートとエクスポート
HBRMigrateSecurity	ビジネス・ルールの起動のアクセス権限を、Oracle Hyperion Business Rules から Planning の Calculation Manager ビジネス・ルールへ移行します。	ビジネス・ルール・セキュリティの移行

表 2-5 (続き) Planning ユーティリティ

ユーティリティ	説明	参照
HspUnlockApp	HSP_LOCK 表のすべてのレコードをクリアします。	アプリケーションのロック解除
ImportFormDefinition	フォーム定義をテキスト・ファイルから Planning フォームへインポートします。	フォーム定義のインポート
ImportSecurity	ユーザーまたはグループのアクセス権限をテキスト・ファイルから Planning データ・フォームへロードします。	アクセス権限のインポート
MaintenanceMode	メンテナンス中に Planning アプリケーションへのアクセス権を付与および取り消します。	MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限
アウトライン・ロード	Planning アプリケーションのメタデータおよびデータをロードします。	アウトライン・ロード・ユーティリティの操作
PasswordEncryption	パスワードに関するメッセージを表示する Planning ユーティリティの実行時にパスワード・プロンプトを抑制します。	Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制
ProvisionUsers	Oracle Hyperion Shared Services Console の Planning ユーザー、グループおよび役割が Planning アプリケーションおよび Essbase と同期されます。	プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期
PushData	レポート・アプリケーションへのデータのプッシュをスケジュールします。	ユーティリティを使用したデータのプッシュ
SortMember	エンティティ、勘定科目、シナリオ、バージョン、ユーザー定義のカスタム・ディメンションでディメンション・メンバーをソートします。	Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作
TaskListDefUtil	Planning アプリケーション間でタスク・リスト定義をエクスポートまたはインポートにより、あるいは XML ファイルからタスク・リスト定義を移動します。	タスク・リストのインポートとエクスポート

Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制

パスワードを催促する Oracle Hyperion Planning ユーティリティを実行する際、管理者はバッチ・モードでユーティリティを実行する場合などで、オプションを利用してパスワード・プロンプトを抑制できます。パスワード・プロンプトの抑制を使用可能にするには、PasswordEncryption ユーティリティを使用してパスワードを暗号化された形式で保管するファイルを作成します。ファイルを設定したら、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてパスワード・プロンプトをスキップし、暗号化されたファイルからパスワードを使う `[-f:passwordFile]` オプションで Planning ユーティリティを実行できます。各パスワード・ファイルには1つのパスワードが含まれ、ユーティリティを実行する際に指定する場所へ保管されます。

PasswordEncryption ユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用します。デフォルトでは、ユーティリティは/planning1 ディレクトリにインストールされます(完全パスは [EPM Oracle インスタンスについて](#) を参照)。

Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制するには:

1. planning1 ディレクトリから次のコマンドを入力します(ただし、passwordFile は、パスワード・ファイルの完全なファイル・パスおよびファイル名です):

- **Windows:** PasswordEncryption.cmd passwordFile
- **UNIX:** PasswordEncryption.sh passwordFile

2. プロンプト表示された場合は、パスワードを入力します。

マスクされたパスワードは暗号化され passwordFile で指定した場所へ保管されます。他の Planning ユーティリティのパスワード・プロンプトでは、コマンド・ラインの最初のパラメータとして[-f:passwordFile]を使用して、プロンプトをスキップし、passwordFile で指定したパスワード・ファイルから暗号化されたパスワードを使用します。

Planning ユーティリティのテキスト・ファイルについて

これらの Oracle Hyperion Planning ユーティリティでは、UTF-8 フォーマットで保存する必要があるテキスト・ファイルを使用します: FormDefUtil、SampleApp_Data、TaskListDefUtil およびアウトライン・ロード・ユーティリティ。その他のユーティリティではテキスト・ファイルを使用せず、特定のエンコードも必要ありません。

たとえば、FormDefUtil ユーティリティのテキスト・ファイルをメモ帳で更新すると、ファイルはデフォルトで正しいエンコード・フォーマットで保存されます。エンコード・オプションを変更したり、ANSI や Unicode などの別のエンコード・フォーマットを使用してテキスト・ファイルを作成したりすると、ユーティリティは正しく動作しません。テキスト・ファイルを保存する際に、UTF-8 エンコードが選択されていることを確認してください。

UNIX での Planning ユーティリティの実行

UNIX で Oracle Hyperion Planning ユーティリティを実行するには、ユーザーが適切な権限を持っている必要があります。たとえば、ユーティリティを実行するディレクトリにおける実行権限、およびログ・ディレクトリへの読取りおよび書込み権限が必要です。

EPM Oracle インスタンスについて

EPM Oracle インスタンスは Oracle Enterprise Performance Management System 製品の構成時に定義されます。このガイドでの EPM Oracle インスタンスの場所は `EPM_ORACLE_INSTANCE` です。EPM Oracle インスタンスのデフォルト場所は `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1` です。デフォルトでは、Oracle Hyperion Planning ユーティリティは `EPM_ORACLE_INSTANCE/Planning/planning1` ディレクトリにインストールされ、Planning の.log ファイルは `EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning` ディレクトリに書き込まれます。

Planning ユーティリティ(ProvisionUsers、ImportSecurity、ExportSecurity など)のデバッグ・メッセージが、`C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\diagnostics\logs\planning` の下に生成される PlanningCLU.log と呼ばれるログ・ファイルに記録されます。デバッグ・レベルは、

C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\Planning\planning1
の下にある loggingCLU.xml ファイルで変更できます。

アプリケーション・サーバーの使用

アプリケーション・サーバーを通して Oracle Hyperion Planning アプリケーションにアクセスできます。アプリケーション・サーバーをワークステーションで登録する必要があります。

インスタンスとクラスタの更新について

アプリケーションの作成時に、インスタンス(クラスタとも呼ばれる)に関連付けられているデータ・ソースを選択します。必要に応じて、EPM System コンフィグレータを使用してクラスタを更新できます。Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイドの Planning クラスタ管理を参照してください。

Planning および Essbase を閉じる

Oracle Essbase サーバーを閉じるには:

1. Essbase ウィンドウを最大化します。
2. **Quit** と入力します。

Oracle Hyperion Planning Web ページからログオフするには、「ファイル」、「ログオフ」の順に選択します。ログオン・ページに戻ります。

Web で Planning を閉じるには、「ファイル」、「終了」の順に選択します。

アクセス権限の設定

アクセス権限のレベル

Oracle Hyperion Planning アプリケーション要素にアクセス権限を設定すると、権限のないユーザーによるデータの表示または変更を防止します。アクセス権限はこれらのレベルで設定できます。

- 外部ユーザー・ディレクトリによるプロビジョニングされたユーザーおよびグループの認証。Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイドで、記載されている Planning に関する情報を参照してください。
- アプリケーション・グループ、アプリケーション、ディメンション、ユーザー、およびグループを管理するアクセス権限を設定する Oracle Hyperion Shared Services の役割。たとえば、特定のタスクを実行するには、ユーザーにはこれらの Shared Services 役割が必要となります。
 - プロジェクト・マネージャ: Shared Services でアプリケーション・グループを作成および管理します。
 - プロビジョニング・マネージャ: アプリケーションでユーザーおよびグループを設定します。
- ユーザー定義のディメンションを含む、ディメンション。ディメンション・プロパティの「**セキュリティの適用**」を選択することにより、メンバーに対してアクセス権限を割り当てます。「**セキュリティの適用**」の設定を省略またはクリアすると、すべてのユーザーがディメンションのメンバーにアクセスできるようになります。

デフォルトでは、勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、年、期間、通貨の各ディメンションのアクセス権限が使用可能です。
- アプリケーションごとに異なるユーザーおよびグループ。「**アクセス権の割当て**」を使用して、Planning アプリケーション・アーティファクトにアクセス権を割り当てます。

アクセス権限の更新後、アプリケーションをリフレッシュして Oracle Essbase セキュリティ・フィルタを更新します。

アクセス権の割当てが可能な Planning のアーティファクト

アクセス権限を次に割り当てることができます:

- シナリオ・メンバー
- バージョン・メンバー
- 勘定科目メンバー
- エンティティ・メンバー

- ユーザー定義カスタム・ディメンションのメンバー
- ビジネス・ルールへの起動権限
- フォーム
- フォーム・フォルダおよびビジネス・ルール・フォルダ
- タスク・リスト

ユーザーのユーザー・タイプを変更すると、Oracle Essbase データベースをリフレッシュするまで、そのユーザーには、サードパーティ製のツールを介したアプリケーションへの完全な読取り/書込みアクセス権があります。データベースがリフレッシュされると、適切なアクセス権限がユーザーに適用されます。

アクセス権限タイプ

アクセス権限には、読取り、書込みおよびなしがあります。どのユーザーがどの Oracle Hyperion Calculation Manager ビジネス・ルールを起動できるかを設定することもできます。

- **起動:** 起動の権限を許可します

ノート:

表示ユーザー・タイプには、ディメンション・メンバーへの書込み許可がないため、メンバー、ディメンション、メンバー範囲またはディメンション間実行時プロンプト・タイプを含む実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを起動できません。その他の実行時プロンプト(たとえば日付タイプ)のあるビジネス・ルールを起動することは可能です。

- **起動しない:** 起動を許可しない権限

ノート:

ユーザーがあるグループに属する理由からビジネス・ルールの起動アクセス権限を継承しているが、他のグループに属する理由から起動を許可しないアクセス権限も割り当てられている場合は、より制限的である「起動を許可しない」権限が優先します。

個別ユーザーおよび各グループにアクセス権限を指定できます。ユーザーをグループに割り当てる場合、ユーザーはグループへのアクセス権限が必要になります。個人のアクセス権限とユーザーが属するグループのアクセス権限に矛盾がある場合は、ユーザーに割り当てられたアクセス権限が優先します。

アクセス権限の継承

ユーザーまたはグループのアクセス権限は継承によって決定されます。メンバーの子または子孫がそのアクセス権限を継承する原因となる属性を指定できます。割り当てられたアクセス権限は、継承されたアクセス権限に優先します。アクセス権限設定で、メンバーを含めるかまたは除外できます。

表 3-1 アクセス権限の継承オプション

継承オプション	アクセス権限の割当て
メンバー	現在選択されているメンバーのみ
子	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー
子(含む)	現在選択されているメンバーおよびそのメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー
子孫	現在選択されているメンバーの下にあるすべての子孫メンバー
子孫(含む)	現在選択されているメンバーおよびそのメンバーの下にあるすべての子孫メンバー

アクセス権限の評価法

アクセス権限を評価する場合、Oracle Hyperion Planning は次の順序で優先権を与えます。

1. 役割レベルのセキュリティ。管理者ユーザーにはすべてのアプリケーション要素に対するアクセス権が与えられます(「一括割当て」機能を使用するアクセス権の割当てが必要となる、一括割当てを除く)。
2. 役割レベルのセキュリティ。管理者の役割を持つユーザーには、すべてのアプリケーション要素へのアクセス権があります。
3. 具体的にユーザーに割り当てられたアクセス権限である、対話型ユーザーおよびプランナ・ユーザー・タイプ。
4. グループに属することで割り当てられたアクセス権。
5. 親レベルの割当て(たとえば、親メンバーまたはフォルダへのアクセス)。

ディメンションのアクセス権限の使用可能

ディメンション・プロパティ タブを使用し、ユーザー定義カスタム・ディメンション・メンバーへのアクセス権限を設定します。

ディメンションのアクセス権限を使用可能にするには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、ディメンションを選択します。
3. 「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
4. 「ディメンション・プロパティ」で、「セキュリティの適用」を選択します。

ノート:

このオプションを選択しないと、ディメンションにはセキュリティが設定されず、ユーザーはそのメンバーに制限なしにアクセスできます。[ディメンションのアクセス権限の使用可能](#)を参照してください。

5. 「保存」をクリックします。

「リセット」をクリックして、前に保存した値に戻します。

メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て

ユーザー定義のカスタム・ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に、ディメンションの「プロパティ」タブで「セキュリティの適用」チェック・ボックスを選択する必要があります。[ディメンションのアクセス権限の使用可能](#)を参照してください。

メンバーまたはビジネス・ルールにアクセス権を割り当てるには:

1. メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:
 - **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択し、続いてディメンションおよびメンバーを選択します。
 - **ビジネス・ルールの場合:** 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。
2. 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。
3. **オプション:** Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更されたアイデンティティや位置を Oracle Hyperion Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。

ノート:

ユーザーまたはグループの変更されたアイデンティティ、あるいはそのユーザー・ディレクトリ内の位置を Shared Services Console から Planning に移行する際に、「移行アイデンティティ」ボタンは使用しないでください。かわりに、UpdateUsers コマンドライン・ユーティリティを実行する必要があります。

4. **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「**プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除**」をクリックします。
5. アクセス権を追加、編集または削除します。

[アクセス権の追加、編集および削除](#)を参照してください。

アクセス権の追加、編集および削除

選択したメンバーまたはビジネス・ルールにアクセスできるユーザーまたはグループを指定できます。

メンバーまたはビジネス・ルールへのアクセス権限の割当て、編集および削除を行うには:

1. メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:
 - **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。続いてディメンションおよびメンバーを選択します。

- **Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルールの場合:** 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。
2. 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。
 3. **オプション:** Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更されたアイデンティティや位置を Oracle Hyperion Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。
 4. **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
 5. アクセス権を追加するには:
 - a. 「アクセス権の追加」をクリックします。
 - b. 選択したメンバーまたはビジネス・ルールにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

 - 複数ページのユーザーまたはグループが存在する場合、「ページ」でページ番号を入力し、「実行」をクリックします。
 - 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。
 - 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。
 - c. **メンバーのオプション:** 関係を選択します。

たとえば、「子」を選択して、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。
 - d. オプションを選択します:
 - 「起動」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。
 - 「起動しない」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。
 - e. 選択されたユーザーまたはグループは、アクセス権のタイプを選択し、「追加」をクリックします。
 - f. 「閉じる」をクリックします。
 6. アクセス権を変更するには:
 - a. 「アクセス権の編集」をクリックします。
 - b. 選択したメンバーまたはビジネス・ルールには、表示されたユーザーまたはグループのアクセス権のタイプを選択します。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

ビジネス・ルールのみ:

- 「**起動**」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。
 - 「**起動しない**」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。
- c. **メンバーのオプション**: 関係を選択します。
- たとえば「子」を選択し、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。
- d. 「**設定**」をクリックします。
- e. 「**閉じる**」をクリックします。
7. アクセス権を削除するには:
- a. 選択したメンバーまたはビジネス・ルールのアクセス権を除去するユーザーおよびグループを選択します。
- 「**ユーザー**」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「**グループ**」をクリックしてすべてのグループを表示します。
- b. 「**アクセス権の削除**」をクリックします。
- c. 「**OK**」をクリックします。
- d. 「**閉じる**」をクリックします。

共有メンバーへの有効なアクセス権限について

共有メンバーに対して直接アクセス権を割り当てることはできません。共有メンバーは、その基本メンバー、親または祖先からアクセス権限を継承します。

Oracle Hyperion Planning により、メンバーのアクセス権限継承関係に基づき、最初にユーザー、次にグループ、という順でアクセス権限が各レベルで確認されます。複数のアクセス権限が存在する場合、最も制限の少ないアクセス権限が適用されます(たとえば、書込みアクセスは読取りアクセスより優先されます)。

この例は、「[データベースのリフレッシュ](#)」または「[データベースの作成](#)」ページで「[セキュリティ・フィルタ](#)」および「[共有メンバー](#)」オプションが選択されて、データベースがリフレッシュまたは作成された場合に、基本メンバーおよびその共有メンバーへの有効なアクセス権を決定する方法について示します([アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ](#)を参照)。

サンプルのエンティティ・メンバー

親エンティティ	子エンティティ
米国	CA (ベース)
	NY
西部	CA (共有)
	NV
営業地域 1	

親エンティティ	子エンティティ
	CA (共有)

表 3-2 共有メンバーへの継承されたアクセス権の例

ケース	アクセス権限	基本および共有メンバー CA への有効なアクセス権	説明
ケース 1	CA (ベース) = なし iDescendants (西部) = 読取り	読取り	「読取り」は「なし」よりも制限が少ないため、CA は West の親から「読取り」アクセス権を継承します。
ケース 2	iDescendants (米国) = なし iDescendants (西部) = 読取り iDescendants (営業地域 1) = 書込み	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は営業地域 1 の親から「書込み」アクセス権を継承します。
ケース 3	iDescendants (米国) = 書込み iDescendants (西部) = なし iDescendants (営業地域 1) = 読取り	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は米国の親から「書込み」アクセス権を継承します。

フォームとフォルダへのアクセス権の管理

フォームとフォルダへのアクセス権の割当て

管理者はフォーム、フォーム・フォルダおよび Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダにアクセス権を割り当てることができます。(ビジネス・ルールおよびメンバーへのアクセス権の割当ての詳細は、[アクセス権限タイプおよびメンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て](#)を参照してください。)

原則:

- **フォーム:**
 - プランナおよび対話型ユーザーは、アクセス権のあるフォームのみ表示またはデータ入力することが可能です(また、アクセス権のあるメンバーに対してのみ作業を行うことが可能です)。
 - 管理者と対話型ユーザーはフォームをデザインできます。
 - 対話型ユーザーは自分が作成した、または管理者がアクセス権を割り当てたフォームにアクセスできます。
 - 管理者はすべてのディメンション・メンバーおよびすべてのフォームへの書込みアクセス権を持ちます。
- **ビジネス・ルール:** プランナは、起動アクセス権を割り当てられているビジネス・ルールのみを表示および起動できます。

- **フォーム・フォルダおよびビジネス・ルール・フォルダ:**
 - フォーム・フォルダへのアクセス権を割り当てられているプランナは、特定のアクセス権が割り当てられていない限り、フォルダのフォームにアクセスできます。同様に、特定のアクセス権が割り当てられていない限り、プランナにはアクセス権を割り当てられているフォルダにある **Calculation Manager** のビジネス・ルールへの起動アクセス権があります。
 - フォルダに対してアクセス権を割り当てる場合、そのフォルダ内にあるすべてのフォルダはそのアクセス権を継承します。
 - フォーム・フォルダに特定のアクセス権限を割り当てる場合(たとえば、「なし」または「書込み」)、そのアクセス権限はその親フォルダのアクセス権限に優先します。たとえば、あるユーザーに「なし」アクセス権が割り当てられている **Folder2** を含む **Folder1** に対する「書込み」アクセスが割り当てられている場合、ユーザーは **Folder1** を開くことができますが、**Folder2** を見ることはできません。
 - **Calculation Manager** のフォルダに対して特定のアクセス(たとえば起動)を割り当てる場合、そのアクセス権限はその親フォルダのアクセス権限に優先します。たとえば、あるユーザーに「起動しない」アクセス権が割り当てられた **RulesFolder2** を含む **RulesFolder1** の「起動」アクセス権が割り当てられている場合、ユーザーは **RulesFolder1** を開くことはできますが、**RulesFolder2** を見ることはできません。
 - ユーザーが、「書込み」アクセス権を割り当てられている **Form1** というフォームを含む **Folder1** というフォーム・フォルダに対し、「なし」アクセス権が割り当てられている場合、ユーザーは **Folder1** と **Form1** の両方を見ることができます。
 - ユーザーが、「起動」アクセスを割り当てられている **Rule1** というビジネス・ルールを含む **RulesFolder1** という **Calculation Manager** フォルダに対し、「起動しない」アクセス権を割り当てられている場合、ユーザーは **RulesFolder1** および **Rule1** の両方を見ることができます。

手順は、[フォームおよびフォルダへのアクセス権の追加、変更および削除](#)を参照してください。

フォームおよびフォルダへのアクセス権の追加、変更および削除

アクセス権をフォーム、フォーム・フォルダおよび Oracle Hyperion Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダに割り当てるには:

1. フォームまたはフォルダを選択します。
 - フォームおよびフォルダの詳細は、[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
 - ビジネス・ルール・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。
 - ビジネス・ルールの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むビジネス・ルール・フォルダを開き、ルールを選択します。

一度に1つのフォーム、ビジネス・ルールまたはフォルダのみにアクセス権を割り当てることができます。

2. 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

3. オプション: Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更されたアイデンティティや位置を Oracle Hyperion Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。
4. オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
5. フォームおよびフォルダへのアクセス権を追加するには:
 - a. 「アクセス権の追加」をクリックして、フォームまたはフォルダにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

 - ユーザーとグループのページが複数におよぶ場合、ページ番号を「ページ」に入力して、「実行」をクリックします。
 - 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。
 - 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。
 - b. 「アクセス権タイプ」には、フォームまたはフォルダに対してユーザーまたはグループに割り当てられているアクセス権の種類を選択します。

ビジネス・ルールまたはそのフォルダのみ:

 - 「起動」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。
 - 「起動しない」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。
 - c. 「追加」をクリックします。
 - d. 「閉じる」をクリックします。
6. フォームとフォルダを使用および変更できるユーザーを変更するには:
 - a. アクセス権を変更するユーザーまたはグループを選択し、「アクセス権の編集」をクリックします。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - b. 「アクセス権タイプ」には、フォームまたはフォルダに対してユーザーまたはグループに割り当てられているアクセス権の種類を選択します。
 - c. 「設定」をクリックします。
 - d. 「閉じる」をクリックします。
7. フォームまたはフォルダからアクセス権を除去するには:
 - a. アクセス権を削除するユーザーまたはグループを選択し、「アクセス権の削除」をクリックします。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - b. 「OK」をクリックします。

アクセス権限のインポート

ImportSecurity ユーティリティを使用して、ユーザーまたはグループのアクセス権限をテキスト・ファイルから Oracle Hyperion Planning にロードできます。(ユーザーまたはグループを追加するには、*Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイド*を参照してください。)アクセス権限をインポートすることにより、インポートされたメンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルールおよび Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダの既存アクセスの割当てが上書きされます。その他の既存アクセス権限は影響を受けません。SL_CLEARALL パラメータは、既存のアクセス権限をすべてクリアします。これは、他のパラメータと併用して既存のアクセス権限を入れ替えることが可能です。[アクセス権限のエクスポート](#)も参照してください。

ImportSecurity ユーティリティでは、アクセスを割り当てる前に、Planning アプリケーションにおいてユーザーをプロビジョニングしておく必要があります。例:

- TotPlan アプリケーションにおいてユーザー `mrauch` がプロビジョニングされている場合、このユーティリティで次のレコードを使用して `mrauch` にアクセス権限が割り当てられます:

```
mrauch,member1,READWRITE,MEMBER
```

- ユーザー `ehennings` がアプリケーションにおいてまだプロビジョニングされていない場合、次のレコードはロードに失敗します:

```
ehennings,member1,READWRITE,MEMBER
```

ExportSecurity ユーティリティを使用し、SecFile.txt ファイルを自動的に作成して、このファイルからアクセス権限をインポートできます。次のガイドラインを使用して、SecFile.txt ファイルを手動で作成することも可能です:

- テキスト・ファイルに SecFile.txt という名前を付け、planning1 ディレクトリに保存する必要があります(完全パスは [EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照)。
- すべてのユーザー、グループおよびアーティファクトは、アプリケーションで定義されている必要があります。
- アクセス権限をユーザー定義のカスタム・ディメンションにインポートする前に、「[セキュリティの適用](#)」を選択することによって、アクセス権限を設定できるようにする必要があります([ディメンションのアクセス権限の使用可能](#)を参照)。
- SecFile.txt ファイルの各行に、アクセス権限を指定します。

各行に、次のいずれかの区切り文字で区切られたこれらのアイテムが含まれていなければなりません。カンマ(,)、タブ、セミコロン(;)、パイプ(|)、コロン(:)、スペース()。デフォルトはカンマです。

アイテム	説明
ユーザー名またはグループ名	<p>Oracle Hyperion Shared Services Console で定義されたユーザーまたはグループ名。</p> <p>アクセス権限情報をユーザーと同名のグループにインポートするには、この情報を次のグループに関連する SecFile.txt ファイルの行に追加します: sl_group</p> <p>例:</p> <pre>admin,member1,READ,MEMBER admin,member1,READ,MEMBER,SL_GROUP</pre>
アーティファクト名	<p>インポートされたアクセス権限のアーティファクト名(たとえばメンバー、フォーム、タスク・リスト、フォルダまたは Calculation Manager ビジネス・ルール)。例: Account1。</p> <p>アーティファクト名に区切り文字として使用している文字が含まれる場合は、名前を二重引用符で囲みます。たとえば、区切り文字としてスペースを使用している場合、「South America」を次のように二重引用符で囲みます: "South America"。</p>
アクセス権限	<p>読取り、読取り書込みまたはなし。ユーザー/メンバーの組合せに重複行がある場合は、読取り書込みアクセス権のある行が優先となります。たとえば次の行の場合:</p> <pre>User1,Member1,READ,@ICILDREN User1,Member1,READWRITE,@ICILDREN</pre> <p>User1 の Member1 へのアクセス権限は読取り書込みとして適用されます。</p> <p>Calculation Manager のビジネス・ルールおよびフォルダのみ: 起動アクセス権限を「なし」または「起動」として指定します。</p>
Oracle Essbase アクセス・フラグ	<p>@CHILDREN、@ICILDREN、@DESCENDANTS、@IDESCENDANTS および MEMBER。</p> <p>これらの関数のセキュリティ実装は、Essbase と同様です。</p>
<hr/> <p>ノート:</p> <p>タスク・リストの場合、MEMBER のみが使用できます。フォルダの場合、@IDESCENDANTS のみが使用できます。</p> <hr/>	

アイテム	説明
アーティファクト・タイプ	<p>メンバー以外のアーティファクトでは、どのアーティファクトにセキュリティをインポートするかをアーティファクト・タイプ識別子によって区別します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SL_FORM - フォーム ・ SL_COMPOSITE - 複合フォーム ・ SL_TASKLIST - タスク・リスト ・ SL_CALCRULE - Calculation Manager ビジネス・ルール ・ SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ ・ SL_CALCFCOLDER - Calculation Manager のビジネス・ルールが含まれるフォルダ
<p>ノート:</p> <p>ExportSecurity ユーティリティによって、必要となるアーティファクト・タイプ識別子が自動的に SecFile.txt ファイルに追加されます。SecFile.txt ファイルを手動で作成した場合は、アーティファクト・タイプ識別子を追加する必要があります。</p>	
<p>ノート:</p> <p>ExportSecurity ユーティリティでは、管理者のタスク・リストへのアクセス権限のエクスポートはサポートされないため、このようなレコードはインポート前に SecFile.txt ファイルに手動で追加する必要があります。</p>	

ファイルのサンプル行:

```
User1,Account1,READ,@CHILDREN
```

```
Group2,DataForm08,READWRITE,MEMBER,SL_FORM
```

```
User3,TaskList09,READWRITE,MEMBER,SL_TASKLIST
```

```
NorthAmericaGroup,Sales,READWRITE,@IDESCENDANTS,SL_FORMFOLDER
```

アクセス権限を Planning にインポートするには:

1. planning1 ディレクトリに移動して、ImportSecurity ユーティリティを見つけます(完全パスは [EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照)。
2. コマンド・プロンプトで、このコマンド(大文字と小文字が区別されます)、1つのスペース、およびパラメータを入力し、それぞれをカンマで区切ります。パラメータは二重引用符で囲みます:

```
ImportSecurity [-f:passwordFile] " appname,username,[delimiter],
[RUN_SILENT],[SL_CLEARALL]"
```

ここで:

パラメータ	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。
<code>appname</code>	アクセス権限をインポートする Planning アプリケーションの名前。
<code>username</code>	Planning 管理者ユーザー名。
<code>delimiter</code>	オプション: SL_TAB、SL_COMMA、SL_PIPE、SL_SPACE、SL_COLON、SL_SEMI-COLON。区切り文字が指定されない場合のデフォルトはカンマです。
<code>RUN_SILENT</code>	オプション: ユーティリティを静かに(デフォルト)または進行状況メッセージ付きで実行します。メッセージ付きには 0 を、メッセージなしには 1 を指定します。
<code>[SL_CLEARALL]</code>	オプション: 新規のアクセス権限をインポートする場合は既存のアクセス権限をクリアします。大文字でなければなりません。

例:

```
ImportSecurity "app1,admin,SL_TAB,1"
```

すべてのアクセス権限をクリアするには、次を入力します:

```
ImportSecurity "app1,admin,,,SL_CLEARALL"
```

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。
4. ユーティリティの実行後、`EPM_ORACLE_INSTANCE /diagnostics/logs/planning` ディレクトリのログ・ファイル `importsecurity.log` を確認し、結果を検証します。完全なパスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

アクセス権限をインポートする場合のパフォーマンス向上

複数のユーザーのアクセスをインポートする場合は、フル・ネームを使用せずにパフォーマンスを向上させます。

1. Oracle Hyperion Planning Web で、「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「拡張設定」を選択し、「実行」をクリックして「システム設定」を選択します。
3. 「ユーザーのフル・ネームの表示」をクリアします。

アクセス権限のエクスポート

ExportSecurity ユーティリティを使用し、Oracle Hyperion Planning アクセス権限を SecFile.txt ファイルにエクスポートすることで、アプリケーションをまたいだアクセス権限のエクスポートおよびインポートが可能になります([アクセス権限のインポート](#)を参照)。特定のユーザーまたはグループ(必須パラメータのみを使用する場合はすべてのユーザーとグループ)は、ExportSecurity ユーティリティを使用して次のアーティファクトにアクセス権限をエクスポートできます: メンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、ビジネス・ルール、ビジネス・ルール・フォルダ。ExportSecurity は、エクスポートされたアーティファクト・セキュリティがフォーム、複合フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、ビジネス・ルールまたはビジネス・ルール・フォルダのいずれかを識別するアーティファクトのタイプ・フラグを追加します。

ノート:

- 必須(オプションではない)パラメータのみを指定する場合、すべてのユーザーとグループのすべてのアーティファクトに対するアクセス権限がすべてエクスポートされます。メンバー・パラメータを指定することにより、エクスポートに制限を設けることができます(1つのメンバー・ベースのパラメータのみ)。
- オプションのパラメータは、任意の順序で指定できます。
- /S_USER または /S_GROUP のみを使用できますが、両方を使用することはできません。
- /S= *searchCriteria* パラメータを使い、同名のユーザーおよびグループを指定します。
- ユーティリティを実行すると、エクスポートされたアクセス権限が含まれる SecFile.txt という名前のファイルが作成されます。

Planning からアクセス権限をテキスト・ファイルにエクスポートするには:

1. planning1 ディレクトリに移動します(完全パスは [EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照)。
2. コマンド・プロンプトに、次のコマンド(大文字と小文字の区別がある)、1つのスペースおよびパラメータを入力します。各パラメータをカンマで区切ります。

```
ExportSecurity [-f:passwordFile] /A= appname , /U= username , [ /S=
searchCriteria | /S_USER= user | /S_GROUP= group ], [ /S_MEMBER= memberName
| /S_MEMBER_ID= memberName | /S_MEMBER_D= memberName | /S_MEMBER_IC=
memberName | /S_MEMBER_C= memberName ], [ /DELIM= delim ], [ /DEBUG=true |
false ], [ /TO_FILE= fileName ], [ /HELP=Y
```

ここで:

パラメータ	説明	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>/A= appname</code>	アクセス権限をエクスポートする Planning アプリケーションの名前。	はい
<code>/U= username</code>	アプリケーションにログインするための管理者 ID。	はい
<code>/S= searchCriteria</code>	ユーザー名またはグループ名。 <code>/S_USER</code> または <code>/S_GROUP</code> では、このオプションは使用できません。	いいえ
<code>/S_USER= user</code>	指定されたユーザー名。 複数ユーザーの指定またはこのオプションを <code>/S_GROUP</code> または <code>/S=searchCriteria</code> と併用はできません。	いいえ
<code>/S_GROUP= group</code>	指定されたグループ。一致するユーザー名ではなく、一致するグループのみがエクスポートされます。 複数グループの指定またはこのオプションを <code>/S_USER</code> または <code>/S=search criteria</code> と併用はできません。	いいえ
<code>/S_MEMBER= MemberName</code>	指定されたメンバー。 1 メンバー・ベースのパラメータのみを指定できます。	いいえ
<code>/S_MEMBER_ID= MemberName</code>	指定されたメンバーとその子孫。	いいえ
<code>/S_MEMBER_D= MemberName</code>	指定されたメンバーの子孫。	いいえ
<code>/S_MEMBER_IC= MemberName</code>	指定されたメンバーとその子。	いいえ
<code>/S_MEMBER_C= MemberName</code>	指定されたメンバーの子。	いいえ
<code>/DELIM= delim</code>	<code>SL_TAB</code> 、 <code>SL_COMMA</code> 、 <code>SL_PIPE</code> 、 <code>SL_SPACE</code> 、 <code>SL_COLON</code> 、 <code>SL_SEMI-COLON</code> 。区切り文字が指定されない場合のデフォルトはカンマです。	いいえ
<code>/DEBUG=</code>	<code>true</code> を指定してユーティリティで実行されたステップを表示します。デフォルトは <code>false</code> です。	いいえ

パラメータ	説明	必須?
/TO_FILE=	SecFile.txt ファイルのパスを指定します。デフォルトでは、ファイルは planning1 ディレクトリに存在します(完全パスは EPM Oracle インスタンスについて を参照)。他のパスを指定する場合は二重円記号(バックスラッシュ)を使用します。例: C:\Oracle\SecFile.txt。	いいえ
/HELP=Y	ExportSecurity の構文およびオプションを表示する唯一のパラメータとして指定します。	いいえ

たとえば、Sales という名前のユーザーおよびグループのアクセス権限をエクスポートする場合は、次を入力します。

```
ExportSecurity /A=appl,/U=admin,/S=Sales
```

Account100 という名前のメンバーおよびその子孫について、特定のパス(この例では Planning\planning1)にある Account100.txt という名前のファイルに、コロンの区切り記号付きでエクスポートするには:

```
ExportSecurity /A=planappl,/U=admin,/TO_FILE=D:\
\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1\Account100,/
S_MEMBER_ID=Account100,/DELIM=SL_COLON
```

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

ノート:

- メンバー、ユーザーまたはグループ名に区切り記号として使用される文字が含まれる場合、名前は二重引用符で囲まれます。たとえば、スペースが区切り記号の場合、South America という名前は二重引用符で囲まれます: "South America"。
- カンマはパラメータの区切りに使用されるため、パラメータにカンマが含まれる場合(たとえば Kravets, Diana)、円記号(バックスラッシュ)が前に置かれます。また、円記号(バックスラッシュ)を使用してコマンド・プロンプトの円記号(バックスラッシュ)からエスケープします。この例では、円記号(バックスラッシュ)を2つ使用します: /A=Kravets\\,Diana
- ExportSecurity ユーティリティでは、管理者のタスク・リストへのアクセス権限のエクスポートはサポートされないため、このようなレコードはインポート前に SecFile.txt ファイルに手動で追加する必要があります。

エクスポート・ファイルの理解:

アイテム	説明
<i>user</i> または <i>group</i>	Oracle Hyperion Shared Services Console で定義されたユーザーまたはグループ名。
<i>memName</i>	アプリケーションのメンバー。

アイテム	説明
アクセス権限	<p>読取り、読取り書込みまたはなし。ユーザー/メンバーの組合せに重複行がある場合は、「読取り書込み」アクセス権のある行が優先となります。</p> <p>Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルールおよびフォルダのみ: アクセス権限を「なし」または「起動」として指定します。</p>
Oracle Essbase アクセス・フラグ	<p>@CHILDREN、@ICHILDREN、@DESCENDANTS、@IDESCENDANTS および MEMBER。</p> <p>これらの関数のセキュリティ実装は、Essbase と同様です。</p>
アーティファクト・タイプ	<p>各行の後に、ユーティリティによってアーティファクト・タイプが追加されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SL_FORM - フォーム ・ SL_COMPOSITE - 複合フォーム ・ SL_TASKLIST - タスク・リスト ・ SL_CALCRULE - ビジネス・ルール ・ SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ ・ SL_CALCFCOLDER - ビジネス・ルールを含むフォルダ
<hr/> <p>ノート:</p> <p>SecFile.txt ファイルを手動で作成した場合は、アーティファクト・タイプ識別子を追加する必要があります。</p> <hr/>	

たとえば、エクスポートされたファイルには次の行が含まれることがあります。

```
User1,DataForm2,READ,MEMBER,SL_COMPOSITE
```

```
User2,Folder3,READWRITE,MEMBER,SL_FORMFOLDER
```

```
User3,DataForm4,READWRITE,MEMBER,SL_FORM
```

```
"North America",Account101,READWRITE,MEMBER,SL_CALCFCOLDER
```

アクセス権限のレポート

現在のアクセス権限を表示し、レポートを印刷できます。

Oracle Hyperion Planning におけるユーザーおよびグループの現在のアクセス権限をレポートするには:

1. Planning で、「ツール」、「レポート」、「アクセス・コントロール」の順に選択します。

2. 「ユーザーまたはグループの選択」で、使用可能なオプションから選択します。
3. 左側の「使用可能」パネルから、ユーザーまたはグループを選択および移動して、「選択済」パネルにレポートします:

参照するのではなく、ユーザーまたはグループ名を入力する場合は、フル・ネームを入力する必要があります。カンマの付いた名前の場合は、名前を引用符で囲みます。

4. 「次」をクリックします。

レポート・オブジェクトの選択

次のオブジェクトのレポートが可能です: 勘定科目、シナリオ、バージョン、エンティティ、ユーザー定義のカスタム・ディメンションおよびフォーム。

レポート・オブジェクトを選択するには:

1. アクセス権レポートを開始します。
[アクセス権限のレポート](#)を参照してください。
2. 「オブジェクトの選択」で、レポートする Oracle Hyperion Planning オブジェクトを選択します。
3. 「次」をクリックします。

レポート・オプションの選択

アクセス・レポートのオプションを指定するには:

1. アクセス権レポートを開始します。
[アクセス権限のレポート](#)を参照してください。
2. 「タイプが一致するアクセスの表示」の「レポート・オプション」で、表示するアクセス権を選択します: 「読取り」、「書込み」または「なし」。
3. 「結果のグループ分け単位」で、どのようにレポートを表示するかを「ユーザー」または「オブジェクト」から選択します。
4. 「レポート・タイプ」セクションで、「割り当てられたアクセス」または「有効なアクセス」を選択します。

表 3-3 アクセス・レポート・タイプ

レポート・タイプ	説明	オプション
割り当てられたアクセス	管理者により割り当てられるアクセス権限の要約	<p>アクセス権がメンバー選択リレーションまたはグループ・メンバーシップのどちらにより割り当てられるかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関係が一致するアクセスの表示: メンバー、子、子(含む)、子孫または子孫(含む)。 ・ グループからの継承を表示: グループのユーザーから継承済のアクセス権限を表示します。

表 3-3 (続き) アクセス・レポート・タイプ

レポート・タイプ	説明	オプション
有効なアクセス	Oracle Hyperion Planning の評価に伴いアクセス権の割当てを要約します (たとえば、子またはグループ・メンバーシップなどのメンバー選択関係)。アクセス権限に不一致が見られる場合に有効です。	有効なアクセス元の表示を選択することにより、有効なアクセス元を説明します。たとえば、Entity1 の「書込み」アクセス権を割り当てられているユーザー名「JSomebody」が、Entity1 の「読取り」アクセス権を割り当てられている「Sales」グループに属しているとします。個人に割り当てられたアクセスは、グループ・メンバーシップにより継承されるアクセス権に優先するため、この設定では「JSomebody」が Entity1 の「書込み」アクセス権を割り当てられていると表示されます。
ノート:	有効なアクセス権レポートはグループに対しては生成できません。	

5. 「終了」をクリックします。

Adobe Acrobat が起動して、レポートがオンラインで表示されます。

アクセス権限レポートの操作

アクセス権限のレポートは Adobe Acrobat に表示されます。Adobe Acrobat のツールバーを使ってレポートを操作できます。

監査証跡の設定

管理者は、変更を追跡するためにアプリケーションの局面を選択できます。たとえば、ユーザーがメンバーのプロパティを変更したり、通貨を追加した場合など、メタデータの変更を追跡できます。また、フォーム、ビジネス・ルール、承認、ユーザー、アクセス権限などの変更を追跡することもできます。監査を表示するには、管理者は RDBMS レポート・ライターを使用してレポートを作成および実行します。

ImportSecurity ユーティリティでインポートされたアクセス権の割当ては、監査レポートに反映されません。

表 3-4 監査できるアクション

監査オプション	追跡される変更
ディメンション管理	<ul style="list-style-type: none"> ディメンション階層: メンバーまたはディメンションの追加。プロパティの移動、削除または変更。メンバーまたはディメンションの名前変更 パフォーマンス設定: ディメンションの密または疎の再設定、ディメンションの順序の変更 通貨: 通貨の追加または削除、三角換算法またはレポートの通貨の設定 Oracle Hyperion Planning に影響を与えるユーティリティによる更新 (ImportFormDefinition ユーティリティでフォーム・デザインをインポートするなど)

表 3-4 (続き) 監査できるアクション

監査オプション	追跡される変更
別名表の管理	別名表への変更: 登録、コピー、名前変更、削除およびクリア
データ	<ul style="list-style-type: none"> ・ セル値 ・ サポート詳細 ・ 勘定科目注釈 ・ セル・レベル・ドキュメント
ビジネス・ルールの起動	計算スクリプトおよびビジネス・ルールによる更新(実行時プロンプトを含む)
フォームの定義	フォーム: 作成、修正、行の追加。(監査レコードには、デザインの変更は記録されません)
フォーム・フォルダの管理	フォルダ: 作成済、移動済、削除済
承認	承認: プランニング・ユニット所有者、ステータスおよびステータス(開始または除外済)
バージョンのコピー	サポート詳細および注釈を含んだコピー済バージョン。監査レコードには、コピー済バージョンの詳細(データ、サポート詳細および注釈など)は記録されません。
セキュリティ	ディメンションのメンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、ビジネス・ルールおよびタスク・リストに対するアクセス権限
ユーザーの管理	追加、変更または削除済のユーザー
グループの管理	追加、変更または削除済のグループ、追加または除去済のユーザー
タスク・リスト	タスク・リスト: 作成、コピー、保存、移動および削除済
データのコピー	静的ディメンション、ソース・ディメンションおよび宛先ディメンションにおけるユーザーの選択
セル詳細のクリア	サポート詳細のクリア、セル・テキスト、および勘定科目注釈におけるユーザーの選択

Planning 記録により変更されるアプリケーションの aspek トを指定するには:

1. 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
2. 「監査」を選択します。
3. アクション Planning 追跡を選択します。

パフォーマンスが低下することのないよう、注意して監査するアプリケーション要素を選択してください。

4. 「選択の保存」をクリックします。

選択された監査オプションに基づき、アプリケーションの変更が HSP_AUDIT_RECORDS 表に記録され、リレーショナル・データベースに保管されます。

5. アプリケーション・サーバーを再起動します。

6. RDBMS レポート・ライターを使用して HSP_AUDIT_RECORDS 表に結果を表示します。

ユーザーが監査オプションをリセットした場合、その変更は記録されます。

追跡されたアクションの例

記録済項目ごとに Oracle Hyperion Planning によって次の追跡が行われます:

追跡される変更	例
変更のタイプ	メタデータ、データ、フォーム、アクセス権限、プランニング・ユニット
影響を受けたオブジェクト(監査レポートの列 ID_1 および ID_2 は、変更されたオブジェクトの定義に役立ちます)。	フォーム: Expenses 04 グループ: Marketing
ユーザー	VHennings
記録時間	08/22/2013 8:17
アクション	追加
プロパティ	通貨
古い値	デフォルト
新しい値	USD

監査レポートの表示とクリア

監査結果は HSP_AUDIT_RECORDS 表に記録され、リレーショナル・データベースに保管されます。監査レポートをクリアするには、HSP_AUDIT_RECORDS 表で SQL の DELETE コマンドを使用します。特定の日数前のエントリをクリアするには、「time_posted」フィールドで比較します。たとえば、表からすべてのエントリを消去するには:

```
DELETE FROM HSP_AUDIT_RECORDS
```

監査レコードを記録された時間でソートして表示するには:

```
SELECT * FROM HSP_AUDIT_RECORDS ORDER BY TIME_POSTED
```

セキュリティ・フィルタの管理

Oracle Hyperion Planning のアクセス権限はリレーショナル・データベースに保管されます。

たとえば Oracle Hyperion Financial Reporting やサードパーティのツールなど、Planning 以外の製品を使用する場合に、Oracle Essbase で直接 Planning データにアクセスするには、セキュリティ・フィルタを生成することによって Planning アクセス権限を Essbase にプッシュする必要があります。

選択済ユーザーのセキュリティ・フィルタを更新するには、「管理」、「管理」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します。すべてのユーザーのセキュリティ・フィルタを同時に更新するには、「管理」、「アプリケーション」、「データベースの作成」、「データベースのリフレッシュ」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します(アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュを参照)。

まず、セキュリティ・フィルタのサイズが Essbase の制限である 64KB/行を超過しないことを検証します。

ノート:

アウトラインが変更されるたびに(動的な子が追加された、メンバー名が変更された、およびセキュリティが新規メンバーに割り当てられたなど)、「セキュリティ・フィルタ」オプションを選択して、データベースのリフレッシュを実行することをお勧めします。

読取りまたは書込みセキュリティ・フィルタが Essbase で生成されるには、ユーザーは、保護された各 Planning ディメンション(ユーザー定義のディメンションを含む)の少なくとも1つのメンバーに対し、読取りまたは書込みのアクセス権限を保有していなければなりません。これらのディメンションにアクセス権が割り当てられていない場合、Essbase におけるユーザーのセキュリティ・フィルタは「なし」に設定されます。

個別のセキュリティ・フィルタを作成または更新するには:

1. Planning から、「管理」、「管理」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します。
2. セキュリティ・フィルタを更新するユーザーを選択します。
3. 「作成」をクリックします。

Essbase により、アクセス権限情報が保存される暗号化ファイル(essbase.sec)が作成されます。

ノート:

- プランナおよび対話型ユーザー・タイプに Essbase の Planning データへ直接書き込むアクセス権を持たせたい場合は、Oracle Hyperion Shared Services で「Essbase 書込み権限」の役割を割り当てます。
- 動的メンバーへのアクセス権を持つユーザーのセキュリティ・フィルタを作成またはリフレッシュした後、Essbase パッケージ名が、実際のメンバー名の代わりに、動的メンバーのフィルタ行に表示されます。

プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期

管理者がコマンド・ライン・インタフェースを使用して実行する ProvisionUsers ユーティリティによって、Oracle Hyperion Shared Services Console の Oracle Hyperion Planning ユーザー、グループおよび役割が、Planning アプリケーションおよび Oracle Essbase と同期されます。

このユーティリティを使用するには:

1. 次の構文を使用し、`planning1` ディレクトリから `ProvisionUsers.cmd` ファイルを起動します:

```
ProvisionUsers [-f:passwordFile] /ADMIN: adminName /A: appName
[/U: user1[user2;user3] ] [/R: n ]
```

`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

表 3-5 ProvisionUsers 構文

パラメータ	説明	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>/ADMIN: adminName</code>	Planning アプリケーションにログオンする管理者名。	はい
<code>/A: appName</code>	同期させる Planning アプリケーション(ユーティリティが実行しているサーバー上に存在する必要があります)。	はい
<code>[/U: user1[user2;user3]]</code>	同期させるユーザーを指定します。たとえば、 <code>Planner1</code> というユーザーと <code>Planner2</code> というユーザーを同期させる場合、 <code>/U:Planner1;Planner2</code> を使用します。この引数を省略すると、すべてのユーザーが同期されます。	いいえ
<code>[/R: n]</code>	同期を実行する間隔を分単位で指定します。たとえば、30 分ごとに同期を行う場合は、 <code>/R:30</code> を使用します。この引数を省略すると、同期は一度のみしか行われません。	いいえ
<code>/?</code>	自身を指定し、 <code>ProvisionUsers</code> の構文およびオプションを印刷します。	いいえ

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例 1

入力:

```
ProvisionUsers /ADMIN:admin /A:App1
```

App1 アプリケーションのすべてのユーザーを同期します。

例 2

入力:

```
ProvisionUsers /ADMIN:admin /A:App2 /U:Planner1 /R:60
```

App2 アプリケーションで、Planner1 というユーザーを 60 分ごとに同期させます。

ユーザーとグループ・アイデンティティの移行

ユーザーまたはグループのアイデンティティ、またはユーザー・ディレクトリ階層の位置を変更する場合、この情報は Oracle Hyperion Planning で更新または移行する必要があります。

変更されたユーザーおよびグループのアイデンティティを Oracle Hyperion Shared Services Console から Planning に移行するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 「管理」、「管理」、「ディメンション」を選択し、続いてディメンション・メンバーを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」の順に選択し、フォームを選択します。
 - Oracle Hyperion Calculation Manager を使用している場合: 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択し、ビジネス・ルール・フォルダまたはビジネス・ルールを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「タスク・リスト」を選択し、タスク・リストを選択します。
2. 「アクセス権の割当て」をクリックします。
3. 「移行 ID」をクリックします。

ビジネス・ルール・セキュリティの移行

アップグレードされたアプリケーションで Oracle Hyperion Business Rules を使用していた場合、管理者はビジネス・ルールの起動アクセス権限およびそのプロジェクトを、Business Rules から Oracle Hyperion Planning の Oracle Hyperion Calculation Manager ビジネス・ルールに HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティを使用して移行できます。

HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティで次の操作を実行します:

- 特定の Planning アプリケーションのビジネス・ルールに割り当てられている起動アクセス権限を上書きします。
- Oracle Hyperion Shared Services Console で特定の Planning アプリケーションに提供されるユーザーおよびグループのアクセス権を移行します。

ノート:

Business Rules は、現在では Planning でサポートされておらず、Calculation Manager が唯一のオプションであるため、「計算モジュール」設定は「システム設定」ページから削除されました。

ビジネス・ルールおよびそのフォルダのアクセス権限を移行するには:

1. HBRMigrateSecurity.cmd を実行する前に:

- ビジネス・ルールを **Business Rules** から **Calculation Manager** へ移行します。
*Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド*を参照してください。
 - ビジネス・ルールを **Planning** にデプロイします。
2. コマンド・ラインで、**planning1** ディレクトリから次のコマンドとそのパラメータを入力し、それぞれをスペースによって区切ります:

```
HBRMigrateSecurity.cmd [-f:passwordFile] /A: appname /U: admin /F: output file
```

planning1 の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

表 3-6 HBRMigrateSecurity パラメータ

パラメータ	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>/A: appname</code>	ビジネス・ルールの起動アクセス権限を移行する Planning アプリケーションを指定します。	はい
<code>/U: admin</code>	管理者のユーザー名を指定します	はい
<code>/F: output file</code>	XML 出力ファイルの名前を指定します。ファイルが planning1 ディレクトリにない場合は、完全パスを指定します(planning1 の完全パスは、 EPM Oracle インスタンスについて を参照してください)。このファイルにはトランザクションのログが含まれ、トラブルシューティングに役立ちます。	はい
<code>/?</code>	HBRMigrateSecurity.cmd の構文とオプションを印刷します	いいえ

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
HBRMigrateSecurity.cmd /A:appname /U:admin /F:C:\temp \HBExportedSecurity.xml
```

移行したビジネス・ルールに関する **Calculation Manager** の**セキュリティ**設定の詳細は、[実行時プロンプトと承認セキュリティについて](#)を参照してください。

古いユーザー記録の削除

Oracle Hyperion Shared Services でユーザーまたはグループをプロビジョニング解除するか削除した場合は、Oracle Hyperion Planning リレーショナル・データベースのユーザー表およびグループ表を更新して古いレコードを削除することで、ディスク容量を節約できます。

古いユーザー記録を Planning データベース表から削除するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 「管理」、「管理」、「ディメンション」を選択し、続いてディメンション・メンバーを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」の順に選択し、フォーム・フォルダまたはフォームを選択します。
 - Oracle Hyperion Calculation Manager を使用している場合: 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択し、ビジネス・ルール・フォルダまたはビジネス・ルールを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「タスク・リスト」を選択し、タスク・リストを選択します。
2. 「アクセス権の割当て」をクリックします。
3. 「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

Financial Reporting でのアクセス権限の設定

Oracle Hyperion Financial Reporting では、これらのアクセス権限がサポートされません。

- ユーザーの認証
 - ログオン・アクセス権限
 - Financial Reporting およびデータ・ソースへのアクセス
- アプリケーション権限
 - Financial Reporting のタスクへのアクセス
 - レポートをデザインまたは表示する権限
- データ権限
 - メンバーや値などのデータ・ソースへのアクセス
 - レポートなどの Financial Reporting オブジェクトへのアクセス

Planning データベースの管理

アプリケーションのロック解除

ユーザーがアプリケーションまたは Planning を正常に終了しない場合などに、Oracle Hyperion Planning アプリケーションがロックされることがあります。アプリケーションのロック解除ユーティリティにより HSP_LOCK 表のすべての記録がクリアされます。ユーティリティは、Planning アプリケーション・サーバーから実行する必要があります。

ユーティリティを実行する前に、Planning アプリケーションに接続しているユーザーがないことを確認してください。タスク・マネージャを Planning サーバーで起動し、hsxser~1 (hsxserver) または hspds というプロセスが存在しないことを確認します。

Planning アプリケーションをロック解除するには:

1. コマンド・ラインを使用して、planning1 ディレクトリに移動し、HspUnlockApp.cmd ユーティリティを見つけます。

planning1 の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

2. HspUnlockApp.cmd [-f:passwordFile] SERVER_NAME USER_NAME PASSWORD APPLICATION_NAME と入力します。application name はロック解除するアプリケーションを指します。

オプション: 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されている場合、[-f:passwordFile] をコマンド行の最初のパラメータとして使用し、passwordFile で指定されている完全なファイルのパスおよび名前からパスワードを読み取ります。[Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制](#)を参照してください。

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。
4. コンソール・アプリケーション・ログのイベント・ビューアを使ってアプリケーションのイベント・ログを確認し、成功または失敗したイベントがレポートされているかどうかを確認します。ログの詳細は、[Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド](#)を参照してください。

ブロードキャスト・メッセージの使用

ブロードキャスト・メッセージを使用して、アプリケーションにログオンしている Oracle Hyperion Planning ユーザーにテキスト・メッセージを送信します。たとえば、システム可用性や定期メンテナンスに関するメッセージなどを送信できます。また、アプリケーションのアップグレードや移行を行う前に、ユーザーにログアウトを促す場合などにもブロードキャスト・メッセージを使用できます。

Web クライアントを使用して、ブロードキャスト・メッセージを送信できます。Web を使ってメッセージを送信した場合、メッセージは現在のアプリケーションのユーザーに送信されます。標準のオペレーティング・システム・メカニズムを利用して、メッセージをスケジュールすることも可能です。コマンド・ライン・ユーティリティを使用して、ブロードキャスト・メッセージを送信することもできます。コマンド・ラインを使って送信すると、ログオンしていないアプリケーションを指定できます。

ページ・リフレッシュ時または別のページにアクセスしたときに、ログオンしているユーザーのブラウザにメッセージが表示されます。

他製品またはサードパーティのレポート・ツールを使用してアプリケーションにログオンしているユーザーは、ブロードキャスト・メッセージを見ることができません。

ブロードキャスト・メッセージを送信するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「ブロードキャスト・メッセージ」の順に選択します。
2. 「メッセージの作成」で、ブロードキャストするメッセージを入力します。
3. 「送信」をクリックします。

コマンド・ラインを使用してブロードキャスト・メッセージを送信するには:

1. コマンド・プロンプトを使用して、`planning1` ディレクトリに移動し、`BroadcastMessage.cmd` ユーティリティを見つけます。
`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

2. コマンド・ラインで次の構文を使用し、ユーティリティを起動します:

```
broadcastmessage.cmd([ SERVER_NAME ], APPLICATION_NAME ,
USER_NAME, MESSAGE )
```

オプション: 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されている場合、`[-f:passwordFile]` をコマンド行の最初のパラメータとして使用し、`passwordFile` で指定されている完全なファイルのパスおよび名前からパスワードを読み取ります。[Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制](#)を参照してください。

SERVER_NAME: ローカルホスト名。

APPLICATION_NAME: メッセージを送信するユーザーのアプリケーション名。

USER_NAME: ブロードキャスト・メッセージを送信する権限のある管理者。

MESSAGE: アプリケーションのユーザーに送信する 127 文字までのテキスト・メッセージ。

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。
4. ステータス、エラーまたはメッセージをブロードキャストする情報をコンソールに表示できます。

例:

```
Broadcastmessage.cmd ABCserver、testapp、VHennings001、定期メンテナンスのため、アプリケーションからログオフしてください。
```

使用統計の表示

どの Oracle Hyperion Planning ユーザーが現在のアプリケーションにログオンしているか、またアプリケーションにアクセスしてからどのくらい時間が経過したかを確認

できます。Oracle Hyperion Financial Reporting、Oracle Smart View for Office またはサードパーティのレポート・ツールなどの、その他のアプリケーションを使用してログオンしているユーザーはリストされません。

RAM が適切に割り当てられているかどうかを確認するため、使用中のサポート詳細検出キャッシュの割合を表示できます。数値が非常に低いかまたは高い場合、RAM の割当てを少なくするかまたは高くするよう調整します。デフォルト値の 20 は、Planning プロパティとして格納されます(サポート詳細キャッシュのメモリー割当てを参照)。

使用統計を表示するには:

1. Planning Web から、アプリケーションにログオンします。
2. 「管理」、「アプリケーション」、「統計」の順に選択します。

アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ

「データベースの管理」ページで、アプリケーションの各プラン・タイプにおける Oracle Hyperion Planning のデータ格納に使用されるアプリケーション・データベースを作成およびリフレッシュできます。データベースはディメンション、階層メンバー、属性およびアプリケーションで指定される他のデータに基づいて構成されます。

Oracle Essbase により暗号化されたデータ・ファイル(essbase.sec)が作成され、アクセス権情報が保管されます。

アプリケーションを作成する場合、「作成」を選択してアプリケーション・データが保管される Planning マルチディメンショナル・データベースを更新します。アウトラインを作成する際、パフォーマンスを向上させ、ユーザーが変更をすばやく利用できるように、データベースの変更およびアクセス権限を個別に転送できます。アウトラインの完了後、データベース情報をリフレッシュする場合にアクセス権を含むことを推奨します。

アプリケーションの構造を変更したら、アプリケーション・データベースを必ずリフレッシュする必要があります。アプリケーションの Planning データベースをリフレッシュするまで、アプリケーションの変更がユーザーによるデータの入力および承認タスクに影響を与えることはありません。たとえば、エンティティ・メンバーのプロパティ修正、シナリオの追加またはアクセス権限の変更が行われた場合、これらの変更はアプリケーション・データベースがリフレッシュされるまで Planning リレーショナル・データベースに保管されます。

リフレッシュの実行中:

- セキュリティ・フィルタが更新されます。
- 通貨換算計算スクリプトが更新されます。
- メンバーまたは関連するプロパティがリレーショナル・データベースからマルチディメンショナル・データベースに反映されます。
- マルチディメンショナル・データベースでカスタム属性が追加、変更、削除されます。
- Planning アウトラインで為替レート値の再移入が行われます。
- 一部の勘定科目のメンバーの式が動的に生成または更新されます。
- 別名表への追加や変更とそのディメンションやメンバーへの関連付けが更新されます。
- Planning アプリケーションが再構築されます。

- UDA が Planning アプリケーションに追加されます。

注意:

作成またはリフレッシュ前にアプリケーションをバックアップするようにお勧めします。 [アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#) を参照してください。これらのステップに従うと、データベースのデータに影響を与えます。「作成」をクリックすると、データが削除され、Planning プラン・タイプが再構築されます。「リフレッシュ」をクリックすると、データの入れ替えが行われます。重要な情報は、[Essbase の操作の考慮事項](#) を参照してください。

管理者が「データベースの作成」または「データベースのリフレッシュ」を使用すると、アプリケーションの所有者を含む他のユーザーがすべてのタスクを利用できなくなります。

Planning データベースをリフレッシュする前に、すべてのユーザーが Planning アプリケーションからログオフする必要があります。Oracle では、Planning アプリケーションをリフレッシュする前に管理者がすべてのユーザーに対し、作業を中止して保存し、アプリケーションを閉じるようブロードキャスト・メッセージを送信することをお勧めしています。Planning では、リフレッシュ中にユーザーのログオフは行われません。[メンテナンス中のアプリケーションの使用制限](#) を参照してください。

アプリケーションのリフレッシュに要する時間は、アプリケーションのエンティティおよびユーザー数などの要因に依存します。ユーザーの数が多かたり、セキュリティ・フィルタが存在すると、リフレッシュ時間は長くなります。オフピーク時にアクセス権限情報の転送を行えば、システム稼働率の最適化を図ることが可能です。

アプリケーション・データベースを作成またはリフレッシュするには:

1. アプリケーションをバックアップします。 [アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#) を参照してください。
2. 「管理」、「アプリケーション」の順に選択します。
3. 「データベースの作成」または「データベースのリフレッシュ」を選択します。
4. 次のオプションを選択します:
 - **データベース:** アプリケーションの Planning データベースを作成またはリフレッシュします。
 - **カスタム定義関数の更新:** アプリケーション・データベースの作成またはリフレッシュ時に、アプリケーションの Planning カスタム定義関数を更新します。
カスタム定義関数の操作の詳細は、[Oracle Essbase データベース管理者ガイド](#) を参照してください。
 - **セキュリティ・フィルタ:** サードパーティ・アプリケーションによる使用のため、セキュリティ・フィルタを作成します。アプリケーションのすべてのユーザーに対するセキュリティ・フィルタを作成する場合、「セキュリティ・フィルタ」を選択し、「制限の検証」は選択しません。選択したユーザーに対してセキュリティ・フィルタを生成するには、[セキュリティ・フィルタの管理](#) を参照してください。

アクセス権限は、暗号化されたデータ・ファイル(essbase.sec)に保管されません。

ヒント:

すべてのユーザーに対しセキュリティ・フィルタを生成する前に、「**アプリケーションを使用可能にする**」オプションを「**管理者**」に設定して、アプリケーションへのユーザーのアクセス権を制限します。セキュリティ・フィルタの生成後、設定を「**すべてのユーザー**」に戻します。[メンテナンス中のアプリケーションの使用制限](#)を参照してください。

ノート:

動的メンバーへのアクセス権を持つユーザーのセキュリティ・フィルタを作成またはリフレッシュした後、Essbase バケット名が、実際のメンバー名の代わりに、動的メンバーのフィルタ行に表示されます。

- **共有メンバー:** メンバー(基本および共有)のすべてのインスタンスに設定されたアクセス権を評価して、すべてに最も制限の少ないアクセス権を適用します。たとえば、共有メンバーの親がそのすべての子へ書込み権限を割り当て、別の親の下別の共有メンバーがそのすべての子に読取り権限を割り当てている場合、基本メンバーとそのすべての共有メンバーには書込み権限が与えられます(例は[共有メンバーへの有効なアクセス権限について](#)を参照)。

ノート:

アプリケーションが共有メンバー・セキュリティに依存しない場合は、パフォーマンスを向上させるためにこのオプションをクリアすることを検討してください。

このオプションがクリアされている場合、共有メンバーは基本メンバーに割り当てられたセキュリティを継承します。

- **制限の検証:** Essbase のセキュリティ・フィルタ制限である 64KB/行を超過しているセキュリティ・フィルタを識別します。このオプションにより、Essbase セキュリティ・フィルタを作成する前にフィルタ・サイズが検証され、サイズ制限が超過しないよう検証されます。
5. **Planning** データベースでデータを作成またはリフレッシュするには、「**作成**」または「**リフレッシュ**」をクリックします。
 6. 確認メッセージをレビューします。続行するには、「**作成**」または「**リフレッシュ**」をクリックします。更新が完了したら、「**終了**」をクリックします。

ノート:

作成またはリフレッシュの処理に多少時間がかかる場合、「**バックグラウンドで実行**」をクリックしてステータスを表示せずにプロセスをバックグラウンドで実行できます。

バックグラウンドでの**作成**または**リフレッシュ**の結果を見るには、**Planning** ログを表示します。ログの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドを参照してください。

為替レートの管理

為替レート表を使って、予算担当者は異なる通貨のプランを作成できます。たとえば、円を日本エンティティの基本通貨として、また US ドルを米国エンティティの基本通貨として指定できます。日本エンティティの値でフォームを表示し、通貨を US ドルに設定して表示すると、円の為替レートが使用され日本の値から US ドルへ換算されます。表示通貨が円に設定されている場合、US ドルの為替レートによって米国エンティティから円に変換されます。

為替レートを使用するには、アプリケーションの作成時に複数通貨が選択されていなければなりません。[為替レート表の作成](#)および[為替レート表の編集](#)の手順を使用して、為替レートを設定できます。

複数通貨アプリケーションには HSP_Rates ディメンションによる為替レートが保管され、通貨レートを保管するこれらのメンバーおよびその他が含まれます:

- HSP_InputValue: データ値を保管します
- HSP_InputCurrency: データ値の通貨タイプを保管します

レポートを作成またはデータをロードする場合は、HSP_InputValue メンバーを参照する必要があります。データのロード時は、現地通貨に対してデータをロードします。HSP_InputCurrency メンバーを参照する必要はありません。デフォルトでは、HSP_Rates ディメンションは「疎」に設定されます。

為替レート表の作成

それぞれが異なるビジネス・シナリオを表す、複数通貨レート表を作成できます。各シナリオは、1つの為替レート表のみに関連付けることができます。

為替レート表を作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「為替レート」の順に選択します。
2. 「作成」をクリックします。
3. 為替レート表の情報を指定します。
4. 「保存」をクリックし、[為替レート表の編集](#)に記載されているように表の設定を定義します。

為替レート表の編集

宛先通貨としてデフォルト通貨およびトライアンギュレーション通貨を使用できます。ソース通貨からデフォルトまたはトライアンギュレーション通貨に為替レートを入力できます。為替レート・ページで定義されたデフォルト通貨からすべての通貨間の変換値を入力します。為替レート表は、すべてのアプリケーション期間に渡るため、すべてのシナリオに為替レートを適用可能です。為替レート表を作成または変更する際、アプリケーションをリフレッシュしてプラン・タイプに保管する必要があります。

通貨のトライアンギュレーション通貨を変更する場合、トライアンギュレーション通貨プロパティの為替レートを再入力し、為替レートを転送および保管するためにアプリケーションをリフレッシュしなければなりません。アプリケーションのデフォルト通貨にトライアンギュレーション通貨を選択することはできません。

ある通貨から別の通貨に換算する為替レートを入力する場合は、計算方法として「乗算」または「除算」を選択します。

為替レート表を編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「為替レート」を選択し、編集する表を選択して「編集」をクリックします。
2. 「レート表」タブで、オプションを選択します。
3. 「次」をクリックします。
4. 「為替レート」タブで、オプションを設定します:

表 4-1 為替レート表オプション

オプション	説明
通貨(先)	変換レートを入力する通貨(デフォルト通貨またはトライアングレーション通貨)。
年の表示	表示される期間(デフォルトは現在のアプリケーション年です)。
レート表名	為替レート表名(表示のみ)。
メソッド	ソースおよび宛先通貨の間で、どのように値が計算されるかを判別する数学演算子(乗算または除算)。
履歴	すべての期間にわたって為替レート・タイプが「履歴」に設定されている勘定科目の為替レート。勘定科目のデータ型は通貨に設定されていなければなりません。履歴は、通常貸借対照表勘定タイプに使用されます。アプリケーションのカレンダー前の時点のレートまたはイベント発生時のレートなど、履歴為替レートは計算済のレートを反映することがあります。
BegBalance	貸借対照表勘定の値。アプリケーションには1つの期首残高、最初の期間が存在します。期首残高のレートは、アプリケーションで各年に移入されます。アプリケーションの最初の年が含まれないシナリオには、期首残高が含まれます。
平均	期間にわたって為替レート・タイプが「Avg」または「平均」に設定されている勘定科目の為替レート。Avg は、通常「収益」および「費用」勘定科目タイプまたはタイム・バランスが「フロー」に設定された「保存された仮定」勘定科目タイプに使用されます。勘定科目のデータ型は通貨でなければなりません。
終了	期間にわたって為替レート・タイプが「末尾」に設定されている勘定科目の為替レート。末尾は通常、「資産」および「負債」勘定科目タイプまたはタイム・バランスが「残高」に設定された「保存された仮定」勘定科目タイプで使用されます。勘定科目のデータ型は通貨でなければなりません。

ヒント:

値の入力後、現在の年または表のすべての年の値をすべて入力します。たとえば、Jan11 のセルで Avg の値を入力し、「年の入力」を選択した場合、値は 2011 年のすべての月に分散されます。「表の入力」を選択すると、値は為替レート表に含まれるすべての年のすべての月に分散されます。値を入力するには、「平均」または「終了」の値を入力し、セルをマウスの右ボタンでクリックして、「年の入力」または「表の入力」を選択します

5. 「保存」をクリックします。

為替レート表の削除

為替レート表を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「通貨換算」の順に選択します。
2. 削除する為替レート表を選択します。
3. 「削除」をクリックします。
4. 確認を求めるメッセージで、「OK」をクリックします。

通貨換算の管理

通貨換算を管理するには:

1. 「管理」、「管理」、「通貨換算」の順に選択します。
2. 「作成」をクリックします。
3. 「ファイルの作成」タブで、通貨換算スクリプト・ファイルの情報を指定し、「次」をクリックします。
4. 「詳細」タブで、通貨換算スクリプトの詳細の情報を選択します。



をクリックしてフィールドのメンバーを選択します。

通貨換算計算スクリプトの操作

通貨換算の作成時に Oracle Hyperion Planning アプリケーションで複数通貨が使用可能になっている場合、選択されたシナリオ、バージョンおよび通貨に基づいて通貨換算計算スクリプトが作成されます。2 番目の計算スクリプトは Planning によって作成されます。勘定科目レート・タイプに基づいて適切な為替レートが勘定科目にコピーされます。通貨換算では、勘定科目タイプが常に優先されます。データ型評価順序は考慮されません。計算コピー・スクリプトは、ボトムアップ・バージョンでは HspCrtB.csc、ターゲット・バージョンでは HspCrtT.csc という名前になります。計算コピー・スクリプトを実行すると、通貨換算計算スクリプトが CELL モードよりも効率的な BLOCK モードで実行されます。

選択済のシナリオ、バージョンおよび通貨は、データベースのアウトラインへのデータ保管が可能である必要があります。「動的計算」、「動的計算および保管」および「ラベルのみ」はデータを保管しない仮想メンバーです。ターゲット・バージョンに仮想メンバーが存在する場合、これらのメンバーの計算結果は Planning によって破棄されるため、通貨換算計算スクリプトのコピーを実行する利点はありません。

通貨を正しく換算するには、通貨換算の初回起動時に管理者は通貨レート計算コピー・スクリプトおよび通貨換算計算スクリプトを実行する必要があります。

HSPCrtB.csc または HspCrtT.csc 計算コピー・スクリプトの実行後、データベース・アウトラインを変更したら再度これらを起動する必要があります(たとえば、為替レート、勘定科目レート・タイプ、バージョン、シナリオ、勘定科目またはユーザー定義のディメンション・メンバーの追加または変更など)。

計算スクリプトの通貨計算コピー・スクリプトを作成するには、通貨換算計算スクリプトを再度作成する必要があります。

パフォーマンスの最適化

次の方法でパフォーマンスを最適化します:

- ディメンションを密または疎として戦略的に割り当て、最も高い密度から最も低い密度へと順序付けします(疎ディメンションおよび密ディメンションについて、[ディメンションの順序変更について](#)および[ディメンションの密度と順序の設定を参照](#))。
- 2分以内で実行するようなビジネス・ルールを設計します。長時間実行するビジネス・ルールはバックグラウンドで実行するようにスケジュールします([バックグラウンド処理の設定を参照](#))。
- 「[欠落ブロックの抑制](#)」オプションを設定します([フォーム・グリッド・プロパティの設定を参照](#))。
- ユーザーが 100 人いる場合は、Oracle Hyperion Planning プロパティの OLAP_MAX_CONNECTIONS を 20 に設定します。必要に応じて、慎重にテストした後、500 ユーザーに対して設定を 100 に増加します([アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定を参照](#))。
- JDBC 接続プール設定を最適化します([JDBC 接続プールの構成を参照](#))。
- SQL 問合せのタイムアウト値を増やします([SQL リレーショナル・データベースの最適化を参照](#))。
- WebLogic Server を使用している場合は、そのパフォーマンス設定を確認します([WebLogic Server パラメータの最適化を参照](#))。
- Java Virtual Machine (JVM)パラメータを調整します([500 エラー・メッセージを参照](#))。
- Windows ネットワーク・パラメータを最適化します([Windows ネットワーク・パラメータの最適化を参照](#))。

ディメンションの順序変更について

ディメンションの順序は、Oracle Hyperion Planning アプリケーションの構造およびパフォーマンスにとって重要です。ディメンションの順序を変更する時にパフォーマンスを最適化します:

- 期間と勘定科目を密にし、密ディメンションは密の度合いが高い順に順序付けします。通常、最も密なものは期間であり、その後に勘定科目が続きます。密ディメンションは疎ディメンションより計算が高速です。
- 疎ディメンションを集約および非集約ディメンションに分離します。集約ディメンションを非集約ディメンションの前に配置します。疎ディメンションを最大から最小の密へと並べ替えます。エンティティなどの集約ディメンションは、子を親に集約して新しいデータを作成します。シナリオなどの非集約ディメンションは、子を作成してデータを作成しません。

サポート詳細キャッシュのメモリー割当て

ユーザーがプランニング・ユニットのステータスを変更した場合にパフォーマンスを向上させるために、サポート詳細キャッシュのメモリー容量を指定できます。サポート詳細キャッシュのデフォルトのメモリー割当てを変更するには、`SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE` プロパティをデフォルトの 20 から変更します。

ヒント:

サポート詳細検出キャッシュが 75%以上に到達した場合、そのサイズを 60%に減らすことをお勧めします。

サポート詳細キャッシュの使用を表示するには、[使用統計の表示](#)を参照してください。その値を変更するには、[アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定](#)を参照してください。

データおよびインデックス・キャッシュ・サイズの構成

システムにメモリが十分にある場合、アプリケーションを作成する前に、パフォーマンスを向上させるために、`essbase.cfg` ファイルを構成し、インデックス・キャッシュを 256MB 以上に増やし、データ・キャッシュを 2GB 以上に増やすことができます。このような設定の変更は既存のアプリケーションに影響を与えません。Oracle Essbase Administration Services を使用するか、または手動で MaxL 文を使用して、各アプリケーションのインデックスおよびデータ・キャッシュを増やすことができます。MaxL の使用の例は次のとおりです:

```
alter databaseName planType set data_cache_size 20000MB
alter databaseName planType set index_cache_size 256MB
```

ノート:

推奨する設定用に十分なメモリがシステムにあることを確認します。そうでない場合、設定を低くします。詳細は、[Oracle Essbase データベース管理者ガイド](#)を参照してください

その他の最適化のヒント

- 密ディメンションの上位メンバーを「動的計算」に設定します。
- 不必要なデータや履歴データをクリアします。たとえば履歴データを別のプラン・タイプに移動して現在のプラン・タイプのデータベース・サイズを縮小します。
- 定期的に Oracle Essbase データベースの最適化を行います。
- 大きなフォームをより少ない行および列を含む複数のより小さいフォームに分割します。関連フォームはフォルダに編成します。
- 勘定科目注釈の使用はパフォーマンスに影響を与えるので、控えめに使用します。
- 最初に Oracle Hyperion Planning を起動してフォームを開くときには、キャッシュがロードされるため、後続のセッションよりも時間がかかります。そのため、ユーザーが Planning の使用を開始する前に、Planning を起動して、最もよく使用されるフォームを開き、ユーザーによるロード時間を短縮します。

アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ

アプリケーションおよびアプリケーション・データベースは日常的にバックアップしてください。また、次を行う前にもバックアップを行います。

- アプリケーションのリフレッシュ
- 他のサーバーへのアプリケーションの移動
- アプリケーションのアップグレード
- プランニングにおける重要なマイルストーン

アプリケーションおよびその関連アプリケーション・データベースのバックは次で構成されます。

- Oracle Essbase でのアプリケーションのバックアップ
- Oracle Hyperion Planning および Oracle Hyperion Financial Reporting 用のリレーショナル・データベースのバックアップ
- Planning の必須コンポーネントのバックアップ

手順の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。

データとメタデータのインポートおよびエクスポート

次も参照:

[概要](#)

[アウトライン・ロード・ユーティリティの操作](#)

[Planning インポートおよびエクスポートの操作](#)

[EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリのファイルのクリア](#)

[Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする](#)

概要

次も参照:

[動的メンバーのロードについて](#)

[ロード・ツール](#)

動的メンバーのロードについて

アウトライン・ロード・ユーティリティまたは Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Management を使用して動的な子を使用できる親メンバーの下にロードした子メンバーは、Oracle Essbase に動的メンバーのプレースホルダが存在する場合、動的な子メンバーとして追加されます。プレースホルダがいっぱいになると、残りの子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。

ノート:

動的な子を使用できる親メンバーと、その子メンバーを同じインポートで同時にインポートすると、子メンバーは通常のメンバーとしてロードされます。これは、Essbase にプレースホルダを作成するためにデータベースのリフレッシュが必要なためです。動的メンバーの詳細は、[動的メンバーについて](#)を参照してください。

ロード・ツール

表 5-1 メタデータ・ロード・ツール

メタデータ・ロード・ツール	コメント
アウトライン・ロード・ユーティリティ	アウトライン・ロード・ユーティリティの操作 を参照してください。
Oracle Hyperion Planning インポートおよびエクスポート	Planning インポートおよびエクスポートの操作 を参照してください。
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition	サポートされている FDMEE ソース・システムからロードします。Oracle Hyperion <i>Financial Data Quality Management, Enterprise Edition</i> 管理者ガイドを参照してください。

表 5-2 データ・ロード・ツール

データ・ロード・ツール	コメント
アウトライン・ロード・ユーティリティ	数値、日付およびテキスト・データ値をロードします。 アウトライン・ロード・ユーティリティの操作 を参照してください。
Planning インポートおよびエクスポート	Planning インポートおよびエクスポートの操作 を参照してください。
FDMEE	サポートされている FDMEE ソース・システムからロードします。Oracle Hyperion <i>Financial Data Quality Management, Enterprise Edition</i> 管理者ガイドを参照してください。

アウトライン・ロード・ユーティリティの操作

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義のディメンション、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータを、フラット・ファイルまたはリレーショナル・データ・ソースからインポートできます。アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してメタデータとデータをフラット・ファイルに、またはメタデータをリレーショナル・データ・ソースにエクスポートできます。

ノート:

コマンドラインを使用せずにデータまたはメタデータをインポートまたはエクスポートするには、[Planning インポートおよびエクスポートの操作](#)を参照してください。Oracle Hyperion Planning インポートおよびエクスポートは、フラット・ファイルとの間でのインポートとエクスポートのみをサポートします。

これらの標準ステップを使用し、アウトライン・ロード・ユーティリティの情報をロードします。

1. データをロードする場合、`DIRECT_DATA_LOAD` および `DATA_LOAD_FILE_PATH` システム・プロパティを設定します。
2. **オプション:** コマンドライン引数を含むコマンド・プロパティ・ファイル (`.properties`)を作成します。
3. ロードする各ディメンションまたはデータのセットのロード・ファイルを作成します。
4. ロード・ファイルをテストし、続いてユーティリティを実行します。
手順の詳細は、次のトピックを参照してください。
 - [コマンド・プロパティ・ファイル](#)
 - [ロード・ファイルの生成](#)
 - [フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート](#)
 - [リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート](#)
 - [Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエクスポート](#)
 - [アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ](#)
 - [ディメンション・プロパティ](#)
5. **オプション:** ロード中に生成された一時ファイルをすべてクリアします。[EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリのファイルのクリア](#)を参照してください。

コマンド・プロパティ・ファイル

コマンド・プロパティ・ファイル(`.properties`)にコマンドライン引数を保存してコマンドラインを最適化し、アウトライン・ロード・ユーティリティを実行するときにコマンドラインで/CP:パラメータ使用してそのファイルを参照できます。たとえば、コマンド・プロパティ・ファイルを使用して、複数のアプリケーションで同じコマンドを実行できます。コマンドラインで必要なのは、インポートごとの/Aパラメータの変更のみです。

コマンド・プロパティ・ファイルの使用を検討する理由は次のとおりです:

- コマンドラインが短くなり、管理が容易
- 読みやすさ
- 使用しやすさ
- 共通アプリケーション用のスイッチをバンドル可能

Java `.properties` ファイルには、キー/値ペアのエントリが含まれています。キーと値のペアは、コロン(:)または等号(=)で、次のように区切ります:

- `Key:value` または `/I:c:/tmp/anInputCSVTextFile.txt`
- `Key=value` または `/cp= c:/tmp/anInputCSVTextFile.txt`

プロパティ・ファイルのエントリは、ユーティリティのコマンド・スイッチとして使用されます。プロパティ・ファイルとコマンドラインの両方に引数が指定されている場合は、コマンドライン引数が優先されます。コマンドラインとプロパティ・ファイルのスイッチは実行時にマージされ、解析の結果がログに表示されます。

たとえば、次のコマンドラインがあります:

```
/A:tr2 /U:admin /M /K /8 /DF:mm-dd-yyyy /I:c:/tmp/loadAccounts.csv /D:Account /
CP:c:/tmp/myProps.properties
```

さらに、myProps.properties ファイルが次の引数を含みます:

```
/DF:yyyy-mm-dd
```

```
/D:Entity
```

```
/T
```

解析の結果を示す次のようなログ・メッセージを出力します:

- プロパティ・ファイル引数: **/DF:yyyy-mm-dd /D:Entity /T**
- コマンドライン引数: **/A:tr2 /U:admin /M /K /8 /DF:mm-dd-yyyy /I:c:/tmp/loadAccounts.csv /D:Account /CP:c:/tmp/myProps.properties**
- 発行される(マージ後の)コマンドライン: **/A:tr2 /U:admin /M /K /T /8 */DF:mm-dd-yyyy /I:c:/tmp/loadAccounts.csv */D:Account /CP:c:/tmp/myProps.properties**

ノート:

アスタリスクは、コマンド・スイッチがプロパティ・ファイルとコマンドラインの両方で見つかり、コマンド・プロパティ・ファイルのバージョンよりコマンドラインのバージョンが優先されたことを示します。

ロード・ファイルの生成

データ・ロード・ファイルの生成

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してデータをロードするとき、ロード・ファイルでドライバ・メンバーを指定し、/TR オプションを指定してユーティリティを実行できます。

ノート:

Oracle Hyperion Planning の「データ・ロード管理」ページで指定されているドライバ・メンバーをロードすることもできます。

次の列を含む、カンマ区切りまたはタブ区切りのデータ・ロード・ファイルを作成します:

- **ドライバ・メンバー:** データのロード先のメンバー。1回のロードに1つのドライバ・ディメンションを指定できます。ドライバ・ディメンションには複数のメンバーを定義できます。値は数値を表す文字列として渡されます。また、スマート・リストがメンバーにバインドされている場合は、スマート・リスト値として渡されます。
- **視点:** データをロードする交差の定義に必要なその他すべてのディメンション (/TR を使用する場合は、ドライバ・メンバー以外のすべてのメンバーを含みます)。データ・ロードは、視点(POV)のディメンション・パラメータに基づき、自

動的にクロス・プロダクト・レコード作成を実行します。ロード・ファイルにより、関連する各セル交差のデータ・レコードが作成およびロードされます。値は文字列として渡されます。POV では、メンバー関数を含むメンバーのカンマ区切りリストを受け入れます。たとえば、ロード中に子(Q1)が Jan、Feb、Mar に展開されます。対応するレコードはすべてのメンバーの組合せのクロス・プロダクトおよびデータ値に基づいて生成されます。

- **データ・ロードのキューブ名:** データがロードされるプラン・タイプの名前。値は文字列として渡されます。値には、Plan1 など、アプリケーションで指定されるすべてのプラン・タイプが含まれます。

例 1: この例では、勘定科目がアプリケーションの「**データ・ロード管理**」ページのデータ・ロード・ディメンションとして選択されています。期間がドライバ・ディメンションとして選択され、Jan はドライバ・メンバーとして選択されています。

Account,Jan,Point-of-View,Data Load Cube Name

```
"acct1,12,Local,ent1,Current,Ver1,FY08",Plan1
```

例 2: この例では、エンティティがアプリケーションの「**データ・ロード管理**」ページのデータ・ロード・ディメンションとして選択されています。勘定科目がドライバ・ディメンションとして選択され、また勘定科目メンバー aUnspec、aSmart、aDate および aText Account がドライバ・メンバーとして選択されています。このロード・ファイルによって、e1 の交差、視点および勘定科目ドライバ・メンバー(aUnspec、aSmart、aDate、aText)にデータがロードされます。

Entity,Operation,Data Load Cube Name,aUnspec,aSmart,aDate,aText,Point-of-View

```
e1, ,Plan1,77,smart1,12-22-2008,textValue,"USD,Jan,Current, BUVersion_1, FY07"
```

これらの値をドライバ・メンバーに推定します。

- aUnspec: データ型未指定(数値)、値 77
- aSmart: データ型スマート・リスト、値スマート・リスト入力'smart1'
- aDate: データ型日付、値 12-22-2008
- aText: データ型テキスト、値'textValue'

DIRECT_DATA_LOAD が False に設定されている場合、例によってこのデータ・ロード・ファイルが作成されます。

```
Currency Version Scenario Year Entity Period Account HSP_Rates
77 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aUnspec HSP_InputValue
1 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aText HSP_InputValue
20081222 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan Date HSP_InputValue
1 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aSmart HSP_InputValue
```

例 3: ドライバをロード・ファイル内で直接指定します。

Value,Driver Member,Point-of-View,Data Load Cube Name

```
14,a1,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
s11_value2,a2,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
OutlineLoad /A:acpt1 /U:admin /M /I:c:\outlinedata.csv /TR /L:c:/OutlineLogs/
outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

ロード・ファイルにコメントを追加するには、[ロード・ファイルのコメント](#)を参照してください。

メタデータ・ロード・ファイルの生成

メタデータをロードするときに、ロード・ファイルはディメンションを一覧表示する「勘定科目」などのヘッダー・レコード、および後続のメタデータ・レコードで 사용되는メンバー・プロパティを含む必要があります。たとえば、「勘定科目」では、どの勘定科目をロードするか、デフォルトの別名、実行する操作などを指定できます。ヘッダー・レコードでは大文字と小文字を区別します。どのような順序でも表示できます。

ロード・ファイルの次の行には、ヘッダー・レコードにより指定された順序で一覧表示されたメタデータ・レコードが含まれています。各メタデータ・レコードには、ヘッダー・レコードのエントリに対応するプロパティ値のカンマ区切りまたはタブ区切りのリストが含まれています。各 Oracle Hyperion Planning メンバーで使用できるプロパティの詳細は、[ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

例: このロード・ファイルは必要なヘッダー・レコードと3つのデータ・レコードを持つエンティティのディメンションをロードします。ヘッダー・レコードはロードするメンバー(Entity)、メンバーのロード先となる親メンバー(Parent)およびメンバーに割り当てる Data Storage プロパティを指定します。

```
Entity, Parent, Data Storage
```

```
e1, Entity,
```

```
e2, ,
```

```
e1, e2, Shared
```

このロード・ファイルを使用すると、他のメンバーが存在しないと仮定すればこのアウトラインになります:

```
Entity
```

```
e1
```

```
e2
```

```
e1(Shared)
```

最初のデータ・レコード(e1, Entity)は Entity メンバー e1 をルート・メンバー Entity にある子としてロードします。指定されない値はデフォルトと見なします。たとえば、データ・ストレージが指定されていない場合、デフォルト値の「共有しない」と見なします。次のデータ・レコード(e2,)は、親が指定されていないため、ディメンション・ルート・メンバーにある Entity メンバー e2 をロードし、データ・ストレージを「共有しない」に設定します。最後のデータ・レコードは(e1, e2, Shared)はメンバー e2 にある e1 の共有メンバーをロードし、データ・ストレージを「共有」に設定します。

デフォルトの通貨記号と一緒に通貨ディメンションをロード中に、記号を指定せずに通貨を追加すると、同じ名前の事前定義済の通貨の記号に設定されます(または名前が事前定義済の通貨に一致しない場合には、追加されている通貨の通貨コードに設定されます)。

ロード・ファイルにコメントを追加するには、[ロード・ファイルのコメント](#)を参照してください。

ロード・ファイルのコメント

アウトライン・ロード・ユーティリティの入力 CSV ファイルでは、コメントを使用できます。

- 1行のコメントの場合は、# comment のように、行の最初の文字としてハッシュ (#)文字を使用します。
- 空白行は無視されます。
- コメント・ブロックは、ブロック開始の記号#!-で始め、別の行をブロック終了の記号#-!で終わらせます。途中の行をコメント処理する必要はありません。

例:

```
#!-start of comment block

Comment within block

Another comment within block

#-! End of comment block
```

ノート:

コメント・ブロックはネストできません。また#!-- HEADERBLOCK は、Oracle Hyperion Planning 内部のコメント・ブロック・ヘッダーとして予約されています。

ロード・ファイルの考慮事項

ロード・ファイルで作業するときに次の点を考慮します。

- ユーザーは、Excel で改行文字を処理するためのマクロを作成する必要があります。ユーザーは、Excel で複数行の式を含むアウトライン・ロード・ユーティリティ・エクスポート・ファイルを開いて変更することはできません。
- メンバー名にカンマが含まれている場合、データ・エクスポートの実行時にタブ区切りファイルを使用する必要があります。
- メンバーがいずれかのメンバー・プロパティ(「説明」など)と同じ名前を持つ場合、アウトライン・ロード・ユーティリティのデータおよびメタデータ・エクスポートで予期しない結果が発生することがあります。
- Microsoft Excel で、アウトライン・ロード・ユーティリティのエクスポート/インポートによって生成されたメタデータまたはデータのカンマ区切り値(CSV)ファイルを保存または変更する場合、Excel で CSV ファイルの一部のフォーマット機能が正しく処理されません。たとえば、アウトライン・ロード・ユーティリティでは POV メンバー情報を二重引用符内に配置し 1 つの列として処理しますが、Excel では個別の列として POV メンバーを処理します。Excel でファイルを保存すると、POV メンバーの前後に引用符のセットが配置され、上部ヘッダー行にカンマが追加されます。アウトライン・ロード・ユーティリティは、ファイルがインポートされたとき、これを有効なフォーマットとして認識しません。CSV エクスポート・ファイルは、メモ帳、ワードパッドまたは他のテキスト・エディタで編集および保存することをお勧めします。
- アプリケーションの各ディメンションについて、ディメンション・プロパティに対応するフィールドを持つロード・ファイルを作成します。各ロード・ファイル

は1つのディメンションのみに対しメンバーを含むことができます。各ディメンションについて複数のメンバーを定義できます。

- 入力が必要のフィールドはロードされている各ディメンションについて異なります。 **ディメンション・プロパティ**を参照してください。
- メンバー名はロード・ファイルのフィールドとして含める必要があります。メンバー・プロパティ値が指定されていない場合、プロパティに対するアプリケーションのデフォルト値が使用されます。
- 新規メンバーを追加するとき、未指定の値にはデフォルト値が仮定されるか、必要に応じて親メンバーのプロパティ値から継承されます。メンバーが存在して値が指定されていない場合は、そのままにしておいてください。
- (たとえば、プロパティを変更するために) **Oracle Hyperion Planning** アプリケーションにすでに存在しているメンバーをロードする場合、親がロード・ファイル内で指定されていないと、そのメンバーは既存の親の下に残ります。新しい親が指定されている場合、メンバーは新しい親の下に移動されます。
- その他のディメンションをロードする場合と同様に、インポート・ファイルが変更の差分ではなく階層の完全な置換えを指定する場合の他のディメンション・ロードと、プランニング・ユニット階層のロード動作が異なります。プランニング・ユニット階層のロードでは最初にプランニング・ユニット階層のすべてのメンバーが削除され、入力ファイルに指定された各メンバーが新規メンバーとして追加されます。プランニング・ユニット階層のロードでは、既存のメンバーが入力ファイルで指定されていなければそのメンバーおよびその子が階層から削除されるので注意してください。
- **null** 値を指定するには、予約値を使用できます。たとえば、<none>を使用して属性の割当てを削除します。
- ヘッダー・レコード・フィールドが表示される順序は任意です。
- ロード・ファイルごとにロードできるディメンションは1つのみです。
- ロード・ファイルの列ヘッダーでは大文字と小文字を区別します。
- レコードは1つずつロードされます。レコードのロードに失敗した場合、その関連付けられた例外が例外ファイルに書き込まれ、ロード・プロセスは次のレコードで再開します。
- 年のロード中にエラーがログ作成され、その年がアプリケーションにロードされた場合、そのプロパティはロード・ファイルで指定されたものと同じにならない可能性があります。ファイル・レコードを修正し、年をリロードしてそのプロパティを正しく設定します。
- 親メンバーが存在するか、子メンバーの前にロードされる必要があります。ほとんどの場合、ロード・ファイルは明示的にまたは/Hを使用して、親から子の順序でソートする必要があります。
- カンマや引用符を含むデータ値は、引用符で囲む必要があります。次の例は、カンマと引用符が解釈される方法を示しています。

表 5-3 カンマや引用符を含むデータ値の例

値	解釈
"quote""quote"	quote"quote
""""quotedstring""""	"quotedstring"

表 5-3 (続き) カンマや引用符を含むデータ値の例

値	解釈
""",quoted,"",string,""	","quoted","string,"
""",quoted,"""",string,""""	","quoted","",string,""

- カッコで囲まれたメンバー名は関数として扱われます。

フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート

データのロード

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したデータのロード時にドライバ・メンバーを指定する方法は2つあります。Oracle Hyperion Planning の「データ・ロード管理」ページに指定されているドライバ・メンバーにロードするか、ロード・ファイルのドライバ・メンバーを指定して/TR オプションを指定してユーティリティを実行することができます。

/TR オプションを指定してデータをロードする場合、ファイルではドライバ・メンバーとその他のすべてのメンバーを、フォーム内での場所にかかわらず、「視点」列にリストする必要があります。たとえば、「1月」または「子孫(年合計)」がフォーム内の列である場合、「視点」列で指定されている必要があります。/TRを使用する場合、ロード・ファイルの各行に1つの値をロードできます。複数の行を含めることもできますが、1行に指定できるのは1つのデータ値のみです。ロード・ファイルの生成を参照してください。

注意:

これらのステップを実行するとデータベース内のデータに影響する場合があります。Planning の DIRECT_DATA_LOAD システム・プロパティを使用すると、Oracle Essbase にデータを直接ロードできます。現在のリリースでは、このプロパティがデフォルトで TRUE に設定されているため、データは直接 Essbase にロードされます。データが直接 Essbase にロードされないようにするには、DIRECT_DATA_LOAD を FALSE に設定します。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してデータをロードするには:

1. 情報をロードする前にアプリケーションとアプリケーション・データベースをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。
2. Planning システム・プロパティを設定します。
 - a. Planning アプリケーションにログインします。
 - b. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」を選択して、「システム・プロパティ」タブをクリックします。
 - c. DIRECT_DATA_LOAD および DATA_LOAD_FILE_PATH プロパティを設定します。
 - DIRECT_DATA_LOAD が TRUE に設定されているか、このプロパティの値を指定していない場合は、ロード・ファイル・レコードの処理中に情報が Essbase に直接ロードされます。この方法が正しく機能するには、Planning と Essbase で維持しているアウトラインが同期している必要があります。

Planning アウトラインの変更がすでに Essbase に対してリフレッシュされている場合を除き、ロード・ファイルで **Planning** アウトラインの変更を指定しないでください。

- **DIRECT_DATA_LOAD** が **FALSE** に設定されている場合、アウトライン・ロード・ユーティリティによって作成済のロード・ファイルが処理され、データ・ファイル(.txt)およびルール・ファイル(.rul)が生成されます。これにより、**Planning** および Essbase アウトラインはデータが同時にロードされないため、同期化する必要はなくなります。変更を適切な時期にリフレッシュしてメタデータの変更を Essbase に伝え、データを Essbase に直接ロードします(たとえば、Oracle Essbase Administration Services を使用します)。

ほとんどのケースでは **DIRECT_DATA_LOAD** は **False** に設定し、**DATA_LOAD_PATH** は作成するデータおよびルール・ファイルで使用される場所と名前に設定します。たとえば、C:/myDirectory/App1.txt のように設定します。これらのプロパティが「**プロパティの管理**」ページの「**システム・プロパティ**」タブで設定されていることを確認してください。

- d. **Planning** アプリケーション・サーバーを再起動します。
3. **Planning** で指定されているドライバ・メンバーにロードする場合は、ドライバ・メンバーをこのステップの説明に従って設定します。それ以外の場合は、次のステップにスキップします。
 - a. データがロードされる **Planning** アプリケーションにログオンします。
 - b. 「**管理**」、「**データ・ロードの設定**」を選択します。
 - c. 「**データ・ロード・ディメンション**」リストからディメンションを選択します(「**勘定科目**」など)。これは、データをロードするディメンションです。たとえば、**Planning** フォームで行として表示されることがあります。
 - d. 「**ドライバ・ディメンション**」リストからディメンションを選択します(「**期間**」など)。
 - e. メンバー選択アイコンをクリックして、「**ドライバ・ディメンション**」のメンバーを選択します(「**1月**」、「**2月**」、「**3月**」など)。たとえば、これらのメンバーは **Planning** フォームに列として表示されることがあります。
4. カンマ区切りのロード・ファイルを生成します。 **データ・ロード・ファイルの生成** を参照してください。
5. ロード・ファイルをテストし、ユーティリティを実行します。
 - a. **planning1** ディレクトリにインストールされているユーティリティを見つめます。

planning1 の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。
 - b. ロード・ファイルがエラーなしで解析されたことを確認するには、/N パラメータを使用してユーティリティを実行し、アウトライン・ログ・ファイルを確認し、エラー・メッセージが生成されていないことを確認します。/N を指定してユーティリティを実行すると、データもメタデータもロードされませんが、ロード・ファイルの解析が正しく行われることを確認してください。たとえば、このコマンド・ラインを使用し、**Planning** アプリケーション・テストのロード・ファイルを確認できます。

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /
A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline\data3.csv /D:Entity /
L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

- c. その後、/N を付けず、1 つのスペース、次に適切なパラメータで、大文字小文字が区別されるコマンドを使用して、コマンド・プロンプトからユーティリティを実行します。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /
A:test /U:admin /M /I:c:\outline\data3.csv /D:Entity /L:c:/
outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

Planning 内でドライバ・メンバーを指定せずにデータをロードする場合、/TR を含むユーティリティを実行できます。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /
A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline\data3.csv /TR /
D:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

アウトライン・ロード・ユーティリティで使用可能なパラメータの詳細は、[ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

メタデータのロード

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションのメタデータは、「勘定科目」、「期間」、「年」、「シナリオ」、「バージョン」、「通貨」、「エンティティ」、ユーザー定義ディメンション、属性、UDA および「スマート・リスト」に対してロードできます。さらに変数を為替レートについてロードすることもできます。ただし為替レートの値は Planning リレーショナル表にロードされ、Oracle Essbase には直接ロードされないため、メタデータのロードの手順が該当します。

ユーティリティは一度に 1 つのレコードをロードします。レコードのロードに失敗した場合、メッセージが例外ファイルに書き込まれ、ロードのプロセスが次のレコードで再開します。新規メンバーが追加されると、未指定のプロパティがデフォルト値をとるか、必要に応じて親メンバーのプロパティを継承します。メンバーが存在し、プロパティ値が指定されていない場合、プロパティはそのままとなります。

メタデータをロードするには:

1. ロード・ファイルを生成します。[メタデータ・ロード・ファイルの生成](#)を参照してください。
2. ロード・ファイルをテストし、ユーティリティを実行します。
 - a. planning1 ディレクトリにインストールされているアウトライン・ロード・ユーティリティを見つけます。

planning1 ディレクトリの完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

- b. ロード・ファイルがエラーなしに解析していることを確認するには、/N を使用してユーティリティを実行し、ログ・ファイルを確認し、エラー・メッセージが生成されていないことを確認します。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /
A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline\ent.csv /D:Entity /
L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

- c. これで、コマンド・プロンプトで大文字と小文字を区別するコマンド、スペース、適切なパラメータを使用し、ユーティリティを実行できます。

アウトライン・ロード・ユーティリティで使用可能なパラメータの詳細は、[ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート

メタデータとデータを、リレーショナル・データベース・ソースからインポートすることもできます。リレーショナル・データベースに含まれるメタデータおよびデータのインポートを実行するには、フラット・ファイルの入力フォーマットに相当する結果セットを戻す外部データベースに対する問合せを指定します。問合せとデータベース接続の情報を指定する必要があります。

この機能を使用するユーザーは、リレーショナル・データベース、SQL 問合せ言語、および JDBC 接続プロパティをよく理解していることをお勧めします。Oracle Hyperion Planning アプリケーションの場合、これらのプロパティの例は、システム・データベースの HSPSYS_DATASOURCE 表にあり、これはデフォルトでは、EPM System コンフィギュレータで「Planning」の「データベースの構成」タスクを選択するとき作成するリレーショナル・データベースにあります。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースからインポートするときには、次のコマンドライン・パラメータを使用できます:

- /IR[:RDBConnectionPropertiesFileName]
- /IRA
- /RIQ:inputQueryOrKey
- /RIC:catalog
- /RID:driver
- /RIR:url
- /RIU:userName
- /RIP:password

ノート:

/IR パラメータと /RIQ パラメータは、どちらか一方しか選択できません。

これらのパラメータの詳細は、[アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンドライン・パラメータ](#)を参照してください。

注意:

インポート操作を実行する前に、必ず Planning リレーショナル・ストアと Oracle Essbase データをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。

メタデータのインポート

入力として myprop_relational.properties ファイル(詳細は後述)を使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行するコマンドラインの例を次に示します:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_relational.properties
```

このファイルは、JDBC 接続パラメータで示されている PS2ORAU アプリケーションから Test_300 という名前のアプリケーションに、勘定科目メンバーをインポートします。プロパティ・ファイルには、複数のリレーショナル問合せを含めることができます。アウトライン・ロード・ユーティリティによって実行される問合せは、/RIQ パラメータで決まります。

/RIQ の詳細は、[アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ](#)を参照してください。

例 5-1 例: myprop_relational.properties ファイル

```
/A:Test_300
/U:admin
/RIQ: ACCOUNT_QUERY

/D:Account
#
ACCOUNT_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Account, (select object_name from hsp_object
where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from HSP_ACCOUNT A, HSP_MEMBER M,
HSP_OBJECT O LEFT OUTER JOIN HSP_STRINGS S ON O.DESCRPTION = S.STRING_SEQ WHERE
O.OBJECT_ID=M.MEMBER_ID AND M.MEMBER_ID = A.ACCOUNT_ID AND M.MEMBER_ID <> M.DIM_ID
ORDER BY O.POSITION
#
ENTITY_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Entity, (select object_name from hsp_object
where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from HSP_ENTITY E, HSP_MEMBER M, HSP_OBJECT
O LEFT OUTER JOIN HSP_STRINGS S ON O.DESCRPTION = S.STRING_SEQ WHERE
O.OBJECT_ID=M.MEMBER_ID AND M.MEMBER_ID = E.ENTITY_ID AND M.MEMBER_ID <> M.DIM_ID
ORDER BY O.POSITION

## jdbc connection
/RIC:PS2ORAU
/RIR:jdbc:oracle:thin:@[sc134390]:1521:orcl
/RID:oracle.jdbc.OracleDriver
/RIU:PS2ORAU
/RIP:password

#end myprop_relational.properties file
```

次の例では、ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの両方の属性ディメンションに 30 文字を超える「Size012345678901234567890123456789」という名前があり、これは Oracle の列ヘッダー制限を超えています。次の例の問合せは、ターゲット・アプリケーションにインポートされるソースから結果セットを作成するために使用します。OLU がこの列を属性ディメンション名として使用できるためには、長いディメンション名を O.OBJECT_NAME 列の別名にする必要があります。

例 5-2 例: リレーショナル・データ・ソースから Planning アプリケーションにインポートするプロパティ・ファイル

```
/A:TARGET
/U:admin
/IR

/DA:Size012345678901234567890123456789:Entity

/C2A:(OBJECT_NAME,Size012345678901234567890123456789)

ATTRIB_DIM_VAL_QUERY_ORACLE1=SELECT O.OBJECT_NAME, (select object_name from
PS3ORA.hsp_object where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from PS3ORA.HSP_OBJECT O
WHERE O.OBJECT_ID IN (select AM.ATTR_MEM_ID from PS3ORA.hsp_attribute_member AM,
PS3ORA.HSP_OBJECT O where AM.ATTR_ID =(select OBJECT_ID from PS3ORA.hsp_object where
OBJECT_NAME='Size012345678901234567890123456789')) ORDER BY O.POSITION
```

例 5-3 例: リレーショナル・データ・ソースから Planning アプリケーションに別名とともにインポートするプロパティ・ファイル

```

/A:expe
/U:admin
/IRA
/D:Entity
/C2A:(Member as
Entity,anotherReallyLongAliasForAColumnNameItsForEntityThisTimeDifferentFromExport),
(Parent, anotherAliasForParent)

/RIQ:select
anotherReallyLongAliasForAColumnNameItsForEntityThisTimeDifferentFromExport, Parent
from test
    
```

前の例について、次のように仮定します:

- 「Test」表には Member と Parent の 2 つの列があり、1 つのエントリがあります:

```

Member  Parent
-----  -----
Ex      Entity
    
```

- エンティティ・ディメンションには、ルート(Entity)の下に 1 つのメンバー e1 があります。

前の問合せの実行後、エンティティ・ディメンションで Ex というメンバーが追加または更新されます。

インポート時には、列の別名は単純な文字列の置換として扱われ、そのためにこの場合は as 句が機能します。Member 列に Entity という名前が付けられている場合は、'Member as'を削除します。

例 5-4 例: /C2A パラメータを使用して別名を別名表にインポート

```

/A:TARGET
/U:admin
/IR
/D:Entity

/RIQ:ENT_ALIAS_ASSIGNMENT_QUERY

/C2A:(AliasTableName, Alias: LongAliasTableName012345678901234567890123)

ENT_ALIAS_ASSIGNMENT_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Entity, (select object_name from
hsp_object where OBJECT_ID=O.PARENT_ID) as Parent, (select OBJECT_NAME from
HSP_OBJECT where OBJECT_ID = AL.ALIAS_ID) as AliasTableName from hsp_object O,
HSP_ALIAS AL where (AL.ALIAS_TBL_ID = (select OBJECT_ID from HSP_OBJECT where
OBJECT_NAME = ' LongAliasTableName012345678901234567890123') AND
O.OBJECT_ID=AL.MEMBER_ID)
    
```

ノート:

前述の例では、ターゲットの Oracle Hyperion Planning アプリケーションとソースの両方に表の長い別名が含まれます。

例 5-5 例: /C2A パラメータを使用して列名をプロパティ名にマップ

```

/RIQ:select
c1,c2,c3,c4,c5,c6,c7,c8,c9,c10,c11,c12,c13,c14,c15,c16,c17,c18,c19,c20,c21,c22,c23,c2
4,c25,c26,c27 from table28
    
```

```

/c2a:(c1, Account), \
(c2, Parent), \
(c3, Alias: Default), \
(c4, Valid For Consolidations), \
(c5, Data Storage), \
(c6, Two Pass Calculation), \
(c7, Description), \
(c8, Formula), \
(c9, UDA), \
(c10, Smart List), \
(c11, Data Type), \
(c12, Hierarchy Type), \
(c13, Enable for Dynamic Children), \
(c14, Number of Possible Dynamic Children), \
(c15, Access Granted to Member Creator), \
(c16, Account Type), \
(c17, Time Balance), \
(c18, Skip Value), \
(c19, Exchange Rate Type), \
(c20, Variance Reporting), \
(c21, Source Plan Type), \
(c22, Plan Type (Plan1)), \
(c23, Aggregation (Plan1)), \
(c24, Plan Type (Plan2)), \
(c25, Aggregation (Plan2)), \
(c26, Plan Type (Plan3)), \
(c27, Aggregation (Plan3))

```

データのインポート

データのインポート操作を実行するときは、次の点が重要です:

- ドライバ・メンバーのデータ型は、インポートされる値と同じである必要があります。そうでない場合、データ・エラーが発生します。日付フィールドには/DF スイッチでフォーマットを指定する必要があります。ドライバ・メンバーのデータ型は日付型である必要があります。同様に、アプリケーションと指定されたスマート・リストにスマート・リスト値が存在する場合、スマート・リスト・メンバーはスマートリスト・タイプである必要があります。テキスト値は、テキスト型のドライバ・メンバーにバインドする必要があります。
- ドライバ・メンバー値を正しく評価するには、ドライバ・メンバー・タイプに加えて、ディメンションの評価順を設定する必要があります。
- アウトライン・ロード・ユーティリティのデータをインポートするとき、**#missing** 値はインポートされません。正しい Oracle Essbase セルに **#missing** 値が必ず含まれるように、すべてのデータ・インポートで /ICB コマンドを使用してロードするブロックをクリア(ブロックのセルをすべて **#missing** に設定)します。/ICB パラメータを使用した Essbase ブロックのクリアを参照してください。

リレーショナル・データベースからデータをインポートするには:

1. Oracle Hyperion Planning リレーショナル・ストアと Essbase データをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。
2. アプリケーションでリレーショナル表を作成します。

次の図は、データベース Test_300A にある Data_Table1 という名前のリレーショナル表の例です:

Entity	Data Load Cub...	Point-of-View	aCur	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText	aInspec
Plan1		FY12, Ron,Current, BU Version_1, Local,Jan	70	80	.75	b	6-15-2013	text3	10
* ALL	ALL	ALL	ALL	ALL	ALL	ALL	ALL	ALL	ALL

3. Planning アプリケーション・フォームを作成します。

次の図は、Test_300 という名前の Planning フォームの例です:

4. .properties ファイルを作成します。

ノート:

有効な列見出し名は SELECT 文の列名から取得され、これは as 句で上書きできます。

次に、myprop_relational.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

```
/A:TEST_300
/U:admin
/IR
/RIQ:DATA_QUERY2
/D:Entity
```

```
DATA_IMPORT_QUERY3 = SELECT Entity , "DATA LOAD CUBE NAME" as 'Data Load Cube
Name' , "AUNSPEC" as "aUnspec" , "ACUR" as "Salary_aCur" , "ANONCUR" as
"aNonCur" , "APER" as "aPer" , "ASL" as "aSL" , "ADATE" as "aDate" , "ATEXT" as
"aText" , "POINT-OF-VIEW" as "Point-of-View" from Data_Table1
```

```
/RIC:Test_300A
/RIR:jdbc:weblogic:sqlserver://[scl34390]:1433;DatabaseName=Test_300A
/RID:weblogic.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver
/RIU:sa
/RIP:password
```

5. 前のステップで作成した .properties ファイルに対してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行します。

たとえば次のコマンドラインを実行すると、Test_300 という Planning アプリケーションで、データベース Test_300A にあるリレーショナル表 Data_Table1 から Planning フォームにデータがインポートされます:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_relational.properties
```

生成される Planning アプリケーション・フォームは、次のようになります:

Salary_aCur	aUnspec	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText
e1	70	10	80	75%	b_Label	6/15/13

6. Essbase ログ・ファイルを確認し、インポート操作の結果を検証します。

/ICB パラメータを使用した Essbase ブロックのクリア

アウトライン・ロード・ユーティリティのデータをインポートするとき、#missing 値はインポートされません。正しい Oracle Essbase セルに#missing 値が必ず含まれるように、すべてのデータ・インポートで/ICB コマンドを使用してロードするブロックをクリア(ブロックのセルをすべて#missing に設定)します。

たとえば、次の図の ACUR の値は、空白または#missing です:

AUNSPEC	ACUR	ANONCUR	APER	ASL	ADATE	ATEXT	ENTITY	POINT-OF-VIEW	DATA LOAD CUBE NAME
30		50	0%	b_Label	07-15-2012	text1	e1	FY12,Current, B...	Plan1

生成される Oracle Hyperion Planning フォームでの aCur の値は空白または#missing になります:

aUnspec	aCur	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText
e1	30	50	0%	b_Label	7/15/12	text1

次に、/ICB パラメータを含む my_prop.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

コマンドライン: OutlineLoad /CP:c:/my_prop.properties

プロパティ・ファイル:

```
/A:DB2APP
/U:admin
```

```
/ICB:e1,"aUnspec,aCur,aNonCur,aPer,aSL,aDate,aText","FY12,Current, BU Version_1, Local,Jan",Plan1
```

```
#Use /IRA switch if relational table from which data is imported is in the same relational database as the Planning app (e.g. DB2APP)
```

```
/IRA
```

```
/RIQ:DATA_IMPORT_QUERY3
```

```
/D:Entity
```

```
#/C
```

```
#/M
```

```
DATA_IMPORT_QUERY3 = SELECT "ENTITY" as "Entity" ,"DATA LOAD CUBE NAME" as "Data Load Cube Name" ,"AUNSPEC" as "aUnspec" ,"ACUR" as "aCur" ,"ANONCUR" as "aNonCur" ,"APER" as "aPer" ,"ASL" as "aSL" ,"ADATE" as "aDate" ,"ATEXT" as "aText" ,"POINT-OF-VIEW" as "Point-of-View" from DataTable1
```

/SDM パラメータを使用したアウトライン・ロード・ユーティリティのドライバの設定

データをインポートする前に、/SDM パラメータを使用し、アウトライン・ロード・ユーティリティを通じてロード・ディメンションとドライバ・メンバーを設定できます。Oracle Hyperion Planning アプリケーションで、「管理」/「データ・ロードの設定」ユーザー・インタフェースを使用するかわりにこれを使用できます。

次に、/SDM パラメータを含む my_prop.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

コマンドライン: OutlineLoad /CP:c:/my_prop.properties

プロパティ・ファイル:

/A:Test_300
/U:admin

/ICB:"aUnspec,aPer","Jan,Feb,Mar","FY12,Current, BU Version_1, Local,e1,Ron",Plan1

#Use /IRA switch if relational table from which data is imported is in the same relational database as the Planning app (e.g. Test_300)
/IRA

/SDM:Account,"Jan,Feb,Mar",Plan1
/RIQ:DATA_IMPORT_QUERY5

/D:Account

DATA_IMPORT_QUERY5 = SELECT Account ,"Data Load Cube Name", Jan,Feb,Mar,"Point-of-View" from Data_Table2

次の例は、リレーショナル表です:

Account	Data Load Cub...	Point-of-View	Jan	Feb	Mar
aUnspec	Plan1	"FY12, Ron,Curr...	10	20	30
aPer	Plan1	"FY12, Ron,Curr...		0.65	0.85
NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL

生成される Planning アプリケーション・フォームは、次のようになります:

	Jan	Feb	Mar
aUnspec	10	20	30
aPer		65%	85%

Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したデータのエクスポート

myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、Test_300 Oracle Hyperion Planning アプリケーションの /EDD パラメータで指定されている交差に含まれるデータが、/ED パラメータで指定されている c:\ドライブの output_file.1-1.csv というフラット・ファイルにエクスポートされます。

myprop_dataexport.properties ファイル:

```
/A:Test_300
/U:admin
```

```
/ED:c:/output_file
/EDD:aUnspec, "Jan, Feb, Mar", "FY12, Current, Local, e1, BU Version_1, Ron", Plan1
```

/ED および /EDD パラメータの詳細は、[アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ](#)を参照してください。

Test_300 アプリケーションに次のフォームが含まれる場合、myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、output_file.1-1.csv から output_file.n-n.csv までのフォームのファイルにデータがエクスポートされます。n は生成されるファイルの数です。

form3				
Scenario: Current		Version: BU Version_1		Currency: Local
Entity: e1		Year: FY12		Employee: Ron
	Jan	Feb	Mar	
aUnspec	10	250	300	

入力として myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行するコマンドラインの例を次に示します:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_dataexport.properties
```

output_file.1-1.csv ファイル:

```
Account, Jan, Feb, Mar, Point-of-View, Data Load Cube Name
aUnspec,10, 250, 300, "FY12, Current, BU Version_1, Local, e1, Ron", Plan1
```

メンバー関数は、/EDD パラメータとともに使用できます。

ロード・ディメンションが従業員、ドライバ・ディメンションが勘定科目の場合、次の文を使用してデータをエクスポートできます:

```
/EDD:Ilvl0Descendants(John), Ilvl0Descendants(Accounts), "FY12, Current, Local, e1, BU Version_1, Jan", Plan1
```

データのエクスポートに関する考慮事項:

- メンバー名にカンマが含まれている場合、データ・エクスポートの実行時にタブ区切りファイルを使用する必要があります。
- メンバーがいずれかのメンバー・プロパティ(「説明」など)と同じ名前を持つ場合。アウトライン・ロード・ユーティリティのデータ・エクスポートで、予期しない結果が発生することがあります。

- テキストまたはその他のタイプのデータが、エクスポートされるファイルで表示される方法と同じようにフォームに表示されるように評価順を設定していることを確認してください。

ノート:

データのエクスポートでは、列ディメンションが密である必要があります。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、ディメンションのメタデータを、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義のディメンション、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層のフラット・ファイルにエクスポートできます。このユーティリティで使用されるパラメータの詳細は、[アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ](#)を参照してください。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してメタデータをエクスポートするには、ディメンション名を指定し、エクスポートする先のファイル名を指定します。たとえば、次のコマンドを使用して、エンティティ・ディメンションのメタデータを `ent_export.csv` というファイルにエクスポートします:

```
OutlineLoad /A:Acpt1 /U:admin /-M /E:c:/ent_export.csv /D:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 名前にスペースを含むユーザー定義のディメンションをエクスポート

名前にスペースを含むユーザー定義のディメンションをエクスポートする場合は名前を引用符(" ")で囲みます。たとえば、次のコマンドを使用して、ユーザー定義のライン・アイテム・ディメンションのメタデータをエクスポートします:

```
OutlineLoad /A:plnldv /U:admin /-M /E:c:/LineItemUserDim_export.csv /D:"Line Item" /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 属性ディメンションのエクスポート

属性ディメンションをエクスポートする場合、次の例に示すように、/D スイッチを属性ディメンションの名前とともに使用し、属性ディメンション・タイプは指定しません:

```
OutlineLoad /A:plnldv /U:admin /E:c:/AttribTextColor_export.csv /D:Color /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 「説明」テキスト・フィールドに改行文字を含むエクスポート。

改行文字は「説明」および「式」のテキスト・フィールドでサポートされます。次の例に示すように、改行文字を含むフィールドは引用符で囲む必要があります:

```
Currency, Description, Data Storage
USD,          "Description Line 1
Description Line 2
Description Line 3", Store
EUR,          "description for EUR", Store
```

メタデータのエクスポートの考慮事項:

- UDA は独立したディメンションとしてエクスポートできません。式と同様に、割り当てられたメンバーとともにエクスポートされます。
- DTS 期間タイプは認識されますが、アウトライン・ロード・ユーティリティではサポートされません。DTS 情報をエクスポートしようとする、ユーティリティによりログ・ファイルにエラーが表示されます。
- エクスポートされたメンバの別名がデフォルトではない別名表にあり、そのメンバーを別のアプリケーションにインポートする場合、インポート前に別名表をアプリケーションに手動で作成する必要があります。
- メンバーがいずれかのメンバー・プロパティ(「説明」など)と同じ名前を持つ場合。アウトライン・ロード・ユーティリティのメタデータ・エクスポートで、予期しない結果が生じることがあります。

Planning アプリケーションからリレーショナル・データ・ソースへのメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、メタデータをリレーショナル・データ・ソースにエクスポートできます。

ノート:

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースにデータをエクスポートすることはできません。

この機能を使用するユーザーは、リレーショナル・データベース、SQL 問合せ言語、および JDBC 接続プロパティをよく理解していることをお勧めします。Oracle Hyperion Planning アプリケーションの場合、これらのプロパティの例は、システム・データベースの HSPSYS_DATASOURCE 表にあり、これはデフォルトでは、EPM System コンフィギュレータで「Planning」の「データベースの構成」タスクを選択するとき作成するリレーショナル・データベースにあります。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースにエクスポートするときには、次のコマンドライン・パラメータを使用できます:

- /ER[:RDBConnectionPropertiesFileName]
- /ERA
- /REQ:exportQueryOrKey
- /REC:catalog
- /RED:driver
- /RER:url
- /REU:userName
- /REP:password

ノート:

/ER パラメータと /REQ パラメータは、どちらか一方しか選択できません。

これらのパラメータの詳細は、[アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ](#)を参照してください。

エクスポート問合せは、INSERT INTO<tableName>[(column1, column2, ...)] VALUES (property1, property2,...)という形式になります

ノート:

- <tableName>は、エクスポートした値が挿入される表の名前です
- (column1, column2, ...)は、オプションで指定する列の名前で、値(プロパティ)は表に挿入されます
- (property1, property2, ...)は厳密には値ではなく、メンバー・プロパティ名(列ヘッダー)です

ノート:

ヘッダー・レコードとは異なり、メンバー名はディメンション名ではなく'Member'で指定されます。

例:

Planning のエンティティ・ディメンションに、「e1's description」という説明を持つ「e1」と、「e11's description」という説明を持つ「e11」との2つのメンバーがあると仮定します。E1 はエンティティの下にあり、e11 は e1 の下にあります。したがって、プランニング・ディメンションは次のようになります:

エンティティ

```
e1
  e11
```

宛先表 my_table に、column1、column2、column3 の3つの列があると仮定します

Insert into my_table values (Member, Parent, Description)を実行すると、my_table に次の行が追加されます:

```
E1    e1's description    Entity
E11   e2's description    e1
```

これは、次と同じです:

```
Insert into my_table (column1, column2, column3) values (Member, Parent, Description)
```

ノート:

表には、指定したプロパティの数以上の列がある必要があります。

問合せに指定できる特殊な演算子として、<columns>と<properties>の2つがあります。<columns>は、表のすべての列名に拡張されます。<properties>は、エクスポートされるディメンションのすべてのプロパティに拡張され、これは/M スイッチで示されます。

```
Insert into my_table values (<properties>)
```

これはすべてのエンティティ・プロパティを my_table にロードします。

これは、次と同じです:

```
Insert into my_table (column1, column2, .... column23) values (<properties>)
```

my_table の列の数がプロパティの数と等しい場合、次の問合せは同じ結果になります:

```
Insert into my_table (<columns>) values (<properties>)
```

表列の名前を使用してメンバー・プロパティを抽出することもできます。たとえば sample_table には、Member、Parent、Description の列があります。次の問合せは、最初の例と同じ結果になります:

```
Insert into sample_table values (<columns>)
```

```
Insert into sample_table (<columns>) values (<columns>)
```

例 5-6 例: リレーショナル・データ・ソースにメタデータをエクスポートするプロパティ・ファイル

```
/A:Appl
/U:admin
```

```
/ERA
```

```
/D:Entity
```

```
/REQ:ENTITY_EXPORT_QUERY1
```

```
ENTITY_EXPORT_QUERY1=INSERT INTO DataTable_Entity1 VALUES (Member, Parent,
Description, Color)
```

```
#ENTITY_EXPORT_QUERY1=Insert into PS3ORA.DataTable_Entity1 (Member, Parent,
Description, Color) values (Member, Parent, Description, Color)
```

例 5-7 例: アウトラインからリレーショナル・データ・ソースに別名とともにエクスポートするプロパティ・ファイル

```
/A:expe
/U:admin
```

```
/ERA
```

```
/D:Entity
```

```
/REQ:ENTITY_EXPORT_QUERY1
```

```
/C2A:AliasLabel
```

```
AliasLabel:(AliasTableName, Alias: reallyLongAliasTableName30Char)
```

```
ENTITY_EXPORT_QUERY1=Insert into Test(Member, Parent, AliasTableName) values (Member,
Parent, Alias: reallyLongAliasTableName30Char)
```

前の例について、次のように仮定します:

- 「Test」表には Member、Parent、AliasTableName の 3 つの列があり、表は空です。
- エンティティ・ディメンションには、ルート(Entity)の下に 1 つのメンバー e1 があります。

前の問合せを実行すると、「Test」表には 1 つのエントリが追加されます:

Header
CL
Footer
DETCY
AliasTableName
CL reallyLongAliasTableName30Char

ノート:

/C2A またはラベル・スイッチ(あるいはその両方)を使用して、Oracle リレーショナル表の 30 文字の列名制限に対処できます。たとえば、別名: reallyLongAliasTableName30Char は 30 文字よりも長く、Oracle リレーショナル表の列名として使用できません。

アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ

次のコマンド・ラインをアウトライン・ロード・ユーティリティで使用できます。ユーティリティを実行した後で、例外ファイルとログ・ファイルをレビューし、結果を確認できます。ログ・ファイルでエラーがレポートされていない場合、インポートされたメタデータおよびデータにアプリケーションでアクセスできます。アプリケーション・サーバーを再起動する必要はありません。

```
HspOutlineLoad [-f:passwordFile] /A:application /U:userName
[/CP:commandPropertyFileName] [/M] [ [/I:inputFileName] /
IR[:RDBConnectionPropertiesFileName] | /IRA | /E:outputFileName | /
ED:outputFileNameStem] [/EDD:dataExportSpecification] [ /
ICB:blockSpecification] [ /SDM:driverMemberSpecification] /
D[U]:loadDimensionName | /
DA:attributeDimensionName:baseDimensionName | TR] [ /N] [ [ /R] [ /
DPU]] [ /C] [ /F] [ /K] [ /8] [ /DF:datePattern] [ /
RIQ:inputQueryOrKey] [ /RIC:catalog /RID:driver /RIR:url /
RIU:userName [ /RIP:password]] [ /X:exceptionFileName]
[L:logFileName] [ /?]
```

パラメータ	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <i>passwordFile</i> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。
<code>/S: server</code>	このパラメータは廃止されており、このパラメータで指定した値は無視されます。使用すると、指定したサーバー名が <code>null</code> ではなく、長さが 0 文字より大きいことがシステム・チェックされます。このパラメータは、下位互換性を提供するために引き続き使用可能です。アウトライン・ロード・ユーティリティの(デフォルト)サーバーは常に <code>localhost</code> です。
<code>/A: application</code>	インポート先の Oracle Hyperion Planning アプリケーションの名前。
<code>/U: userName</code>	アプリケーションにログオンするときに使用するユーザー名。

パラメータ	説明
<i>/CP: commandPropertieFileName</i>	<p>コマンドライン引数を含むファイルを指定します。このファイルとコマンドライン引数の組合せで、実行するオプションが構成されます。コマンド・プロパティ・ファイルとコマンドラインの両方に引数が指定されている場合は、コマンドライン引数が優先されます。コマンド・プロパティ・ファイルを参照してください。</p>
<i>/M</i>	<p>ロード可能なディメンションの完全に修飾されたヘッダー・レコードをアプリケーションで生成します。この情報を表示しない場合には、<i>/-M</i>を使用します(デフォルト)。</p>
<i>/I: inputFileName</i>	<p>CSV フォーマットでヘッダー・レコードとデータ・レコードを含むデータ・ロード入力ファイルを指定します。データ・ロード・ディメンション(<i>/D</i> オプションまたは <i>/TR</i> オプション)も指定する必要があります。<i>/ICB</i> スイッチを指定すると、Oracle Essbase データをクリアできます。</p>
<p><i>/</i> <i>IR[:RDBConnectionPropertiesFileName]</i></p>	<p>入力レコードをリレーショナル・データベース・ソースから取得することを指定します。オプションのプロパティ・ファイルを指定すると、必要なリレーショナル接続スイッチのプロパティ(<i>/RIQ</i>、<i>/RIC</i>、<i>/RID</i>、<i>/RIR</i>、<i>/RIU</i>、<i>/RIP</i>)の一部または全部がプロパティ・ファイルに含まれることとなります。データ・ロード・ディメンション(<i>/D</i> オプション)も指定する必要があります。<i>/ICB</i> スイッチを指定すると、Essbase データをクリアできます。</p>
<i>/IRA</i>	<p><i>/IR</i> スイッチと同じですが、必要な RDB JDBC 接続プロパティ(<i>/RIQ</i>、<i>/RIC</i>、<i>/RID</i>、<i>/RIR</i>、<i>/RIU</i>、<i>/RIP</i> スイッチ値)が、現在接続されているアプリケーションの RDB データ・ソースから取得される点は異なります。データ・ロード・ディメンション(<i>/D</i> オプション)も指定する必要があります。<i>/ICB</i> スイッチを指定すると、Essbase データをクリアできます。</p>

パラメータ	説明
/ICB: <i>blockSpecification</i>	インポート操作(/I、/IR、/IRA)を実行する前に、Essbase ブロックをクリアします。 (\"<loadDimensionMembers,...>、\"<driverMembers,...>、\"<point-of-view members,...>、<dataLoadCubeName>\" というフォームの文字列。)
/ALS	別名表が存在しない場合はインポート時に作成します(デフォルト)。参照される別名表が存在しない場合にエラーを生成するには、/ALS を使用します。
/E: <i>outputFileName</i>	/D スイッチで指定されたディメンションを、指定した出力ファイルにエクスポートします(プランニング・ユニット階層をエクスポートする場合、このファイルのフォーマットはプランニング・ユニット階層のエクスポート用に定義されたフォーマットです)。
/ED: <i>outputFileNameStem</i>	Planning ドライバ・メンバーでフォーマットされたデータ・ファイルにデータをエクスポートします。/EDD スイッチも設定する必要があります。ファイルは、<fileNameStem>.1-n.csv から<fileNameStem>.n-n.csv までのフォームで生成されます。n は生成されるファイルの番号です。
/EDH	出力ファイルで、 Planning の内部 HEADERBLOCK フォーマットのディメンション・ヘッダーをエクスポートします。インポート前に基本ディメンションと属性ディメンションを動的に作成するには、インポート時にこれを使用します。
/ ER[:RDBConnectionPropertiesFileName]	エクスポート・レコードをリレーショナル・データベース表に書き込むことを指定します。/EDD スイッチを設定すると、データもエクスポートされます。オプションのプロパティ・ファイルを指定すると、必要なリレーショナル接続スイッチのプロパティ(/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU、and /REP)の一部または全部がプロパティ・ファイルに含まれることとなります。/D スイッチを使用して、データ・ロード・ディメンションも指定する必要があります。

パラメータ	説明
/ERA	/ER スイッチと同じですが、必要な RDB JDBC 接続プロパティ(/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU、/REP スイッチ値)が、現在接続されているアプリケーションの RDB データ・ソースから取得される点は異なります。/EDD スイッチを設定すると、データがエクスポートされます。/D スイッチを使用して、データ・ロード・ディメンションも指定する必要があります。
/EDD: <i>dataExportSpecification</i>	Planning ドライバ・メンバーでフォーマットされたデータ・ファイルをエクスポートするフォーマットを指定します。 <loadDimensionMembers,...>、 <driverMembers,...>、<point-of-view members,...>、<dataLoadCubeName> というフォームの文字列。
/SDM: <i>driverMemberSpecification</i>	インポート操作のときのみ(/I、/IR、/IRA)、アプリケーション(/A)の基本ロード・ディメンションでドライバ・メンバーを設定します。(\ "<baseLoadDimension>、\ "<driverMembers,...>\ "、<PlanTypeName>" というフォームの文字列)
/D: <i>loadDimensionName</i>	メンバー・フィールドがロード・ファイルのヘッダー・レコードに対応している、ロードされるディメンション。さらにロード・ファイル(/I)か、/E スイッチでエクスポートするプランニング・ユニット階層を指定する必要があります。 /DU、/DA[T]、/DAN、/DAB および/DAD を使用してユーザー定義ディメンションおよび属性をロードするには、次の行を参照してください。
/DU: <i>userDefinedLoadDimensionName</i>	ロードされるユーザー定義ディメンション。この名前のディメンションが存在しない場合には作成されます。
/DA[T]: <i>attributeLoadDimensionName:baseDimensionName</i>	ロードされるテキスト属性ディメンション。基本ディメンションに関連付けられた、この名前を持つ属性ディメンションが存在しない場合には作成されます。
/DAN: <i>attributeLoadDimensionName:baseDimensionName</i>	ロードされる数値属性ディメンション。基本ディメンションに関連付けられた、この名前を持つ属性ディメンションが存在しない場合には作成されます。

パラメータ	説明
/DAB: <i>attributeLoadDimensionName:baseDimensionName</i>	ロードされるブール属性ディメンション。基本ディメンションに関連付けられた、この名前を持つ属性ディメンションが存在しない場合に作成されます。
/DAD: <i>attributeLoadDimensionName:baseDimensionName</i>	ロードされる日付属性ディメンション。基本ディメンションに関連付けられた、この名前を持つ属性ディメンションが存在しない場合に作成されます。
/DX:HSP_Rates	HSP_Rates ディメンションをロードし、為替レート表が存在しない場合は作成します。
/DS:HSP_SMARTLISTS	スマート・リスト・ディメンションおよびスマート・リスト・ディメンション・エントリをロードします。
/DL:comma tab	フィールドの区切り文字をカンマ文字","のカンマ(デフォルト)またはタブ文字に設定します。
/TR	ドライバ・メンバーがロード・ファイルのドライバ・メンバー列に指定されている場合、データをロードします。ドライバ・メンバー以外のすべてのメンバーを、「視点」列に指定する必要があります。/TR を使用すると、ロード・ファイルの各行に1つの値をロードできます。
/T	新規メンバーを追加するときに未指定のプラン・タイプ設定を継承します(デフォルト)。メンバーのプラン・タイプ設定の明示的な設定を強制するには、/T を使用します。
/N	データまたはメタデータをロードせずにロード・ファイルを解析することにより「リハーサル」を実行します。データまたはメタデータのロード中にロード・ファイルを解析するには(デフォルト)、/N を使用します(または/N パラメータを指定しません)。

ノート:

ドライ・ランを実行すると、ロード・ファイルが解析(たとえば、ヘッダー・レコードのチェック、値の数がヘッダー・レコード番号と一致するかどうかのチェック)されますが、ファイルに定義された値の妥当性はチェックされません。

パラメータ	説明
/O	UDA を例外として(デフォルト)、ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を維持します。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視するには、/O を使用します。
/H	UDA を例外として(デフォルト)、親-子の順序で入力レコードに順序をつけます。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視するには、/H を使用します。このオプションはより高速で、メモリー使用量が小さくなります。
/R	ロードを実行する前にロード・ディメンションのすべてのメンバーを削除します。ロード・ディメンションのすべてのメンバーを維持するには(デフォルト)、/R を使用します(または/R パラメータを指定しない)。さらに/U も参照してください。
<hr/> <p>ノート: /R には注意してください。このオプションは、属性バインディングおよび承認状態を除去します。</p> <hr/>	
/DPU	/R パラメータですべてのプランニング・ユニットを削除するか、プランニング・ユニットのメンバーの削除が試行された場合にエラーを表示します。削除操作でプランニング・ユニットのメンバーが削除されないようにするには、/DPU を使用します。
/IDU	ロードで明示的に指定されていない未指定のメンバーを削除します。入力ソースで明示的に指定されていないメンバーは、1)指定されたメンバーの祖先であるか、2)指定された共有メンバーのベース・メンバーである場合を除いて、ロードの完了時に Planning アウトラインから削除されます(/IDU がデフォルトです)。
/C	メタデータ・ロードの後でキューブ・リフレッシュを実行します。キューブ・リフレッシュを実行しない場合には、/C を使用します(デフォルト)。さらに/F も参照してください。

パラメータ	説明
/F	/C オプションでリフレッシュするときにセキュリティ・フィルタを作成します。セキュリティ・フィルタをリフレッシュしない場合に(デフォルト)、/F を使用します。(このオプションはユーザーをアプリケーションにプロビジョニングしません。現在存在しているユーザーにセキュリティ・フィルタを作成するのみです。ユーザーは他の方法でアプリケーションにプロビジョニングする可能性があります。)このオプションを有効にするには、/C も指定する必要があります。
/K	ロードする前にロード・ディメンションをロックすること(デフォルト)を推奨します。ディメンションをロックしたくない場合には、/K を使用します(/N を使用しないかぎり推奨しません)。
/8	入力、出力、ログ、例外の各ファイルで UTF-8 エンコーディングを指定し、出力ファイルに UTF-8 BOM マーカーを追加します(デフォルト)。UTF-8 エンコーディングを設定しない場合は /-8 を使用します。
/DF:datePattern	<p>日付データ変換に関するデフォルト日付パターンを、指定されたパターンにオーバーライドします。パターンは、次のいずれかにする必要があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ MM-DD-YYYY ・ DD-MM-YYYY ・ YYYY-MM-DD <p>デフォルトの日付パターン設定を使用するには、/DF を使用します。</p>
/RIQ:inputQueryOrKey	<p>インポート操作の入力を生成するために実行される SQL 問合せを値にとるコマンド引数プロパティ・ファイル(/CP スイッチ)における SQL 問合せまたはキー。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/RIC、/RID、/RIR、/RIU、/RIP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/RIC:catalog	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC カタログ名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/RIQ、/RID、/RIR、/RIU、/RIP の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。</p>

パラメータ	説明
/RID:driver	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC ドライバ名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用する場合、/RIQ、/RIC、/RIR、/RIU、/RIP の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。</p>
/RIR:url	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC の URL。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用する場合、/RIQ、/RIC、/RID、/RIU、/RIP の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。</p>
/RIU:userName	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC ユーザー名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用する場合、/RIQ、/RIC、/RID、/RIR、/RIP の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。</p>
/RIP:password	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC パスワード。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用する場合、/RIQ、/RIC、/RID、/RIR、/RIU の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、/RIP スイッチを指定する必要はありません。</p> <p>.properties ファイルで最初に指定するときは、暗号化されていない形でパスワードを入力します。アウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、プロパティ・ファイルは /RIP パスワードの暗号化された値で書き換えられます。プロパティ・ファイルでこの値を指定しなかった場合は、パスワードを入力するコマンドライン・プロンプトが表示されます。</p>

パラメータ	説明
/REQ:exportQueryOrKey	<p>エクスポートされるフォームの値を指定する SQL 問合せを値にとるコマンド引数プロパティ・ファイル(/CP スイッチ)における SQL 問合せまたはキー。'INSERT INTO<tableName> (column1, column2, ...) VALUES (property1, property2, ...)' ここで、properties はフラット・ファイルの列ヘッダー・レコードで見つかる Planning メンバー・プロパティです。これを使用するには/ERまたは/ERA スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REC、/RED、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/REC:catalog	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC カタログ名。これを使用するには/ER スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REQ、/RED、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/RED:driver	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC ドライバ名。これを使用するには/ER スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REQ、/REC、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/RER:url	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC の URL。これを使用するには/ER スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/REU:userName	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC ユーザー名。これを使用するには/ER スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/RER、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
REP:password	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC パスワード。これを使用するには/ER スイッチを設定する必要があります、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU の各スイッチも設定する必要があります。</p> <p>コマンド・プロパティ・ファイルでこの値を指定しなかった場合は、パスワードを入力するコマンドライン・プロンプトが表示されません。</p>

パラメータ	説明
<code>/C2A:(column1, alias1), (column2, alias2), ...</code>	"列から別名への"マッピング、または実行時の列の名前変更および除外。このパラメータを使用すると、実行時における列ヘッダーの名前変更、列の無視、または特定のプラン・タイプ・プロパティの無視や名前変更が可能になります。
<hr/> ノート:	
列に別名が指定されている場合は、このコマンドの割当てより優先されます。	
<code>/UCH</code>	認識されない列ヘッダーを無視してロードを続行します。 <code>/-UCH</code> がデフォルトの現行機能です。認識されない列ヘッダーが検出された場合、ロードを中止します。無視された列がリストされた情報メッセージが出力されません。
<code>/X: exceptionFileName</code>	ロード中に発生する例外を含むファイルを指定します。(ファイル名が指定されていない場合、情報は <code>stderr</code> と呼ばれるファイルに書き込まれます。)
<code>/L: logFileName</code>	ステータスおよび情報メッセージを含んでいるファイルを指定します。(ファイル名が指定されない場合、情報は <code>stdout</code> と呼ばれるファイルに書き込まれます。)
<code>/?</code>	使用方法のテキストを表示します。

例: 数値属性ディメンションおよび値をロードし、エンティティ・ディメンションに関連付けます。(属性ディメンションが存在しない場合には作成されますが、属性値は基本番号に割り当てられません。)

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_attribvals_text.csv /
DAN:NumericAttrib:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

```
NumericAttrib,Parent
```

```
One,NumericAttrib
```

```
1,One
```

```
2,NumericAttrib
```

例: 為替レートをロードし、EUR を通貨ディメンションのメンバーとして追加し、**Planning** アプリケーションの既存の年に一致するようにロード・ファイルで年を変更します。為替レート表が存在しない場合は、**Planning** アプリケーションに作成されません。

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_rates.csv /DX:HSP_Rates /L:c:/
OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
Table, To Currency, From Currency, Method, Historical, Beg Balance, Year, Period,
Average, Ending
```

```
FX1 , USD, EUR, multiply, 1, 2, FY08, Jan, 3, 4
```

```
FX1 , USD, EUR, , , , FY09, Feb, 5, 6
```

例: 「週次配分」を「445 を使用」に設定します。

```
Account, Parent, Use 445
```

```
all,a1,1
```

例: UDA で使用可能なプロパティをすべて含むファイルをロードします。UDA はロードされ、ディメンションに関連付けられますが、ディメンションのどのメンバーにも割り当てられません。

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_uda.csv /D:UDA /L:c:/OutlineLogs/
outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

```
Dimension,UDA
```

```
Account,New2
```

例: 通貨記号を指定しない通貨についてファイルをロードします。この場合、Planning アプリケーションのこの通貨の記号は ISO 記号、EUR に設定されます。スケールのデフォルトは 1 です。

```
Currency,Parent,Symbol,Scale
```

```
EUR,,,
```

例: 記号を新しい通貨の名前に設定する通貨についてファイルをロードします。記号は通貨 NewCurr1 について Planning アプリケーションで NewCurr1 に設定されます。通貨名は 8 文字に制限されます。

```
Currency,Parent,Symbol,Scale
```

```
NewCurr1,,,
```

例: 暗号化されたパスワードを持つ -f パラメータを使用します

暗号化されたパスワード・ファイルを生成した場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとして -f を使用し、パスワードを入力せずにアウトライン・ロード・ユーティリティを実行できます。たとえば、PasswordEncryption ユーティリティを使用して encrypt.txt と呼ばれるパスワード・ファイルを作成した場合、このコマンド・ラインを使用できたはずですが、

```
OutlineLoad -f:c:\encrypt.txt /A:acct /U:admin /M /I:c:/outline1_accounts.csv /
D:Account /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

例: /o パラメータおよびロード・ファイルの順序

次のロード・ファイルで、エンティティ・メンバー e1 および e2 がすでにエンティティ・ディメンションに存在する場合、e3 がロード・ファイルの最初にある場合でもそれを最後の兄弟として追加できます。/o を使用した場合、e3 は最初の兄弟としてロードされます。/o はデフォルトであるため、最後の兄弟として e3 をロードさせるには /-o を指定する必要があります。

Entity,Parent,Data Storage,TextAttrib

e3,Entity,Store,

e2,Entity,Store,

e1,Entity,Store,

例: /H パラメータおよび親/子の順序

メンバー e1 はすでに存在しており、A および B はロードされている新規メンバーであると仮定します。メンバー B が存在しないため、/H がなければエラーが表示されます。/H があればメンバーは内部的にソートされ、B は最初に e1 の子としてロードされます。そのあと A は B の子として正常にロードされます。

Entity,Parent,Data Storage

A,B,Store

B,e1,Store

例: /R パラメータ

一部のメンバーがすでにディメンションに存在している場合、入力ロード・ファイルのメンバーのみがロード後にディメンションに存在している必要があります。削除の操作後のロード中にエラーが発生する場合、ディメンションのすべてのメンバーは削除され、ディメンションが空になる可能性があります。属性ディメンションは削除されません。プランニング・ユニットが開始している場合、プランニング・ユニット内のエンティティ・メンバーは削除できないため、エンティティ・メンバーは削除されません。

Entity,Parent,Data Storage,TextAttrib

e1,Entity,Store,

e11,e1,Store,orange

e2,Entity,Store,

e21,e2,Store,

e11,e2,shared,yellow

例: /T パラメータ

新規メンバーを追加するときに親からのロード・ファイルで明示的に指定されていないプラン・タイプを継承するには、/T で勘定科目ディメンションをロードします。メンバー a1 がすでにアプリケーションに存在しており、3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。ロードが完了すると、Plan1 および Plan3 のみがロード・ファイルで指定されていても、メンバー a11 が 3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。

Account, Parent, Source Plan Type, Plan Type (Plan1), Plan Type (Plan2), Plan Type (Plan3)

a11,a1,Plan1,1,,1

例: /-T パラメータ

新規メンバーのプラン・タイプの明示的な設定を強制するには、/-T で勘定科目ディメンションをロードします。メンバー a1 がすでにアプリケーションに存在しており、3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。ロードの後に、メンバー a11 が

有効になるのはロード・ファイルで指定された Plan1 および Plan3 プラン・タイプのみとなり、Plan2 では有効になりません。

例: /TR パラメータ

```
OutlineLoad /A:acpt1 /U:admin /M /I:c:\outlinedata.csv /TR /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

```
Value,Driver Member,Point-of-View,Data Load Cube Name
```

```
14,a1,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
s11_value2,a2,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

例: /DS:HSP_SMARTLISTS パラメータを使用して、スマート・リスト・ディメンションおよびスマート・リスト・ディメンション・エントリをロードします。

```
OutlineLoad /A:acpt /U:admin /M /I:c:/smartlist_create1.csv /DS:HSP_SMARTLISTS /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

```
SmartList Name, Operation, Label, Display Order, Missing Label, Use Form Missing Label, Entry ID, Entry Name, Entry Label
```

```
SL1,addsmartlist,SL1Label,,,,,
```

```
SL1,addEntry,,,,,entry1,entrylabel1
```

```
SL1,addEntry,,,,,entry2,entrylabel2
```

例: LINEITEM フラグを使用した増分データ・ロードの実行

データ・ロード・ファイルに LINEITEM フラグを組み込むことにより、一意のドライバ・ディメンション識別子に基づいてデータ・ロード・ディメンションの子に対して増分データ・ロードを実行できます。これは一意の識別子を指定した行がフォームにすでに存在する場合に、データが上書きされることを指定します。行が存在しない場合、データ・ロード・ディメンションの親メンバーの下に十分な子メンバーが存在する限り、データは入力されます。

たとえば、従業員データをロードする場合、事前定義された給与等級に対する予算ライン・アイテムの詳細をロードできます。次の例は LINEITEM フラグを含むデータ・ロード・ファイルで使用できるコマンドを示します。

```
OutlineLoad /A:pln1dv /U:admin /M /I:c:\dataload_file.csv /D:"Budget Item"
```

次のサンプル・データ・ロード・ファイルは、Grade Changes の子の Budget Item ディメンションのデータをロードします。

```
"Budget Item","Data Load Cube Name","Point-of-View","Grade Step","Option Value","Start Date","End Date"
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes")>","HCP","POVMembers","Step1","31721","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes")>","HCP","POVMembers","Step2","32673","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes")>","HCP","POVMembers","Step3","33654","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes")>","HCP","POVMembers","Step4","33654","7/1/09",""
```

この場合、<LINEITEM("Grade Changes")>は、「データ・ロードの設定」ページで選択した一意の識別子(「等級ステップ」、「オプション値」、「開始日」および「終了日」)

に基づいて、**Grade Changes** メンバーの子である **Budget Item** から、使用可能な最初のメンバーを検索します。

データ・ロード時に、**Grade Changes** の子メンバーに **Step1** および **7/1/09** のデータがすでに存在する場合、対応するメンバーを使用して残りのデータ値が更新されます。存在しない場合は、次に使用可能な空のデータ行が **Step1** および **7/1/09** に割り当てられます。

最初のデータ行が処理されると、メンバー **Grade1** が割り当てられます。同様に、次の2つのメンバーである **Grade2** と **Grade3** が2番目と3番目のデータ行に割り当てられます。4番目のデータ行の処理時には、**Step1** および **7/1/09** はすでにメンバー **Grade1** に割り当てられています。これにより、この行を使用して残りのフィールドの値を更新できます。

例: /D パラメータを使用して、プランニング・ユニット階層をインポートします。

```
OutlineLoad /A:acpt /U:admin /I:c:\puhl.csv /D:PUH1
```

/D を使用してプランニング・ユニット階層をインポートする場合、プランニング・ユニット階層の名前(ディメンションではありません)を指定する必要があります。プランニング・ユニット階層が **Planning** アプリケーションに存在していないと、そこに新しいメンバーをロードすることはできません。

例: /E パラメータを使用して、プランニング・ユニット階層をエクスポートします。

```
OutlineLoad /A:acpt_580 /U:admin /M /E:puh_test2.csv /D:test2
```

Primary Member, Primary Enabled, Secondary Dimension, Secondary Parent, Relative Generation, Auto Include, Secondary Member, Include, Owner, Reviewers, Notifiees

```
e1, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, admin, planner
e11, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, <none>, <none>
e2, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1, false, , true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1, false, a11, true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1, false, a12, true, admin, <none>, "admin,admin"
e21, true, Account, a1, 1, false, a13, true, planner, "planner2,admin", admin
e21, true, Account, a1, 1, false, a14, true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1, false, a15, true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1, false, a16, true, <none>, <none>, <none>
e21, true, Account, a1, 1-2, false, a111, true, <none>, <none>, <none>
```

ノート:

最初の4つのレコードのセカンダリ・メンバーは指定していません。

ディメンション・プロパティ

共通したメンバー・プロパティおよび勘定科目、エンティティ、期間、ユーザー定義ディメンション、年、シナリオ、バージョン、通貨、属性ディメンション、UDA、為

替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層に関しては、次の項を参照してください。

動的メンバーのプロパティは、期間および年を除くすべてのディメンションに対して公開されます。期間および年を除くすべてのディメンションに公開される3つのプロパティは、次のとおりです:

- 動的な子に対して使用可能
- 使用可能な動的な子の数
- メンバー作成者に付与されたアクセス権

共通したメンバー・プロパティ

複数のディメンションで共通するメンバー・プロパティをこの項で説明します。特定のディメンションに特有のプロパティについては、次の項を参照してください。

- **親:** ディメンション階層を作成するためにロードされるメンバーの親。メンバーをロードし、アプリケーションの親メンバーとは異なる親メンバーを指定するとき、指定した新しい親の値でメンバーが更新されます。たとえば、メンバー1がOracle Hyperion Planning アプリケーションでメンバーAの親の値を持ち、メンバー1をメンバーBの親の値でロードする場合、システムはメンバーBをメンバー1の親にしてアプリケーションを更新します。メンバー1およびその子孫はメンバーAからメンバーBに移動されます。親を指定しない場合、ロード中に無視されます。指定された親がロードされているメンバーの子孫である場合またはアプリケーションに存在しない場合、レコードは拒否されます。
- **別名: デフォルト:** 「デフォルト別名」表でメンバーに対して定義された別名。値を指定しない場合、その別名はアプリケーションで変更されません。<none>を値として指定する場合、アプリケーションにある別名は削除されます。
- **集計に有効:** Planning では使用しません。
- **階層タイプ:** 集約ストレージ・プラン・タイプにバインドされているディメンションは、自動的に複数階層のサポートが有効になります。階層を「保管済」(デフォルト)、「動的」、「なし」のいずれかに指定します。
- **データ・ストレージ:** ロードされているメンバーのストレージ属性。この値は文字列として渡されます。デフォルト: 共有しない。有効な値:
 - 保管
 - 動的計算
 - 動的計算および保管
 - 共有
 - 共有しない
 - ラベルのみ

ノート:

各プラン・タイプには、異なるデータ・ストレージ・プロパティを含めることができ、各プラン・タイプのデータ・ストレージ・プロパティは公開されます(たとえば、データ・ストレージ(プラン 1)など)。元のデータ・ストレージ・プロパティは、デフォルトのデータ・ストレージに対応します。データ・ストレージ・プロパティが「共有」または「ラベルのみ」に設定されている場合、プラン・タイプ固有のストレージが「共有」または「ラベルのみ」以外の値に設定されると、インポートでエラーが発生します。

- **2パス計算:** この属性がロードされているメンバーに関連付けられているかを示すブール値。0はFalseで他の数字はTrueとなります。デフォルト:False。勘定科目メンバーについて、2パス計算プロパティはデータ・ストレージ設定に関係なく設定できます。勘定科目以外のディメンションのメンバーについては、2パス計算プロパティが有効になるのはデータ・ストレージ値が「動的計算」または「動的計算および保管」である場合のみです。それ以外の場合にはレコードが拒否されます。
- **説明:** ロードされているメンバーの説明。値を入力しない場合、新規メンバーが説明なしにロードされ、既存のメンバーの説明は変更されません。<none>を値として使用する場合、そのメンバーの既存の説明は削除されます。
- **式:** メンバーのメンバー式を指定します。デフォルトでは、ディメンションまたはメンバーに関連付けられたメンバー式はありません。共有またはラベルのみのメンバーについてはメンバー式をロードできません。

ノート:

各プラン・タイプには、異なる式を含めることができ、各プラン・タイプの式プロパティは公開されます(たとえば、式(プラン 1)など)。元の式プロパティは、デフォルトの式に対応します。

- **UDA:** メンバーとバインドするには、ユーザー定義属性の値を指定します。未定義のUDAがディメンションに追加されます。UDAを追加できるのは、Planningですでに作成されたこれらのディメンションのみです。
- **スマート・リスト:** アプリケーションで定義されたユーザー定義スマート・リストの名前をとります。この値は文字列として渡されます。スマート・リストのデフォルトは<none>です。メンバーに関連付けることができるのは1つのスマート・リストのみです。
- **データ型:** データ・ストレージ値。有効な値:
 - **通貨:** デフォルト通貨でメンバー値を保管、表示します。
 - **通貨以外:** メンバー値を数値として保管、表示します。
 - **パーセンテージ:** 値を数値として保管し、メンバー値をパーセンテージとして表示します。
 - **スマート・リスト:** 値を数値として保管し、メンバー値を文字列として表示します。
 - **日付:** メンバー値を mm/dd/yyyy または dd/mm/yyyy のフォーマットで保管、表示します。
 - **テキスト:** メンバーの値をテキストとして保管、表示します。

- **未指定:** メンバー値をメンバー値として保管、表示します。
- **操作:** これらの値をとります:
 - **更新:** ロードされているメンバーを追加、更新または移動します。
 - **レベル 0 の削除:** 子がない場合に、ロードされているメンバーを削除します。
 - **子孫(含む)の削除:** ロードされているメンバーおよび含まれている子孫すべてを削除します。
 - **子孫の削除:** ロードされているメンバーの子孫を削除しますが、メンバー自体は削除しません。
メンバーを削除するときに注意を使用します。これによりメンバー、そのデータおよび関連したプランニング・ユニットが削除されます。
- **承認を使用可能:** 承認を使用可能にします。デフォルトでは **True** です。
- **プラン・タイプ**(たとえば、**Plan1**、**Plan2**、**Plan3**): ロードされているメンバーが指定されたプランで使用されているかどうかを示すブール値です。有効な値: **0** は **False** で、他の数字は **True** になります。デフォルト: **True**。その名前は、アプリケーションのプラン・タイプの名前に応じて決まります。
- **集約(Plan1、Plan2、Plan3):** 指定されたプランに関連してロードされている、メンバーの集約オプション。これを使用できるのは、このプラン・タイプでアプリケーションが有効な場合のみです。この値は文字列として渡されます。有効な値:
 - **+** (加算)
 - **-** (減算)
 - ***** (乗算)
 - **/** (除算)
 - **%** (パーセント)
 - **~** (集計では無視する)
 - **なし** (階層に関係なく集約しない)
- **UDA:** ロードされている UDA の値。UDA を関連付けることができるのはアプリケーションに存在するディメンションのみです。UDA が存在する場合、そのプロパティは変更されます。

勘定科目ディメンション・プロパティ

勘定科目ロード・ファイルには次のプロパティが含まれます。

勘定科目、親、別名: デフォルト、別名: T1、集約に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、勘定科目タイプ、タイム・バランス、445 を使用、544 を使用、554 を使用、スキップ値、為替レート・タイプ、差異レポート、ソース・プラン・タイプ、プラン・タイプ (*Plan1*)、集約 (*Plan1*)、プラン・タイプ (*Plan2*)、集約 (*Plan2*)、プラン・タイプ (*Plan3*)、集約 (*Plan3*)、*AttribDim1*、*AttribDim2*

これらプロパティの詳細は、次の表と [共通したメンバー・プロパティ](#) を参照してください。

ノート:

- タイム・バランスは勘定科目データが時間の経過にしたがってどのようにフローするかを指定します。「保存された仮定」の勘定科目タイプをもつメンバーのみのタイプを取り込むかまたはレコードが拒否される必要があります。
- タイム・バランスが「フロー」の場合、有効なスキップ値がロードされ、すべての勘定科目タイプについて「スキップ値」が無効になります。
- タイム・バランスが「最初」、「残高」または「平均」の場合に、「スキップ値」を設定できます。これらのオプションは、現在の値が計算される時: なし、#MISSING、ゼロまたは#MISSING およびゼロの場合にどの値をスキップするかを設定します。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。基本期間はユーティリティを使用して追加できません。年、基本期間および為替レートは削除できません。
- 年合計および BegBalance 期間はユーティリティを使用して変更できません。
- 「為替レート・タイプ」は「データ型」のために指定された値に応じて決まります。有効な値: 「平均」、「終了」および「データ型が通貨の場合に履歴」またはデータ型が通貨以外の場合は「なし」。
- 「差異レポート」は、「保存された仮定」の勘定科目タイプの場合またはレコードが拒否された場合に勘定科目メンバーをロードします。「費用」は仮定の勘定科目を費用として指定します。差異を決定するため、実際の量が見積もられた量から減算されます。「費用外」は、費用でない勘定科目を指定します。差異を決定するため、見積もられた量が実際の量から減算されます。勘定科目タイプの値: 収益: 「費用外」、費用: 「費用」、資産: 「費用外」、負債: 「費用外」、自己資本: 「費用外」。
- メンバーの親を更新または保存するときに、システムはロードされているメンバーに関連付けられた「ソース・プラン・タイプ」が新しい親に対して有効であるかどうかを確認します。メンバーのソース・プラン・タイプが親のメンバーに対して有効でも、メンバー自身に対して有効でない場合、メンバーは保存されますが、そのソース・プラン・タイプは最初の有効なプラン・タイプに対して設定されます。「ソース・プラン・タイプ」が指定されていても親に対して有効でない場合、レコードは拒否されます。

表 5-4 勘定科目ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
勘定科目	メンバー名	テキスト。メンバー命名規則に準拠	なし	はい
親	メンバー名	テキスト。メンバー命名規則に準拠。	なし。既存のメンバーの名前または空の場合に、メンバーはディメンション・ルートにある子として配置されます	いいえ (ほとんどの「期間」メンバーで指定する必要あり)

表 5-4 (続き) 勘定科目ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
別 名:Alias_Table_Name	別名	テキスト。Planning メンバー命名規則お よび列ヘッダーで指 定された別名表で定 義された別名に準拠 します。<なし>は、 指定された表からの メンバーに対する別 名のバインディング を除去します。	なし	いいえ ディメンションで定 義された各別名表の 列ヘッダーが1つ表 示されます。デフォ ルトは各ディメンシ ョンについて事前定 義された別名表で す。
集計に有効	未使用	N/A	N/A	いいえ
データ・ストレージ	データ・ストレージ	テキスト: 保管、動的 計算および保管、動 的計算、共有しない、 共有、ラベルのみ	親から継承。親がル ート・メンバーの場 合、デフォルトは「共 有しない」です	いいえ
2 パス計算	2 パス計算	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼ ロは偽	親から継承	いいえ
説明	説明	テキスト。Planning の最大文字数制限に 準拠します。 <none>は説明を除 去します	なし	いいえ
式	式	テキスト。有効な式 構文の Oracle Essbase 制限に準拠 します。<none>は 式を除去します	なし	いいえ

表 5-4 (続き) 勘定科目ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
UDA	UDA	単一の UDA テキスト値または引用符で囲まれ、カンマで区切られた UDA テキスト値のリスト。存在しない UDA はディメンションに追加され、既存の UDA バインディングは再指定していない場合、結果の保存内容から除去されます。何も指定していない場合にはバインディングをそのまま残します。<なし>は既存の UDA のバインディングをすべて除去します。	なし	いいえ
スマート・リスト	スマート・リスト	テキスト。アプリケーション用にすでに定義されたスマート・リストの名前に制限されます。データ型がスマート・リストに設定されている場合にのみ指定する必要があります。<none>は既存のスマート・リスト・バインディングを除去します	なし	いいえ
データ型	データ型	テキスト: 未指定、通貨、通貨以外、パーセンテージ、スマート・リスト、日付、テキスト	親から継承。通貨メンバーがルート・ディメンションの下に追加される場合	いいえ
操作		テキスト: 更新、レベル 0 の削除、子孫(含む)の削除、子孫の削除	更新	いいえ
勘定科目タイプ	勘定科目タイプ	テキスト: 支出、収益、資産、負債、自己資本、保存された仮定	親から継承。メンバーがルート・ディメンションの下に追加される場合は、収益。	いいえ

表 5-4 (続き) 勘定科目ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
タイム・バランス	タイム・バランス	テキスト: フロー、最初、残高、平均、avg_actual、avg_365、入力	親から継承(勘定科目タイプに対するデフォルトのタイム・バランス値: 支出: フロー 収益: フロー、資産: 残高、負債: 残高、自己資本: 残高)	いいえ
445 を使用、544 を使用、554 を使用(システム設定に応じて、1つの列ヘッダーのみが表示されます。週次配分がアプリケーションに定義されていない場合、列ヘッダーは表示されません。)	週次配分(アプリケーションの「週次配分」が「均等」に設定されている場合、配分オプションは表示されません。)	True、False または整数: ゼロ以外は真、ゼロは偽	なし	いいえ
値のスキップ		テキスト: なし、欠落、ゼロ、欠落およびゼロ、なしである必要あり、勘定科目タイプが支出または収益の場合	親から継承	いいえ
為替レート・タイプ	為替レート・タイプ	テキスト: なし、平均、終了、履歴(なしは、データ型が通貨に設定されている場合には指定すべきではありません。それ以外の場合には指定する必要があります。)	親から継承。メンバーがルート・ディメンションの下に追加される場合は、平均。	いいえ
差異レポート	差異レポート	テキスト: 支出外、支出。(勘定科目タイプが支出の場合は支出である必要があり、その他すべての勘定科目タイプの場合には支出外である必要があります。)	親から継承。メンバーがルート・ディメンションの下に追加される場合は、費用外。	いいえ
ソース・プラン・タイプ	ソース・プラン・タイプ	テキスト: プラン・タイプアプリケーションで定義された名前(たとえば、Plan1 または Plan2)	Plan1 またはアプリケーションで定義された最初のプラン・タイプの名前	いいえ

表 5-4 (続き) 勘定科目ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
プラン・タイプ (Plan1)	プラン・タイプ	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan1)	集約	テキスト: +、-、 *、/、%、~、なし	親から継承。親がルート・メンバーである場合、デフォルトは+。年についてのデフォルトは~(無視)	いいえ
プラン・タイプ (Plan2)	プラン・タイプ	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan2)	集約	テキスト: +、-、 *、/、%、~、なし	親から継承。親がルート・メンバーの場合、デフォルトは+。年についてはデフォルトは~(無視)	いいえ
プラン・タイプ (Plan3)	プラン・タイプ	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan3)	集約	テキスト: +、-、 *、/、%、~、なし	親から継承します。親がルート・メンバーの場合、デフォルトは+です。年の場合、デフォルトは~(無視)です。	いいえ
属性ディメンション名(このプロパティは疎の「勘定科目」、「エンティティ」またはユーザー定義ディメンションで使用できます)	属性	属性ディメンションで定義された属性の名前: 再度指定されないかぎり、既存の属性バインディングはその後の保存内容で除去されます。指定されたものはバインディングをそのまま残しません。<なし>はメンバーについてすべての既存の属性バインディングを除去します。1つの列ヘッダーはディメンションで定義される各属性ディメンションについて表示します。	なし	いいえ

エンティティ・ディメンション・プロパティ

エンティティ、親、別名： デフォルト、別名： T1、集計に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、基本通貨、プラン・タイプ(*Plan1*)、集約(*Plan1*)、プラン・タイプ、(*Plan2*)、集約(*Plan2*)、プラン・タイプ(*Plan3*)、集約(*Plan3*)、*AttribDim1*、*AttribDim2*

ノート:

- **エンティティ:** エンティティ情報をロード中です。
- **基本通貨:** 複数通貨アプリケーションでのみ表示されます。アプリケーションの定義に従って、ロードされているエンティティの通貨のコードを取得します。
- **プラン・タイプ名および番号**はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 5-5 エンティティ・ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト
エンティティ	メンバー名	テキスト。プランニング・メンバー命名規則に準拠	なし
2パス計算	2パス計算	True、False または整数: 非ゼロが真、ゼロが偽(データ型が動的計算または動的計算および保管の場合にのみ 1 に設定する必要があります)	親から継承
基本通貨	基本通貨	テキスト。アプリケーションによりすでに定義済の通貨名に制限されます	親から継承。メンバーが共有されている場合、デフォルトは基本メンバーの通貨です。メンバーがルート・ディメンションに追加される場合、基本通貨はアプリケーションが作成されたときに定義済のデフォルト通貨です。

期間ディメンション・プロパティ

期間、親、別名： デフォルト、別名： T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、タイプ、開始期間、終了期間、集約(*Plan1*)、集約(*Plan2*)、集約(*Plan3*)

ノート:

- 期間については、親はほとんどの更新操作を指定する必要があります。
- タイプ(「基本」または「ロールアップ」など)は既存のメンバー用に変更できません。ロールアップおよび代替メンバーを追加、更新することはできます。また **BegBalance** および基本期間も更新できます(たとえば、別名に追加するなど)。年合計期間の追加または変更はできません。DTS 期間タイプは認識されますが、アウトライン・ロード・ユーティリティではサポートされません。DTS 情報をロードしようとする場合、ユーティリティはログ・ファイルにエラーを表示します。

- ロールアップ期間タイプについて開始期間と終了期間が有効です。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。
- 期間および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[勘定科目ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

表 5-6 期間ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
期間	メンバー名	テキスト。期間メンバー名についての Planning 制限に準拠。		
タイプ	Planning では表示されません	テキスト: ベース、ロールアップ、年、代替、DTS。ユーティリティでロードできるのはロールアップおよび代替期間のみです。BegBalance および基本期間は変更できません(たとえば、別名に追加するなど)。年合計および DTS 期間のロードおよび変更はできません。	なし	はい
開始期間	テキスト(要約期間にのみ適用可能)	テキスト。アプリケーション用にすでに定義済の期間に制限。	なし	はい
終了期間	テキスト(要約期間にのみ適用可能)	テキスト。アプリケーション用にすでに定義済の期間に制限。	なし	はい

ユーザー定義ディメンション・プロパティ

ユーザー定義ディメンション名、親、別名: デフォルト、別名: T1、集計に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。ユーザー定義および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[勘定科目ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

表 5-7 ユーザー定義ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
ユーザー定義ディメ ンション名	メンバー名	テキスト。プランニ ング・メンバー命名 規則に準拠ディメン ションに追加されて いるユーザー定義メ ンバーの名前です。	なし	はい
親	メンバー名またはル ート・ディメンショ ン名	テキスト。プランニ ング・メンバー命名 規則に準拠	ルート・ディメンシ ョン・メンバー	はい

年ディメンション・プロパティ

年、親、別名： デフォルト、別名： T1、データ・ストレージ、2 パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作

ノート:

- 年のメンバー名は FYnn の形式にする必要があります。
- 既存の最後の年が入力された年よりも前の場合、その間の年も作成されます。たとえば定義された最後の年が FY08 で FY11 を入力した場合、ユーティリティは FY09、FY10 および FY11 を作成します。

表 5-8 年ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
年	年メンバー	FYnn	なし	はい

シナリオ・ディメンション・プロパティ

シナリオ、親、別名： デフォルト、別名： T1、集計に有効、データ・ストレージ、2 パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、開始年、開始期間、終了年、終了期間、為替表、BegBal を含める、承認を使用可能、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

ノート:

- 開始年または終了年として年を選択できません。BegBalance も開始期間または終了期間として選択できません。
- 指定されない場合、開始年、終了年、開始期間、終了期間はデフォルト値に設定されます(アプリケーションの最初と最後の年、アプリケーションの最初と最後の基本期間)。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 5-9 シナリオ・ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
シナリオ	シナリオ名	テキスト	なし	はい
開始年		アプリケーションで 定義された最初の FY 年(位置により決 定)	アプリケーションに おける最初の年	いいえ
開始期間		最初の基本期間(位 置により決定)	アプリケーションに おける最初の基本期 間	いいえ
終了年		アプリケーションで 定義された最後の FY 年(位置により決 定)	アプリケーションに おける終了年	いいえ
終了期間		最後の基本期間(位 置により決定)	アプリケーションに おける最後の基本期 間	いいえ
為替表		アプリケーションで 定義された為替レ ートの名前。	なし	いいえ
BegBal を含む		True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼ ロは偽	False	いいえ
承認を使用可能		True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼ ロは偽	False	いいえ

バージョン・ディメンション・プロパティ

バージョン、親、別名: デフォルト、別名: T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、バージョン・タイプ、承認を使用可能、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 5-10 バージョン・ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
バージョン	バージョン名	テキスト	なし	はい
バージョン・タイプ	バージョン・タイプ	ボトムアップまたは ターゲット	ボトムアップ	いいえ
承認を使用可能	承認対象に使用可能	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼ ロは偽	False	いいえ

通貨ディメンション・プロパティ

通貨、親、別名：デフォルト、別名：T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、記号、スケール、トライアンギュレーション通貨、レポートの通貨、3桁ごとの区切り文字、小数点、負のスタイル、負数の色

通貨記号が指定されていない場合、ロードされている通貨が Oracle Hyperion Planning で定義されている場合にデフォルトで ISO 記号に設定されます。

表 5-11 通貨ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
通貨	通貨名	テキスト	なし	はい
記号	記号	テキスト。Planning 通貨記号命名規則に準拠	ロードされている通貨が Planning で定義されている場合、ISO 記号。ロードされている通貨が Planning で定義されていない場合、通貨名と同じ	いいえ
スケール	スケール	0 から 9 の整数値。0 は 1 に対応、1 は 10 に対応、2 は 100 に対応、など	スケールなし	いいえ
トライアンギュレーション通貨	トライアンギュレーション通貨	アプリケーションで定義された通貨	なし	いいえ
レポート通貨	レポート通貨	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	False	いいえ
3桁ごとの区切り文字	3桁ごとの区切り文字	デフォルト、なし、カンマ、ドット、スペース	なし	いいえ
小数点	小数点	デフォルト、ドット、カンマ	ドット	いいえ
負数のスタイル	負数の符号	デフォルト、接頭辞、接尾辞、括弧	接頭辞	いいえ
負数の色	負数の色	デフォルト、黒、赤	黒	いいえ

属性ディメンション・プロパティ

属性、親、別名：デフォルト、操作

ノート:

- 属性および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[勘定科目ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。
- カスタム属性:** テキスト、数値、ブール、日付属性について属性ディメンションに属性値をロードできます。プロパティを変更して値を指定しない場合、カスタム

属性はアプリケーションで変更されません。カスタム属性を除去するには、<none>を値として指定します。値は文字列として渡されます。

- **更新:** ロードされているメンバーを追加、更新または移動します。
- **レベル 0 の削除:** 子がない場合にロードされているメンバーを削除します。
- **子孫(含む)の削除:** ロードされているメンバーおよび含まれている子孫すべてを削除します。
- **子孫の削除:** ロードされているメンバーの子孫を削除しますが、メンバー自体は削除しません。
メンバーを削除するときに注意を使用します。これによりメンバー、そのデータおよび関連したプランニング・ユニットが削除されます。

表 5-12 属性ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
属性	属性値名	テキスト。プランニ ング・メンバー命名 規則に準拠	なし	はい

UDA ディメンション・プロパティ

ディメンション、UDA、操作

UDA および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[勘定科目ディメンション・プロパティ](#)を参照してください。

表 5-13 UDA ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
ディメンション	UDA が定義されて いる基本ディメンシ ョンの名前	テキスト、UDA が定 義されるディメンシ ョンの名前; UDA は 属性ディメンション については定義でき ません	なし	はい
UDA	定義されている UDA	テキスト。プランニ ング・メンバー命名 規則に準拠	なし	はい

為替レート・ディメンション・プロパティ

表、説明、通貨(先)、通貨(元)、メソッド、履歴、開始残高、年、期間、平均、終了

表 5-14 為替レート・ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
表	fxTblId	為替レート表の名前	なし	はい

表 5-14 (続き) 為替レート・ディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
説明	説明	為替レート表の説明	なし	いいえ
通貨(先)	toCur	換算が適用されるア プリケーションで定 義されている通貨	なし	はい
通貨(元)	fromCur	換算が計算されるア プリケーションで定 義されている通貨	なし	はい
操作	N/A	更新(削除の操作は サポートされていま せん: レベル 0 の削 除、子孫(含む)の削 除、子孫の削除)	update	いいえ
メソッド	method	multiply、divide	multiply	いいえ
履歴	historicalRate	数値	0	いいえ
期首残高	begBalanceRate	数値	0	いいえ
年	yearId	FY08 など、アプリケ ーションで定義され る年	なし	平均または終了が指 定されている場合、 はい
期間	tpId	1月など、アプリケ ーションで定義され ている基本期間	なし	平均または終了が指 定されている場合、 はい
Average	avgVal	数値	なし	いいえ
期末	endVal	数値	なし	いいえ

プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

プライマリ・メンバー、プライマリを使用可能、セカンダリ・ディメンション、セカンダリ親、「相対的な世代」、「自動組込み」、セカンダリ・メンバー、「含む」、「所有者」、「確認者」、通知されるユーザー

表 5-15 プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
プライマリ・メンバー	プライマリ・ディメンション(エンティティ)のメンバー名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「名前」列に対応します。	テキスト	なし	はい
プライマリを使用可能	承認のプライマリ・メンバーを使用可能にします。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「使用可能」列に対応します。	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	なし	いいえ
セカンダリ・ディメンション	プライマリ・メンバーに関連付けるサブ階層ディメンションを指定するディメンション名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「ディメンション」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ
セカンダリ親	「相対的な世代」プロパティを使用してセカンダリ・メンバーを指定した場合に参照されるディメンション・メンバー名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「親メンバー」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ

表 5-15 (続き) プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
相対的な世代	「自動組込み」および「含む」プロパティに応じて承認の対象とするセカンダリ親の子孫を指定する数値範囲。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「相対的な世代」列に対応します。	世代の範囲を指定する整数。 たとえば、1-3 により世代 {1,2,3}、1,3-5 により世代 {1,3,4,5}、0-4,7 により世代 {0,1,2,3,4,7} が指定されます。レベル 0 はセカンダリ親の世代と等価です。レベル 1 はセカンダリ親の直属の子の世代と等価です。その他同様です。	なし	いいえ
自動組込み	「セカンダリ親」および「相対的な世代」プロパティを使用して指定した子孫メンバーを承認対象として使用できるようにします。この設定は、「含む」プロパティを使用してメンバー単位で上書きできます。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「自動組込み」チェック・ボックスに対応します。	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	なし	いいえ

表 5-15 (続き) プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
含む	<p>指定したサブ階層メンバーを承認対象として使用できるようにします。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの最も右の列にあるアイコンをクリックしたときに表示される選択したメンバー・ポップアップ・ウィンドウのチェック・ボックスに対応します。</p>	True、False または 整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	True	いいえ
セカンダリ・メンバー	<p>承認対象として使用できるようになったセカンダリ・ディメンション・メンバー名。「含む」、「所有者」、「確認者」および「通知されるユーザー」プロパティはこのプロパティに依存します。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「名前」列(セカンダリ親が指定されている場所)、および「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「選択したメンバー」列に対応します。</p>	テキスト	なし	所有者、確認者、通知されるユーザーの各列ヘッダーが定義されている場合は、はい

表 5-15 (続き) プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
所有者	指定したメンバーの所有者のユーザー名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「所有者」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ
確認者	指定したメンバーの確認者のカンマ区切りのリスト。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「確認者」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ

ノート:

確認者は、プランニング・ユニットをレビューする順序で指定します。リスト内の最初の確認者が、プランニング・ユニットを処理する最初のユーザーです。最初のユーザーがプランニング・ユニットを移動すると、リスト内の 2 番目のユーザーがプランニング・ユニットの所有者になり、それ以降も、作成した確認者のリストによって順序が決まります。

表 5-15 (続き) プランニング・ユニット階層のディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
通知されるユーザー	指定したメンバーの、通知されるユーザーのカンマ区切りのリスト。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブのユーザーに通知列に対応します。	テキスト	なし	いいえ

スマート・リストのディメンション・プロパティ

スマート・リスト名、操作、ラベル、表示順、Missing ラベル、フォームの設定の使用、エントリ ID、エントリ名、エントリ・ラベル

表 5-16 スマート・リストのディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列 ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
スマート・リスト名	スマート・リストの名前	テキスト。スマート・リスト/列挙の名前	なし	はい
操作	操作	テキスト。 addsmartlist - 新規スマート・リストを作成します; addEntry - スマート・リストにエントリを追加します	なし	はい
ラベル	スマート・リストのラベル・フィールド	テキスト。スマート・リストのフィールド	空	いいえ
表示順	表示順	スマート・リストの表示順の整数またはテキスト値: 0 または ID - エントリ ID の順序; 1 または名前 - エントリ名別の順序; 2 またはラベル - エントリ・ラベル別の順序	ID	いいえ
Missing ラベル	#Missing ドロップ・ダウン・ラベル	テキスト。Missing ドロップ・ダウン・ラベル	LABEL_NONE	いいえ

表 5-16 (続き) スマート・リストのディメンション・プロパティ

ロード・ファイルの列ヘッダー	Oracle Hyperion Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
フォームの設定の使用	#Missing フォーム	TRUE - フォームの設定; FALSE - ドロップ・ダウンの設定	フォーム設定	いいえ
エントリ ID	スマート・リストのエントリ ID	スマート・リストのエントリの ID	デフォルトのエントリ ID	いいえ
エントリ名	エントリ名	N/A	なし	はい
エントリ・ラベル	エントリ・ラベル	N/A	なし	はい

Planning インポートおよびエクスポートの操作

コマンドラインを使用せずにインポートとエクスポートの操作を実行するには、Oracle Hyperion Planning インポートおよびエクスポートを使用します。管理者は、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義ディメンション、属性、UDA、為替レート、スマート・リスト、およびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータを、フラット・ファイルからインポートできます。Planning インポートおよびエクスポートを使用して、メタデータおよびデータをフラット・ファイルにエクスポートすることもできます。

ノート:

Planning インポートおよびエクスポートで、メタデータまたはデータのリレーショナル・インポートまたはエクスポートはサポートされません。リレーショナル・データ・ソースからメタデータまたはデータをインポートまたはエクスポートする場合には、[アウトライン・ロード・ユーティリティの操作](#)を参照してください。

Planning インポートおよびエクスポートの実行

Oracle Hyperion Planning インポートおよびエクスポートを使用してデータまたはメタデータをインポートまたはエクスポートするには:

1. 情報をロードする前にアプリケーションとアプリケーション・データベースをバックアップします。 *Oracle Enterprise Performance Management System* バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。
2. **オプション:** インポートの場合、コマンド・プロパティ・ファイル(.properties)を作成します。 [コマンド・プロパティ・ファイル](#)を参照してください。
3. インポートの場合、ロードする各ディメンションまたはデータ・セットのロード・ファイルを生成します。 [ロード・ファイルの生成](#)を参照してください。
4. Planning アプリケーションにログインします。
5. 「管理」、「インポートおよびエクスポート」の順に選択し、タスクを選択します:
 - フラット・ファイルからメタデータをインポートするには、「ファイルからのメタデータのインポート」を選択します。

オプションの詳細は、[ファイルからのメタデータのインポート](#)を参照してください。

- フラット・ファイルからデータをインポートするには、「[ファイルからのデータのインポート](#)」を選択します。

オプションの詳細は、[ファイルからのデータのインポート](#)を参照してください。

- メタデータをフラット・ファイルにエクスポートする場合は、「[ファイルへのメタデータのエクスポート](#)」を選択します。

オプションの詳細は、[ファイルへのメタデータのエクスポート](#)を参照してください。

- データをフラット・ファイルにエクスポートする場合は、「[ファイルへのデータのエクスポート](#)」を選択します。

オプションの詳細は、[ファイルへのデータのエクスポート](#)を参照してください。

6. 「**実行**」をクリックします。

7. **オプション:** インポートまたはエクスポート中に生成された一時ファイルをすべてクリアします。[EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリのファイルのクリア](#)を参照してください。

データまたはメタデータをインポートする場合、バックグラウンドでインポートを実行することもできます。進行状況バーで「[バックグラウンドで実行](#)」をクリックして、バックグラウンド処理を有効にします。

データのエクスポート時に、データのエクスポート時間が3分を超える場合、次のメッセージが表示され、エクスポートは自動的にバックグラウンドで実行されます:

```
"The export has exceeded the maximum configured wait time and will now be performed in the background. To check export status, open the Import and Export Status page. Note that exported data files should be downloaded and saved because they may be periodically removed from temporary locations on the server."
```

このメッセージが表示されたら、「[ステータスの表示](#)」をクリックするか、「[ツール](#)」、「[インポートとエクスポートのステータス](#)」の順に選択すると、「[ステータス](#)」列に「[処理](#)」ステータスが表示されます。データのエクスポートが完了すると、「[ステータス](#)」列には「[完了](#)」ステータスが表示されます。「[完了](#)」ステータスを選択すると、「[ステータスの表示](#)」ウィンドウが起動し、緑の矢印が表示されます。緑の矢印をクリックして、エクスポートされたファイルを一時的な場所からダウンロードし、永続的な場所に保存します。一時的な場所にファイルがすでに存在しない場合、次のメッセージが表示されます:

```
"The file that you tried to download no longer exists on the server. Export your data again."
```

ノート:

メタデータのエクスポート操作は、バックグラウンドで実行できません。

ファイルからのメタデータのインポート

属性、ユーザー定義ディメンション、スマート・リストまたは為替レートをインポートするには、「ディメンション」ドロップダウンで「**新しいディメンション**」を選択し、「ディメンション・タイプ」でタイプを選択します。

フラット・ファイルからのメタデータのインポートで、次の中からオプションを選択します:

表 5-17 「ファイルからのメタデータのインポート」オプション

オプション	説明
インポートするディメンション	<p>ロードされるディメンション。これに属するメンバー・フィールドがメタデータ・ファイルのヘッダー・レコードに対応します。必要に応じて、インポート時に新しいディメンションを作成できます。</p> <p>ユーザー定義ディメンション(製品など)は、基本ディメンションとともにドロップダウン・リストにリストされます。アプリケーションにユーザー定義ディメンションがあり、そのメタデータをロードする場合、ドロップダウン・リストからユーザー定義ディメンションを選択します。ファイルにユーザー定義ディメンション、たとえば NewProduct などのメタデータが含まれており、これがアプリケーション内にまだ存在していない場合、「新しいディメンション」、「ユーザー定義」の順に選択し、次に「NewProduct」を選択します。Oracle Hyperion Planning インポートおよびエクスポートは、NewProduct ディメンションを作成し、そのメタデータをロードします。</p>
インポートするメタデータ・ファイル	<p>ヘッダー・レコードとメタデータ・レコードを含むメタデータ・ロード入力ファイルを指定します。</p> <p>メタデータのロードを参照してください。</p>
セキュリティ・フィルタの作成	<p>キューブ・リフレッシュを実行する際にセキュリティ・フィルタを作成します。セキュリティ・フィルタをリフレッシュしない場合は、このオプションを選択解除します。(このオプションはユーザーをアプリケーションにプロビジョニングしません。現在存在しているユーザーにセキュリティ・フィルタを作成するのみです。ユーザーは他の方法でアプリケーションにプロビジョニングする可能性があります。)</p>
データベース・リフレッシュ	<p>メタデータのロード後にデータベース・リフレッシュを実行します。</p>

表 5-17 (続き) 「ファイルからのメタデータのインポート」オプション

オプション	説明
すべてのプランニング・ユニットの削除	プランニング・ユニットをすべて削除するか、プランニング・ユニットのメンバーが削除される場合にエラーを表示します。開始されたプランニング・ユニットの削除と、ロード・ファイルで指定されたディメンションのすべてのメンバーの削除を有効にする場合は、このオプションと「インポートする前に、ディメンションからすべてのメンバーを削除してください」オプションをあわせて選択します。
インポートする前に、ディメンションからすべてのメンバーを削除してください	ロードを実行する前にロード・ディメンションのすべてのメンバーを削除します。すべてのプランニング・ユニットの削除も参照してください。ロード・ディメンションのすべてのメンバーを保持する場合は、このオプションをクリアします。
<hr/> <p>ノート: 注意して使用してください。このオプションで、属性バインディングと承認状態が削除されます。</p> <hr/>	
ファイル内に指定されていない場合は親のプラン・タイプを想定	新規メンバーを追加するときに未指定のプラン・タイプ設定を親から継承します。メンバーに対してプラン・タイプ設定の明示的な設定を強制するには、このオプションをクリアします。
ロード前にロード・ディメンションをロック	ロードする前にロード・ディメンションをロックします。ディメンションをロックしない場合は、このオプションをクリアします(ドライ・ランを実行する場合を除いて推奨されません)。
インポート・ファイル内のメンバー順序を使用	UDA を例外として、ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を維持します。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視する場合は、このオプションをクリアします。
インポート・ファイルの親子順序のソート	UDA を例外として親-子の順序で入力レコードに順序を付けます。ロード・ファイルと同じ順序で入力レコードをロードする場合は、このオプションをクリアします。このオプションをクリアすると、高速になりメモリー使用量も少なくなります。

表 5-17 (続き) 「ファイルからのメタデータのインポート」オプション

オプション	説明
ドライ・ラン	<p>データまたはメタデータをロードせずにロード・ファイルを解析することにより「ドライ・ラン」を実行します。データおよびメタデータのロード中にロード・ファイルを解析する場合は、このオプションをクリアします。</p>
<p>ノート: ドライ・ランを実行すると、ロード・ファイルが解析(たとえば、ヘッダー・レコードのチェック、値の数がヘッダー・レコード番号と一致するかどうかのチェック)されますが、ファイルに定義された値の妥当性はチェックされません。</p>	

ファイルからのデータのインポート

データをインポートするには、ロード・ディメンションを「ディメンション」リストで選択する必要があります。

表 5-18 「ファイルからのデータのインポート」のオプション

オプション	説明
データ・インポート・フォーマット	<p>データ・インポート・ファイルのフォーマットを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> Planning-Oracle Hyperion Planning ファイル・フォーマット
	<hr/> <p>ノート:</p> <p>データを Planning フォーマットでファイルにエクスポートする場合、すべてのディメンションが集約ストレージ・アウトラインに存在していれば、メモ帳を使用してファイル内のデータベース名 (ASOCube など) を変更してから、データ・ファイルを集約ストレージ・アウトラインにインポートできます。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> Essbase-Oracle Essbase ファイル・フォーマット。 <p>(オンプレミス製品によりエクスポートされます。) これらのファイルは、セル・リスト・フォーマットまたは列リスト・フォーマットのいずれかでフォーマットできます。セル・リスト・フォーマットは、各レコードに対して単一のセルの値を指定するのに対し、列リスト・フォーマットは、各レコードに対して複数のセルの値を指定します。たとえば、列で時間を指定した場合、その列には、1 月、2 月、3 月など、各レコードに 12 個の値 (各月に 1 つ) が含まれます。反対に、セル・リストでこれに相当するものには、12 個のレコード (各月に 1 つ) が含まれます。Essbase からのファイルのエクスポートの詳細は、オンプレミスの <i>Oracle Essbase Administration Services</i> オンライン・ヘルプを参照してください。</p>
インポートするディメンション	<p>Planning データ・インポート・フォーマットの場合、データのロード先として、メンバー・フィールドがデータ・ファイルのヘッダー・レコードに対応しているディメンションを選択します。このディメンションは、アプリケーションに存在する必要があります。</p>
プラン・タイプ	<p>Essbase データ・インポート・フォーマットの場合、データのインポート先のプラン・タイプを選択します。</p>
インポートするデータ・ファイル	<p>ヘッダー・レコードとデータ・レコードを含むデータ・ロード入力ファイルを指定します。</p>

表 5-18 (続き) 「ファイルからのデータのインポート」のオプション

オプション	説明
ドライバ・メンバーの指定	Planning データ・インポート・フォーマットの場合、インポート・ディメンションに指定されているドライバ・メンバーを入力します。このフィールドを空のままにして、「 データ・ロード管理 」ウィンドウでインポート・メンバーおよびドライバ・メンバーを指定した場合、これらの設定がインポートに使用されません。反対に、ここで入力した値は、「 データ・ロード管理 」ウィンドウの値を上書きします。
日付フォーマット	インポートの日付フォーマットを次の中から選択します: <ul style="list-style-type: none"> ・ MM-DD-YYYY ・ DD-MM-YYYY ・ YYYY-MM-DD
Essbase データのクリア	インポートを実行する前に、Essbase ブロックをクリアします。 例: <pre>e2, IDescendants(Account_Total), "FY13, Current, BU Version_1, Jan, Local", Plan1</pre>
	<p>ノート:</p> <p>データ値がセル内に存在し、インポートされたデータにそのセルの値がない場合、既存のデータは上書きされません。既存データを #missing 値で上書きするには、先にデータ・ブロックをクリアし(すべてのセルが #missing となります)、データをこれらのセルにインポートする必要があります。</p>

ファイルへのメタデータのエクスポート

ファイルへのメタデータのエクスポートで、次の中からオプションを選択します:

表 5-19 ファイルへのメタデータのエクスポートのオプション

オプション	説明
ディメンション	エクスポートするディメンション

「実行」をクリックすると、ブラウザにより、ファイルを開くかファイルをローカル・コンピュータに保存するよう求められます。

ファイルへのデータのエクスポート

エクスポートされるデータを含むフォームを記述します。フォームの設計中に入力されたプラン・タイプ、行、列および POV メンバーの情報を入力する必要があります。

「データのファイルへのエクスポート」ウィンドウでカンマ文字を使用してメンバー名を入力する際、二重引用符を使用してメンバー名を囲みます。複数のメンバー・リスト内の各メンバーを、それぞれの二重引用符のセット内に配置する必要があります。

例:

```
"e2,""e,2""
"Jan,""Feb,2"" ,Mar"
"FY13,Current,""a,1A"" ,Local, BU Version_1"
```

ファイルへのデータのエクスポートで、次の中からオプションを選択します:

表 5-20 ファイルへのデータのエクスポートのオプション

オプション	説明
プラン・タイプ	フォームの設計中に入力されたプラン・タイプ
行メンバー	フォームの設計中に入力された行情報 例: Idescendants(Ent_Total)
列メンバー	フォームの設計中に入力された列情報 例: Idescendants(YearTotal)
POV メンバー	ページ・ディメンションおよびメンバー情報 例: FY13,Current, BU Version_1,account1,Local

EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリのファイルのクリア

インポートまたはエクスポートが発生するたび、Oracle Hyperion Planning によって EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリに一時ファイルが作成されます。これらのファイルは削除されないため時間とともに増え、パフォーマンスに影響を与えます。EPM Oracle インスタンスの tmp ディレクトリを定期的にクリアすることをお勧めします。

EPM Oracle インスタンスの詳細は、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする

パラメータを指定し、データを直接 Oracle Essbase データベースに直接ロードできるようにします。必要に応じて、ドライバ・ディメンションの一意の識別子に基づいて親ディメンション・メンバーの子メンバーに詳細をロードする場合、拡張設定を使用できます。

たとえば、開始日、職階、給与基準および支払タイプとともに勘定科目データを従業員ディメンション・メンバーにロードできます。人事データには新規従業員と既存の従業員のプレースホルダが含まれているため、次のような拡張設定も設定できます:

- データ・ロード・ディメンションの親: 新規従業員、既存の従業員

- 新規従業員の一意の識別子: 開始日、職階
- 既存の従業員の一意的識別子: 給与基準、支払タイプ

データ・ロード時に、新規従業員と既存の従業員の子メンバーにデータ更新がないかどうか評価されます。一意の識別子である開始日、職階、給与基準および支払タイプにより、既存のデータ・ロード・ディメンション値が更新されるか、新規値が追加されるかが判別されます。つまり、一意の識別子のデータ値が同じ場合はデータが更新され、データ値が異なる場合は次に使用可能な子メンバーが使用されます。

データをロードするためのパラメータを指定するには:

1. 「管理」、「データ・ロードの設定」を選択します。
2. 「データ・ロード・ディメンション」で、アプリケーション用にデータがロードされるディメンション(従業員など)を選択します。
ディメンションはロードされる情報に対応します。
3. 「ドライバ・ディメンション」で、 をクリックし、データのロード先のディメンションを選択します。
たとえば、データを従業員にロードする場合、ドライバ・ディメンションには勘定科目を使用できます。
4. ドライバ・ディメンションのメンバーを選択します。
たとえば、ドライバ・ディメンションが勘定科目である場合、ドライバ・ディメンション・メンバーには開始日、等級、職階、給与基準および支払タイプを組み込むことができます。
5. オプション: 拡張設定を使用するには、これらのステップを完了します。
 - a. 「データ・ロード・ディメンションの親」の上にある  をクリックし、行を追加します。
 - b. 新規フィールドの右側で、 をクリックし、親メンバーを選択します。
メンバーの選択の詳細は、[メンバー・セレクタの使用](#)を参照してください。
 - c. 親メンバーの右側にある「ドライバ・ディメンションの一意的識別子」の下で、1つ以上のメンバーを一意的識別子として選択します。(このフィールドで選択したメンバーは、ページの上にある選択済ドライバ・ディメンション・メンバーのリストに追加されます。)

各親メンバーには、少なくとも1つの一意の識別子メンバーを含める必要があります。これらの識別子メンバーにより、既存のデータ・ロード・ディメンション値が更新されるか、新規値が追加されるかが判別されます。
 - d. 必要に応じて、ステップ 5.a からステップ 5.c を繰り返し、続けて行を追加します。
 - e. 行を複製または削除するには、行の左側にあるチェック・ボックスを選択し、 または  をクリックします。一度に複製できるのは1つの選択行のみです。
6. 「保存」をクリックします。

Administration Services からロード

Oracle Essbase Administration Services からロードするには:

1. Administration Services Console を開きます。
2. サーバーに接続しユーザー名およびパスワードを入力する手順は、Oracle Essbase ドキュメンテーションを参照してください。
3. Administration Services Console を最小化します。
4. Windows NT Explorer の(「スタート」を開き、「プログラム」から **Windows NT Explorer**)を開きます。
5. ロードするデータ・ファイルを含むディレクトリを閲覧します。
6. ロードするテキスト・ファイルを選択し、画面の下部にある Windows タスクバーの「Administration Services Console」にドラッグします。
7. マウスをホールドしたまま Administration Services Console ウィンドウにファイルをドラッグし、マウスを放します。
8. データ・ファイルをロードするアプリケーションを選択するための手順については、Essbase ドキュメンテーションを参照してください。
9. データ・ファイルをロードするデータベースを選択します。

データをロードする Oracle Hyperion Planning アプリケーションでプラン・タイプに対応するデータベースを選択します。

ファイルの例

この例では、実績シナリオと最終バージョンにおける欧州エンティティと Gross Sales 勘定科目の 2008 年第 1 四半期に対するデータ値をロードします。

欧州	総売上	実績	最終	1 月	2008	150
欧州	総売上	実績	最終	2 月	2008	110
欧州	総売上	実績	最終	3 月	2008	200

ディメンションがすべての行に同じ値を使用する場合は、次の例のようにページ・ディメンションとしてヘッダーに値を設定します。

実績	最終					
欧州	総売上	1 月	2008	150		
アジア	純益	2 月	2008	150		
欧州	純益	2 月	2008	110		
アジア	総売上	1 月	2008	200		

フォームの管理

次も参照:

[フォームについて](#)

[単一のフォームの作成](#)

[複合フォームの作成](#)

[特定のタイプのフォームの設計](#)

[フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作](#)

フォームについて

フォームはデータ入力用のグリッドです。ユーザーのニーズを満たす単一のフォームまたは複合フォームを作成できます。複合フォームは単一のフォームで構成されるため、複合フォームを作成する前に単一のフォームを作成する必要があります。

フォーム・コンポーネント

視点

ページ、行および列のコンテキストを決定するため、視点についてメンバーを選択します。たとえば、「シナリオ」ディメンションが視点で「予算」に設定されている場合、ページ、行、列で入力されたすべてのデータは「予算」シナリオに入ります。各視点ディメンションについて、1つのメンバーに視点が設定され、ユーザーはこれを変更できません。

フォームを簡単にするには、視点で関係のあるメンバーのみを指定するか、ユーザー変数を含めます。[単一のフォーム・ページと視点の定義](#)および[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

ページ軸

ページ軸を使用し、ユーザーがより小さな論理的なビューでデータを操作できるように、様々なディメンションにわたるメンバーの組合せを指定します。ページ軸の各アイテムは1つまたは複数のディメンションから選択されたメンバーを持つことができます。ユーザーはアクセスできるメンバーのみを見ます。

複数のページのドロップダウン・リストを指定し、関係機能または属性を使用してメンバーを選択できます。ページ軸から選択して、メンバー・セット間で切り替えます。

メンバー名または別名をページ軸で表示します。データ入力ページで検索ドロップダウン・リストを使用可能にするページ・ディメンションでメンバーの数を指定できます。ディメンションに多くのメンバーが含まれている場合に役に立ちます。[単一のフォーム・ページと視点の定義](#)を参照してください。

行と列

行と列は、ユーザーがデータを入力するグリッドを定義します。たとえば、売上個数を行軸に割り当て、1月を列軸に割り当てることができます。ユーザーがフォームにアクセスすると、売上個数の行が1月の列と交差しているセルにデータを入力できます。

デフォルトでは、フォームに1セットの行と列があります。行と列を追加し、メンバーの非対照的な組合せを作成できます。[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。

フォームの設計に関する考慮事項

フォームとプラン・タイプ

フォームを作成する際、プラン・タイプにフォームを関連付けます。これによりフォームの有効なメンバーが決まります。たとえば、フォームを「収益」プラン・タイプに割り当てると、「収益」プラン・タイプで有効な勘定科目のみを追加できます。入力されたデータは選択されたプラン・タイプのデータベースに保存されます。割り当てた後は、フォームのプラン・タイプを変更することはできません。

ソース・プラン・タイプがフォームのプラン・タイプに一致する場合、フォームの勘定科目を編集できます。勘定科目のソース・プラン・タイプ以外のプラン・タイプについてフォームに勘定科目を追加する場合、勘定科目はそのフォームでは読取り専用となります。

フォームおよびアクセス権限

フォームへのアクセスを割り当てることで、どのユーザーが設計(たとえば、そのレイアウトと手順)および入力データを変更できるかを制御します。ユーザーは読取りまたは書込みアクセス権を有しているメンバーのみ選択できます。ユーザーがフォームを編集できるのは、安全な各ディメンションのメンバーに少なくとも1つアクセスできる場合のみです。たとえば、ユーザーが欧州エンティティへの読取り専用のアクセス権を有している場合、欧州を含んでいるフォームの行と列は読取り専用として表示されます。ユーザーは書込みアクセス権を有しているメンバーのデータのみ変更できます。

フォームと通貨

単一通貨のアプリケーションでは、すべてのエンティティではアプリケーションの作成時に選択された通貨が使用されます。複数通貨のアプリケーションでは、フォームで選択された通貨メンバーによって、値が表示される通貨が判別されます。通貨メンバー「ローカル」が行または列に選択されると、その行または列について通貨換算は生じず、ユーザーはそのネイティブの通貨でエンティティのデータを入力できます。ローカル以外の通貨メンバーが選択されている場合、データ値はその行または列で選択された通貨に換算され、フォームは読取り専用の表示となります。データは「通貨」または「ローカル」を選択したメンバーとして持つ行または列に入力できます。[複数通貨のフォームの設計](#)を参照してください。

フォームとバージョン

ボトムアップ・バージョンでは、レベル0メンバーを持つ行および列でデータ入力が可能です。親メンバーに設定された行または列は読取り専用となります。ボトムアップ・バージョンでデータ・エントリを許可するには、さらに視点をレベル0メンバーに設定する必要があります。ターゲット・バージョンにより親および子のメンバーでデータ・エントリを許可できます。

フォームと属性

共有された属性を選択し、メンバーを選択できます。たとえば、南の属性を選択し、南の属性を持つメンバーを含めることができます。値を入力し、属性を使用する行と列に保存できます。

フォームと共有メンバー

共有されたメンバーを個別には選択できません。そのかわりに、関係機能を使用してメンバーを選択します。たとえば、代替の機能ロールアップを選択し、そのロールアップの下にすべてのメンバーを入力できます。共有されたメンバーを表示する行と列に値を入力し、データベースの基本メンバーに保存できます。共有されたメンバーはフォームで同じ内容を基本メンバーとして表示します。

フォームと計算

計算を最適化するには、個別に子を選択するかわりに、関係(「子孫」や「子」など)を使用して行メンバーを選択します。個別に選択された子の親について合計を計算するには、階層レベルの数に応じて、複数のパスが必要です。

単一のフォームの作成

表 6-1 単一のフォームの作成のチェックリスト

タスク	詳細を知るには
次のようなフォームのレイアウトを設定します: <ul style="list-style-type: none"> ・ フォームの行と列の追加 ・ 列と行へのディメンションの割当て ・ ユーザーが操作するディメンション・メンバーの選択 ・ フォームのグリッド・プロパティの設定 ・ ディメンション・プロパティの設定 ・ 式の行と列の追加 ・ フォームの表示プロパティの設定 ・ フォームの印刷オプションの設定 ・ フォームの検証ルールの追加および更新 	フォーム・レイアウトの設定 を参照してください。
ページ軸および視点の定義	単一のフォーム・ページと視点の定義 を参照してください。
メンバーの選択	メンバー・セレクトタの使用 を参照してください。
フォーム精度、コンテキスト・メニューの関連付け、および動的ユーザー変数を有効にするかどうかの設定	フォームの精度およびその他オプションの設定 を参照してください。
ビジネス・ルールの選択およびプロパティの設定	ビジネス・ルールの使用 を参照してください。
アクセス権限の定義	アクセス権限の設定 を参照してください。
式の行と列の設計	式の行と列を使用したフォームの設計 を参照してください。

表 6-1 (続き) 単一のフォームの作成のチェックリスト

タスク	詳細を知るには
データ検証ルール設計	データ検証を使用したフォームの設計 を参照してください。

単一のフォームを作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
2. 「アクション」をクリックし、「単一のフォームの作成」を選択します。
3. 「プロパティ」タブに、フォームの名前を 80 文字まで、オプションの説明を 255 文字まで指定します。
4. フォームに関連付ける「プラン・タイプ」を選択します。[フォームとプラン・タイプ](#)を参照してください。
5. オプション: フォームの操作方法を指定します。
6. 「次」をクリックして、フォームのレイアウトを指定します。[フォーム・レイアウトの設定](#)を参照してください。

複数の単一のフォームが同時に表示されるフォームである複合フォームを作成することもできます。[複合フォームの作成](#)を参照してください。

フォーム・レイアウトの設定

フォームを作成する場合、「レイアウト」タブには最初、1つの行と1つの列が含まれ、すべてのディメンションは視点内にあります。フォームを作成または編集する場合、必要に応じて、行および列をフォームに追加できます。

行と列のレイアウトを設定する場合:

- 行と列の軸に少なくとも1つのディメンションを割り当てます。
- 複数の軸で同じディメンションは選択できません。(視点でユーザー変数を設定すると、複数の軸でディメンションを選択できるようになります。)
- 軸のディメンションを別の軸に移動するには、軸のディメンションを選択し、ターゲット軸にドラッグします。
- 表示プロパティの選択

フォーム・レイアウトを設定または更新するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. オプション:  をクリックしてディメンションを選択し、それを「行」または「列」、あるいは行または列内にドラッグします。

ノート:

当初、すべてのディメンションはフォーム視点内にあります。ディメンションは視点から行、列またはページにドラッグできます。また、グリッド内の任意の領域(行、列、視点またはページ)から他の任意の領域にドラッグすることもできます。

3. **オプション:**別のディメンションを選択し、「行」または「列」、あるいは行または列にドラッグします。
4. 各ディメンションのメンバーを選択します。
[メンバー・セレクタの使用](#)を参照してください。
5. **オプション:**行または列内のディメンションの順序を変更するには、をクリックし、「ディメンションを上に移動」または「ディメンションを下に移動」を選択します。
6. 次の表の情報を使用して、行ヘッダー(1 または 2 など)を選択して行プロパティを設定したり、列ヘッダー(A または B など)を選択して列プロパティを設定します(オプションは、「セグメント・プロパティ」の真下にリストされます)。

表 6-2 セグメント・プロパティ

オプション	説明
すべての行に適用	設定をすべての行に適用します。2 つ以上の行がある場合に使用できます。行ごとに異なるプロパティを設定する場合は、このオプションをクリアします。
すべての列に適用	設定をすべての列に適用します。2 つ以上の列がある場合に使用できます。列ごとに異なるプロパティを設定する場合は、このオプションをクリアします。
非表示	フォーム上の列または行を非表示にします
読取り専用	古い読取り専用のデータと新しい編集可能なデータの比較ができるように、読取り専用の行または列を作成します
区切り線の表示	セグメントが目視で区別できるように太い枠線を作成します
階層の抑制	インデントを抑制します。
欠落データの抑制	データがない行または列を非表示にします。クリアすると、データが欠落しているセルには「#MISSING」が付いた行または列が表示されます。

表 6-2 (続き) セグメント・プロパティ

オプション	説明
列幅	<ul style="list-style-type: none"> ・ デフォルト: グリッド・レベルで定義された列幅を使用します(「グリッドのプロパティ」の下) ・ 小: 小数点以下 7 桁を表示します。 ・ 中: 小数点以下 10 桁を表示します。 ・ 大: 小数点以下 13 桁を表示します。 ・ 適合するようサイズ調整: 一番上のデータ・セル値に基づいて、表示される空間にすべての列を強制的に合せます。 ・ カスタム: 小数点以下 13 桁から 999 桁を表示するカスタム・サイズを選択します。
行の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・ デフォルト: グリッド・レベルで定義された行の高さを使用します(「グリッドのプロパティ」の下)。 ・ 中: 標準の行の高さを表示します。 ・ 適合するようサイズ調整: すべての行を表示された空間に合せます ・ カスタム: 行の高さのカスタム・サイズをピクセルで選択します。

7. **オプション:** 式の行または列を追加します。 [式の行と列の追加](#)を参照してください。
8. **オプション:** データ検証ルールを追加または更新します。 [フォームへのデータ検証ルールの組み込み](#)を参照してください。

フォーム・グリッド・プロパティの設定

フォーム・グリッド・プロパティにより、一般的なフォームの行および列の表示を設定します。

フォーム・グリッド・プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「**レイアウト**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「**グリッドのプロパティ**」で、次の表の情報を使用して一般的な行および列プロパティを設定します。

表 6-3 フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
欠落ブロックの抑制	<p>(行のみ)90%以上など多くの行を抑制するときに、「欠落データの抑制」設定のパフォーマンスを向上します。抑制された行がわずかまたは存在しない場合、「欠落ブロックの抑制」設定によりパフォーマンスが低下する可能性があります。この設定を使用する前後でフォームをテストし、パフォーマンスが向上するかどうかを判定します。さらにアプリケーションに大幅な変更を行うときはいつでもフォームをテストします。</p> <p>この設定を選択すると、属性はフォームに表示されず、抑制された特定のブロックは動的計算メンバーを無視する場合があります。また、行メンバーはインデントして表示されません。</p>
欠落データの抑制	<p>データがない行または列を非表示にします。クリアすると、データが欠落しているセルには「#MISSING」が付いた行または列が表示されます。</p>
無効なデータの抑制	<p>無効なデータを含む行または列を非表示にします。クリアすると、無効なデータのあるセルを含む行または列が表示されます。無効なデータを含むセルは読取り専用です。</p>
デフォルトの行の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中 ・ 適合するようサイズ調整: すべての行を表示された空間に合せます ・ カスタム: 行の高さのカスタム・サイズをピクセルで選択します。
デフォルトの列の幅	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小: 小数点以下 7 桁を表示 ・ 中: 小数点以下 10 桁を表示 ・ 大: 小数点以下 13 桁を表示 ・ 適合するようサイズ調整: 一番上のデータ・セル値に基づいて、表示される空間にすべての列を強制的に合せます。 ・ カスタム: 小数点以下 13 桁から 999 桁を表示するカスタム・サイズを選択します

表 6-3 (続き) フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
自動保存の使用可能	<p>このオプションを選択すると、単一のフォームで次の影響があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プランナがセルの外に移動すると、プロンプトまたはメッセージが表示されることなく変更が自動的に保存されます。セルの値はその親に集約され、影響を受けたセルは緑の背景で表示されます。 ・ プランナは、[Ctrl]を押しながら[Z]を押すことでアクションを連続的に元に戻せます。 <hr/> <p>ノート: 自動保存のパフォーマンスを最適化するには、行と列に密ディメンションのみ必要です。ただし、行または列に疎ディメンションを置く必要がある場合は、ブロック・ストレージ・データベースの自動保存のパフォーマンスを向上させるために、Oracle Essbase の構成設定 ASODYNAMICAGGINBSO でハイブリッド集計を有効にします。</p>
自動保存時にフォーム・ルールを実行	<p>自動保存の有効化を選択した場合、このオプションは使用可能になります。自動保存時にフォーム・ルールを実行を選択した場合、変更および保存されたセルの値(たとえば集約された親の値のパーセンテージを計算するメンバー式を持つ行)に依存して動的に計算されるセルも更新され、緑の背景で表示されます。</p>

3. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

ディメンション・プロパティの設定

フォームのディメンション表示プロパティを設定および編集できます。このプロパティには、フォームにメンバー名または別名を表示するかどうか、行または列を非表示にするかどうか、およびユーザーにメンバー式の表示を許可するかどうかが含まれます。これらのプロパティは、行、列、ページおよび視点ディメンションに適用されます。

ディメンション・プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 視点、ページ、行または列をクリックして、ディメンション・プロパティを設定します。
3. 「ディメンション・プロパティ」を選択します:

表 6-4 ディメンション・プロパティ

プロパティ	説明
すべての行ディメンションに適用	すべての行ディメンションにプロパティを適用します
すべての列ディメンションに適用	すべての列ディメンションにプロパティを適用します
すべてのページ・ディメンションに適用	すべてのページ・ディメンションにプロパティを適用します
すべての POV ディメンションに適用	すべての視点ディメンションにプロパティを適用します
メンバー名	メンバー名を表示します
別名	メンバーの別名を表示します
メンバー式	メンバー式を表示します
ディメンションの非表示	ディメンションを非表示にします
集計演算子を表示	集計演算子を表示します
展開開始	行または列でのディメンションにのみ使用でき、このオプションを最初に選択すると、展開されたディメンション・メンバー・リストが表示されます。
カスタム属性の使用可能	行または列でのディメンションにのみ使用でき、カスタム属性を使用可能にします。

4. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

表示プロパティの設定

「レイアウト」タブで、フォームの非表示や欠落値を空白で表示など、フォーム表示のオプションを設定および編集できます。

勘定科目レベルの注釈を使用可能にもできます。ユーザーは、勘定科目、エンティティ、シナリオおよびバージョン番号への書込み権限がある場合に、フォームの勘定科目に注釈を追加できます。勘定科目レベルの注釈は、シナリオ、バージョンおよびエンティティ・ディメンションの様々な組合せに応じて異なる場合があります。

ノート:

- 「勘定科目」ディメンションは、行軸に割り当てる必要があります。
- 「勘定科目」、「エンティティ」、「バージョン」、「シナリオ」のディメンションは、列軸に割り当てることはできません。
- 「エンティティ」ディメンションは、行、ページまたは視点軸に割り当てることができます。
- 「バージョン」と「シナリオ」ディメンションは、ページまたは視点軸に割り当てる必要があります。

表示プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。

2. 「表示プロパティ」を選択し、フォームのオプションを選択します。

表 6-5 表示プロパティ

オプション	説明
フォームを読取り専用にする	複合フォームについては、このオプションを設定できません。
フォームの非表示	たとえば、複合フォームの一部であるフォームまたはメニューやタスク・リストからアクセスできるフォームを非表示にします。
欠落値を空白で表示	データが存在しないフォーム・セルを空白のままにします。このオプションを選択しない場合、空のセルでは「#MISSING」のテキストが表示されます。
勘定科目注釈の使用可能	このオプションは、勘定科目ディメンションが行にある場合のみ使用可能です。 勘定科目注釈の使用の詳細は、 <i>Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド</i> を参照してください。
1つのエンティティに複数通貨を許可	アプリケーションが複数の通貨をサポートする場合、基本通貨に関係なく、エンティティが複数の通貨をサポートするのを許可します。ユーザーはフォームで表示するセル値の通貨を選択できます。
一括割当ての使用可能	このオプションを使用するには、ユーザーが「一括割当て」役割を持っている必要があります。 一括割当ての使用の詳細は、 <i>Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド</i> を参照してください。
グリッド分散の使用可能	グリッド分散の使用の詳細は、 <i>Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド</i> を参照してください。
セル・レベルのドキュメントの使用可能	(デフォルト)アクセス権限に応じて、ユーザーがフォームのセルでドキュメントを追加、編集、表示できるようにします。フォームでドキュメントをユーザーが使用するのを防ぐには、このオプションをクリアします。 セル・ドキュメントを使用するには、 <i>Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド</i> の アクセス権限の設定 を参照してください。
データのないフォームのメッセージ	使用可能な行のない問合せのためにフォーム行で表示するテキストを入力します。デフォルトのテキスト「このフォームに有効なデータの行がありません。」を表示するよう、空白を残します。

3. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

印刷オプションの設定

「レイアウト」タブで、フォーム情報を印刷する際のプリファレンスを設定および編集できます。

印刷オプションを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「印刷オプション」を選択し、フォーム情報を印刷する際のプリファレンスを設定します。

表 6-6 印刷オプション

オプション	説明
サポート詳細を含める	PDF ファイルにサポート詳細を追加行として含めます。表示フォーマットを指定します。 標準順序: 関連付けられたメンバーの後に、「サポート詳細」ページと同じ順序でサポート詳細を印刷します。 逆順: 関連付けられたメンバーの前で、サポート詳細を逆の順序で印刷します。子に関するサポート詳細は親の上に表示され、兄弟の順序が保たれます
コメントの表示	セルに関連付けられたテキスト・ノートを表示します
データのフォーマット	フォームから表示済のデータに数のフォーマット設定を適用します
属性メンバーの表示	フォームで属性メンバーを選択した場合、PDF ファイルで表示します
精度の適用	フォームの精度設定(必要な小数点以下の桁数)を PDF ファイルで表示されたデータに適用します
通貨コードの表示	フォームが複数の通貨をサポートしている場合、フォームおよび PDF ファイルに通貨コードが表示されます。通貨コードが表示されるかどうかは、通貨コードがフォームの任意のメンバーに存在するかどうかによって決まります。 通貨コードがフォームに含まれる任意のメンバーに存在する場合、このチェック・ボックスの選択に関係なく、フォームに通貨コードが表示されます。通貨コードがフォームのメンバーに存在しない場合、通貨コードは表示されません。
勘定科目注釈の表示	勘定科目注釈がフォームで使用可能になっている場合、PDF ファイルで勘定科目注釈を表示する選択をします

さらに、[レポートのカスタマイズ](#)で説明されているように、フォームについてもレポートを作成できます。

3. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

フォームへのデータ検証ルールの組み込み

「レイアウト」タブで、検証ルールをグリッド、列、行またはセルに対して追加および更新できます。ルールを処理することで、セルの色の変更、データ入力時の検証メッセージの表示、プランニング・ユニットの移動パスの変更ができます。検証ルールはフォームとともに保存されます。

データ検証ルールを追加する前に、ルールが実行する関数について検討し、ルールの範囲をプランすることが重要です。検証ルールのプランニングおよび実装に関する詳細とベスト・プラクティスは、[データ検証の管理](#)を参照してください。

フォームにデータ検証ルールを組み込むには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「検証ルール」を選択してから、次のオプションを選択します。

ノート:

表示されるメニュー・オプションはコンテキスト依存であり、ルールがすでに追加されているかどうか、および前にメニュー・オプションを選択しているかどうかによって異なります。たとえば、ルールが含まれるセルを右クリックして「[検証ルールのコピー](#)」を選択した場合、別のセルを右クリックすると、「[検証ルールの貼付け](#)」メニュー・オプションが表示されます。

表 6-7 「検証ルール」のオプション

オプション	説明
検証ルールの追加/編集	「 データ検証ルール・ビルダー 」ダイアログ・ボックスの条件ビルダー領域で既存のルールを追加または編集します。
検証ルールのコピー	貼り付けるために選択したルールを新しい場所にコピーします。
検証ルールの貼付け	すでにコピーしたルールを新しい場所に貼り付けます。
このフォームへのアクセス権を持つユーザーについてのみ検証	現在ログインしているユーザーがフォームへのアクセス権を持たない場合は、プランニング・ユニットの検証時に、フォームに関連する検証を実行しません。
既存のブロックがあるページについてのみ検証	有効化されている場合、Oracle Hyperion Planningにより潜在的ブロックが含まれるページの組合せが自動的に検出され、そのページの組合せに対してのみ検証が実行されます。これにはいくつかの例外があります。ページの組合せに動的計算、動的計算および保管、ラベルのみ、または子メンバーが1つ含まれる保管が含まれる場合、そのページは常にロードされます。

表 6-7 (続き) 「検証ルール」のオプション

オプション	説明
ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページについてのみ検証	有効化されている場合、管理者ではなく現在ログインしているユーザーとして検証が行われ、フォーム・メンバーにはユーザーのセキュリティが適用されます。

3. データ検証ルールの作成および更新の説明に従って、ルールを作成して検証します。
4. フォームで、フォームの構築を続行するため「次」をクリックしてから、フォームを検証および保存します。

フォームの精度およびその他オプションの設定

「その他オプション」で、データ精度を設定し、コンテキスト・メニューをフォームに関連付け、動的ユーザー変数を有効にします。

様々な勘定科目タイプについて最小値と最大値を適用し、データ精度を制御します。たとえば、長い数の小数部の桁を切り捨てることができます。

フォームの精度およびその他オプションを設定するには:

1. フォームを開き「その他オプション」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「精度」で、「通貨の値」、「通貨以外の値」および「パーセンテージ値」について、セルに表示される小数部の桁数を設定するオプションを選択します。

短い小数部を持つ数にゼロを追加するには、「最小」に値を指定します。長い数の小数部を切り捨てるには、「最大」に値を指定します。例:

表 6-8 データ精度の例

値	最小精度	最大精度	表示される値
100	0	任意	100
100	3	3以上の任意の数値か、なし	100.000
100.12345	5以下の任意の数値	なし	100.12345
100.12345	7	なし	100.1234500
100.12345	3以下の任意の数値	3	100.123
100.12345	0	0	100
100.12345	2	4	100.1234
100	2	4	100.00

ノート:

- デフォルトで、ここで選択した精度設定は、通貨メンバーの精度設定を上書きします([通貨の作成](#)を参照)。通貨メンバーの精度設定をフォームより優先したい場合は、「通貨メンバーの精度設定の使用」を選択します。

- 精度設定は値の表示にのみ影響し、より正確である保管された値には影響しません。たとえば、**最小精度**を2に設定し、**Oracle Hyperion Planning**でQ1からの値100が1、2、3月に分散された場合、選択されていない月セルには33.33と表示されます。選択されたセルには、より正確な値(たとえば33.33333333333333)が表示されます。保管された値の小数点以下の桁数は有限なため、1、2、3月の値がQ1に集約されると、33.33333333333333に3がかけられて、Q1をクリックすると、Q1の値に99.9999999999998が表示されます。
3. 「コンテキスト・メニュー」で、「使用可能なメニュー」からメニューを選択して「選択したメニュー」に移動し、メニューをフォームに関連付けます:
 -  選択した内容を移動します
 -  すべて移動します
 -  選択した内容を削除します
 -  すべて削除します
 4. 複数のメニューを選択した場合、表示する順序を設定するには、次のオプションのいずれかをクリックします:
 -  選択した内容を順序の一番上に移動します
 -  選択した内容を順序内で1つ上に移動します
 -  選択した内容を順序内で1つ下に移動します
 -  選択した内容を順序の一番下に移動します

複数のメニューは、間に区切りが配置され順番に表示されます。
 5. 「動的ユーザー変数の使用可能」を選択して、フォームの動的ユーザー変数を許可します(*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*を参照)。
 6. 「保存」をクリックします。

非対称の行と列の作成

非対称の行と列には、同じディメンションで選択されたが異なっているメンバー・セットが含まれます。例:

行/列 A: シナリオ = Actual、期間 = Q1

行/列 B: シナリオ = Budget、期間 = Q2, Q3, Q4

非対称の行と列を作成するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2.  をクリックし、変更するディメンションを選択します。
3. ディメンション名の右側にある  をクリックし、このディメンションに選択したメンバーを変更します。[メンバー・セクタの使用](#)を参照してください。

4. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

式の行と列の追加

式の行には、フォームの行に適用される式が含まれます。式の列には、フォームの列に適用される式が含まれます。たとえば、1月の売上(列 A)と2月の売上(列 B)のパーセンテージ差異を計算する式の列(列 D)を作成できます。式の行または列に定義された式は、行または列のすべてのディメンションに適用されます。既存の式をフォームに定義する、または割り当てる場合は、「レイアウト」タブで適切な行または列を選択し、「セグメント・プロパティ」の下の式作成オプションを表示します(式の作成を参照してください)。

ヒント:

空白行を作成するには、他の2つの行間に式の行を追加することを考慮します。空白行は、フォーム内で合計と小計を視覚的に区別する際に役に立ちます。

式の行と列を追加するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。
2. 「レイアウト」タブで、「行」または「列」を右クリックします。
3. 「式の行の追加」または「式の列の追加」を選択します。
4. 行または列で表示される新しい「式ラベル」をクリックし、式の名前を入力します。
5. 行または列の番号をクリックし、右側の「セグメント・プロパティ」ペインに表示される次のいずれかを指定します。
 - 「非表示」では、行または列が非表示になります
 - 「区切り線の表示」では、行または列の区切り記号が表示されます
 - 「フォームの式を表示」を選択すると、行または列ヘッダーで  をクリックしたときに、フォームに式が表示されます。
6. 右側のペインにある「式のデータ型」のディメンションごとに、式の結果のデータ型を選択します。

データ型は、次のとおりです:

- 通貨
- 通貨以外
- パーセンテージ
- スマートリスト
「スマートリスト」を選択する場合、データ型の横にあるドロップダウン・リストから「スマート・リスト」を選択します。
- 日付

- テキスト
7. 「式」フィールドに式の名前を入力して、行または列に使用する式を定義し、 をクリックします。[式の編集](#)を参照してください。
 8. 式にエラーがないことを確認するには、「検証」をクリックします。
 9. 「OK」をクリックして式を保存し、「式」ウィンドウを閉じます。

単一のフォーム・ページと視点の定義

ページ軸と視点についてディメンションとメンバーを選択できます。視点ディメンションおよびメンバーは、フォーム・プラン・タイプに対して有効で、かつページ、列または行軸に割り当てられていない必要があります。視点は、データの交差を定義する固有のディメンション・メンバーを設定します。

フォームのユーザー変数を設定すると、変数名が「視点」に表示されます。[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

ページ軸および視点を定義するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2.  をクリックし、ディメンションを「ページ」にドラッグしてフォーム・ページ軸に追加します。
3. ページ軸ディメンションごとに  をクリックし、メンバーを選択します。[メンバー・セレクトタの使用](#)を参照してください。

検索オプションを使用可能にするページ・ディメンションでメンバー数を指定できます。「ファイル」、次に「プリファレンス」を選択します。「表示オプション」で「ページ数を超えた場合に検索を許可」に値を入力します。
4. ステップ 2 および 3 を繰り返し、複数のディメンションをページ軸に割り当てます。

複数のディメンションをページ軸に割り当てると、プランナはデータ入力中にディメンションナリティを選択できます。ユーザーは「表示オプション」を選択し、Oracle Hyperion Planning がページの選択内容を最近使用した選択内容に設定するかどうかを指定できます。
5. 「ディメンション・プロパティ」で、ページ・ディメンションのオプションを選択またはクリアします。[ディメンション・プロパティの設定](#)を参照してください。
6. オプション:  をクリックし、ディメンションを「視点」にドラッグして、「視点」フォームに追加します。「視点」に移動するディメンションごとにこのアクションを繰り返します。
7. 「視点」で、ディメンションごとに  をクリックし、メンバーを選択します。

オンザフライでまだ存在しないメンバーを作成することもできます。
[メンバー・セレクトタの使用](#)を参照してください。
8. 「ディメンション・プロパティ」で、視点ディメンションのオプションを選択またはクリアします。[ディメンション・プロパティの設定](#)を参照してください。

9. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

フォーム定義のインポート

ImportFormDefinition ユーティリティを使用して、データではなく、フォーム定義をテキストベースのファイルから Oracle Hyperion Planning フォームにインポートします。行、列またはその両方をインポートできます。Planning がインポートするのは、データを含んでいる行または列のみです。ユーティリティは Windows システムで実行する必要があります。

フォーム定義をインポートするには:

1. フォームのインポートを準備します。
[フォームの準備](#)を参照してください。
2. データ・ファイルを準備します。
[データ・ファイルの準備](#)を参照してください。
3. ユーティリティを実行します。
[フォーム定義のインポート](#)および [ImportFormDefinition の例](#)を参照してください。

フォームの準備

フォーム定義のために行と列をインポートする前に、必要に応じて行、列、ページおよび視点でディメンションを設定し、フォームを作成します。一般的に、フォームを定義するときに列のレイアウトを定義し、ImportFormDefinition を使用して行のみをインポートします。結果のフォームはフォーム定義のような外見になります。

データ・ファイルからインポートされる行は、フォームとインポート・オプションで指定されたメンバーに基づいています。これでどのデータをインポートするかを決定します。[ImportFormDefinition の例](#)を参照してください。

データ・ファイルの準備

ImportFormDefinition は Oracle Essbase 列エクスポート・フォーマットのテキストベースのファイルからデータをインポートします。ファイル・ディレクトリを直接生成するか、Essbase にデータをロードする方法がある場合にはデータをロードしてファイルを生成できます。

Essbase を使用して Essbase 列エクスポート・フォーマットのファイルを作成するには、Administration Services Console を使用し、「データベース」、「エクスポート」を選択します。さらに「列フォーマットでエクスポート」を選択します。(レベル 0 データも選択するようお勧めします。)なお、Essbase からエクスポートした後でファイルを変更する必要はありません。

ファイルを自分で生成する場合、次に従ってください。

- ファイルの最初の行はデータ・ファイルの列を示します。それはあるディメンションからのメンバーのリストである必要があります。
- 最初の行の後にある各行には、データが後に続く列を表すディメンション以外の、各ディメンションからのメンバーが含まれている必要があります。
- メンバー名は二重引用符で括る必要があります。
- 区切り文字はスペースにする必要があります。
- データは二重引用符で囲まないでください。

- 空白のデータ・セルは#MISSING を含む必要があります。

データ・ファイルのフォーマットではなく、フォームのレイアウトが、結果のフォームが表示される仕方を決定します。したがって、同じデータ・ファイルを使用して異なるフォームをロードできます。

フォーム定義のインポート

ImportFormDefinition ユーティリティは `planning1` ディレクトリにあります。`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

ImportFormDefinition を起動するには:

1. `planning1` ディレクトリから次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
ImportFormDefinition [-f:passwordFile] /A:appName /U:username /
F:formname /D:filename [/AR] [/AC] [/SR] [/SC] [/KC] [/KR]
```

パラメータの一覧は、[ImportFormDefinition ユーティリティのパラメータ](#)を参照してください。

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
ImportFormDefinition /A:MyPlan /U:Admin /F: "My Budget" /
D:exportfilename /AR /-AC
```

ファイルのデータ量によっては、フォームの作成に時間がかかる場合があります。

ImportFormDefinition で Oracle Hyperion Planning フォームへ定義をインポートし、データ・ファイルにデータがあるすべてのセルがフォームに表示されるようにします。「#MISSING」が入っているデータ・ファイルのセルについては、行または列がフォームに追加されません。

ノート:

- 行または列のインポートを無効にすると、ImportFormDefinition はフォームで定義された行または列別に、インポートされたデータをフィルタ処理します。
- ImportFormDefinition を 1 回以上実行すると、新しい結果を既存のフォーム定義とマージし、さらにソートも指定する場合は、新規および既存の行または列をディメンション順別にソートします。

ImportFormDefinition ユーティリティのパラメータ

表 6-9 ImportFormDefinition ユーティリティのパラメータ

設定	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>/A</code>	アプリケーション名。	はい

表 6-9 (続き) *ImportFormDefinition* ユーティリティのパラメータ

設定	目的	必須?
/U	管理者ユーザー名。	はい
/F	フォームの名前。	はい
/D	Oracle Essbase 列エクスポート・フォーマットのデータ・ファイルの名前および場所。場所は完全パスとファイル名またはオペレーティング・システムがファイルの検索に必要とするフォーマットにできます。	はい
/AR	データ・ファイルから行を追加します(デフォルトで)。/AR を指定すると無効になります。たとえば、Oracle Hyperion Planning で行を定義し、列定義のみをインポートできません。	いいえ
/AC	データ・ファイルから列を追加します(デフォルトで)。/AC を指定すると無効になります。	いいえ
/KC	フォームの列のメンバー選択を保ちます(デフォルトで)。/KC を指定し、列をクリアします。フォームでは少なくとも 1 つの列定義が必要です。列をクリアして追加しない場合、フォームは保存されず、エラーが表示されます。	いいえ
/KR	フォームで行のメンバー選択を保ちます(デフォルトで)。/KR を指定し、行のメンバー選択をクリアします。フォームでは少なくとも 1 つの行定義が必要です。行をクリアして追加しない場合、フォームは保存されず、エラーが表示されます。	いいえ
/SR	フォームで行をソートします(デフォルトで)。/SR を指定して使用不可能にします。	いいえ
/SC	フォームで列をソートします(デフォルトで)。/SC を指定して使用不可能にします。	いいえ

ImportFormDefinition の例

フォームの各軸で適切にメンバーを定義し、インポート・オプションを正しく定義します。これはどのデータがインポートされるかに影響します。

指定された列にデータを含む行のみをインポートするには:

1. Oracle Hyperion Planning で、フォーム列を指定します(たとえば、YearTotal を含めた子孫)。
2. 行にメンバーをインポートするディメンションについて、ディメンション・ルートをフォーム・デザインに追加します。
たとえば、行で勘定科目をロードするには、フォームの行に「勘定科目」ディメンション・ルートを配置します。
3. ImportFormDefinition を実行するとき、次のオプションを使用します。 / AR /-AC

各ディメンションからのメンバーが、セルを構成する各ディメンションからのメンバーをフォームの列、行、ページおよび視点のメンバーと一致する場合、勘定科目がデータ・ファイルからロードされます。追加された行はページのメンバーによりフィルタ処理されます。たとえば、ページにメンバーを配置する場合、それらのメンバーのデータを含む勘定科目のみがフォームに追加されます。行は視点のメンバーによってフィルタされます。データ・ファイルに 2008 年の給与勘定科目のデータが含まれており、視点には 2009 年のデータしかない場合、給与勘定科目はデータ・ファイルにあってても行には追加されません。

複合フォームの作成

複合フォームには、様々なプラン・タイプに関連付けられている場合でも、複数のフォームが同時に表示されます。ユーザーはデータを入力し、収益合計など、上位交差に集約された結果をみることができます。

複合フォームを作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
2. フォームを保管するフォルダを選択します。 [フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
3. フォームのリストの上にある「複合フォームの作成」をクリックします。
4. 「プロパティ」タブに、フォームの名前を 80 文字まで、オプションの説明を 255 文字まで入力します。
5. オプション: 「フォームの非表示」を選択してフォームを非表示にします。
6. オプション: フォームへの指示を入力します。
7. 複合フォームのレイアウトを設定します。 [複合フォームのレイアウトの設定](#)を参照してください。
8. 複合フォーム・セクションのプロパティを設定します。 [複合フォームのセクション・プロパティの設定](#)を参照してください。
9. 複合フォームの視点およびページ表示オプションを設定します。 [複合フォームの視点およびページ・ディメンションの設定](#)を参照してください
10. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

複合フォームのレイアウトの設定

Oracle Hyperion Planning には、アプリケーションに最適なあらゆる複合フォームのレイアウトを作成できるツールが用意されています。複合フォームの各領域はセクションと呼ばれます。最初に、複合フォームのレイアウトを、横に並ぶ 2 つのセクショ

ンと縦に並ぶ2つのセクションのどちらかに分割するかを指定します。また、カスタム・レイアウト・オプションもあります。

複合フォームのレイアウトを設定するには:

1. 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。

2. 「レイアウトの選択」でオプションを選択します:

-  **カスタム・レイアウト:** 複合フォームのレイアウトを独自に作成します。

ノート:

「カスタム・レイアウト」オプションは、デフォルトで選択されています。

-  **2行レイアウト:** 複合データ・フォームを水平線によって分けられた、縦に並ぶ2つのセクションに分割します。
-  **2列レイアウト:** 複合フォームを垂直線によって分けられた、横に並ぶ2つのセクションに分割します。

選択したレイアウトが表示されます。

3. 必要に応じて、単一のフォームを追加、再調整または削除します。

[単一のフォームの複合フォーム・レイアウトへの追加、レイアウト内のフォームの再調整および単一のフォームの複合フォームからの削除](#)を参照してください。

4. **オプション:** セクションの右上の  をクリックして、次に示すそのセクションの追加のレイアウト・オプションを選択します:

- **水平方向の分割:** セクションを、縦に並ぶ複数のセクションに分割します。
- **垂直方向の分割:** セクションを、横に並ぶ複数のセクションに分割します。

ノート:

単一のフォームが含まれる複合フォーム・セクションを分割すると、単一のフォームは元のセクション内に残ります。たとえば、セクションを垂直方向に分割すると、元のセクションは横に並ぶ2つのセクションに分割されます。分割されたセクション内の単一のフォームは左側のセクションに含まれ、右側のセクションは空になります。

- **削除:** 複合フォームからセクションを削除します。
複合フォームからセクションを削除すると、このセクションに含まれる単一のフォームは、複合フォームの他のセクションに含まれていないかぎり、複合フォームから削除されます。
- **フォームの追加:** 「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスを表示し、そこでレイアウトに追加する追加のフォームを選択できます。

- **タブとしてグループ化:** セクション内のフォームをタブとして表示します。
- **タブのグループ解除:** 「タブとしてグループ化」をクリアします。

5. 「保存」をクリックして、複合フォーム・レイアウトを保存します。

ヒント:

複合フォーム内から単一のフォームを編集できます。単一のフォームを右クリックし、「フォーム・デザイナー」を選択します。フォームの編集の説明に従ってフォームを編集します。アクセス権限は、[フォームおよびアクセス権限](#)に記載されているように適用されます。

単一のフォームの複合フォーム・レイアウトへの追加

単一のフォームを複合フォームのセクションへ追加するには、次のいずれかを行います:

- フォームを <フォーム・フォルダ>ペインの「フォーム」から必要なセクションにドラッグします。
- 必要なセクションをクリックして、 を選択し、「フォームの追加」を選択します。「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスで、フォームを選択し、「OK」をクリックします。
- 「セクション・プロパティ」を展開し、 をクリックします。「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスで、フォームを選択し、「OK」をクリックします。

単一のフォームを複合フォームに追加する場合、次のことに注意してください:

- 複合フォームに組み込むことができるのは、単一のフォームおよびアドホック・フォームです。
- 実行時に、複合フォームに対して選択した単一のフォームは、各複合フォーム・セクション内で左から右へ、さらに上から下へ表示されます。
- 「グループ」をタブとして選択する場合、フォームは選択した順番に表示されず。
- 単一のフォームを複合フォームのセクション間にドラッグすることができます。

レイアウト内のフォームの再調整

複合フォーム・レイアウト内の単一のフォームを再調整するには、「セクション・プロパティ」を展開し、フォームを選択します。矢印キーをクリックできます。次を行います:

- フォームを一番上に移動
- フォームを上へ移動
- フォームを下へ移動
- フォームを一番下に移動

複合フォーム内から単一のフォームを編集

複合フォームを編集する際に、「レイアウト」タブから単一のフォームを編集できます。このオプションは、アド・ホック・フォームには使用できません。アクセス権限は、[フォームおよびアクセス権限](#)に記載されているように適用されます。

複合フォームから単一のフォームを編集するには:

1. 複合フォーム内で、「レイアウト」タブをクリックします。
2. 単一のフォームを右クリックし、「フォーム・デザイナー」を選択します。
3. [フォームの編集](#)の説明に従って、単一のフォームを編集します。

単一のフォームの複合フォームからの削除

単一のフォームを複合フォームから削除するには、次のいずれかを行います:

- フォームを右クリックして、「削除」を選択します。
- 「セクション・プロパティ」でフォームを選択し、をクリックします。
- 「フォーム・セレクト」ダイアログ・ボックスでフォームの選択を解除し、「OK」をクリックします。

複合フォームのセクション・プロパティの設定

複合フォームの各セクションは、作成時に設定されたプロパティに関連付けられます。これらのプロパティは、複合フォームの作成後に編集できます。

複合フォームのプロパティを設定するには:

1. 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「セクション・プロパティ」を展開します。
3. 複合フォームのセクションをクリックし、必要に応じてプロパティを設定します。

表 6-10 複合フォームのセクション・プロパティ

オプション	説明
フォーム	セクションに単一のフォームを表示します。選択した各フォームには、次のオプションを使用できます: <ul style="list-style-type: none"> ・ タブとしてフォームを表示 ・ フォームの追加 ・ フォームの削除 ・ フォーム・ラベルの編集 ・ 一番上へ移動 ・ 上へ移動 ・ 下へ移動 ・ 一番下へ移動

表 6-10 (続き) 複合フォームのセクション・プロパティ

オプション	説明
名前	<p>プレビュー・モード時および実行時にセクションの上部に表示されるセクション名です。</p> <p> を選択して、セクション名のテキストのスタイルおよび色を選択します。</p>
高さ	<p>セクションの高さです。選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「自動」を選択すると、Oracle Hyperion Planning によって高さが設定されます。 ・ %(パーセンテージ記号): セクションの高さが複合フォームの高さに対するパーセンテージに設定されます。
幅	<p>セクションの幅です。選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自動: Planning によって幅が設定されます。 ・ %(パーセンテージ記号): セクションの幅が複合フォームの幅に対するパーセンテージに設定されます。
1 行当たりのフォーム数	<p>選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自動: Planning によって数値が設定されます。 ・ 1 から 20 の数値を選択します。 <p>デフォルトは、1 行当たり 1 つのフォームです。「1 列当たりのフォーム数」が「自動」以外の値に設定されている場合、「1 行当たりのフォーム数」は「自動」に設定されません。</p>
	<hr/> <p>ノート: フォームをタブとしてグループ化している場合、このオプションは使用できません。</p> <hr/>
1 列当たりのフォーム数	<p>選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自動: Planning によって数値が設定されます。 ・ 1 から 20 の数値を選択します。 <p>デフォルトは、1 列当たり 1 つのフォームです。「1 行当たりのフォーム数」が「自動」以外の値に設定されている場合、「1 列当たりのフォーム数」は「自動」に設定されません。</p>
	<hr/> <p>ノート: フォームをタブとしてグループ化している場合、このオプションは使用できません。</p> <hr/>

表 6-10 (続き) 複合フォームのセクション・プロパティ

オプション	説明
すべての共通ディメンションのスコープをグローバルに設定	複合フォームのすべてのセクションのすべての共通ディメンションをグローバルに設定し、「グローバル・ディメンション」プロパティの視点とページにグローバル・ディメンションのリストを表示します。

複合フォームの視点およびページ・ディメンションの設定

複合フォームの視点およびページ・ディメンションにより、各視点およびページ・ディメンション名を表示する、複合フォーム内の場所を指定します。複合フォーム内のセクションを選択すると、該当するパネルが表示されます:

- **グローバル・レイアウト・ディメンション:** 複合フォームの見出しに表示される視点およびページ・ディメンションがリストされます。
「グローバル」として指定できるのは、複合フォームのすべてのセクション内の単一のフォームすべてに共通し、同じメンバーが含まれるディメンションのみです。
- **共通のディメンション:** 選択した複合フォーム・セクションに含まれる単一のフォームすべてに共通する視点およびページ・ディメンションがリストされます。
共通ディメンションを表示する、複合フォーム内の場所を指定できます。共通ディメンションの表示オプションは、次のとおりです:
 - **ローカル:** ディメンション名を単一のフォームの見出しに表示します。
 - **セクション:** セクション名をセクション見出しに表示します。
セクション見出しに表示できるのは、セクション内の単一のフォームすべてに共通し、同じメンバーが含まれるディメンションのみです。
 - **グローバル:** ディメンション名を複合フォーム見出しに表示します。

マスター複合フォームの作成

1つのマスター・フォームと複数の単一のフォームを含む複合フォームを設計できます。その場合、マスター・フォームのメンバーの選択は単一のフォームのメンバーに自動的にフィルタされ、単一のフォームには、マスター・フォームでハイライトされたメンバーに関連する詳細のみが表示されます。

たとえば、ユーザーがフォームで新しいコンピュータのライン・アイテムを調査していて、このライン・アイテムからキャッシュ・フローの影響を知りたいとします。このシナリオでは、次のフォームを含む複合フォームを設計できます:

- "New Computers"というマスター・フォームには、次のディメンションおよびメンバーが含まれます:
 - エンティティ: MA
 - シナリオ: Plan
 - バージョン: Working
 - 通貨: Local
 - 年: No Year

- 期間: Beginning Balance
 - 資産クラス: Computers
 - ライン・アイテム: Base SP1
- 単一のフォームの名前は"Cash Flow Impact"です。

マスター複合フォームで、ユーザーは Computers/Base SP1 行をハイライトします。

図 6-1 マスター複合フォーム: "New Computers"

MA											
Plan		Working		Local		NoBalance		No Year		Refresh	
C16											
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
1		Asset Description	Asset Units	Asset Rate	Basic Cost	Salvage	Purchase Date	In Service Date	Premature End Date	Reason ended	
2	Furniture and Fixtures	Base SP1	Office Furniture	0	1,000	1,000	0	1/2/2009	1/2/2009	12/10/2009	Transfer Out
3		Base SP2	Office Desktops	0	100	100	5	1/2/2009	1/2/2009		None
4	Computers	Base SP1	Laptops	0	50	250	0	1/2/2009	1/2/2009		None
5	Tangible Assets	Total Specified				1,250					None

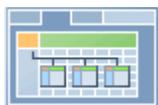
単一のフォーム"Cash Flow Impact"はフィルタされて、マスター複合フォーム"New Computers"でハイライトされているメンバー、Computers、Base SP1、Plan、Working および MA に関連するデータのみが表示されます。

図 6-2 単一のフォーム: "Cash Flow Impact"

MA															
Computers		Plan		Working		Base SP1		FY10		Local		Refresh			
F16															
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
		-YearTotal													
1		Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec		
2	Cash Outflow from Capital Additions	250	250												
3	-Net Cash Flows	-250	-250												
4															

フォームをマスター複合フォームとして指定するには:

1. 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
 フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。
2. フォームを右クリックして「マスター複合フォームとしてタグ付け」を選択します。



はフォームがマスター複合フォームであることを示します。

ノート:

マスター複合フォームは複合フォーム全体に適用されます。そのため、1つの複合フォームに対し、そのセクション全体で1つのマスター・フォームしかあり得ません。

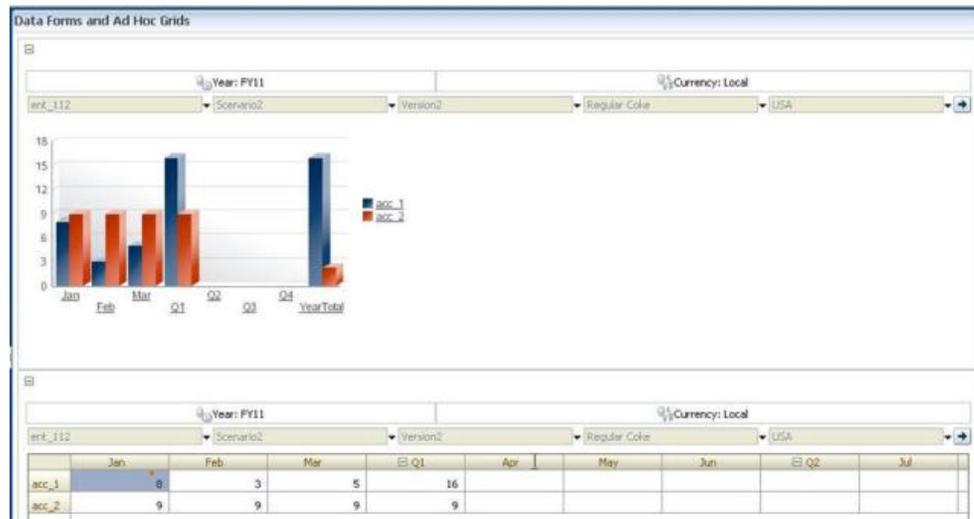
マスター複合フォームのデータに関連する単一のフォーム内のデータをフィルタするには、マスター複合フォームを右クリックし、「コンテキストの適用」を選択します。

複合フォームの埋込みチャート

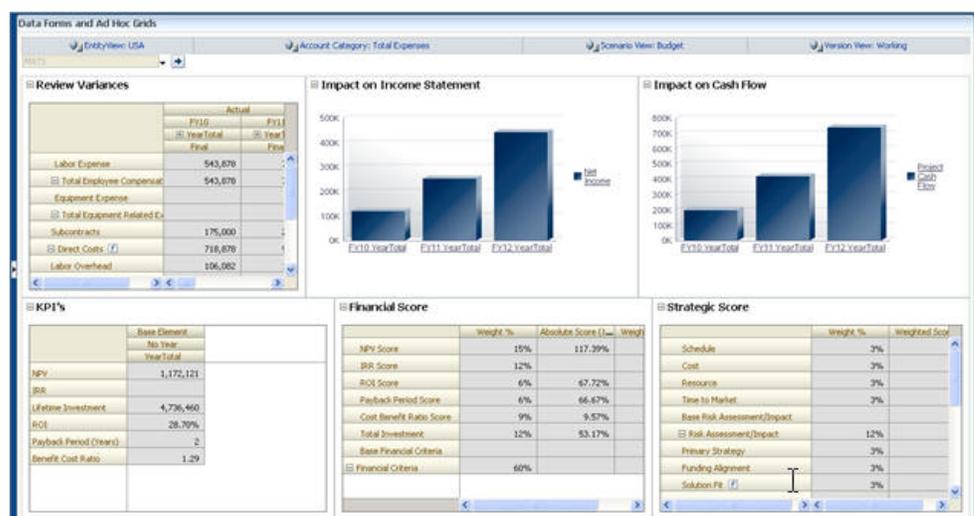
管理者はデータをセクション内にチャートで表示するように複合フォームを設計できます。プランナが下線付きのリンクまたはチャート領域をクリックすると、次のレベルにドリル・ダウンすることもできます。

設計案:

- 上部セクションをチャートとして表示し、下部セクションをグリッドとして表示することで、プランナが下部のグリッドに入力したデータ(保存された場合)の影響を、上部にチャートとして表示することができます。



- 同じアドホック・グリッドを2つ含み、1つはグリッドとして表示し、もう1つはチャートとして表示します。次にユーザーはアドホック操作(「ズーム・イン」、「ピボット」、「選択項目のみ保持」など)をグリッドで実行し、チャートでその変化を表示できます。
- ダッシュボードを作成します。例:



複合フォームにチャートを埋め込むには:

- 複合フォームを作成または編集し、「レイアウト」をクリックします。

フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。

2. 複合フォームのセクションをクリックし、フォームを右クリックします。
3. 「**チャートとして表示**」を選択します。
「**チャートとして表示**」と「**グリッドとして表示**」との間で切り替えることができます。
4. 「**チャートのプロパティ**」で、**チャート・タイプ**を選択します。

表 6-11 チャート・タイプ

チャート・タイプ	説明
棒	各棒の長さに比例して値を独立変数(時間など)にわたって表します。
水平棒	通常の棒グラフに似ていますが、横向きになっていることで、従属変数が横軸に表示されます。
折れ線	時間とともにデータ・ポイント(様々な製品ラインの売上げなど)が線でつながれて表示されます。
面	折れ線グラフと似ていますが、軸と軸との間の面と線が色で強調されます。
円	円グラフの各区分は、データ・クラスを全体と関連させて比例して表します。
散布	各点は、2つの変数に対するデータの分散を表します。

チャート・タイプの選択時のヒントは画面上のテキストを読んでください。

5. 「**OK**」をクリックします。
6. **オプション**: チャートが表す値(凡例と呼ばれる)をチャートのどこに表示するかを設定するには、「**オプション**」をクリックしてから「**凡例**」をクリックし、次のいずれかを選択してから「**OK**」をクリックします。
 - **右**: 凡例をチャートの右に表示します(デフォルト)。
 - **最下位**: 凡例をチャートの下に表示します。
 - **左**: 凡例をチャートの左に表示します。
 - **最上位**: 凡例をチャートの上に表示します。
7. **オプション**: チャートのラベル(メンバー名や別名など)を表示する場所を設定するには、「**オプション**」で、「**ラベル**」をクリックし、次のいずれかを選択してから「**OK**」をクリックします。
 - **外側最大**: ラベルを棒グラフの上に表示します。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルを表示します。「**外側最大**」がデフォルトです。
 - **中央**: ラベルは棒グラフの中央に表示されます。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルが表示されます。

- **内側最大:** ラベルは棒上の上端近くに表示されます。棒グラフ以外では、正の数の場合はデータ・ポイントの下に、負の数の場合はデータ・ポイントの上にラベルが表示されます。
- **内側最小:** ラベルは棒上の内側の下端近くに表示されます。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルが表示されます。
- **最大エッジ:** ラベルは棒グラフの上に表示されます。棒グラフ以外では、データ・ポイントにラベルが表示されます。

特定のタイプのフォームの設計

次も参照:

[複数通貨のフォームの設計](#)

[ドリルスルー情報に使用するフォームの設計](#)

[式の行と列を使用したフォームの設計](#)

[データ検証を使用したフォームの設計](#)

[グローバル仮定を使用したフォームの設計](#)

[ローリング予測のフォームの設計](#)

複数通貨のフォームの設計

エンティティの基本通貨以外の通貨でユーザーが作業するのを許可するには、次のタスクを実行します。

- 同じフォームで換算された通貨を比較するには、少なくとも2種類の通貨からメンバーを選択します。
- そのフォームのすべてのメンバーについて通貨を換算するには、「通貨」ディメンションをページ軸に割り当て、レポート通貨をメンバーとして選択します。これでユーザーはページ軸から通貨メンバーを選択し、「通貨の計算」ビジネス・ルールを起動し、その通貨について値を表示できます。

ドリルスルー情報に使用するフォームの設計

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition などのソースからロードされたデータを持つメンバーがフォームに含まれている場合、ユーザーはドリルスルーしてセル・データ・ソースの詳細を表示できます。ドリルスルー用のフォームを使用可能にするには、フォームの設計時に次のタスクを実行します:

- FDMEE 内で設定タスクを完了し、データまたはメタデータを Oracle Hyperion Planning にロードします。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition 管理者ガイドを参照してください。
- たとえば、[アクセス権限の設定](#)の説明に従って、フォームとメンバーに適切なアクセス権限を付与します。FDMEE をソースとするすべてのディメンションに対してドリルスルーが使用可能になります。ユーザーが書込み権限を持つセル内でドリルスルーが使用可能になっている場合は、ユーザーがセルを更新する際にドリルスルー・アイコンが継続して表示されます。ただし、ユーザーがドリルスルーするとき、更新内容はソース・データと連結されません。

- 複数通貨アプリケーションの場合、ソース・システム内のエンティティのすべての通貨をロードできます。為替レートは、Planning 内の為替レート表にロードされ、Planning で通貨換算が行われます。

ドリルスルー情報のあるセルを含んでいるフォームをユーザーが印刷するとき、これらのセルにドリルスルー・アイコンが表示されます。

式の行と列を使用したフォームの設計

式の行と列には、グリッド・メンバーに対して算術計算を実行する式が含まれます。たとえば、特定の列内の値にランクを付けたり、2つの行間の差異を計算できます。式は、グリッド参照、算術演算子および算術関数で構成されます。既存の式をフォームに定義する、または割り当てる場合は、「レイアウト」タブで適切な行または列を選択し、「セグメント・プロパティ」の下で選択を行います。

[式の行と列の追加](#)を参照してください。式の作成および算術関数の使用の詳細は、[フォームの式関数](#)を参照してください。

データ検証を使用したフォームの設計

ビジネス・ポリシーやビジネス・プラクティスの実装に役立つよう事前定義されたデータ検証ルールが含まれるフォームを設計できます。フォームでは、入力したデータが検証ルールに違反したときに生成されるセルの色やデータ検証メッセージを指定できます。データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。[フォームへのデータ検証ルールの組み込み](#)および[データ検証の管理](#)を参照してください。

グローバル仮定を使用したフォームの設計

フォーム設計者は、通常、減価償却値、税率、単価など、グローバル仮定(「ドライバ」、「ドライバ・データ」とも呼ばれる)を格納する特定の目的のフォームを作成します。これは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Management を使用してフォームのドライバ・データを移行する(たとえばテスト環境から本番環境に)場合に役立ちます。このようなフォームは、通常は小さく、計算を処理する参照表として使用されます。

単一のフォームの設計時に、テスト環境から本番環境へのグローバル仮定の転送を有効にするには、「レイアウト」タブで、「グリッドのプロパティ」、「グローバル仮定フォーム」の順に選択します。次に、税率などのドライバ・データを保管するフォームを更新します。Lifecycle Management を使用して移行する場合、これにより、タグ付けされたフォームに含まれるドライバ・データを移行できます。グローバル仮定は、複合フォームまたは複数のセグメントを持つフォームとともに使用することはできません。

ローリング予測のフォームの設計

ローリング予測について

従来の予測では、予測サイクルは常に会計年度の終わりと関連し、予測期間の月は会計年度の月が進むにつれて減っていきます。

ローリング予測は、会計年度の終了期間と関係なく継続するという点で、従来の予測とは異なります。ローリング予測の期間は、ローリング予測用に事前定義されたウィンドウに基づいて進みます。この期間は通常月次または四半期ごとに定義されます。月次ローリング予測は通常12ヶ月、18ヶ月、または24ヶ月サイクルです。12ヶ月サイクルでは、12ヶ月の期間が常に月ごとに移動し、毎月の予測は実際の会計年度の終わりと関係なく、次の12ヶ月に対するものになります。

たとえば、ある会社の会計カレンダーが7月から6月だとします。年度の最初の月(FY11の7月)、会社のプランナは11年7月から12年6月までの期間の予測シナリオを入力します。次の月(11年8月)に、プランナは12年7月が次の会計年度(FY12の7月から

3. 列セグメント・ヘッダーを右クリックして、「ローリング予測設定」を選択します。
「ローリング予測設定」メニュー・オプションは、「年」および「期間」が同じグリッド軸(行または列)である場合にのみ使用できます。
4. 「ローリング予測設定」ダイアログ・ボックスで、次の情報を入力します:

表 6-12 「ローリング予測設定」のオプション

オプション	説明
接頭辞	これによりローリング予測代替変数が別の代替変数と区別されます。たとえば、4QRFは予測が第4四半期のローリング予測であることを指定します。
既存の代替変数の再利用	以前に使用したことがある接頭辞を指定する場合は、これを選択します。
開始年	ローリング予測が開始する年(例: FY11)。 開始年を入力するか、  をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。 入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「既存の代替変数の再利用」を選択してあると、既存の代替変数の開始年が「開始年」に自動的に入力されます。
開始期間	ローリング予測が開始する年の期間(例: Q1)。 開始期間を入力するか、  をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。 入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「既存の代替変数の再利用」を選択してあると、既存の代替変数の開始期間が「開始期間」に自動的に入力されます。
期間数	個別のセグメントとして生成される年/期間の組合せの数。

5. 「生成」をクリックします。

定義済の代替変数が作成され、ローリング予測用の代替変数の組合せを含むフォームで、追加の列セグメントが作成されます。

ノート:

- 代替変数は、開始年および開始期間に選択した期間に基づいています。 [メンバーとしての代替変数の選択について](#)を参照してください。
- フォームを設計するとき、「年」と「レベル0」の期間(たとえば、FY12/Jan)が選択されている行または列から「ローリング予測設定」ダイアログ・ボックスを開いた場合は、「開始年」と「開始期間」が自動的に入力されます。関数、変数、またはレベル0でないメンバーを使用して列のメンバーを選択した場合、値は自動的に入力されません。

- ローリング予測変数を別のフォームで再利用するには、新しいフォームの列ヘッダーを右クリックして「メンバー・セクタ」を起動します。

ローリング予測変数の変更

管理者はローリング変数の代替変数をフォームで直接の改訂できます。

フォームでローリング予測変数を変更するには:

- 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- ローリング予測のフォームを開きます。
- フォームの任意の列を右クリックして、「ローリング予測変数の設定」を選択します。
- 「ローリング予測変数の設定」ダイアログ・ボックスで、「年」および「期間」ディメンションの値を入力または編集します。

「値のシフト基準」の横の選択を変更することで、値を上下にシフトできます。「値のシフト基準」の隣にある選択肢を変更すると、年ディメンションと期間ディメンションの値は自動的に移入され、シフト後の年と期間の値が表示されます。

- 「適用」をクリックします。

新しい値は、これらの代替変数が使用されるすべてのフォームに流れ、そのフォームに変更が反映されます。

フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作

フォームとフォルダの選択および表示

これらの手順を使用して、フォーム・フォルダと、フォルダに含まれるフォームを選択して開きます。編集を容易にするために、管理者がアド・ホックではないフォームを開き、直接エンド・ユーザー・インタフェースから編集できます。

エンド・ユーザーのインタフェース内からアド・ホック以外のフォームを選択して開くには:

- データ・フォームを開きます。
- ページの上で、「フォーム・デザイナ」アイコン  をクリックします。
フォームが新しいタブに編集モードで開きます。

管理者のインタフェース内からフォームまたはフォーム・フォルダを選択して開くには:

- 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 次のステップのいずれかを実行します:
 - フォーム・フォルダを開くには、「フォーム・フォルダ」の下からフォーム・フォルダを選択します。
 - フォームを開くには、適切なフォーム・フォルダが開かれているときに「フォーム」の下に表示されるリストからフォームを選択します。

フォーム・フォルダを選択した後、「フォーム・フォルダ」の横にあるボタンを使用して、フォルダの作成、名前変更およびアクセス割当てを行います。フォームを表示した後、「フォーム」の上のボタンを使用して、フォームの作成、編集、移動、削除およ

びアクセス割当てを行います。フォーム名の横にあるアイコンはフォームのタイプを示します:

-  単一のフォーム
-  複合フォーム
-  マスター複合フォーム
-  アド・ホック・グリッド

アド・ホック・グリッドの設定の詳細は、*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*を参照してください。

フォームのプレビュー

フォームの設計中に、視点、列、行およびページ軸に割り当てられているディメンションをプレビューできます。プレビューでは、メンバー属性、別名および、フォームに関連付けられたデータが表示されますが、新規データは入力できません。

プレビューにより、通常のフォームの設計検証チェックが完了し、フォームに含まれるデータ検証ルールが正しく評価されたかどうかをチェックされます。フォームを保存するには、データ検証ルールが正しく完了している必要があります。また、データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。変更をフォームに保存しない場合、フォームが最後に保存された後に行われた検証ルールの変更はすべて失われます。

フォームの設計をプレビューするには:

1. フォームを開き「**プレビュー**」をクリックします。
フォームが新しいタブに編集モードで開きます。
2. 設計検証チェック中にレポートされた問題を解決します。これには、データ検証ルールに関する問題も含まれます。
3. フォームを保存し、更新が保存されたことを確認します。更新には、データ検証ルールの変更も含まれます。

フォーム定義の印刷

管理者は、ディメンション・メンバー、ビジネス・ルール、アクセス権限および他のフォームのコンポーネントについての情報が記載されているフォーム定義レポートを印刷できます。

さらに、[レポートのカスタマイズ](#)で説明されているように、フォーム定義についてもレポートを作成できます。

フォーム定義レポートを作成および印刷するには:

1. 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
2. 「フォーム」を選択します。
3. 「使用可能なフォーム」から「**選択したフォーム**」に移動することによって、印刷するフォーム定義を選択します:
 - 選択した1つ以上のフォームを追加するには、 をクリックします。

- すべてのフォームを追加するには、 をクリックします。
 - 1つ以上のフォームを削除するには、 をクリックします。
 - すべてのフォームを削除するには、 をクリックします。
4. オプション: 「メンバー選択リストを含める」を選択し、レポートに列と行を含みます。
 5. オプション: 「ビジネス・ルールを含める」を選択し、関連付けられたビジネス・ルールを含みます。
 6. 「レポート作成」をクリックします。

Adobe Acrobat が次のような集計されたレポートを生成します:

- プラン・タイプ
 - 説明
 - 列ディメンション、メンバーおよび追加の列の定義
 - 行ディメンション、メンバーおよび追加の行の定義
 - 「ページと視点」ディメンション
 - フォームのアクセス権限
 - 関連付けられたビジネス・ルール
7. レポートを印刷するには、Adobe のツールバーで、「ファイル」、「印刷」の順に選択します。

ノート:

マルチバイト文字がレポートに表示されるようにするには、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドのマルチバイト文字を参照してください。正しい言語のグリフがレポートに反映されるよう表示するには、フォントを `java.home` ディレクトリで使用可能にすることも必要です。Oracle Hyperion Planning ディレクトリは、`EPM_ORACLE_HOME\common\JRE\Sun\1.6.0\lib\fonts` という場所を示します。

フォームの検索

フォームを検索するには:

1. 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
2. 「検索」で、フォーム名の一部または全体を入力します。
大文字と小文字の区別を無視し、次の一致が検索されます。
3.  をクリックして前方(下方)に検索するかまたは  をクリックして後方(上方)に検索します。

フォームの編集

単一のフォームと複合フォームの両方のレイアウト、メンバーおよびプロパティを編集できます。たとえば、式の行または列を単一のフォームに追加することや、フォームを複合フォームに追加することが可能です。

単一のフォームの編集

単一のフォームを編集するには:

1. フォームを選択し、「**編集**」をクリックします(フォームとフォルダの選択および表示を参照)。
2. 選択:
 - a. **プロパティ**: フォームの名前、説明および指示を編集します。単一のフォームの作成を参照してください。
 - b. **レイアウト**: フォームのレイアウトを編集します。フォーム・レイアウトの設定を参照してください。
 - c. **その他オプション**: フォームの精度を編集し、フォームに関連付けられているコンテンツ・メニューを変更します。フォームの精度およびその他オプションの設定を参照してください。
 - d. **ビジネス・ルール**: フォームに関連付けるビジネス・ルールを変更したり、ビジネス・ルールのプロパティを変更します。ビジネス・ルールの使用を参照してください。
3. 「**終了**」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

複合フォームの編集

複合フォームを編集するには:

1. 次のいずれかのアクションを行います:
 - フォームを選択して「**使用状況の表示**」アイコン、「**編集**」の順にクリックします。
 - フォームを選択し、「**編集**」をクリックします(フォームとフォルダの選択および表示を参照)。

ノート:

複合フォームの編集時に、「組み込まれている1つ以上のフォームが変更されています。共通ディメンションの変更を保存する場合は、複合フォームを保存してください」というメッセージが表示された場合は、複合フォームの変更を保存する前に、組み込まれている単一のフォームの共通ディメンションに加えた変更を確認してください。

2. 選択:
 - **プロパティ**: 複合フォームの名前、説明または指示を編集します。複合フォームの作成を参照してください。

- **レイアウト:** フォームのレイアウトとプロパティを編集します。 [複合フォームのレイアウトの設定](#)を参照してください。
- **ビジネス・ルール:** フォームに関連付けるビジネス・ルールを変更したり、ビジネス・ルールのプロパティを変更します。 [ビジネス・ルールの使用](#)を参照してください。

3. 「終了」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

フォームの移動、削除および名前変更

フォームを移動、削除および名前変更するには:

1. フォームを選択します。

[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。

2. 次のタスクを選択します。

- フォームを移動するには、「**移動**」をクリックしてから、宛先フォルダを選択します。

ノート:

複数のフォームが同じフォルダにある場合、それらを同時に移動できます。

- フォームを削除するには、「**削除**」をクリックします。
- フォームの名前を変更するには、「**名前変更**」をクリックしてから、新しい名前を入力します。

3. 「OK」をクリックします。

フォーム定義のインポートとエクスポート

管理者は `FormDefUtil.cmd` (Windows) または `FormDefUtil.sh` (UNIX) を使用し、Oracle Hyperion Planning アプリケーション間でフォーム定義を移動できます。XML ファイルへまたは XML ファイルから、フォームをインポート、エクスポートできます。これは開発からプロダクション環境へ移動する際に便利です。

このユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用し、`planning1` ディレクトリにインストールされます。`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

ノート:

前のリリースを使用してエクスポートされた複合フォームの XML ファイルは、現在のリリースにインポートできません。該当の Planning アプリケーションが現在のリリースに移行された後で、XML ファイルを再抽出する必要があります。ただし、前のリリースを使用してエクスポートされた非複合フォームの XML ファイルは、現在のリリースにインポートできます。

FormDefUtil ユーティリティを起動するには:

1. `planning1` ディレクトリから、次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
formdefutil [-f:passwordFile] import|export filename|formname|-all server
name user name application
```

パラメータ	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>import export</code>	フォーム定義をインポートまたはエクスポートします。	はい
<code>filename formname -all</code>	<code>import</code> で使用するときには、フォーム定義を含む XML ファイルを指定します。 <code>export</code> で使用するときには、XML にエクスポートするフォームを指定します。 <code>-all</code> を <code>import</code> または <code>export</code> に付けて使用し、現在のアプリケーションのすべての XML ファイルまたはフォーム定義をインポートまたはエクスポートします。	はい。 <code>-all</code> はオプションです。
<code>server name</code>	Planning アプリケーションが存在するサーバー名。	はい
<code>user name</code>	管理者の名前。	はい
<code>application</code>	<code>export</code> で使用する場合、エクスポートするフォーム定義を含んでいる Planning アプリケーションの名前。 <code>import</code> で使用する場合、フォーム定義をインポートする Planning アプリケーションの名前。	はい

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

フォームの定義をエクスポートすると、ユーティリティによって現在のディレクトリに XML ファイルが作成され、ログ・ファイルにエラーが記録されます(ログ・ファイルの場所の詳細は、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。)このユーティリティを任意のディレクトリにコピーし、そこから起動することで、別のディレクトリにファイルを保存することができます。

表 6-13 FormDefUtil.cmd コマンドの例

タスク	例
1つのファイルのインポート	<pre>FormDefUtil.cmd import c:\ \EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning \planning1\form1.xml localhost admin APP1</pre>

表 6-13 (続き) FormDefUtil.cmd コマンドの例

タスク	例
1つのファイルのエクスポート	FormDefUtil.cmd export Form1 localhost admin APP1
すべてのフォーム定義のエクスポート	FormDefUtil.cmd export -all localhost admin APP1
すべてのフォーム定義のインポート	FormDefUtil.cmd import -all localhost admin APP1

ノート:

EPM_ORACLE_INSTANCE を、システム上のフォーム・ファイルへの絶対パスまたは相対パスに置き換えます。詳細は、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定

ユーザーが一度に複数のフォームを処理できるようにするには、アプリケーションのユーザーごとにキャッシュされるデータ・グリッド数を指定する DATA_GRID_CACHE_SIZE プロパティを更新します。このプロパティはデフォルトで 1 に設定されており、各ユーザーが一度に開いてアクティブにできるフォームは 1 つになっています。

注意:

このプロパティの値を大きくすると、アプリケーション・サーバーの使用メモリーも増加することに注意してください。たとえば、ユーザーが 100 人のアプリケーションの場合、アプリケーション・サーバーはデフォルトで最大 100 のデータ・グリッドをキャッシュできます。このプロパティが 3 に設定されている場合、最大 300 のデータ・グリッドをキャッシュできます。大量のフォームがあるアプリケーションでは、メモリー使用状況への影響が大きくなります。

各ユーザーが同時に処理できるフォーム数を指定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
2. すべての Oracle Hyperion Planning アプリケーションのプロパティを設定するには、「システム・プロパティ」を選択します。
3. 設定を更新するには:
 - プロパティを追加するには、「追加」をクリックします。空の行に(スペースは使用せずに)DATA_GRID_CACHE_SIZE を入力します。「プロパティ値」で、ユーザーが一度に開いてアクティブにできるフォーム数を表す数値を入力します。
 - プロパティを変更するには、「プロパティ値」の値を変更します。

- プロパティを削除するには、削除するプロパティの名前を選択して[Delete]キーをクリックします。
4. 「保存」をクリックして、変更を確認します。
 5. Planning サーバーを再起動します。

グリッド診断の使用

グリッド診断を使用すると、フォームとアド・ホック・グリッドを開くときに要する時間を確認できます。チャート形式と表形式のどちらでロード時間を表示するか、およびどのフォームとグリッドで診断を実行するかを選択できます。パフォーマンスの低いフォームを識別し、フォームでの設計時の問題に対処できるようになります。

グリッド診断を使用するには:

1. Oracle Hyperion Planning アプリケーションにログインします。
2. 「ツール」、「診断」、「グリッド」の順に選択します。
3. 診断を実行するフォームを選択して、「診断の実行」をクリックします。

フォームとアド・ホック・グリッドのロード時間について、5秒を超えるもの、1秒から5秒の間、および1秒未満の割合を示す円グラフが、「診断の要約」とに表示されます。
4. 円グラフの一部をクリックすると、特定のロード時間の詳細が「診断の要約」の「表示」領域に表示されます。

たとえば、円グラフでロード時間(5秒超)をクリックすると、ロード時間が5秒より長くかかったフォームの詳細が「表示」領域に表示されます。
5. 表示するロード時間の詳細を選択したら、その情報を「表形式」と「チャート」のどちらの表示形式で公開するかを選択します。

ロード時間をチャートとして表示する形式を選択した場合は、「面」、「水平棒」、「棒」、「折れ線」のいずれかを選択します。

ビジネス・ルールの使用

ビジネス・ルールについて

適切なアクセス権があるユーザーは Oracle Hyperion Planning からビジネス・ルールを起動できます。ルールの起動時に、ユーザーに入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。

最適なパフォーマンスのために、フォームで実行するビジネス・ルールは3分以内に実行するよう設計されています。実行時間がそれよりも長いビジネス・ルールでは、バッチ処理のスケジュールを作成するか、ピーク以外の時間にビジネス・ルールを実行できます。

詳細について:

- ビジネス・ルールの作成および更新については、*Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド*を参照してください。
- 実行時プロンプトの使用については、[実行時プロンプトについて](#)を参照してください。

ビジネス・ルールを選択

「ビジネス・ルール」タブで、複数のビジネス・ルールをプラン・タイプ別にフォームに関連付けることができます。ユーザーはフォームから関連付けられたビジネス・ルールを起動し、値を計算して割り当てることができます。フォームを開くまたは保存するときに、フォームに関連付けられた各ビジネス・ルールが自動的に起動するかどうかを設定できます。

フォームのビジネス・ルールを選択するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 現在のフォームを更新するには、「**ビジネス・ルール**」をクリックします。
 - 編集するフォームを開くには、「**編集**」、「**ビジネス・ルール**」の順に選択します。
2. 「**プラン・タイプ**」ドロップダウン・メニューから、プラン・タイプを選択します。
3. 「**ビジネス・ルール**」リストから、フォームに関連付けるビジネス・ルールを選択し、「**選択したビジネス・ルール**」に移動します。[メンバー・セレクトアの使用](#)を参照してください。

デフォルトでは、「フォームの計算」および「通貨の計算」のビジネス・ルールが選択されます。「フォームの計算」はフォームが小計を計算するために自動的に作成されます。「通貨の計算」は、複数の通貨を行、列またはページに含むフォームが、使用できる通貨間で値の換算ができるよう作成されます。カスタマイズされた計算スクリプトを使用して通貨換算すると、「通貨の計算」をクリアできます。「フォームの計算」をクリアすることで、プランナがフォーム上でデータを計算するのを防げます。

4. 選択したビジネス・ルールの順序(ルールが表示および起動される順序)を変更するには、「**選択したビジネス・ルール**」でビジネス・ルールを選択し、上矢印または下矢印をクリックしてリスト内で上下に移動します。リストの先頭にあるルールが最初に表示および起動されます。リストの末尾にあるルールは最後に表示および起動されます。

ビジネス・ルールを起動する順序は重要であり、データに影響する場合があります。たとえば、小計を出す前にまず通貨を換算することが重要です。

5. ビジネス・ルールのプロパティを設定するには、「**プロパティ**」をクリックします。[ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照してください。
6. 「**保存**」をクリックして処理を保存し、フォームの作成または編集を続行します。または、「**終了**」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

ノート:

複合フォームに対してビジネス・ルールを選択する場合、含まれるフォームのどのビジネス・ルールを複合フォームで実行するかを選択できます。複合フォーム自体に対して選択しないかぎり、含まれるフォームのビジネス・ルールは実行されません。たとえば、「**Total Expense Impact**」という名前の含まれるフォームに関連付けられたすべてのビジネス・ルールを実行するには、「**Total Expense Impact**」のビジネス・ルールを選択します。

ビジネス・ルールのプロパティの設定

ユーザーがフォームを開くまたは保存するときに、フォームに関連付けられたビジネス・ルールが自動的に起動するかを指定できます。ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプトのデフォルト・メンバーを、ページ軸と視点軸で選択されたメンバーに一致させるかどうかを設定できます。

ビジネス・ルールのプロパティを設定するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 現在のフォームを更新するには、「**ビジネス・ルール**」をクリックします。
 - 編集するフォームを開くには、「**編集**」、「**ビジネス・ルール**」の順に選択します。
2. 「**ビジネス・ルール**」タブをクリックします。
3. ビジネス・ルールの横にある「**ロード時に実行**」を選択し、フォームを開くときに自動的に起動するようにします。

実行時プロンプトがあるビジネス・ルールはロード時に起動できません。

4. ビジネス・ルールの横にある「**保存時に実行**」を選択し、フォームを保存するときに自動的に起動するようにします。

「**保存時に実行**」と設定されたビジネスに実行時プロンプトが含まれる場合、フォームが保存される前に、実行時プロンプト値を入力するよう求められます。

5. **オプション:** ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプト・ウィンドウのデフォルトのメンバー選択を、開いているフォームのページ軸と視点軸の現在のメンバーに一致させるには、「**フォームのメンバーを使用**」を選択します。

このオプションが他の設定や条件の下でどのように作用するかを学習するには、[実行時プロンプトの理解](#)を参照してください。

6. **オプション:** 実行時プロンプトの値をユーザーに非表示にするには、「**プロンプトの非表示**」を選択します。これにより自動的に「**フォームのメンバーを使用**」が選択されます。

フォームを保存した後、次回このページに戻ると、「**フォームのメンバーを使用**」が選択したとおりに表示されます。

次の場合に実行時プロンプトを非表示にできます:

- すべての実行時プロンプト・メンバーの値が入力されている場合(該当するディメンション・メンバーがフォームの「ページ/視点」から読み取られます)
- 実行時プロンプトではディメンションは繰り返されません

7. 「**OK**」をクリックします。

実行時プロンプトについて

起動時にビジネス・ルールは、メンバー、テキスト、日付または数字としての変数についてユーザーにプロンプト表示します。プロンプトは特定である必要があり、どのようなタイプのデータが予期されるかをユーザーに示します。例:

- 月を選択します。

- 四半期ごとの予想顧客数を入力します。
- 翌月に予測される収益変化のパーセンテージは何ですか？

Oracle Hyperion Calculation Manager で、ビジネス・ルールについて「動的メンバーの作成」オプションが選択されており、親メンバーが動的な子を追加できるようになっている場合(動的メンバーについてを参照)、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規メンバーを作成できます。

実行時プロンプトを使用してビジネス・ルールを起動するときに、Oracle Hyperion Planning は入力された値を検証しますが、ビジネス・ルールは検証しません。実行時プロンプトでデフォルトのメンバー選択を設定するには、[ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照してください。他の設定と条件がどのように実行時プロンプトに影響するかを理解するには、[実行時プロンプトの理解](#)を参照してください。

デフォルトでは、アプリケーション内の処理された実行時プロンプトはデータベースに保存され、ジョブ・コンソールから表示できます(「ツール」の後に「ジョブ・コンソール」を選択します)。多くのユーザーが実行時プロンプトを使用してビジネス・ルールを実行している場合、これらの値の追跡にはかなりのシステム・リソースが必要となります。パフォーマンスを改善するには、この機能をオフにし、Planning が実行時プロンプトの値をキャプチャしないようにします。これを実行するには、`CAPTURE RTP_ON_JOB_CONSOLE` プロパティをプロパティ表に追加し、プロパティ値を「FALSE」にします(もう一度オンにするには、値を「TRUE」に変更します)。[アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定](#)を参照してください。

実行時プロンプトの理解

実行時プロンプトの表示および値は次のような点に影響されます。

- 設計時に、ルールまたはルールセットのレベルで「オーバーライド値として使用」プロパティが設定されているかどうか
- フォームのページ/視点に有効なメンバーがいるかどうかおよび「ビジネス・ルール・プロパティ」タブで「フォームのメンバーを使用」と「プロンプトの非表示」オプションが選択されているかどうか([ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照)
- 「実行時プロンプト」オプションをフォームの設計中に設定するか、実行時プロンプトの設計時に設定するか([Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド](#)を参照)
- 前回の値を使用プロパティをビジネス・ルールの設計時に設定するかどうか
- Oracle Hyperion Calculation Manager で、ビジネス・ルールのオプション「動的メンバーの作成」が選択されていて、親メンバーが動的な子を追加できるようになっているかどうか(動的メンバーについてを参照)。なっている場合、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規メンバーを作成できます。

原則:

1. 「オーバーライド値として使用」プロパティが設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定されている場合には、ページ/視点のメンバーの値や前回保存された値より、ルールまたはルールセットのレベルで上書きされる値が優先されます。これは、ルールの起動方法(フォームからか、「ツール」の「Business Rules」メニューからか)とは無関係に、また設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかにも関係なく発生します。「値の上書き」は Oracle Hyperion Planning ユーザー変数として設定できます。その場合、ルールは変数の現在値を使用して起動されます。
2. フォームから起動するときに、「フォームのメンバーを使用」オプションを選択すると、設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかに関係なく、前回保存された

値よりページ/視点のメンバーの値が優先されます。非表示の実行時プロンプトをユーザーに表示せずにビジネス・ルールが実行され、実行時プロンプトの値がページ/視点メンバーからとられます。

複合フォームに関連付けられたビジネス・ルールが保存時にまたは左側のペインから起動される場合またはビジネス・ルールが「ツール」から、そしてそのあと「ビジネス・ルール」メニューから起動するときには、これは該当しません。これらの場合、「フォームのメンバーを使用」設定が無視され、非表示の実行時プロンプトに設計時の値が与えられ、前回保存された値が優先されます。

3. **前回の値を使用**オプションを設計時に実行時プロンプトで選択する場合および次の条件のどれかが該当する場合:

- **フォームでメンバーを使用**は選択されません
- 実行時プロンプトは、「ツール」、次に「ビジネス・ルール」メニューから起動されます
- 値をコンテキストから事前に入力できません

実行時プロンプト値の優先度は次によって決定されます:

- a. 前回保存された値が優先されます。
- b. ルールセットが起動する場合、設計時にルールセットのレベルで上書きされた値が使用されます。
- c. ビジネス・ルールが起動する場合、設計時にルール・レベルで上書きされた値が使用されます。ルール・レベルで上書きされない場合、設計時の実行時プロンプト値が使用されます。

設計時に非表示の実行時プロンプトは前回保存された値を絶対に使用しません。これらの場合、**前回の値を使用**設定は無視されます。

4. 「**フォームのメンバーを使用**」および「**プロンプトの非表示**」オプションは「メンバー」および「ディメンション間」実行時プロンプト・タイプのみ適用されます(ディメンション間実行時プロンプト・タイプを使用できるのは、Calculation Manager で作成されたビジネス・ルールのみです)。

「**オーバーライド値として使用**」プロパティが設定されているとき、設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定された値は、「**プロンプトの非表示**」の動作に影響します。

5. ディメンション間実行時プロンプトの場合: 実行時プロンプトのすべてのプロンプトを「**値の上書き**」またはページ/視点から事前に入力可能でないかぎり、実行時プロンプトは非表示になりません。実行時プロンプトは、「**値の上書き**」またはページ/視点から事前に入力された一部の値および原則 1、2 および 3 に応じて入力された他の値とともに表示されます。

この表は、次の設定と条件における実行時プロンプトの結果を説明しています。

表 6-14 メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
<p>「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用可能。</p>	はい	はい	はい/いいえ 設定は無視されます	<p>ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわり、実行時プロンプトの値は「値の上書き」またはページ視点メンバーからとられます。</p>
<p>「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用可能。</p>	はい	いいえ	はい	<p>すべての実行時プロンプトが「値の上書き」またはページ視点コンテキストから事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が1つでも「値の上書き」またはページ視点コンテキストから事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則 1 および 3 に従います。</p>
<p>「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用可能。</p>	はい	いいえ	いいえ	<p>実行時プロンプトは「値の上書き」またはページ視点から事前に入力された値とともに表示されません。</p>

表 6-14 (続き) メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	はい	はい/いいえ 設定は無視されます	ビジネス・ルールは、原則 3 に従って事前に入力された値とともに実行時プロンプトをユーザーに表示します。 たとえば、実行時プロンプトのディメンションは行または列にあるためフォームのコンテキストを渡すことはできません。このため「 プロンプトの非表示 」設定は無視され、実行時プロンプトが表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	はい	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	すべての実行時プロンプトが「 値の上書き 」から事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が 1 つでも「 値の上書き 」から事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則 1 および 3 に従います。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。

表 6-14 (続き) メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ/視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理 1 および 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されません。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。

非表示の実行時プロンプト値が明瞭でない場合、次に注意してください。

- フォームのコンテキストを渡すことができない場合(たとえば、ディメンションは行または列にあるため)、非表示の実行時プロンプトが表示されます。
- 実行時プロンプトが非表示のディメンション間タイプで、「値の上書き」またはコンテキストから一部のプロンプトを渡すことができない場合、実行時プロンプトは、「値の上書き」またはコンテキスト値および設計時の値から値が事前入力された状態で表示されます。たとえば、「ディメンション間」に「期間」、「エンティティ」および「シナリオ」の実行時プロンプトがあり、「エンティティ」が行で定義されていてシナリオに「値の上書き」が設定されている場合、実行時プロンプトには上書きシナリオ、エンティティの設計時値、ページ期間が順に表示されます。

- 「**値の上書き**」が存在するか、実行時プロンプト値でコンテキストを渡すことが可能でもそれが制限範囲外の場合、実行時プロンプトは事前に入力されたコンテキスト値で表示されます。
- 「**メンバー**」のタイプと「**ディメンション**」のタイプの組合せの実行時プロンプトが1つ以上ある場合、実行時プロンプトは「**値の上書き**」、または事前に入力されたコンテキスト値とともに表示されます。たとえば、「**エンティティ**」ディメンションのメンバー・タイプの実行時プロンプトと、「**エンティティ**」ディメンションの1つのプロンプトをとともう「**ディメンション間**」タイプの実行時プロンプトがある場合、両方の実行時プロンプトが表示されます。このルールは **Calculation Manager** のルールセットには適用されません。
- 「**ツール**」から、そしてそのあと「**ビジネス・ルール**」メニューから起動するときは、実行時プロンプトは非表示となり、設計時の値(ルールまたはルールセットのレベルで上書きされた)を使用してビジネス・ルールを起動します。与えられた設計時の値が制限範囲外の場合、実行時プロンプトが事前に入力された設計時の値とともに表示されます。
- 設計中に非表示となる実行時変数は前回保存された値を決して使用しません。前回の値を使用プロパティは無視され、その値はデータベースに保存されません。

実行時プロンプトと承認セキュリティについて

管理者はメンバーの承認セキュリティを保持する実行時プロンプトを設計できます。そうすることで、承認ルールに従い、プランナがアクセス権のないプランニング・ユニットのデータを変更することを防ぎます。たとえば、管理者はプランナに関連プランニング・ユニットの移行処理後にデータを変更させたくない場合があります。Oracle Hyperion Calculation Manager で、管理者は次の実行時「**セキュリティ**」をメンバーに対して設定できます。

- **承認:** これらの条件がどちらも TRUE の場合、Oracle Hyperion Planning により、ユーザーがメンバー・データを変更できます。
 - ユーザーにメンバーへの書込みアクセス権があります(Planning で割当て済)。
 - メンバーがプランニング・ユニットに属している場合、ユーザーがプランニング・ユニットを所有しています。

両方の条件が満たされない場合、ユーザーはメンバーのデータを変更できません。
 - **書込み:** メンバーへの書込みアクセス権があり(Planning で割当て済)、ビジネス・ルールを起動するユーザーはそのデータを変更できます。メンバーの承認ステータスは無視されます。
 - **読取り:** メンバーへの読取りアクセス権があり(Planning で割当て済)、ビジネス・ルールを起動するユーザーはそのデータを変更できます。承認ステータスは無視されます。
 - **デフォルトの使用:** メンバーのアクセス権が「なし」に設定されていない場合(つまり、読取りまたは書込みのいずれか)、セキュリティは実行時プロンプトにのみ適用されます。
- ビジネス・ルールが以前のリリースから移行される時、この設定であると仮定されます。

[保護された実行時プロンプトの設計](#)を参照してください。

保護された実行時プロンプトの設計

Oracle Hyperion Planning は、実行時プロンプトの設計順序により、「シナリオ」、「バージョン」、「エンティティ」およびセカンダリ・ディメンション交差での実行時セキ

ュリティをサポートします。「承認」セキュリティを適用するビジネス・ルールの場合、Oracle Hyperion Calculation Manager デザイナは、エンティティの実行時プロンプトより前に、「書込み」または「承認」セキュリティを持つシナリオおよびバージョンの実行時プロンプトを配置する必要があります。

Calculation Manager の「セキュリティ」が「承認」または「書込み」のいずれかに設定されている場合、バージョンおよびシナリオ・メンバーの実行時プロンプトは書込みアクセス権でフィルタされます。「セキュリティ」が「承認」に設定されたエンティティの実行時プロンプトは、「エンティティ」実行時プロンプトの前に表示される最後の「シナリオ」/「バージョン」によりフィルタされます。「シナリオ」または「バージョン」実行時プロンプトがどちらも存在しない場合、エンティティは書込みアクセス権でフィルタされます。

「セキュリティ」が「承認」に設定されたその他のディメンションの実行時プロンプトは、その実行時プロンプトの前に表示される最後の「シナリオ」/「バージョン」/「エンティティ」によりフィルタされます。

そのため、「承認」セキュリティを使用する実行時プロンプトは次の順番で定義されます。

Scenario1: Version2: To_Entity1、Scenario2: Version1、To_Entity2、To_Product

実行時プロンプトは次のようにフィルタされます。

- To_Entity1 は次の組合わせでフィルタされます: Scenario1: Version2
- To_Entity2 は次の組合わせでフィルタされます: Scenario2: Version1
- To_Product は次の組合わせでフィルタされます: Scenario2、Version1、To_Entity2、To_Product

例:

```
Fix (FY11, Jan, {EntitySalesByCountry}, {MyScenario2}, {MyVersion2})
```

```
Fix ({MyProduct}, {MyCountry})
```

```
{ToAccount} = {FromAccount} * 2;
```

```
ENDFIX
```

```
Endfix
```

ノート:

ビジネス・ルール・デザイナが実行時プロンプトのリストからプランニング・ユニット・ディメンションを省略する場合(たとえば、実行時プロンプトに「シナリオ」または「エンティティ」が含まれない)、「承認」セキュリティは適用されず、階層は書込みアクセスによりフィルタされます。

[実行時プロンプトと承認セキュリティについて](#)を参照してください。

ユーティリティによるビジネス・ルールの起動

CalcMgrCmdLineLauncher.cmd ユーティリティを使用し、管理者はコマンド・プロンプトから Oracle Hyperion Calculation Manager で作成されたビジネス・ルールを起動できます。

ノート:

- /Validate オプションを使用し、ビジネス・ルールを起動する前にコマンド構文を確認します。
- 起動されたビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、CalcMgrCmdLineLauncher.cmd を実行する前に、実行時プロンプトの値を含んでいるファイルを作成します。実行時プロンプトの値が入っている ASCII ファイルを手動で作成するか、「実行時プロンプト」ページの「実行時プロンプト値ファイルの作成」オプションを選択して自動的に値を生成できます。

ビジネス・ルールを CalcMgrCmdLineLauncher.cmd で起動するには:

1. 実行時プロンプトがあり、ビジネス・ルールを起動するとき、次のどちらかにより実行時プロンプト値が入っているファイルを作成します:
 - 「実行時プロンプト」ページで生成した実行時プロンプト値ファイルの名前を指定します(*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド* を参照)。
 - 分離したラインで、ダブル・コロンの(:)で区切られた各実行時プロンプト名とその値を含んでいる実行時プロンプト ASCII ファイルを作成します。例:


```
CopyDataFrom::Jan
CopyDataTo::Apr
```

 このファイルは CopyDataFrom という名前の実行時プロンプトの値が Jan であり、CopyDataTo という名前の実行時プロンプトの値が Apr であることを指定します。

 planning1 ディレクトリにファイルを保存します(planning1 の完全パスは [EPM Oracle インスタンスについて](#) を参照)。または、ユーティリティを実行するときに、実行時プロンプト・ファイルへの完全パスを指定します。
2. コマンド・プロンプトで、planning1 ディレクトリから、このコマンド、次にスペース 1 つ、そしてパラメータを、それぞれスペースで区切って入力します:

```
CalcMgrCmdLineLauncher.cmd [-f:passwordFile] /A: appname /U:
username /D: database [/R: business rule name] /F: runtime prompts file [/
validate]
```

表 6-15 CalcMgrCmdLineLauncher パラメータ

パラメータ	目的	必須?
[-f:passwordFile]	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、passwordFile で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
/A: appname	Oracle Hyperion Planning を指定します ビジネス・ルールを起動するアプリケーション	はい
/U: username	管理者のユーザー名を指定します	はい
/D: database	計算を起動するプラン・タイプの名前を指定します	はい

表 6-15 (続き) CalcMgrCmdLineLauncher パラメータ

パラメータ	目的	必須?
[/R: <i>business rule name</i>]	起動するビジネス・ルールの名前を指定します	はい
/F: <i>runtime prompts file</i>	ビジネス・ルールの実行時プロンプトの名前と値を含むファイルの名前を指定します	はい(実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを起動する場合)。
[/validate]	コマンド構文のみを確認し、ビジネス・ルールを起動しません。あらゆるエラーがコンソールに表示され、Calculation Manager のログ・ファイルに書き込まれます。 CalcMgrLog4j.properties ファイルが Classpath にある場合、ログ・ファイルは EPM_ORACLE_INSTANCE/ diagnostics/logs/planning ディレクトリに生成されます。	いいえ
/?	CalcMgrCmdLineLauncher.cmd の構文とオプションを印刷	いいえ

たとえば、Values.txt という名前のファイルで実行時プロンプト値を使用して Depreciate という名前のルールを起動するには、次を入力します。

```
CalcMgrCmdLineLauncher.cmd /A:planapp /U:admin /D:plan1 /
R:Depreciate /F:Values.xml
```

3. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

エラー・メッセージのカスタマイズ

管理者は Oracle Essbase @RETURN 関数を使用して、ビジネス・ルールの計算の終了時に表示されるメッセージをカスタマイズできます。たとえば、「この計算が正常に実行されるには最大値を指定する必要があります。」と表示するようにビジネス・ルールをカスタマイズします。

ビジネス・ルールの構文:

```
@RETURN ("ErrorMessage", ERROR)
```

ここで:

- "ErrorMessage" は、エラー・メッセージ文字列、または文字列を戻す式です。
- ERROR は「ErrorMessage」文字列に指定したメッセージがユーザー、ジョブ・コンソール、およびアプリケーション・ログにエラー・タイプのメッセージとして表示されることを示します。

ノート:

- @RETURN が呼び出されると、ビジネス・ルールの実行は停止します。
- IF... ELSEIF 計算コマンド・ブロックを使用し、論理エラー条件を指定して @RETURN 関数を使用し、カスタマイズしたエラー・メッセージおよびエラー・レベルとともに計算を終了できます。

- 次の構文を使用して、ローカライズされたリソース・ファイル HspCustomMsgs に定義されたエラー・メッセージ・ラベルを表示することもできます:

- パラメータなし:

```
@RETURN(@HspMessage("MESSAGE_LABEL_NAME"), ERROR)
```

- パラメータあり:

```
@RETURN(@HspMessage(@NAME("MESSAGE_LABEL_NAME", "PARAM_NAME1",
"PARAM_VALUE1", "PARAM_NAME2", "PARAM_VALUE")0, ERROR)
```

HspCustomMsgs ファイルをカスタマイズする手順は、[テキスト、色および画像のカスタマイズ](#)を参照してください。

- この関数はメンバーの式では使用できません。

@RETURN 関数の詳細は、[Oracle Essbase テクニカル・リファレンス](#)を参照してください。

Smart View でのセル・フォーマットが Planning で持続する方法

この項で説明されている注意点を踏まえて、Oracle Smart View for Office で適用するセル・フォーマットが Oracle Hyperion Planning フォームの同じセルに適用されます。

管理者はアプリケーション・プロパティ SMART_VIEW_MERGE_FORMATTING を設定することにより、管理者が Smart View で設定したセル・フォーマットと、管理者以外が Smart View で設定したセル・フォーマットをマージするかどうかを制御できます。[Planning フォームでの Smart View セル・フォーマットの制御](#)を参照してください。

フォーマット・ルールはセル・フォーマットが管理者か管理者以外かによって次のように異なります:

- 管理者:** すべてのアプリケーション管理者が他の管理者によって保存されたセル・フォーマットを共有します。フォーマットは加算的です。管理者が同じセルに別のフォーマットを適用する場合、最新の変更内容が Planning フォームに表示されます。管理者が Smart View でセル・フォーマットをクリアすると、管理者以外が保存したすべてのセル・フォーマットもクリアされます。
- 管理者以外:** ユーザーがセルをフォーマットして Smart View でフォーマットを保存する場合、Planning フォームでユーザーのフォーマットが適用されて表示されます。ユーザーが Smart View でフォーマットを保存しない場合、Planning フォームで管理者のフォーマットで表示されます。セキュリティとその他のフィルタリング・オプションのため、表示されるフォーマットは管理者が保存したフォーマットと完全に一致しない場合があります。ユーザーは、管理者のフォーマットを変更して独自のフォーマット設定として保存するか、独自のフォーマット設定をクリアして管理者のフォーマット設定に戻すことができます。

フォームのフォーマットを選択するには:

1. フォームで右クリックし、「適用」を選択します。
2. 選択:
 - **セル・スタイル:** Planning のフォーマットを使用する場合
 - **カスタム・スタイル:** Smart View で保存したフォーマットを使用する場合

詳細情報:

- Smart View および Planning でサポートされる Microsoft Excel フォーマット機能については、*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*の Planning フォームでの Smart View のフォーマットに関する項を参照してください。
- Excel フォーマットの保存については、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*を参照してください。

代替変数の操作

代替変数について

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。たとえば、フォームやレポート・スクリプトで月の値を毎月更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 CurMnth に設定できます。Oracle Hyperion Planning 内で代替変数への値の作成および割当てを行います。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときに、Planning で使用できます。

Oracle Essbase Administration Services Console または ESSCMD を使用して、代替変数への値の作成および割当てを行うこともできます。

代替変数の選択の詳細は、[メンバーとしての代替変数の選択について](#)を参照してください。

Planning を使用した代替変数への値の作成および割当て

Oracle Hyperion Planning を使用して代替変数への値を作成し割り当てるには:

1. 「管理」、「管理」、「変数」の順に選択します。
2. 「代替変数」タブを選択します。
3. 「アクション」をクリックして、「追加」を選択します。
4. 「代替変数の追加」ページで、「プラン・タイプ」を選択します。
5. 「名前」に、代替変数名を入力します。
6. 「値」に、代替変数の値を入力します。
7. 「OK」をクリックします。

Planning を使用した代替変数の削除

Oracle Hyperion Planning を使用して代替変数を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「変数」の順に選択します。
2. 「代替変数」タブを選択します。
3. 削除する代替変数を選択します。
4. 「アクション」をクリックして、「削除」を選択します。
5. 「はい」をクリックします。

ユーザー変数の操作

ユーザー変数について

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、プランナは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。ユーザー変数でフォームを作成するとき、プランナはフォームを開く前に変数の値をプリファレンスで先に選択する必要があります。その後、プランナは、変数が動的ユーザー変数の場合のみ、フォームで変数を変更できます。それ以外の場合は、プリファレンスで変数の設定を続行する必要があります。たとえば、**Division** という名のユーザー変数を作成する場合、プランナはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。

フォーム用に変数を初回に選択するときに、プランナはプリファレンスでこれを実行します。その後はプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。ユーザー変数をメンバーとして選択する方法の詳細は、[メンバーとしてのユーザー変数の選択について](#)を参照してください。

ユーザー変数の管理

ユーザー変数を設定し、フォームで表示されるメンバー数を制限することで、ユーザーが一定のメンバーに注目できるようになります。たとえば、エンティティ・ディメンションで **Division** という名前のユーザー変数を作成すると、ユーザーは自分の区分のメンバーを選択できます。各ディメンションについてユーザー変数の数を作成し、フォームのすべての軸でユーザー変数を選択できます。[単一のフォーム・ページと視点の定義](#)を参照してください。

一般的なステップ:

1. 必要に応じて、ディメンション・アウトラインに適切な親レベルのメンバーを作成します。
2. ユーザーがフィルタ処理できるディメンションについて、それぞれユーザー変数を定義します。
[ユーザー変数の作成](#)を参照してください。
3. フォームをデザインするときに、ユーザー変数をフォームに関連付けします。
[メンバーとしてのユーザー変数の選択について](#)を参照してください。
4. フォームに関連付けられたユーザー変数についてメンバーを選択するよう、ユーザーに指示します。

ユーザー変数を持つフォームをユーザーが開く前に、プリファレンスで「ユーザー変数オプション」のメンバーを選択する必要があります。初期値を選択したあとで、フォームまたはプリファレンスでそれを変更できます。*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*を参照してください。

ユーザー変数の作成

ユーザー変数を作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「変数」の順に選択します。
2. 「ユーザー変数」タブを選択します。
3. 「アクション」をクリックして、「追加」を選択します。
4. 「ユーザー変数」ウィンドウで、「ディメンション名」に、ユーザー変数を作成するディメンションを選択します。
5. 「ユーザー変数名」で、ユーザー変数の名前を入力します。

6. オプション: 「**コンテキストの使用**」を選択して、ユーザー変数が視点で使用できるようにします。この設定では、ユーザー変数の値はフォームのコンテキストにより動的に変更されます。
7. 「OK」をクリックします。

これで、フォームにユーザー変数を関連付けることができます。[メンバーとしてのユーザー変数の選択について](#)を参照してください。その後、プランナはユーザー変数のメンバーを選択できます。*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*を参照してください。

ユーザー変数の削除

ユーザー変数を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「変数」の順に選択します。
2. 「ユーザー変数」タブを選択します。
3. 削除するデータ変数を選択します。
4. 「アクション」をクリックして、「削除」を選択します。
5. 「はい」をクリックします。

メンバー・セレクタの使用

メンバーの操作について

フォームやビジネス・ルールの実行時プロンプトなどの機能で使用するメンバーおよびその他の情報を選択するには、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用します。変数と属性が定義されている場合は、変数と属性も選択できます。メンバー名、別名または両方でメンバーを表示および選択します。「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに定義する表示オプションは、管理者によってアプリケーション・デフォルトとして定義されたオプションより、またアプリケーション・プリファレンスで指定されたオプションよりも優先されます。

メンバーの選択

「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用して、Oracle Hyperion Planning 機能のメンバーおよび他の情報を選択します。たとえば、フォーム管理、ビジネス・ルール実行時プロンプト、および「セル詳細のクリア」のメンバーを選択できます。メンバーの選択には、現在のアプリケーションに対するディメンション編集者のメンバーの設定およびユーザーによって設定されたメンバー選択オプションに応じて、メンバー名または別名、あるいはその両方を使用できます。

メンバーを選択するには:

1. メンバー・リストからメンバーを選択します。
2. オプション: 検索条件を選択または入力します。
 - a. 「検索」ボックスで、「メンバー名」、「メンバーの別名」、「説明」または「UDA」の中からオプションを選択します。

また、メンバー名、別名、説明、UDA のすべてまたは一部を入力することもできます。検索の対象には共有メンバーも含まれます。完全一致を検索するには、「完全一致」を選択し、検索文字列を入力します。検索では大文字と小文字は区別されません。検索できるのは、1つの単語、複数の単語またはワイルドカード文字です。[ワイルドカードを使用した検索](#)を参照してください。

- b.  をクリックします。
3. オプション: 現在のセッションの「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの左ペインで情報を表示する方法およびメンバーをフィルタする方法を設定するには、メンバー・リストの上にある次のアイコンの1つをクリックします。関数や世代などの複数のフィルタを選択できます。

-  すべてのメンバーを縮小します
-  すべてのメンバーを展開します

-  プロパティを表示します。「メンバー名」、「別名」、「メンバー名:別名」または「別名:メンバー名」を選択します。または、「追加表示プロパティ」を選択し、「説明」または「カウント」を選択します。選択したオプションは、左ペインまたは右ペインの列に表示されます。列を削除するには、選択をクリアします。
 -  「関数別に選択項目のみ保持」。「メンバー」、「子孫」、「子孫(含む)」、「祖先」、「祖先(含む)」、「兄弟」、「兄弟(含む)」、「親」、「親(含む)」、「子」、「子(含む)」または「レベル0子孫」を選択します。
 -  「属性別に選択項目のみ保持」。属性が定義されている場合、「属性」、「演算子」および「値」のオプションを選択し、「OK」をクリックします。複数の属性を選択できます。
 -  「レベル別または世代別に選択項目のみ保持」。「レベル」または「世代」を選択して、表示するレベルまたは世代を選択し、「OK」をクリックします。
 -  : 表示をリフレッシュしてフィルタを解除します。
4. メンバー・リストで、選択を行います。

アクセス権があるメンバーのみが表示されます。

ノート:

- 実行時プロンプトの場合のみ:** 表示される階層は、ビジネス・ルールの起動対象となるアプリケーションおよびプラン・タイプに対するものです。実行時プロンプトの場合、実行時プロンプトの制限を満たすメンバーが表示されます。
- ディメンション間またはメンバー範囲実行時プロンプトを持つビジネス・ルールまたは検証ルールの場合のみ:** 「ディメンションの選択」リストから、この実行時プロンプトについてビジネス・ルール・デザイナーが設定するディメンションを選択します。
- 共有メンバーの場合のみ:** 共有メンバーは *shared_member.parent_member* (shared) のフォーマットで表示されます。共有メンバーをダイアログ・ボックスの右側で選択したときには、共有メンバー名のみが表示されます。

5. オプション:  または  をクリックし、階層を縮小または展開します。

6. 「選択したメンバー」リストとの間でメンバーを移動します。

階層関係に基づいてメンバーの範囲を選択するには、ダイアログ・ボックスの中央にある  をクリックします。

表 7-1 メンバーの関係

関係	含まれるメンバー
メンバー	選択したメンバー
子孫	選択したメンバーのすべての子孫(選択したメンバーは除く)
子孫(含む)	選択したメンバーとその子孫

表 7-1 (続き) メンバーの関係

関係	含まれるメンバー
祖先	選択したメンバーの上方にあるすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
祖先(含む)	選択したメンバーとその祖先
兄弟	選択したメンバーと同じ階層レベルからのすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
兄弟(含む)	選択したメンバーとその兄弟
親	選択したメンバーの上方にあるレベルのメンバー
親(含む)	選択したメンバーとその親
子	選択したメンバーの真下にあるレベルのすべてのメンバー
子(含む)	選択したメンバーとその子
レベル 0 の子孫	子を持たない選択したメンバーのすべての子孫

オプション: 右側のペインで選択したメンバーに関数を挿入するには、ダイアログ・ボックスの右側にある「関数セレクト」アイコン  をクリックします。

- 変数または属性が定義されている場合、「**変数**」タブをクリックし、ユーザー変数、代替変数および属性のメンバーを選択します。各カテゴリのメンバーは子として表示されます。フォームに表示されるのは、ユーザーが読取りアクセス権を持つメンバーのみです。
 - ユーザー変数:** [メンバーとしてのユーザー変数の選択についての説明](#)に従って、メンバーを選択します。
 - 代替変数:** [メンバーとしての代替変数の選択についての説明](#)に従って、メンバーを選択します。選択内容は、[システム設定の指定](#)で説明されている、「**代替変数の表示を使用可能にする**」のプリファレンス設定に応じて異なります。
 - 属性:** 次の表で説明されている値に基づいて属性を選択します。非レベル 0 属性を選択すると、すべてのレベル 0 子孫が選択され、各子孫に演算子が適用されます([メンバーとしての属性値の選択について](#)を参照)。

オプション: カスタム属性に適用される関数を選択するには、 をクリックします。ディメンション別にフィルタするには、「ディメンション」ドロップダウン・リストからオプションを選択します。

表 7-2 属性値の選択

演算子	含まれる属性値
等しい	選択された属性に等しい
等しくない	選択された属性に等しくない

表 7-2 (続き) 属性値の選択

演算子	含まれる属性値
より大きい	選択された属性よりも大きい
以上	選択された属性に等しいか大きい
より小さい	選択された属性より小さい
以下	選択された属性に等しいかより小さい

8. メンバー選択オプションがメンバー・セレクタ・ダイアログ・ボックスを呼び出すコンテキストに適していることを確認します。
9. 「OK」をクリックします。

ワイルドカードを使用した検索

次のワイルドカード文字を使用して、メンバーを検索できます。

表 7-3 ワイルドカード文字

ワイルドカード	説明
?	任意の 1 文字を表します
*	ゼロ文字以上の文字を表します。たとえば、「sale*」と入力すると、「Sales」と「Sale」が一致します。これは*を使用することで、「sale」という語の後にゼロ文字以上の文字を含む語と一致するためです。 デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。たとえば、検索条件として「cash」と入力すると、「*cash*」が検索され、「Restricted Cash」、「Cash Equivalents」、「Cash」、「Noncash Expenses」などが戻されます。これは、一致した各アイテム内に「cash」が含まれるためです。
#	任意の 1 つの数字(0-9)を表します
[list]	指定した文字リスト内の任意の単一文字を検索します。ワイルドカードとして使用する特定の文字をリストできます。たとえば、[plan]と入力すると、カッコ内のすべての文字を 1 つのワイルドカード文字として使用します。「-」文字を使用すると、[A-Z]や[!0-9]などの範囲を指定できます。「-」文字をリストの一部として使用するには、この文字をリストの先頭に入力します。たとえば、[-@&]の場合、カッコ内の文字をワイルドカード文字として使用します。
[!list]	指定した文字リスト内にないすべての単一文字を検索します。また、[!A-Z]や[!0-9]のように、「-」で範囲を示すこともできます。

メンバーとしての属性値の選択について

属性メンバーが定義されている場合、「メンバー選択」ページで属性値を選択できます。属性メンバーについては、すべての非レベル0属性を選択すると、すべてのレベル0子孫が選択され、演算子が相互に適用されます。数値、日付、ブール(`false = 0`で`true = 1`)などのタイプの属性については、評価は最小値と最大値に基づいています。テキスト属性については、評価は階層の上部から下部への位置に基づいています。最上部の位置は最小値となり、最下部の位置は最大値となります。

例: 数値属性

この例では、数値に基づいて、選択された演算子は各レベル0子孫に適用されます。たとえば、「メンバー選択」ページで「等しくない」と **Small** を選択すると、1に等しくなく、2に等しくないすべての値が含まれるため、選択には3、4、5および6が入ります。「より大きい」と **Small** を選択すると、1より大きいまたは2よりも大きくなすべての値が含まれます。このため選択には2、3、4、5および6が入ります。

```
Size
Small
1
2
Medium
3
4
Large
5
6
```

表 7-4 例: 数値属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Large	5, 6	「等しい」演算子は、5と6を含む Large のすべてのレベル0子孫に適用されます。
より小さい	Medium	1, 2, 3	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3より小さい、または4より小さい値が含まれ、結果として1、2および3になります。
より大きい	Medium	4, 5, 6	「より大きい」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3より大きい、または4より大きい値が含まれ、結果として4、5および6になります。

表 7-4 (続き) 例: 数値属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
以上	Medium	3, 4, 5, 6	「以上」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 以上、または 4 以上の値が含まれ、結果として 3、4、5 および 6 になります。
以下	Medium	1, 2, 3, 4	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 以下、または 4 以下の値が含まれ、結果として 1、2、3 および 4 になります。
等しくない	Medium	1, 2, 5, 6	「等しくない」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 に等しくなく、かつ 4 に等しくない値が含まれます。結果として 1、2、5 および 6 になります。

例: テキスト属性

テキスト属性の場合、選択された演算子は階層の位置、上部(最小値)から下部(最大値)までに基づいて、各レベル 0 子孫に適用されます。

この例では、Envelope は最上部にあり、最小値となります。Packet は次に高い値になります。これに Box、Carton、Barrel、Crate が続きます。Crate は最下部にあり、最大値となります。

このテキスト属性の場合には、「より小さい」と Small を選択すると、Envelope よりも小さい値または Packet よりも小さい値が含まれます。Envelope は Packet よりも小さいため、結果として Envelope のみを含む選択となります。同じように、「より大きい」と Large を選択すると、Barrel より大きい値または Crate よりも大きい値が含まれ、結果として Crate のみを含む選択となります。

Containers

Small

Envelope

Packet

Medium

Box

Carton

Large

Barrel

Crate

表 7-5 例: テキスト属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Medium	Box、Carton	「等しい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには Box および Carton が含まれます。
等しくない	Medium	Envelope、Packet、Barrel、Crate	「等しくない」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Box に等しくなく、かつ Carton に等しくない値が含まれます。この結果として Envelope、Packet、Barrel、Crate となります。
より小さい	Medium	Box、Packet、Envelope	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Carton よりも下位または Box より下位のすべてが含まれます。この結果として Box、Packet、Envelope となります。
以下	Medium	Envelope、Packet、Box、Carton	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Carton と同じ位置またはカートンより下位のすべてが含まれます。この結果として Envelope、Packet、Box、Carton となります。

フォームのメンバーの選択について

フォームのメンバーを選択するとき:

- 特定のユーザーからメンバーをフィルタ処理するには、そのアクセス権をメンバーに制限し、その後プランをリフレッシュします。[メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て](#)を参照してください。
- 「**選択したメンバー**」リストでのメンバーの順序によりフォームの順序が決まります。順序を変更するには、メンバーを選択し、選択したメンバー・リストの上にある上矢印または下矢印を選択します。

ノート:

メンバーを個別に選択し、その親を最初に選択する場合、親はフォームのメンバー階層の一番上に表示されます。(階層レベルの数に応じて、個別に選択されたメンバーの親についての合計の計算では複数のパスがとられ、計算が遅くなる可能性があります)。「子孫(含む)」などの関係によって選択されたメンバーの親は、階層の一番下に表示されます。

- 「**フォームの管理**」ダイアログ・ボックスの「**レイアウト**」タブで、メンバー選択アイコンをクリックするか、行または列を右クリックして「**メンバー選択**」を選択することにより、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを開くことができます。
- 同じディメンションで異なるメンバー・セットを選択するには、[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。
- 1つの行または列内に複数のディメンションがあるフォームの場合、ディメンションに対してメンバー選択オプションを設定できます。それには、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスに表示される「**ディメンション**」ドロップダウン・リストから、そのディメンションを選択します。
- メンバー選択アイコンをクリックすると、「**選択内容を別々の行に配置**」または「**選択内容を別々の列に配置**」のオプションが表示されます。これを使用すると、選択内容がフォーム上の既存の最後の行または列の後の行または列に追加されます。たとえば、列 A に Acct1、Acct2 および Acct3 のメンバーが含まれるフォームの場合、「**選択内容を別々の列に配置**」を選択した状態でこれらのメンバーを選択すると、列 A、B、C としてそれぞれ Acct1、Acct2 および Acct3 が選択されます。このオプションを使用せずにメンバーを選択すると、列 A としてすべてのメンバーが選択されます。

この機能は、単一のメンバーに対してのみ使用でき、「子(含む)」などの関数を使用して選択されたメンバーには使用できません。たとえば、列 A に対して「Q」/「子(含む)」を選択している場合に、「**選択内容を別々の列に配置**」を選択しても、フォームのレイアウトは変更されません。
- 「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを閉じた後は、「**カウント**」を除くすべての設定が保持され、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスのメンバーはユーザー定義設定に基づいて表示されます。「**レイアウト**」タブに表示されるメンバーは、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスに定義されている表示設定を継承しません。かわりに、メンバー名を使用して表示されます。
- ディメンションについて異なるメンバー・セットを定義するには、[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。
- 表示、機能および印刷オプションを設定するには、[フォームの精度およびその他のオプションの設定](#)を参照してください。
- フォームまたはフォームの定義を含むレポートを設定するには、[レポートのカスタマイズ](#)を参照してください。

メンバーとしての代替変数の選択について

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。代替変数はローリング予測で展開、レポートする場合に特に役立ちます。代替変数をフォームのメンバーとして選択すると、その値は動的に生成される情報に基づきます。たとえば、フォームやレポート・スクリプトで月の値を毎月更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 CurMnth に設定できます。

各変数には割り当てられた値があり、それらの値は Oracle Essbase サーバーで一元的に変更できます。

ノート:

- フォームの値を開くか計算するとき、Oracle Hyperion Planning アプリケーションによって、代替変数がそれらに割り当てられた値に置き換えられます。

デフォルトでは、各代替変数は Essbase サーバーから 5 分(300 秒)ごとに取得され、キャッシュされます。SUBST_VAR_CACHE_LIFETIME アプリケーション・プロパティを追加し、その値を秒単位で設定し、取得間隔を変更できます。

- Planning 内で代替変数への値の作成および割当てを行います。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときに、Planning で使用できます。Planning を使用して値を作成し、代替変数に割り当てる手順は、[代替変数の操作](#)を参照してください。

Oracle Essbase Administration Services Console または ESSCMD を使用して、代替変数への値の作成および割当てを行うこともできます。

- 代替変数はフォームのコンテキストに適合する必要があります。「期間」ディメンションのメンバーとしての Qtr2 の値により、CurrQtr という名前の代替変数を選択できます。CurrYr という名前の代替変数を「年」ディメンションで選択しても、その値が Feb であれば有効になりません。アプリケーションまたはデータベース・レベルで代替変数を設定できます。

Essbase サーバー・レベルで代替変数を設定することもできます。

同じ代替変数が複数のレベルで存在します。Planning は、次の順序で検索するときに検出される最初の代替変数を使用します:

- データベース
 - アプリケーション
 - サーバー
- 代替変数がビジネス・ルールの実行時プロンプト用に使用可能であり、その値がビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー・セットに一致する場合、それらの代替変数のいずれかをメンバーとして選択できます。
 - Planning は代替変数を使用するときに(たとえば、フォームを開く場合)、その代替変数の有効性を確認します。フォームを設計するときには確認しないため、フォームを保存して開くことで、代替変数をテストする必要があります。
 - 代替変数が計算されるときに生じるエラーの詳細は、複数のログを確認できます。Essbase に含まれていない代替変数を使用する場合には、Essbase サーバー・ログを参照してください。フォームで有効でない代替変数の詳細は、Planning ログを参照してください。ログの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドを参照してください。

代替変数をフォームで指定するには:

- フォームを作成します([単一のフォームの作成](#)を参照)。
- 「メンバー選択」で、メンバーを選択する場合と同様に、右矢印、左印、二重矢印を使用して「選択したメンバー」に代替変数を移動します。

選択すると、代替変数にはアンパサンド(&)が先頭に付きます。例:

```
&CurrentScenario
```

3. 「OK」をクリックします。

メンバーとしてのユーザー変数の選択について

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、プランナは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

ユーザー変数でフォームを作成するとき、プランナはフォームを開く前に変数の値を選択する必要があります。たとえば、**Division** という名のユーザー変数を作成する場合、プランナはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。フォーム用に変数を初回に選択するときに、プリファレンスでこれを実行します。その後はプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。

フォームのユーザー変数を選択するには:

1. フォームを作成します([単一のフォームの作成](#)を参照)。
2. 「**メンバー選択**」では、矢印を使用して代替変数を「**選択したメンバー**」で移動し、メンバーを選択したのと同じ方法でユーザー変数を選択します。

ユーザー変数が現在のディメンションに対して表示されます。たとえば、エンティティ・ディメンションのユーザー変数は次のように表示される可能性があります。

Division = [User Variable]

選択すると、ユーザー変数には先頭にアンパサンドが付きます。例:

Idescendants(&Division)

3. 「OK」をクリックします。

データ検証の管理

データ検証規則の作成および更新

ビジネス・ポリシーおよびビジネス・プラクティスを実装するために、フォームで条件が満たされたときにチェックするデータ検証規則を構築できます。入力したデータが検証規則に違反したときに、検証メッセージを生成できます。また、送信されるプランニング・ユニット・データに対して、検証規則を使用して制限を構築したり、特定の条件を満たすデータを確認する確認者、所有者または通知者を指定することもできます。

たとえば、データ検証を使用して、会社のガイドラインから外れる資本費用が含まれる予算をプランナが送信するのを阻止することにより、部門の資本経費を会社のポリシーに準拠させることができます。データ検証規則を使用して処理できるシナリオの例は、[データ検証規則のシナリオ](#)を参照してください。

データ検証規則の定義には、次のメイン・タスクがあります：

- 条件が満たされたときに検証メッセージとともに表示したり別の色で表示するデータのセルまたは場所を指定します。
- ルールの評価に関与させるセルを指定し、適切にルールを定義します。
- このトピックに説明されているとおり、指定した場所でデータ検証規則を作成します。

検証規則を作成および更新するには：

1. 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。フォームを作成または編集し、「フォームの管理」ページで「レイアウト」タブをクリックします。
2. 「レイアウト」タブで、検証規則を追加または更新するグリッド、行見出し、列見出しまたはセルを右クリックします。

ノート：

「レイアウト」タブ内のセルの上にカーソルを置くと、コンテキスト・メニューでは、セルに検証規則が含まれるかどうかが表示されます。検証メッセージを表示するには、「[データ検証メッセージの表示](#)」を選択します。単一のセルを選択すると、コンテキスト・メニューも表示されます。

3. 「[検証規則の追加/編集](#)」を選択し、ルールを作成または更新します。
4. ルールを追加するには、「[ルールの追加](#)」をクリックし、ルールの名前と説明を入力します。

必要に応じて、「[場所](#)」からオプションを選択し、ルールを移動します。既存のルールと似たルールを作成するには、「[複製](#)」をクリックしてルールを更新します。

ルールを表示するには、「**ルールの表示**」をクリックします。[データ検証規則の表示](#)を参照してください。

5. ルールを更新します。

- a. 「**条件**」で、 をクリックし、条件文を開始するオプションを選択します: **IF**、**ELSE IF**、**ELSE**、**THEN**、**CHECK RANGE** または **RANGE**。

ルールの最初の部分には、IF 条件が含まれる必要があります。また、ルールには、特定の形式の THEN 条件も含まれる必要があります。[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

- b. 「**ソース・タイプ**」から、ルールによる評価のオプションを選択します。

「**ソース・タイプ**」リストには、条件に適したオプションが表示されます。たとえば、IF 条件に対しては、「**現在のセル値**」、「**セルの値**」、「**列値**」、「**行値**」、「**メンバー名**」、「**メンバー**」、「**ディメンション間メンバー**」、「**勘定科目タイプ**」、「**バージョン・タイプ**」、「**Var レポート・タイプ**」、「**UDA**」または「**属性**」などが含まれます。条件の各タイプの詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

- c. 選択した「**ソース・タイプ**」に「**ソース値**」の値が必要な場合は、それを入力します。値を入力するには、 をクリックしてオプションを選択するか、 をクリックしてフリー・フォーム値を入力します。

- d. 評価に適した演算子を「**=**」、「**!=**」、「**<**」、「**<=**」、「**>**」、「**>=**」、「**等しい**」、「**等しくない**」、「**次を含む**」、「**次で始まる**」または「**次で終わる**」、「**次に含まれる**」、「**次に含まれない**」から選択します。

たとえば、[データ検証の条件演算子](#)を参照してください。

- e. ルールに適した「**ターゲット・タイプ**」を選択します。

- f. 条件ビルダーの右側にある「**アクション**」領域でアイコンをクリックして条件を更新します:

-  現在の行の横に条件を追加します。
-  現在の行の条件を削除します。

- g. 更新する条件または条件ブロックを選択します。

条件ブロックを更新するには、条件ビルダーの上部にある「**条件**」領域のアイコンをクリックします:

-  検証ルール内に IF などの条件を追加します。条件は展開または縮小できます。[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。
-  選択した条件ブロックを削除します。
-  選択した条件を削除し、コピーしたものを新しい場所に貼り付けます。
-  選択した条件をコピーします。
-  選択した条件を新しい場所に貼り付けます。

-  条件内の選択対象をグループ化し、グループ用のカッコを追加します。設定したグループに加えて、条件がグループ化されるとこのグループ・ブロック内の IF 文がグループ化され、「カスタム・グループ」オプションが有効になります。
 -  選択した条件のグループを解除します。選択した条件からは、グループ用のカッコが削除されます。グループ化解除が選択されるたびに、条件から 1 つのグループが削除されます。
独自の条件グループを設定することもできます。それには、「カスタム・グループ」を選択して、ルール定義領域でグループを設定します。
選択した条件は影付きで表示されます。選択した条件をクリアするには、「条件」列の左側を再クリックします。
6. 右端の列にある「セルの処理」アイコン  をクリックし、処理命令を追加します。
[セルのフォーマットと移動パスの設定](#)を参照してください。
7. ルールをフォームで使用可能にする準備ができた後で、「**検証規則の使用可能**」を選択します。
- ヒント:
- ルールは、構築する際、使用可能にしなくても保存できます。この場合、エラーを解決してルールが検証および使用する準備ができた後、ルールを使用可能にして保存し、フォームで使用可能にできます。また、「**検証規則の使用可能**」をクリアすることにより、ルールを一時的に無効にすることもできます。
8. ルールの更新の終了後、ルールを検証します。
- a. 「**検証**」をクリックします。
検証ステータスが、ダイアログ・ボックスの上部に表示されます。変更を保存する前に、エラーを修正する必要があります。ルールを検証しなかったり、検証中に検出されたエラーを修正せずにダイアログ・ボックスを閉じると、更新は保存されません。
 - b. 検証中に検出されたエラーを修正した後、ルール定義領域の上にある「**検証規則の使用可能**」が選択されていることを確認し、アプリケーションでルールを有効にします。
 - c. ルールを検証した後、「**OK**」をクリックします。
9. オプション: 「フォームの管理」 ページで、ルールを表示して更新します。
- 「フォームの管理」 ページの右側にある「**検証規則**」 ペインで、、 または  をクリックしてルールを追加、編集または削除します。
 - 現在レベル以上のルールを表示するには、「フォームの管理」 ページ内でクリックし、「検証規則」 ドロップダウン・リストから検証ルールを選択します。
 - 同じ場所に複数のルールが定義されている場合に、ルールの優先度が同じであるときは、ルールが処理される順序を変更できます。ルールをリストで上下あるいは一番上または下に移動するには、ルールを選択して、矢印をクリックします。[データ検証規則の評価および実行の順序](#)を参照してください。
 - プランニング・ユニットの検証時に、現在ログインしているユーザーがフォームへのアクセス権を持たない場合に、フォームに関連する検証が実行されない

ようにするには、「このフォームへのアクセス権を持つユーザーについてのみ検証」を選択します。

10. 「フォームの管理」 ページで、フォームをプレビューして検証し、すべての検証エラーを解決してから、変更を保存します。

データ検証ルールが使用可能なフォームの場合、フォームがロードまたは保存されたときにルールが検証されます。フォームが保存されると、データ検証ルールが保存されます。 [単一のフォームの作成](#) を参照してください。

ユーザーは、フォームを開くと、「データ検証メッセージ」 ペインを使用して検証メッセージを表示および解決できます。 *Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド* を参照してください。

セルのフォーマットと移動パスの設定

ルールを設定した後、「セルの処理」 ダイアログ・ボックスを使用して、フォームにおけるセルの表示方法を設定し、データ検証に基づいて移動パスを更新します。

セルをフォーマットし、移動パスを設定するには:

1. 「データ検証ルール・ビルダー」 ダイアログ・ボックスで、右端の列にある「セルの処理」 アイコン  をクリックします。

アイコンが表示されない場合は、ルールが有効であり、ルールでセルの処理命令が許可されていることを確認してください。セルの処理命令はたとえば ELSE、RANGE および THEN 条件に含まれています。このアイコンは、ルールに必要なすべての列が選択されるまで表示されません。 [データ検証ルールの作成および更新](#) を参照してください。

2. 「セルの処理」 ダイアログ・ボックスで、このルールに定義されている条件が満たされた場合のフォームにおけるセルの表示方法を設定します。

ルールが使用可能であっても、セルの背景色、検証メッセージまたは移動パスのうち少なくとも1つのオプションを指定しないかぎり、ルールによる検証は行われません。

- セルの背景色を追加または更新するには、  をクリックします。セルの背景色を削除するには、  をクリックします。
- セルの検証メッセージを表示するには、「検証メッセージ」 フィールドにメッセージを入力します。フォームのセルの上にマウスを置くと表示されるコンテキスト・メニューで「データ検証メッセージの表示」を選択すると、このテキストが表示されます。また、検証ルールによってデータ・セルにフラグが設定されており、「データ検証メッセージ」 ペインにメッセージを表示」 チェック・ボックスが選択されている場合、このテキストは「データ検証メッセージ」 ペインにリンクとしても表示されます。データ検証エラーの表示および解決の詳細は、 *Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド* を参照してください。
- セルに指定されたデータ検証ルールに基づいてプランニング・ユニット移動パスを更新するには、「承認」 オプションを選択します。

データ・セルが技術的に有効な状態にあるときに、セルの背景色の更新や検証メッセージの指定のみを行う場合、このオプションを「なし」のままにし、移動パスを変更しないことを指定できます。また、「移動パスの更新」または「移動しない」(条件が満たされた場合でもプランニング・ユニットが移動されないようにする)を選択することもできます。 [プランニング・ユニットの移動パスの変更](#) を参照してください。

3. 「OK」をクリックします。

ルールの更新は、ルールの「処理」列に表示されます。セルの色を指定した場合、その色が表示されます。検証メッセージをプレビューするには、「処理」列の上にカーソルを置きます。

データ検証ルールの表示

処理命令を使用してデータ検証ルールを設定した後、「ルールの表示」ダイアログ・ボックスを使用して、選択したグリッド、行、列またはセルに適用されるすべてのルールを表示できます。

データ検証ルールを表示するには:

1. 「データ検証ルール・ビルダー」ダイアログ・ボックスで、「**ルールの表示**」をクリックし、フォーム内のこの場所におけるこのレベル(セル、行、列またはグリッド)のルールをすべて表示します。
2. ルール名を選択し、ルールをダブルクリックするか「**OK**」をクリックして、詳細を表示します。

データ検証ルールに関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

データ検証ルールの評価および実行の順序

フォーム内のデータ更新ルールについては、ルール評価の優先度は、条件の優先度、ルールの場所、およびルール・リスト内のルールの位置(同じ場所に複数のルールが存在する場合)によって決まります。最初に、セル・レベルのルールが処理されます。次に、列レベルのルールが処理され、続いて、行レベルのルールが処理されます。最後に、グリッド・レベルのルールが処理されます。これらのルールは、各レベルのルール・リスト内の位置に基づいて評価されます。

場所と位置により、ルールの処理順序が決まります。ただし、データ・セルに適用されるルールは、処理命令の優先度によって決まります。このため、セル・レベルのルールに優先度 4 の処理命令が含まれ、グリッド・レベルのルールに優先度 5 の処理命令が含まれる場合、データ・セルにはグリッド・レベルのルールが適用されます。すべてのルールの処理命令の優先度が同じである場合は、最初に処理されたルールが優先されます。優先度は、検証メッセージ、色、「移動しない」移動パス・オプション、またはこれらの設定の組合せがセルの処理命令に指定されているかどうかによって決まります。

表 8-1 フォームのルール優先度

デフォルトの条件優先度	検証メッセージ	色	移動しない
1 (最低)	X		

表 8-1 (続き) フォームのルール優先度

デフォルトの条件優先度	検証メッセージ	色	移動しない
1		X	
1	X	X	
2			X
3	X		X
4		X	X
5 (最高)	X	X	X

データ検証ルールに関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

ルール・ビルダーによってサポートされている条件

データ検証ルール・ビルダーによってサポートされている条件は、IF、ELSE、ELSE IF、THEN、CHECK RANGE および RANGE です。

これらの条件によってサポートされている値の詳細と例は、次の項を参照してください:

- **IF、ELSE、ELSE IF:** [IF 条件値](#)。
- **THEN:** [THEN 条件値](#)。
- **CHECK RANGE、RANGE:** [RANGE 条件値](#)。

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

IF 条件値

IF 条件についてデータ検証ルール・ビルダーによってサポートされている値は、次のとおりです:

- [現在のセル値](#)
- [セルの値](#)
- [列値](#)
- [行値](#)
- [ディメンション間メンバー](#)
- [メンバー名](#)
- [メンバー](#)
- [勘定科目タイプ](#)
- [バージョン・タイプ](#)
- [差異レポート・タイプ](#)
- [UDA](#)
- [属性](#)

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

現在のセル値

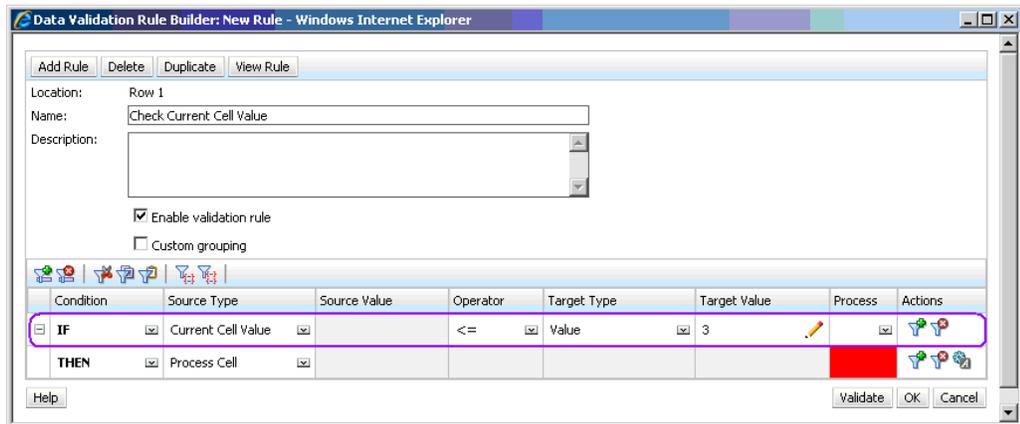
アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの値がこの条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:



条件評価:

前の図に示す条件の場合、条件が評価されると、メンバー Row_Member1 を持つ行 1 のセルは赤になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

セルの値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定したセルの値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:



条件評価:

設計時セルは、次の図に示すように、データ入力時に 1 つ以上のデータ・セルまで展開できます。セルの値は、展開されたすべてのデータ・セルの値の合計です。たとえ

ば、セル A1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+2+5+6+9+10=33)です。また、セル A2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(13+14+17+18=62)です。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

列値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定した列の値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Column Value	A	<	Value	3		
----	--------------	---	---	-------	---	--	--

条件評価:

設計時列は、次の図に示すように、データ入力時にデータ・セルまで展開できます。列の値は、現在の行の場所にあるこの列内の展開されたすべてのデータ・セルの値の合計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、これに応じて現在の行も変更されます。

たとえば、メンバー Row_Member1 を持つ行 1 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+2=3)になります。メンバー Row_Member3 を持つ行 1 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(9+10=19)になります。同様に、メンバー Row_Member5 を持つ行 2 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、緑色の線で囲まれたセルの値の合計(17+18=35)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

行値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定した行の値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Row Value	1	!=	Value	10
----	-----------	---	----	-------	----

条件評価:

設計時行は、次の図に示すように、データ入力時に1つ以上のデータ・セルまで展開できます。行の値は、現在の列の場所にあるこの行内の展開されたすべてのデータ・セルの値の合計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、それに応じて現在の列も変更されます。

たとえば、メンバー **Column_Member1** を持つ列 **A** の任意のセルに対してルールが評価される場合、行 1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+5+9=15)になります。同様に、メンバー **Column_Member2** を持つ列 **A** の任意のセルに対してルールが評価される場合、行 2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(14+18=32)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

ディメンション間メンバー

アクション:

アクションが実行されるのは、ディメンション間メンバーによって参照されるデータ・セルの値が条件を満たす場合です。現在のデータ・セル・メンバーを使用して、メンバーがディメンション間に指定されていないディメンションのセルを完全修飾します。このメンバー名は、フリー・フォームで入力されます。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンショナル間メンバーがあります。ターゲット値には、各ディメンションの1つのメンバーのみを含めることができますが、ディメンションのメンバーのみを行または列として含める必要があります。

条件定義:



条件評価:

前のルールがグリッド・レベルで適用されると、このルールはフォームの各セルで呼び出され、紫色の線で囲まれたセルの値とこのセルの値が比較されます。このため、Row_Member5 のセル->Column_Member2 は赤色になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

メンバー名

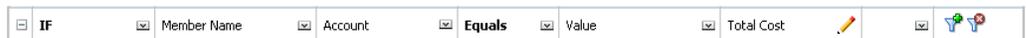
アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定したディメンション・メンバーがある場合です。フォームが作成されたプラン・タイプに、選択したディメンションのメンバー名が含まれる必要があります。

演算子:

演算子には、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」を使用できます。メンバー名であるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

条件定義:



メンバー

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定したディメンション・メンバー(または、指定した関数の評価結果として生成されるメンバーの1つ)がある場合です。

演算子:

使用可能な演算子は「次に含まれる」および次に含まれないです。メンバーであるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

属性を含める

ルールには属性値を含めることができます。「ソース・タイプ」が「属性」の場合、使用可能な演算子は「次である」で、属性値を「ターゲット値」フィールドに直接入力できます。「ソース・タイプ」が「メンバー」の場合、「ターゲット値」フィールドで

「次に含まれる」、または次に含まれない演算子を選択し、 をクリックして「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの「変数」タブをクリックして、属性を選択できます。メンバー選択関数セレクトアを使用して、「等しくない」や「以上」などの属性の関数を選択できます。

データ検証ルールに属性値を使用する場合、属性の評価方法に注意してください。1つのルールが1つまたは複数のディメンションからの1つまたは複数の属性を参照する場合、同じ属性ディメンションからの属性値はORとして評価され、異なる属性ディメンションからの属性はANDとして評価されます。たとえば、ルールに属性 IN Red、Blue、True、Big が含まれる場合、いずれか(Red OR Blue) AND True AND Big のすべてのメンバーが選択されます。詳細は、[メンバーとしての属性値の選択について](#)を参照してください。

メンバーのソース・タイプの条件定義

<input type="checkbox"/> IF	<input type="checkbox"/> Member	<input type="checkbox"/> Account	<input type="checkbox"/> In	<input type="checkbox"/> Value	<input type="checkbox"/> IDescendants("Total Cost")			
-----------------------------	---------------------------------	----------------------------------	-----------------------------	--------------------------------	---	---	---	---

属性のソース・タイプの条件定義

<input type="checkbox"/> IF	<input type="checkbox"/> Attribute	<input type="checkbox"/> Entity	<input type="checkbox"/> Is	<input type="checkbox"/> Value	<input type="checkbox"/> red			
-----------------------------	------------------------------------	---------------------------------	-----------------------------	--------------------------------	------------------------------	---	---	---

勘定科目タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定した勘定科目タイプの勘定科目がある場合です。現在サポートされているすべての勘定科目タイプ(費用、収益、資産、負債、資本、保存された仮定)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

<input type="checkbox"/> IF	<input type="checkbox"/> Account Type	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> Is	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> Expense	<input type="checkbox"/>		
-----------------------------	---------------------------------------	--------------------------	-----------------------------	--------------------------	----------------------------------	--------------------------	---	---

バージョン・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したバージョン・タイプのバージョンがある場合です。現在サポートされているバージョン・タイプ(標準ボトムアップ、標準トップダウン)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Version Type	Is	Standard Botto...		
----	--------------	----	-------------------	--	--

差異レポート・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定した差異レポート・タイプの勘定科目がある場合です。使用可能な差異レポート・タイプ(費用、費用外)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Var Reporting Type	Is	Non-Expense		
----	--------------------	----	-------------	--	--

UDA

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したディメンションのメンバーに関連付けられたこのUDAがある場合です。UDA参照は、選択したディメンションに基づいて選択されます。条件は、選択した値と等しいこのディメンションのUDAに基づいています。UDA値は、ドロップダウン・リストから選択する必要があります。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	UDA	Scenario	Is	Value	ACTUAL		
----	-----	----------	----	-------	--------	--	--

属性

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したディメンションのメンバーに関連付けられたこの属性がある場合です。属性参照は、選択したディメンションに基づいて選択されます。条件は、選択したターゲット値と等しいこのディメンションの属性に基づいています。

RANGE 条件値

CHECK RANGE および RANGE 条件は一緒に使用されます。これらの条件は、データ検証ルール・ビルダーを使用して、THEN 句内でまたは独立して使用できます。

参照:

- [CHECK RANGE](#)
- [RANGE](#)

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

CHECK RANGE

アクション:

特定の範囲内に収まる必要がある値を定義します。

値:

この値には、「現在のセル値」、または特定の「行」、「列」または「セル」の値を使用できます。

RANGE

アクション:

CHECK RANGE 条件に定義されている値に有効な範囲を定義します。この範囲には、最小値以上かつ最大値未満のすべての値が含まれます。CHECK RANGE 条件に指定した値がこの範囲内である場合、この条件によって定義される処理命令は、ルールが呼び出されるデータ・セルに適用されます。複数の値範囲を定義し、範囲ごとに異なる処理命令を指定できます。

値:

範囲の最小値と最大値は、「セルの値」、「現在のセル値」、「行値」、「列値」、ディメンション間値を使用するか、フリー・フォーム値を入力することにより、定義できます。たとえば、次のルールにより、現在のセル値が 5 以上 10 未満であることを確認できます。この条件が満たされない場合、セルは赤になります。

条件定義:

Condition	Source Type	Source Value	Operator	Target Type	Target Value	Process	Actions
CHECK RANGE	Current Cell Value						
RANGE	Value	5		Value	10		

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

データ検証の条件演算子

データ検証ルール・ビルダーの条件演算子には、次のタイプの比較を組み込むことができます:

- 次の演算子を使用した数値比較:
 - = (次と等しい)
 - != (次と等しくない)
 - < (次より小さい)
 - <= (次以下)
 - > (次より大きい)
 - >= (次以上)
- 次の演算子を使用した文字列値比較:
 - 次と等しい
 - 次と等しくない
 - 次を含む
 - 次で始まる
 - 次で終わる
 - 次に含まれる
 - 次に含まれない

ルールにより、テキストやスマート・リストなどの様々なデータ型を持つセルを比較できます。セルのデータ型が保持されるのは、常に1つのセルからの値が参照される場合です。「現在のセル値」と「ディメンション間メンバー」を使用してセル値を参照する場合はこれに該当します。比較対象の値が複数のセルからの値(行値、列値およびセル値など)である場合、データ型はデフォルトで **double** 型に設定されます。

これらのデータ型の値を比較する場合、次のような処理が行われます:

- **double** 型の場合、**double** 値に対して文字列表現(123.45 など)が使用されます。**double** 型が小数部を持たない整数(123.00 など)である場合、整数値(この場合、123)が使用されます。
- スマート・リストの場合、ルールには、**Oracle Essbase** に格納されているスマート・リスト名と数値が使用されます。これらのルールでは、スマート・リスト・ラベルは使用されません。これは、スマート・リスト・ラベルはユーザー・ロールに応じてユーザーごとに異なる可能性があるためです。

- テキストの場合、ルールで比較対象として使用するのはテキスト値のみです。
- その他すべてのデータ型(通貨、通貨以外、パーセンテージおよび日付)は、double型として処理されます。
- 日付の場合、ルールで比較対象として使用するのは、Essbaseに格納されている数値です。たとえば、ユーザーがMM/DD/YYYYというフォーマットを前提として12/11/1999と入力した場合、この値は19991211としてEssbaseに格納され、この数値が比較対象として使用されます。

表 8-2 「次で始まる」、「次で終わる」および「次を含む」の結果の例

演算子	比較値	比較先の値
次で始まる	2.0	2
	1234.0	12.0
	101.0	10
	2.0	2.0
	2.5	"2."
	"YearTotal"	"Year"
次で終わる	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	"YearTotal"	"al"
	"YearTotal"	"Total"
次を含む	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	2.5	2.5
	23.567	3.5
	23.567	67
	23.567	"23."
	23.567	".56"
"YearTotal"	"al"	

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)

- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証ルールシナリオ](#)

データ検証ルールシナリオ

これらのシナリオは、データ検証がビジネス・ポリシーの実装にどのように役立つかについての例となります。

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [セルのフォーマットと移動パスの設定](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)

シナリオ 1

John は、Acme, Inc という会社で働くコンサルタントで、フォームを設計したり、会社のポリシーを実施するデータ検証ルールを実装しています。彼は、実際のコスト合計が予算額を超えたときに実績額を赤色で示す検証ルールを実装するよう求められました。このテストは、アプリケーションで年度および期間ごとに繰り返す必要があります。John は、次の図のようにフォームを設計し、ディメンション間メンバーを使用してセル・レベルにデータ検証ルールを追加しました。

設計時のフォームのレイアウト:

Point of View	
BU Version_1	entity1
Page	
Columns	
A	
FY09, FY10	
IDescendants(YearTotal)	
Rows	
1	Actual Units, Rate, Total Cost
2	Budget Units, Rate, Total Cost

設計時のデータ検証ルール:

データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

		FY09								FY10			
		Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	Jan	Feb	Mar	Q1
Actual	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	14	7	26
	Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	4	4	4	12
	Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	3780	20	56	28	312
Budget	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	13	7	25
	Rate	4	6	3	13	15	15	9	52	5	4	4	13
	Total Cost	12	24	18	169	180	360	189	3640	25	52	28	325

ヒント:

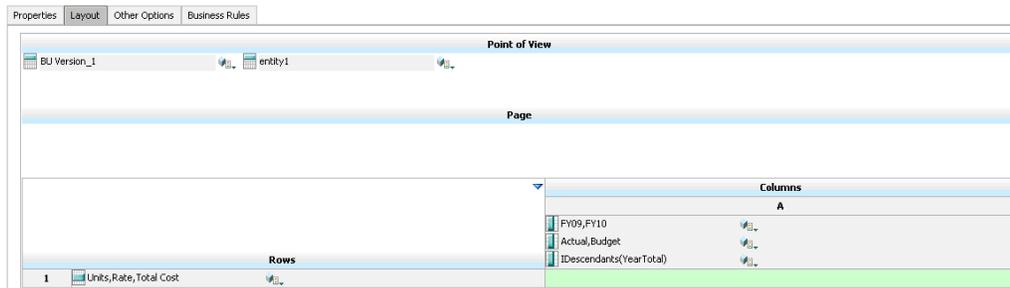
- John は、コスト合計を分割して独立したセグメントとし、このセグメントにデータ検証ルールを適用することにより、パフォーマンスをわずかに向上させることができます。ただし、これを行うと、新規のアカウントとシナリオがフォームに追加されるためにメンテナンス作業が増えます。
- 「実績」の年合計期間のみを赤色で示すというように要件が変更された場合、John には 2 つのオプションがあります。最善のオプションは、年合計が「期間」メンバーであるかどうかをチェックする IF エントリを追加する方法です。もう 1 つのオプションは、年合計メンバーを分割して独立した列とし、パフォーマンスを向上させる方法です。ただし、これを行うと、分散ロジックが破綻し、「年」の列ヘッダーが繰り返されるため、新規年度が追加されるにつれてフォームのメンテナンスがより困難になります。

その他のシナリオについては、[データ検証ルールのシナリオ](#)を参照してください。

シナリオ 2

シナリオ 1 で John によって設計されたフォームをレビューした後、Acme は、「予算」を行ではなく列として配置することにしました。この要件を実装するには、John は、軸内でメンバーを移動してフォームのレイアウトを変更できます。ただし、データ検証ルールを更新する必要はありません。John は、次の図のようにフォームを更新しました。

設計時のフォームのレイアウト:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

	FY09										Budget	FY10			
	Actual											Actual			
	Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	Jan	Feb		Mar	Q1		
Units	3	4	6	13	12	24	21	70	70	5	14	7	26		
Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	52	4	4	4	12		
Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	3700	3640	20	56	28	312		

その他のシナリオについては、[データ検証ルールシナリオ](#)を参照してください。

シナリオ 3

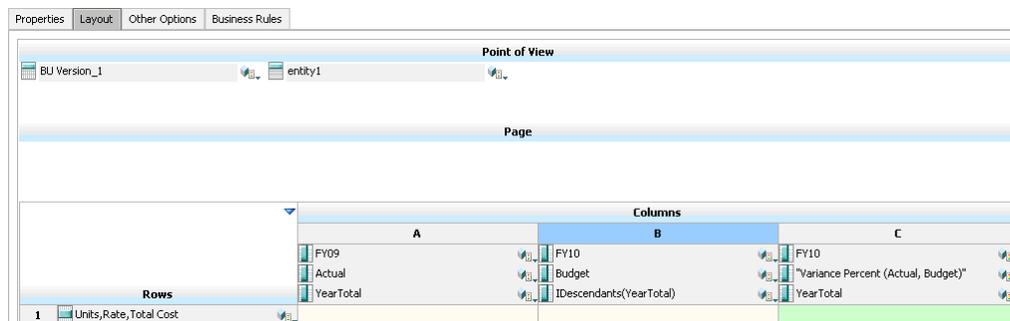
これらのフォームを正常にロール・アウトした後、John は、次のポリシーを実装するよう求められました。それは、今年度の予算金額が前年度の実績金額を大幅に超えないことを確認するためです。差が5%を超える場合、差が赤色で示されます。

John は、メンバー式を持つメンバーを使用して、今年度の予算金額と前年度の実績金額の差異を計算することにしました。次のメンバー式を追加しました:

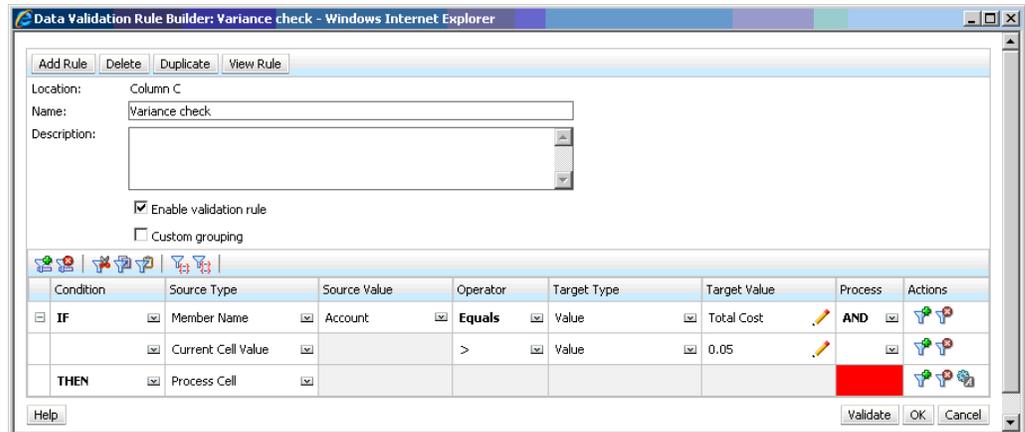
```
@varper(@Prior("Actual", 1, @Relative("Year", 0)), budget)/100;
```

John は、次の図に示すようにフォームを設計し、セル・レベルでデータ検証ルールを追加しました。John は、「メンバー名」を使用して検証をコスト合計にのみ適用しました。

設計時のフォームのレイアウト:



設計時のデータ検証ルール:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

	FY09	FY10					FY10
	Actual	Budget					Variance Perce
	YearTotal	⊕ Q1	⊕ Q2	⊕ Q3	⊕ Q4	⊖ YearTotal	YearTotal
Units	70.0	60.0	20.0	20.0	15.0	115.0	39.13%
Rate	54.0	24.0	4.0	4.0	5.0	37.0	-45.95%
⊖ Total Cost	3780.0	1440.0	80.0	80.0	75.0	4255.0	11.16%

ヒント:

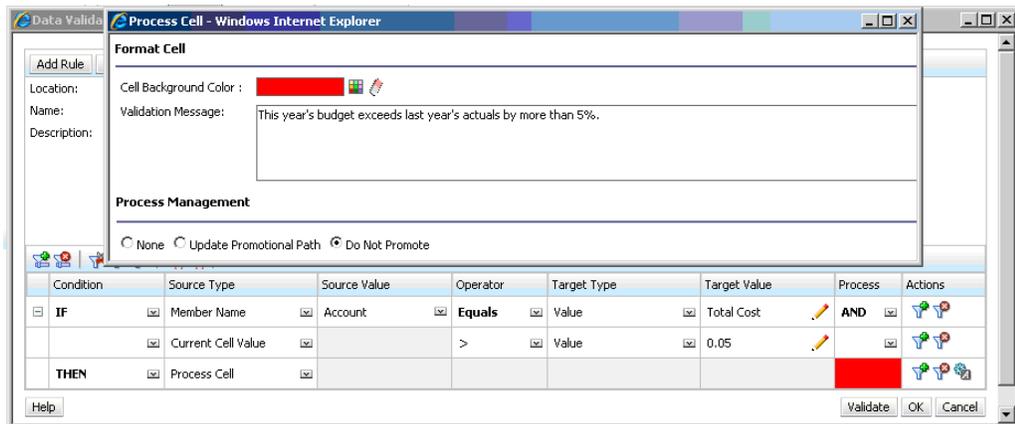
- John がアウトラインの変更を許可されていない場合、またはメンバー式のパフォーマンスに問題が発生した場合、式の列を使用できます。式の行と列を使用したフォームの設計を参照してください。
- John は、次の理由により、このルールを「差異の割合(%)」列に定義します。
 - パフォーマンスが向上します。ルールは、「差異の割合(%)」列のセルにおいてのみ評価されます。これに対し、ルールが年合計に割り当てられている場合は、今年度の予算についてすべての期間でルールを評価することが必要になってしまいます。
 - ユーザーがデータ検証メッセージに対応しやすくなります。John は、差異が大きいという内容のメッセージを、年合計に追加するのではなく、「差異の割合(%)」列に追加できます。これにより、ユーザーは、差異を確認するために「差異の割合(%)」を探さなくて済みます。
- 年合計と「差異の割合(%)」の両方を赤色で示すことが要件の一部であった場合、John は両方を赤色で示すことができます。

その他のシナリオについては、データ検証ルールのシナリオを参照してください。

シナリオ 4

セルを赤色で示すのみでなく、今年度の「予算」が前年度の「実績」金額より大幅に多い(5%を超える)ときに、ユーザーがプランニング・ユニットを上位へ移動できないようにすることも必要です。この要件を実装するために John に必要な作業は、次の図に示すように、データ検証ルールの処理命令を編集し、「移動しない」を選択することです。

設計時のデータ検証ルール:



その他のシナリオについては、[データ検証ルールシナリオ](#)を参照してください。

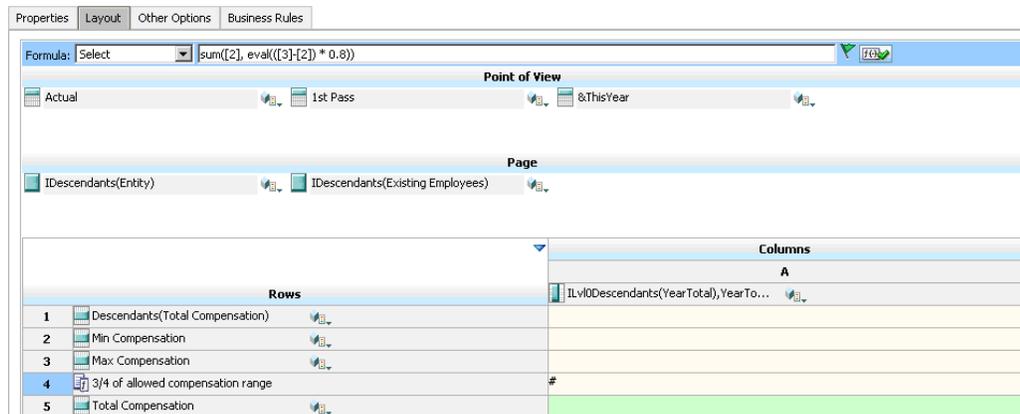
シナリオ 5

最後に、John は、特定部門の従業員の合計報酬が許容範囲内に収まっているかどうかを検証するデータ検証ルールを設計するよう求められました。このルールにより、「運用」部門の「既存の従業員」を評価します。これは、「合計報酬」が許可された「最小」より大きく、従業員の等級に応じた報酬範囲の4分の3以下である場合、アクションは必要ないと検証します。

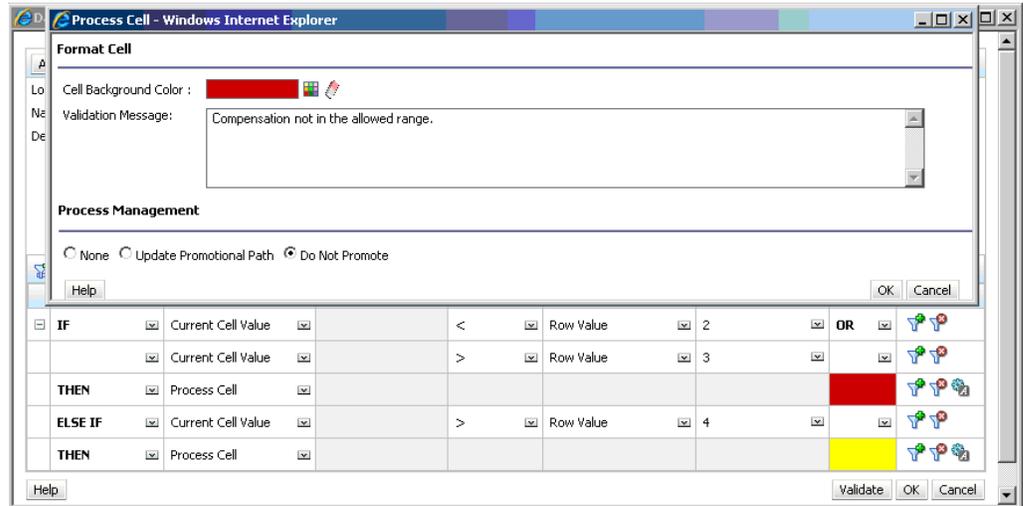
「合計報酬」が報酬範囲の4分の3を超える場合、検証メッセージが表示され、プランニング・ユニットは人事部長の承認を受ける必要があります。この値が「最小」より小さい場合や、「最大」より大きい場合は、エラーが生成され、ユーザーはそのプランニング・ユニットを上位に移動できなくなります。

John は、「フォームの管理」ダイアログ・ボックスから従業員費用サマリーフォームを開きました。このフォームでは、ページに従業員と部門、行に勘定科目(「合計報酬」など)、および列として期間があります。検証を構築しやすくするために、John は、次の図に示すように、報酬範囲の4分の3を計算するための計算行を追加し、フォームに最小報酬および最大報酬メンバーを追加しました。従業員の等級に応じた最小報酬および最大報酬は、メンバー式を使用して計算されます。

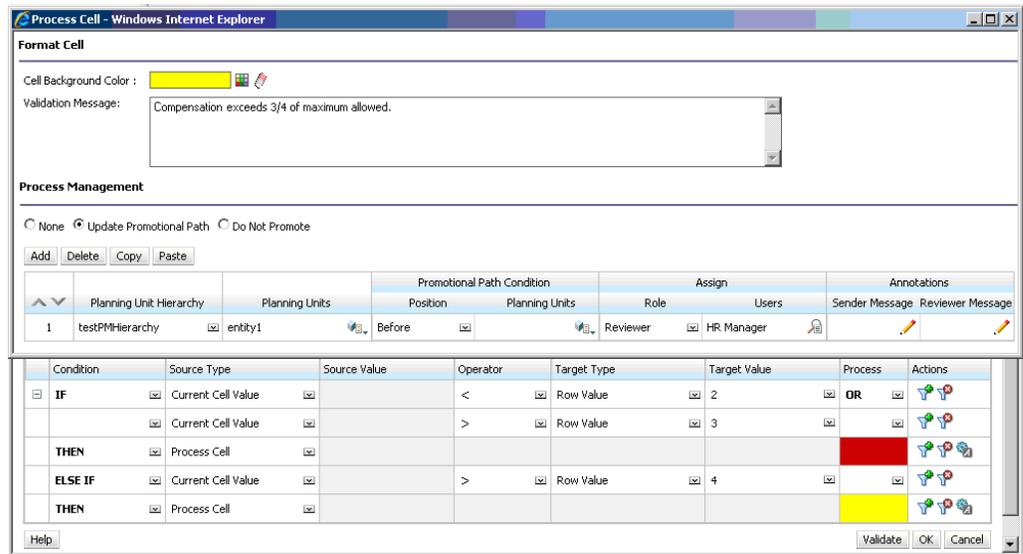
設計時のフォームのレイアウト:



プランニング・ユニットの移動を阻止するデータ検証ルール:



人事部長を確認者として追加するデータ検証ルール:



データ検証が適用され、検証メッセージが表示された、データ入力時のフォーム:

データ検証ルールシナリオ

Scenario: Actual													Version: 1st Pass		
Page	Operations	Existing Employees												Go	
		Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec		
Salary		3000	3000	3000	3000	3000	3000	3000	3010	3100	3300	3300	3300		
Ment															
Overtime						500									
Adjusted Salary		3000	3000	3000	3000	3500	3000	3000	3010	3100	3300	3300	3300		
Bonus													10000		
Sign On Bonus															
Commissions															
Total Salary		3000	3000	3000	3000	3500	3000	3000	3010	3100	3300	3300	13300		
Health Care Costs		55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55		
Severance															
Other Compensation															
Turnover Adjustment															
Min Compensation		2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000		
Max Compensation		3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	9500		
3/4 of allowed compensation		3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	8000		
Total Compensation		3055	3055	3055	3055	3355	3055	3055	3065	3155	3355	3355	13355		

Salary exceeds 3/4 of maximum allowed.

Data Validation Messages: Salary not in the allowed range. [3]: 1, 2, 3; Salary exceeds 3/4 of maximum allowed. [2]: 1, 2

その他のシナリオについては、[データ検証ルールシナリオ](#)を参照してください。

予算編成プロセスの管理

予算編成プロセスについて

プランニング・ユニットを使用して、予算の追跡およびステータスの確認、問題やプランニング・ユニット所有権の処理ができます。予算サイクル期間は短縮されます。

- 承認経路は組織の構成から独立しています
- 例外と問題の領域はハイライト表示されます
- 監査情報には注釈とプロセス・ステータスが含まれます
- レビューには注釈とコメントが含まれます

プランニング・ユニット

プランニング・ユニットはシナリオ、バージョンおよびエンティティまたはエンティティの一部の組合せです。シナリオとバージョンはレビュー・サイクルの基礎です。プランニング・ユニットはシナリオとバージョンに対してプランニング・データを送信します。たとえば、プランニング・ユニットを、バージョン(「ベスト・ケース」)、エンティティ(「New York」)およびシナリオ(「実績」)で構成することができます。また、プランニング・ユニットは、エンティティ内にセカンダリ・ディメンションを含めて、プランニング・ユニットの細かさを調整できます。

レビュー・プロセス

予算プロセスが完了するまで、プランニング・ユニットは確認者間を移動します。レビュー・プロセスは、プランニング・ユニットに対して所有者および確認者を選択したときに設定した移動パスに沿って行われます。ただし、イベントにより移動パスの変更がトリガーされた場合は異なります。移動パスに影響するイベントは次のとおりです:

- 給与、新規採用または資本設備などの予算項目の費用の境界を超過する場合、または境界に到達しない場合
- 現在の所有者が予算を、追加情報を求めて前の所有者に戻す場合
- 現在の所有者が、必ずしも移動パスにいないが許可されたユーザーに支援を求める場合

選択した承認テンプレートによって、予算を確認する最初のユーザーが決まります(プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定を参照)。最初のユーザーは、割り当てられたタスクを完了し、次に(「ボトム・アップ」テンプレートを)上位に移動したり、(「配分」テンプレートを)送信します。これにより、次の所有者に予算に注目するよう警告します。予算がユーザー間で受渡しされれば、他のユーザーにも通知されます。

各確認者は、予算を次の確認者に送信する前にプランニング・ユニットを検証する必要があります。検証により、確認者が処理するプランニング・ユニットに定義されて

いるすべてのデータ検証ルールが実行され、プランニング・ユニットの移動パス内のすべてのデータ・エラーまたは変更がレポートされます。[プランニング・ユニットの移動パスの変更](#)を参照してください。

ヒント:

「承認」に(ユーザー ID ではなく)ユーザーのフルネームを表示するには、[システム設定の指定](#)の説明に従って、オプション「ユーザーのフル・ネームの表示」を選択します。

プランニング・ユニット階層

プランニング・ユニット階層には、レビュー・プロセスの対象となるプランニング・ユニットとエンティティが含まれます。

プランニング・ユニット階層メンバー間の親/子関係はレビュー・プロセスに影響します:

- 親を上位へ移動または拒否すると、その子は承認されないかぎり上位へ移動されるか、拒否されます。親の所有者は子の所有者になります。
- 親を承認すると、その子は承認されます。
- すべての子が同じ所有者に上位へ移動されると、親は所有者に移動されます。
- すべての子のステータスが1つのステータス、たとえば「サインオフ済」に変更されると、親のステータスも同じステータスに変更されます。

子に別の所有者がいる場合、親のステータスを変更できません。子が異なるユーザーによって上位へ移動、送信またはサインオフされた場合、親には所有者がなく、予算管理者のみがそのステータスを変更できます。

データ検証ルール

ビジネス・ポリシーおよびビジネス・プラクティスを実装するために、管理者はフォームで条件が満たされたときにチェックするデータ検証ルールを構築できます。ルールを使用して、検証メッセージの生成、送信されるプランニング・ユニット・データに対する制限の適用、および特定の条件を満たすデータを確認する特定の確認者または所有者の指定を行うことができます。

例:

- プランニング・ユニットの移動パスの条件付け
- 無効なデータを含むプランニング・ユニットの移動の防止

プランニング・ユニットの移動パスに影響するルールを設計する場合、これらのルールが評価および適用される順序を理解する必要があります。データ検証ルールの設計と予想される結果の詳細は、[データ検証の管理](#)を参照してください。

タスク・リスト

タスク・リストは、タスク、手順および終了日を一覧表示することで、ユーザーにプランニング・プロセスの手順を示します。管理者や対話型ユーザーはタスクやタスク・リストを作成、管理します。

承認通知用電子メールの設定

管理者は、他のユーザーが電子メールの通知を有効にする前に、電子メール・サーバーの詳細を指定する必要があります。承認通知用の電子メール・サーバーの詳細は、

EPM レジストリから取得します。これは、「共通設定」の「EPM System コンフィギュレータ」を使用して設定します。

電子メール・サーバーを指定するには、*Oracle Enterprise Performance Management System セキュリティ構成ガイド*を参照してください。

「アプリケーション設定」ページで、承認通知を有効にします。電子メールの通知を有効にすると、ユーザーはプランニング・ユニットの所有者になったとき、または通知対象のユーザーとして指定されたときに電子メールを受信します。この機能はSMTP電子メール・システムのみで使用可能です。

ノート:

承認電子メール通知は、アプリケーション所有者が有効にする必要があります。アプリケーション所有者がこれを有効にしない場合、管理者が承認通知を有効にしても、他のユーザーがプランニング・ユニットを移動したときや、プランニング・ユニットで他のアクションを実行したときに電子メール通知は送信されません。

承認通知を有効にするには、[アプリケーション・デフォルトの設定](#)を参照してください。

予算策定プロセスの定義

承認の役割

Oracle Hyperion Planning の承認を管理するには、承認の役割を割り当てられている必要があります。

- 承認管理者 - 承認管理者は一般的に組織内のある地域を担当するビジネス・ユーザーであり、その地域の承認プロセスを管理する必要がありますが、**Planning** 管理者の役割を付与される必要はありません。承認管理者の役割には、承認所有権割当て者、承認プロセス・デザイナー、承認スーパーバイザといった **Planning** の役割が含まれます。
- 承認所有権割当て者 - プランナの役割で実行できるタスクを行います。また、書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、所有者の割当て、確認者の割当ておよび通知対象のユーザーの指定を行えます。
- 承認プロセス・デザイナー - プランナおよび承認所有権割当て者の役割で実行できるタスクを行います。また、書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、書込み権限を持つエンティティのセカンダリ・ディメンションとメンバーの変更、プランニング・ユニット階層に対するシナリオとバージョンの割当ての変更、アクセス権を持つフォームのデータ検証ルールの編集を行えます。
- 承認スーパーバイザ - 書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、プランニング・ユニットの停止と起動、プランニング・ユニットに対する任意のアクションを実行できます。承認スーパーバイザはプランニング・ユニットを所有していない場合でも、前述のアクションを実行できます。ただし、プランニング・ユニットを所有していない場合、そのデータの変更は行えません。

これらの役割の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイド*を参照してください。

承認プロセス

Oracle Hyperion Planning では、配分、ボトムアップ、フリーフォームの各予算策定がサポートされています。通常は、上位のユーザーがロードされたデータを含めたプランニング・ユニットを開始し、データ・エントリを直属の下位のメンバーに委任し、そのメンバーがさらに直属の下位に配分する、などと続きます。予算が配分されるまで、ユーザーは予算にアクセスできません。

予算プロセスを定義するには、管理者が次の項目を定義します:

- プランニング・ユニット階層
- プランニング・ユニット階層の所有者と確認者
- 送信したデータを評価する検証ルール

ユーザーが提出した予算データには、検証ルールが適用されます。データが検証をパスした場合、予算は次の所有者へ移動し、元のユーザーは所有者として再度承認されないかぎりデータを編集できなくなります。提出プロセスでは、現在の所有者のみ編集可能なようにデータがロックされます。

承認操作およびデータ検証

データ検証を起動する承認操作の間、フォーム上のユーザー変数およびコンテキスト・ユーザー変数は、すべての可能な入力の結果セットの個別の組合せに置き換わります。POV でのユーザー変数とコンテキスト・ユーザー変数はページとして処理されます。

ノート:

ユーザー代替変数の結果を表示するには、データ検証レポートのタスク・リストに移動します。フォームで故意に検証が失敗するようにして、レポートに表示するプランニング・ユニットの検証操作を実行する必要があります。

レビュー・プロセスの開始とサポート

管理者がレビュー・プロセスを開始した後、プランニング・ユニットはあるレビュー担当者から別の担当者へ、予算プロセスが完了するまで移動します。選択した承認テンプレートによって、予算をレビューする最初のユーザーが判別されます。

確認プロセスを開始するには:

1. 「ツール」、「承認の管理」の順に選択します。
2. 「シナリオ」で、シナリオを選択します。
3. 「バージョン」で、バージョンを選択します。
4. 「実行」をクリックし、選択したシナリオとバージョンの組合せに関連付けられたプランニング・ユニットを表示します。

リストされたプランニング・ユニットは承認に使用できます。

選択したシナリオとバージョンで開始されたプランニング・ユニットがない場合、次のメッセージが表示されます: 「選択されたシナリオとバージョンの組合せにプランニング・ユニット階層を割り当てていません。」

5. 「ツリー・ビュー」を選択し、「プラン・サイクル」で「開始」をクリックして、確認プロセスを開始します。

ノート:

プランニング・ユニット階層に「ボトム・アップ」テンプレートが使用されている場合、「開始」を選択すると、プランニング・ユニットが開始され、「作成」アクションも実行されます。これらのアクションにより、プランニング・ユニット階層でプランニング・ユニット所有者として定義されているユーザーが現在の所有者として設定され、プランニング・ユニットのステータスが「レビュー中」に変更されます。

6. **オプション:** プランニング・プロセスから、またはシステムの追跡からプランニング・ユニットを除去するには、「除外」を選択します。

注意:

プランニング・ユニットを除外すると、関連付けられた注釈および履歴がすべて破棄されます。プランニング・ユニットのステータスは「未開始」に戻り、所有者は「所有者なし」となります。データ値はそのまま保留されます。

プランニング・ユニットの注釈の印刷

管理者は、シナリオ、バージョンおよびプランニング・ユニット・メンバーのセットの注釈についてレポートを作成し、プランニング・ユニットのステータスを確認できます。レポートはプロセス・ステータスに基づいて作成できます。アプリケーション名、選択したシナリオ、バージョンおよびエンティティ、プランニング・ユニットのタイトル、ステータス、作成者、元の日付、および注釈が表示されます。注釈テキストは、最新のエントリを最初にして日付順に表示されます。

プランニング・ユニットの注釈についてレポートを作成および印刷するには:

1. 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
2. 「プランニング・ユニットの注釈」を選択します。
3. 「プランニング・ユニット」で、レポートを生成するシナリオ、バージョン、およびエンティティを選択します。「カスタム」を選択した場合、 をクリックしてカスタムのシナリオ、バージョンおよびエンティティを選択します。
4. 「承認ステータス」でステータスの状態を選択します。
5. 「レポート作成」をクリックします。
6. Adobe Acrobat ツールバーで「印刷」 をクリックします。

ノート:

マルチバイト文字がレポートに表示されるようにするには、Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドのマルチバイト文字を参照してください。正しい言語のグリフがレポートに反映されるよう表示するには、フォントを java.home ディレクトリで使用可能にすることも必要です。Oracle Hyperion Planning ディレクトリは、EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\common\JRE\Sun\1.6.0\lib\fonts という場所を示します。

プランニング・ユニット階層の管理

プランニング・ユニット階層を使用すると、予算策定プロセスをすべてのタイプの組織要件に適用できます。

- プランニング・ユニットはエンティティおよび他のディメンションの組合せです。たとえば、あるアプリケーションに会社のすべての製品が含まれる場合に、**North America**(北米)のプランニング・ユニット階層には北米で販売されている製品に該当するディメンションとメンバーが含まれます。同様に、**Europe**(欧州)地域に対するプランニング・ユニット階層は、欧州で販売されている製品のディメンションとメンバーが含まれます。同じ承認階層内で、**Latin America**(南米)エンティティを勘定科目ディメンションを使用して拡張し、人事別のエンティティ、資本支出別のエンティティおよび収益別のエンティティなどのプランニング・ユニットを作成できます。
- 事前設定した予算策定モードのテンプレートを使用して、ボトム・アップ、配分またはフリー・フォームの階層を作成します。
- 使用されるエンティティ・ディメンションおよびセカンダリ・ディメンションの世代番号に基づいたディメンションへの動的なリンクが含まれます。たとえば、エンティティまたはセグメント・ディメンションの世代 0 から 3 がプランニング・ユニット階層に自動的に追加されます。ディメンションで変更が発生した場合、プランニング・ユニット階層は簡単に更新されます。
- プランニング・ユニット階層をインポートおよびエクスポートします。
- シナリオおよびバージョン別に異なるプランニング・ユニット階層を作成します。たとえば、予算シナリオでは、部門、勘定科目、製品を含む大きなプランニング・ユニット階層を使用します。一方、予測では、より少ない承認レベルを含むより単純なプロセス組織を使用します。

プランニング・ユニット階層の作成

各プランニング・ユニット階層では、エンティティがプライマリのディメンションです。エンティティ・ディメンションにメンバーを追加する際、新しいメンバーが承認プロセスの一部になるかどうかは、作成した追加ルールによって決まります。管理者は、プランニング・ユニット階層構造の例外として、メンバーを階層に追加することもできます。

プランニング・ユニット階層を作成するには:

1. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
2. 「作成」をクリックします。

ノート:

「承認ディメンション」が「エンティティ」に設定されます。他の選択肢はありません。

3. 承認プロセスに含まれるエンティティ・メンバーを定義する汎用ルールを作成します(プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定を参照)。
4. 承認プロセスに含めるプライマリおよびサブ階層メンバーを選択します(プランニング・ユニット階層のメンバーの選択を参照)。

5. 承認プロセスの各ステージの所有者と確認者を割り当て、プランニング・ユニットの移動パスを作成します([プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当てを参照](#))。
6. 「保存」をクリックします。

プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定

プランニング・ユニット階層を設定するには:

1. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
2. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 新しい階層を作成するには、「作成」をクリックします。
 - 既存の階層を編集するには、プランニング・ユニット階層を選択して、「編集」をクリックします。
3. 「承認ディメンション」を選択します。
4. 「階層名」で、プランニング・ユニット階層名を入力します。
5. オプション: 説明を入力します。
6. 「承認の使用可能」で、次を選択します:
 - **すべて:** すべてのプランニング・ユニットを承認プロセスに追加します。
 - **なし:** デフォルトで、プランニング・ユニットを承認プロセスの対象に含めません。
 プランニング・ユニットのグループまたは個別のプランニング・ユニットを承認プロセスに追加するには、[プランニング・ユニット階層のメンバーの選択](#)を参照してください。
 - **カスタム:** 承認プロセスに含めるプランニング・ユニットを定義します。
 個別のプランニング・ユニットおよび、親メンバーおよび世代の条件に基づくプランニング・ユニットを追加できます。[プランニング・ユニット階層のメンバーの選択](#)を参照してください。
7. 「承認テンプレート」で、次を選択します:
 - **ボトム・アップ**([ボトムアップ予算策定](#)を参照)。
 - **配分**([配分予算策定](#)を参照)。
 - **フリー・フォーム**([フリーフォーム予算策定](#)を参照)。
8. 「プラン・タイプ」で、プランニング・ユニットの集約値が継承されるプラン・タイプを選択します。
[プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て](#)を参照してください。
9. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 「次」をクリックするか、「**プライマリおよびサブ階層の選択**」を選択して、プランニング・ユニット階層のメンバーを選択します([プランニング・ユニット階層のメンバーの選択](#)を参照)。

- 「保存」、「終了」の順にクリックして、変更を保存し、プランニング・ユニット階層を閉じます。

ボトムアップ予算策定

データはリーフ・メンバー・レベル(予算グループの子など)で入力され、データを組織階層にロール・アップすることで結合されます。予算策定を開始すると、データは各シナリオと各ユーザーに別々に移入されます。所有者はボトムアップ・モードでの承認の階層に従います。ユーザーはプランニング・ユニットに対して定義されたアクセス権限に基づいてデータを表示または編集できます。最上位の予算グループ所有者は、個別に承認された予算を最終集計予算に集計します。

配分予算策定

予算データが組織のリーフ・レベルで入力され、所有権が組織の最上位レベルで開始されます。所有権は次に、組織階層の下位へ配布されます。所有権が下位のレベルに到達すると、予算は承認プロセスを経て最上位に戻されて提出されます。予算管理、トランザクション管理、レポート作成に利用できるように最上位の予算グループ所有者が予算をレビュー、承認、およびロードします。

フリーフォーム予算策定

フリーフォーム予算策定を行う場合、リーフ・メンバーにデータが入力され、プランナは次の所有者をドロップダウン・リストから選択します。フリーフォーム予算策定モードでは、プランナは次の所有者をドロップダウン・リストから選択できます。この予算テンプレートは、[プランニング・ユニット階層の作成](#)に記載されている承認機能を使用しない場合に選択してください。

プランニング・ユニット階層のメンバーの選択

プランニング・ユニット階層のメンバーを選択するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - a. 「承認ディメンション」から「次へ」を選択するか、「プライマリおよびサブ階層の選択」を選択して、プランニング・ユニット階層の定義を続行します。
 - b. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。プランニング・ユニット階層を選択し、「編集」、「プライマリおよびサブ階層の選択」の順に選択してメンバーを編集します。

ノート:

- プランニング・ユニット階層メンバーの選択中ならどの時点でも、「デフォルトの階層にリセット」をクリックして、プランニング・ユニット階層を「承認ディメンション」ページで定義したデフォルトのメンバーシップにリセットできます。
 - 共有メンバーはプランニング・ユニット階層内に表示されません。
2. プランニング・ユニット階層を表示する方法を定義します:
 - 右クリックして、「展開」または「下をすべて展開」を選択し表示を展開します。
 - 右クリックして、「縮小」または「下をすべて縮小」を選択し表示を縮小します。
 - 存在するすべてのプランニング・ユニットを表示するには、「すべてのエンティティ」をクリックします。

- 使用可能なプランニング・ユニットのみを表示するには、「**プランニング・ユニット**」をクリックします。
 - 「**検索**」では、「**名前**」、「**別名**」、または「**両方**」を選択します。「**検索**」に名前の一部またはすべてを入力してエンティティを検索してから、をクリックしてプランニング・ユニット階層内で前方(下方向)に検索したり、をクリックして後方(上方向)に検索できます。
 - 複数ページのプランニング・ユニット階層内のページ間で移動するには、「**ページ**」にページ番号を入力して「**実行**」をクリックするか、「**開始**」(最初のページ)、「**前へ**」(前のページ)、「**次へ**」または「**終了**」(最後のページ)をクリックします。
3. **オプション:** 承認プロセスの対象としてのデフォルト設定に含まれないプランニング・ユニットの場合、プランニング・ユニット名の左側にあるボックスを選択することで、このプランニング・ユニットを承認プロセスの対象に含めることができます。
 4. **オプション:** プランニング・ユニット名を右クリックして承認プロセスのサブ階層メンバーを定義し、1つのオプションを選択します:
 - **子を含む:** プランニング・ユニットの子を含めます。
 - **メンバーを含む:** プランニング・ユニットのみを含め、子孫は含めません。
 - **すべての子孫を含む:** プランニング・ユニットのすべての子孫を含めます。
 - **世代を含む:** プランニング・ユニットの1つ以上の世代を含めます。プロンプトが表示された後、含める世代を指定します。
 - **子を除外:** プランニング・ユニットの子を除外します。
 - **メンバーを除外:** プランニング・ユニットのみを除外し、子孫は除外しません。
 - **すべての子孫を除外:** プランニング・ユニットのすべての子孫を除外します。
 - **世代を除外:** プランニング・ユニットの世代を除外します。プロンプトが表示された後、除外する世代を指定します。
 5. **オプション:** 承認プロセスの対象に含まれているプランニング・ユニットにセカンダリ・ディメンションを追加して、粒度を上げることができます:
 - a. 「**ディメンション**」からディメンションを選択します。
 - b. 「**親メンバー**」で、をクリックしてメンバー選択ウィンドウを表示し、そのディメンションの親メンバーとしてメンバーを1つ選択します。
 - c. 「**相対的な世代**」で、含める親メンバー世代を指定します。
世代を追加すると、この世代のすべてのメンバーが承認プロセスに追加されます。
 - d. 検索条件を満たすプランニング・ユニット階層に、新たに追加されたメンバーを自動的に含めるには、「**自動組込み**」を選択します。
 - e. **オプション:** 含めるメンバーを絞り込むには、プランニング・ユニットの「**選択したメンバー**」で  をクリックします。メンバーを削除するには、メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリアします。

6. 次のいずれかの操作を実行します。

- 「次」をクリックするか、「所有者の割当て」を選択して、プランニング・ユニット所有者を指定します(プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当てを参照)。
- 「保存」、「終了」の順にクリックして、変更を保存し、プランニング・ユニット階層を閉じます。

プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て

プランニング・ユニットの所有権は、プランニング・ユニットの親から継承されます。プランニング・ユニットの確認者も継承されます。また、プランニング・ユニットが継承する所有者と確認者でなく、プランニング・ユニットの所有者と確認者を明示的に指定して所有者と確認者を割り当てることもできます。

プランニング・ユニットの所有者と確認者を割り当てるには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。

- 「プライマリおよびサブ階層の選択」から「次へ」をクリックするか、「所有者の割当て」を選択して、プランニング・ユニット階層の定義を続行します。
- 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。プランニング・ユニット階層を選択し、「編集」、「所有者の割当て」の順に選択してプランニング・ユニット所有者を指定します。

2. プランニング・ユニットを選択し、「所有者」で  をクリックして所有者を選択します。

1つのプランニング・ユニットに設定できる所有者は1人のみです。ユーザーまたはグループのいずれかが所有者になることができます。「ユーザー」タブを選択し、個別のユーザーを所有者として割り当てます。「グループ」タブを選択し、グループを所有者として割り当てます。グループ・ベースの承認についてを参照してください。

3. 「確認者」で  をクリックしてプランニング・ユニットの確認者を選択します。

確認者には、個々のユーザー、単一のグループまたは複数のグループを指定できます。「ユーザー」タブを選択し、個別ユーザーを確認者として割り当てます。「グループ」タブを選択し、単一のグループまたは複数のグループを確認者として割り当てます。グループ・ベースの承認についてを参照してください。

ノート:

「ボトム・アップ」または「配分」テンプレートを使用し、確認者が個別ユーザーの場合、確認者はプランニング・ユニットをレビューする順序で選択します。リスト内の最初の確認者が、プランニング・ユニットを処理する最初のユーザーです。最初の確認者がプランニング・ユニットを移動または送信すると、選択した2番目のユーザーがプランニング・ユニットの所有者になり、それ以降も、作成した確認者のリストによって順序が決まります。

4. 承認中にプランニング・ユニットの集約値を表示可能にするには、「値定義メンバー」で  をクリックして、非プランニング・ユニット・ディメンションの交差を定義します。

ノート:

- **非プランニング・ユニット・ディメンションの場合:** プランニング・ユニットの集約値を表示するには、「メンバー選択」で、「承認ディメンション」タブで選択したプラン・タイプの非プランニング・ユニット・ディメンションごとに1メンバーを選択する必要があります。非プランニング・ユニット・ディメンションのメンバーを選択しないと、プランニング・ユニットの集約値は空白になります。
- **プランニング・ユニット・ディメンションの場合:** プランニング・ユニット階層で親メンバーに指定した値定義メンバーは、そのメンバーの子孫によって継承されます。値定義メンバーがプランニング・ユニット・ディメンションの親メンバーと子メンバーの両方に選択されている場合、子の選択が優先されます。たとえば、親「米国」とその子「西部地域」の両方に値定義メンバーを選択すると、「西部地域」の値定義メンバーが優先されます。実行時に、プランニング・ユニット階層で指定したエンティティ、シナリオ、バージョンおよびセカンドリ・ディメンション・メンバーが選択されます。
- **複数通貨アプリケーションの場合:** 「プリファレンス」で、集約プランニング・ユニットに表示される「レポートの通貨」を設定します。Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照してください。合計が正しいことを保証するには、「通貨換算」ビジネス・ルールを起動するようユーザーに知らせます。

ノート:

複数通貨のアプリケーションではレポートの通貨が想定されるため、通貨の値定義メンバーを選択しないでください。

5. 「移動パス」で  をクリックし、プランニング・ユニットの移動パスを表示し、このパスが正しいかどうかを確認してエラーを修正します。
6. 「ユーザーに通知」で  をクリックし、プランニング・ユニットがユーザー間で移動されるたびに通知するユーザーを選択します。
7. オプション: 他のプランニング・ユニットの所有者または確認者を変更するには、それらのユニットに対してステップ 2 から 5 を繰り返します。
8. 処理を保存して続行する場合は「保存」をクリックし、処理を保存してプランニング・ユニット階層を閉じる場合は「終了」をクリックします。

グループ・ベースの承認について

プランニング・ユニット所有者の割当てでは、個別ユーザーまたはグループを割り当てることができます。プランニング・ユニット確認者の割当てでは、個別ユーザー、1つのグループまたは複数のグループを割り当てることができます。

グループの所有者としての割当て

1人のユーザーまたは1つのグループのみがプランニング・ユニットの所有者として割り当てられます。グループ内では、任意のユーザーが所有者になれますが、所有者になれるのは一度に1人のユーザーのみです。所有者として割り当てられたユーザーのみがアクションを実行できます。他のグループ・メンバーは、現在の所有者から自分に所有権を移行できます。所有者として割り当てられているユーザーがいない場合、グループ内の任意のユーザーが、所有権を要求することなく、グループを代表してアクションを実行できます。

グループ(複数可)の確認者としての割当て

個別ユーザーを確認者として選択する場合、すべてのユーザーが承認する必要があり、承認はユーザーが入力した順番に従う必要があります。グループ(複数可)を確認者と

して選択する場合、グループ内のユーザーは確認者になることができ、次のレベルに移行できます。

複数の確認者を入力する方法の例を次に示します:

例 9-1 例 1

```
North America - Bill
  USA - Nick, Sandy, Kim
    CA - John
```

承認経路は、John、Nick、Sandy、Kim、Bill です。

例 9-2 例 2

```
North America - Bill
  USA - {Group A}
    CA - John
```

承認経路は、John、グループ A の任意のユーザー、Bill です。

例 9-3 例 3

```
North America - {Group B}, Bill
  USA - Susan, {Group A}
    CA - John
```

承認経路は、John、Susan、グループ A の任意のユーザー、グループ B の任意のユーザー、Bill です。

例 9-4 例 4

```
North America - {Group B}, Bill
  USA - Susan, {Group A}
    CA - John
```

**A validation rules indicates that if New Hires > 4, then before USA, set {Group HR} as reviewer.

CA プランニング・ユニットに対し条件が TRUE の場合、承認経路は、John、グループ HR の任意のユーザー、グループ A の任意のユーザー、グループ B の任意のユーザー、Bill です。

プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て

予算プロセス中、Q1 や FY10 などの様々なシナリオについて計算が実行されます。シナリオごとに、Initial や Final などの様々なバージョンについて計算を実行できます。予算プロセスを開始する前に、予算プロセスに含まれるシナリオとバージョンの組合せに対してプランニング・ユニット階層を割り当てます。

プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せを割り当てるには:

1. 「管理」、「承認」、「シナリオおよびバージョンの割当て」を選択します。
2. オプション: 目的のプランニング・ユニットに割り当てられているシナリオとバージョンを表示するには、そのユニットの横にある  をクリックします。リストを閉じるには、 をクリックします。
3. シナリオとバージョンの割当てを追加します。
 - a. プランニング・ユニットの「アクション」列の  をクリックします。

- b. 「シナリオ」列で「**選択**」をクリックしてから、プランニング・ユニット階層に関連付けるシナリオを選択します。
 - c. 「バージョン」列で「**選択**」をクリックしてから、選択したシナリオに関連付ける1つ以上のバージョンを選択します。
 - d. 「OK」をクリックします。
新規割当て行が表示されます。
4. オプション: シナリオとバージョンの割当てを削除するには、をクリックします。
 5. 「保存」をクリックし、シナリオとバージョンの割当てを保存して続行するか、「**変更の取消**」をクリックして、直前の保存以降の変更を元に戻します。

プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択

プランニング・ユニット階層のシナリオおよびバージョンを選択するには:

1. 「ツール」、「承認の管理」の順に選択します。
2. 「シナリオ」で、シナリオを選択します。
3. 「バージョン」で、バージョンを選択します。
4. 「実行」をクリックし、選択したシナリオとバージョンに定義されているプランニング・ユニット階層を表示します。
5. 「表示」で、「ツリー・ビュー」をクリックしてプランニング・ユニットを階層として表示するか、「フラット・ビュー」をクリックしてプランニング・ユニットをリストとして表示します。
6. オプション: この階層のプランニング・ユニットを所有している場合、「**自身を選択**」を選択して、それらを選択します。
7. 各プランニング・ユニットに対し、次が表示されます:
 - **プラン・サイクル**(ツリー・ビューのみ): プランニング・ユニットが開始されているか、また予算プロセスの対象に含まれているかどうかを表示します
 - **承認ステータス**: たとえば「**最初のパス**」
 - **サブステータス**
 - **現在の所有者**
 - **場所**
 - 「パス」で、をクリックして、可能性のある移動パスを表示します
 - 「アクション」で、「**詳細**」をクリックしてプランニング・ユニットの詳細を表示し、プランニング・ユニットの注釈を追加または編集します

プランニング・ユニット階層の編集

プランニング・ユニット階層を編集するには:

1. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
2. 編集するプランニング・ユニット階層を確認します。
3. 「編集」をクリックします。
4. 変更内容に応じて適切なタブを選択します(たとえば、階層でプランニング・ユニットの所有者を編集する場合は「所有者の割当て」を選択します)。
 - **承認ディメンション**
 プランニング・ユニット階層の説明または承認のデフォルト・スコープを変更するには、[プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定](#)を参照してください。
 - **プライマリおよびサブ階層の選択**
 承認からメンバーを選択または削除するには、[プランニング・ユニット階層のメンバーの選択](#)を参照してください。
 - **所有者の割当て**
 プランニング・ユニットの所有者または確認者を変更するには、[プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て](#)を参照してください。
 - **使用状況**
 プランニング・ユニット階層を参照する Oracle Hyperion Planning オブジェクト(データ検証ルールまたはシナリオおよびバージョン割当て)を表示するには、[プランニング・ユニット階層の使用状況の表示](#)を参照してください
5. 完了後、「保存」をクリックします。

処理するプランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンを選択するには、[プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層の削除および名前変更

プランニング・ユニット階層が、データ検証ルールやシナリオおよびバージョン割当てなどの他の Oracle Hyperion Planning オブジェクトにより参照されていない場合には削除できます。「使用状況」タブは選択したプランニング・ユニット階層を参照するオブジェクトを表示し、そのオブジェクトへリンクしているので、階層から関連付けを解除できます。

プランニング・ユニット階層の名前を変更することもできます。プランニング・ユニット階層の名前を変更しても、階層を参照する Planning オブジェクトには影響しません。

プランニング・ユニット階層を削除または名前変更するには:

1. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
2. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 削除するには、削除するプランニング・ユニット階層を選択して、「削除」をクリックします。
 - 名前を変更するには、名前を変更するプランニング・ユニット階層を選択して、「名前変更」をクリックします。ダイアログ・ボックスにプランニング・ユニット階層の新しい名前を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

他の Planning オブジェクトにより参照されるプランニング・ユニット階層を選択すると、エラー・メッセージが表示されます。プランニング・ユニット階層を参照する Planning オブジェクトを表示および編集するには、[プランニング・ユニット階層の使用状況の表示](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層の使用状況の表示

プランニング・ユニット階層には、シナリオおよびバージョン割当て、データ検証ルールなど、フォームに定義された依存関係がある可能性があります。プランニング・ユニット階層に依存関係がある場合、その依存関係が削除されるまで階層は削除できません。「使用状況」タブでは、プランニング・ユニット階層の依存関係を表示し、フォームまたはシナリオおよびバージョン割当てにリンクすることができるので、必要に応じて、依存関係を削除できます。

プランニング・ユニット階層の使用状況を表示するには:

1. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
2. プランニング・ユニット階層を選択して「編集」をクリックし、「使用状況」を選択して、プランニング・ユニット階層の依存関係を表示します。
3. 「フォーム」を選択し、関連付けられたデータ検証ルールを表示します:
 - 関連付けられたデータ検証ルールがない場合、メッセージが表示されます。
 - データ検証ルールが関連付けられている場合、フォームにリストされます。ルールのハイパーリンクをクリックすると、フォームが新しいタブに編集モードで表示されます。その後、データ検証ルールを更新または削除して、プランニング・ユニット階層から関連付けを解除できます。[データ検証ルールの作成および更新](#)を参照してください。
4. 「シナリオおよびバージョンの割当て」を選択して、関連付けられたシナリオおよびバージョン割当てを表示します:
 - 関連付けられたシナリオおよびバージョン割当てがない場合、メッセージが表示されます。
 - シナリオおよびバージョン割当てが関連付けられている場合、シナリオにリストされます。バージョンのハイパーリンクをクリックすると、割当てが新しいタブに表示されます。その後、シナリオおよびバージョン割当てを削除して、プランニング・ユニット階層から関連付けを解除できます。[プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て](#)を参照してください。
5. ステップ 3 または 4 で依存関係を削除したら、「使用状況」タブの「リフレッシュ」をクリックして、残りの依存関係を表示します。
6. プランニング・ユニット階層を削除する場合、すべての依存関係が削除されるまでステップ 3、4、5 を繰り返します。

すべての依存関係がプランニング・ユニット階層から削除されたら、階層を削除できます。[プランニング・ユニット階層の削除および名前変更](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層の同期

プランニング・ユニット階層で使用されているディメンション・メンバーを追加、削除または変更する場合、影響を受けるプランニング・ユニット階層をこの変更と同期させる必要があります。プランニング・ユニット階層のリストを表示する場合、各プランニング・ユニット階層のエントリには、最新の変更がプランニング・ユニット階層に反映されているかどうかを示されます。この手順を使用して、プランニング・ユニット階層をディメンション・メンバーの変更と同期させます。

ノート:

ディメンション・メンバーを追加する場合、ディメンション・メンバーがプランニング・ユニットとして追加されるのは、プランニング・ユニット階層の組み込みルールの基準をこれらが満たす場合のみです。たとえば、追加したエンティティが第4世代のエンティティであるときに、第1世代から第3世代までがプランニング・ユニットであると組み込みルールに指定されている場合、エンティティはプランニング・ユニットとして追加されません。ただし、このエンティティが第3世代のメンバーである場合は、プランニング・ユニット階層が次回に編集、保存または同期されるときに、プランニング・ユニットとして追加されます。

プランニング・ユニット階層を変更と同期させるには:

1. 「管理」、「承認」の順に選択します。
2. 「プランニング・ユニット階層」を選択します。「同期済」列では、プランニング・ユニット階層に次のようなラベルが付きます:
 - **同期済** - 変更はプランニング・ユニット階層と同期されます
 - **非同期** - 変更はプランニング・ユニット階層と同期されません
 - **未同期の従属** - 変更は、プランニング・ユニット階層と同期されますが、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting では、関連する意思決定パッケージのプランニング・ユニット階層と同期されません
 - **user** によって**ロック済** - ユーザーがプランニング・ユニット階層を編集または同期中です

ノート:

プランニング・ユニット階層リストを表示した後、ユーザーによってプランニング・ユニット階層の編集または同期が開始された場合、プランニング・ユニット階層リストでは、このプランニング・ユニット階層について「ロック済」とは表示されません。このプランニング・ユニット階層を同期しようとしても同期は行われず、編集集中であることを示すエラー・メッセージが表示されません。

3. 「同期済」で「未同期」としてリストされているプランニング・ユニット階層を選択してから、「同期」をクリックします。

プランニング・ユニット階層に変更が適用され、次に、プランニング・ユニット階層に定義されている組み込みルールに従ってプランニング・ユニットのリストが更新されます。

ノート:

別のユーザーによる編集または同期中であるプランニング・ユニット階層を変更と同期させることはできません。

プランニング・ユニット階層のエクスポート

プランニング・ユニット階層をエクスポートする場合、プランニング・ユニット階層情報を含むファイルを作成します。このファイルを作成した後、そのコンテンツを既

存のプランニング・ユニット階層にコピーできます([プランニング・ユニット階層のインポート](#)を参照)。

ファイル・フォーマットの詳細は、[ロード・ファイルの生成](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層をエクスポートするには:

1. 「管理」、「承認」、「ファイル・ベースのインポート/エクスポート」を選択します。
2. 「プランニング・ユニット階層のエクスポート」を選択します。
3. 「既存のプランニング・ユニット階層名」で、エクスポートするプランニング・ユニット階層を選択します。
4. 「OK」をクリックします。
5. 「保存」ダイアログ・ボックスが表示されたら、エクスポート・ファイルを選択した場所に保存します。
6. 「エクスポート」または「完了」をクリックします。「エクスポート」ではアクションが実行され、「完了」ではダイアログ・ボックスが閉じられます。

プランニング・ユニット階層のインポート

プランニング・ユニット階層には、プランニング・ユニット階層インポート・ファイルのコンテンツを移入できます。このインポート・ファイルは、既存のプランニング・ユニット階層をエクスポートした結果です。[プランニング・ユニット階層のエクスポート](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層情報をインポートしても、プランニング・ユニット階層は作成されません。エクスポート・ファイルから移入されたプランニング・ユニット階層が存在し、少なくともインポート前の名前を持っている必要があります。プランニング・ユニット階層のロードでは最初にプランニング・ユニット階層のすべてのメンバーが削除され、入力ファイルに指定された各メンバーが新規メンバーとして追加されます。

ノート:

プランニング・ユニット階層のロードでは、既存のメンバーが入力ファイルで指定されていないならばそのメンバーおよびその子が階層から削除されます。

プランニング・ユニット階層をインポートするには:

1. 「管理」、「承認」、「ファイル・ベースのインポート/エクスポート」を選択します。
2. 「プランニング・ユニット階層のインポート」を選択します。
3. 「既存のプランニング・ユニット階層名」で、エクスポートした情報を受け取るプランニング・ユニット階層を選択します。

ノート:

インポート後のプランニング・ユニット階層には、移動パスを決定するために定義されている所有者、確認者およびルールが追加されます。

4. 「所有者を含むプランニング・ユニット階層」で「参照」をクリックし、インポートするエクスポートされたプランニング・ユニット階層ファイルを選択します。

5. 「OK」をクリックします。
6. 「インポート」または「完了」をクリックします。「インポート」ではアクションが実行され、「完了」ではダイアログ・ボックスが閉じられます。

インポートに成功しましたというメッセージが表示された場合は、エクスポート済ファイル内のプランニング・ユニット階層情報は、「既存のプランニング・ユニット階層名」で選択したプランニング・ユニット階層に正常にコピーされたことになります。

「インポートに失敗しました。一部のアイテムがインポートされませんでした。」というメッセージが表示された場合は、「詳細」をクリックしてログ・ファイルを表示します。エラーを修正し、プランニング・ユニット階層のインポートを再試行します。

プランニング・ユニットの移動パス

プランニング・ユニットは、プランニング・ユニットごとに割り当てる所有者と確認者、およびプランニング・ユニット階層内のその親に基づいて人から人へ、また部署から部署へ移動します。

プランニング・ユニット階層の移動パスに影響を及ぼす方法には、次の2つがあります:

- 承認アクション(移動や拒否など)を使用してプランニング・ユニットの所有者と確認者およびその子孫を変更します
- データ検証ルールを使用して、プランニング・ユニットの移動パスの変更が必要かどうかを決定します

プランニング・ユニットの移動パスの変更

プランニング・ユニットの所有者と確認者およびその親を選択する場合、プランニング・ユニットの移動パスを設定します(プランニング・ユニットの移動パスを参照)。ただし、場合によっては、予算計算結果により、次に予算を確認する担当者が変更されます。たとえば、販売グループの給与が前年度の予算を10%超多い場合、次の確認者以外の担当者による承認が必要になることがあります。このような場合、予算のリダイレクトを自動化するには、これらの例外がないかをテストするデータ検証ルールに条件およびアクションを追加してから、必要に応じて移動パスを変更します。また、データ検証ルールを使用することにより、プランニング・ユニットにデータ・エラーがあるときにプランニング・ユニットが次の確認者に移動するのを阻止できます。

プランニング・ユニットの移動パスを変更するには:

1. データ検証ルールを作成または選択します(データ検証ルールの作成および更新を参照)。
2. データ検証ルール・ビルダーで、 をクリックして移動パス条件を作成し、予算計算がこれらの条件を満たさないときに実行するアクションを指定します。
3. 次のいずれかのアクションを選択します。
 - **移動パスの更新:** 設定した条件がトリガーされたときに確認者または所有者を移動パスに追加する移動パス条件を作成します。
 - **移動しない:** プランニング・ユニットが次の確認者に移動するのを阻止します。通常、このアクションは予算内に無効なデータがあることを示します。
4. 「セルの処理」ダイアログ・ボックスの「承認」の下で、「追加」をクリックして移動パス条件を追加します。

移動パス条件は、リストされている順序で処理されます。移動パス条件をリスト内で上下に移動するには、▲および▼を使用します。

5. オプション: 移動パス条件を複製するには:
 - a. 移動パス条件を選択し、「コピー」をクリックします。
 - b. リスト内でコピーした移動パス条件より前にある移動パス条件を選択し、「貼付け」をクリックして、コピー済移動パス条件を追加します。
6. オプション: 移動パス条件を削除するには、「削除」をクリックします。
7. 「プランニング・ユニット階層」および「プランニング・ユニット」で、をクリックし、移動パス条件が影響するプランニング・ユニット階層およびプランニング・ユニットを選択します。
8. 「移動パスの条件」で、「移動パスの条件」で選択したプランニング・ユニットについて移動パスを変更する位置を指定します。選択:
 - a. 「位置」で、「プランニング・ユニット」で選択したプランニング・ユニットについて移動パスを変更する位置を指定します。選択:
 - 前: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達する前に、代替の所有者または確認者を挿入します。
 - 後: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達した後で、代替の所有者または確認者を挿入します。
 - 前および後: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達する前または後に、代替の所有者または確認者を挿入します。

ノート:

データ検証ルールに移動パス条件を追加すると、プランニング・ユニット内の定義されている移動パスの上に、プランニング・ユニットの所有権の可能な変更が、オプションのパスとして表示されます。この表示は、パスを変更できる位置と、定義されているパスに代替パスが再結合する方法を示します。

- b. 「移動パスの条件」の「プランニング・ユニット」列で、をクリックし、「位置」で選択したアクションが影響するプランニング・ユニットを選択します。

ノート:

選択したプランニング・ユニットは、直前のステップで選択したプランニング・ユニットの祖先である必要があります。祖先でないプランニング・ユニットを選択すると、プランニング・ユニット階層の検証時に移動パス条件が評価されません。

9. 「割当て」列で、代替の各所有者および確認者の役割とユーザー・タイプ、およびユーザーまたは UDA と、ルール例外が発生したときに通知対象とするユーザーを選択します。
 - a. 「役割」で、次を選択します。
 - 代替の所有者を選択するには「所有者」

- 代替の確認者を選択するには「**確認者**」
 - 通知されるユーザーを選択するには「**通知されたユーザー**」
- b. 「**タイプ**」で、次を選択します。
- 代替ユーザーを指定するには「**ユーザー名**」
 - ディメンションを選択し UDA に割り当てられた接頭辞を入力するには「**UDA から**」
- c. 「**ユーザー**」で、次を指定します。
- 「**ユーザー名**」には、代替ユーザーの名前を指定、またはユーザー・セレクトから1つを選択
 - 「**UDA から**」には、「**ディメンションの選択**」ドロップ・ダウンからディメンションを選択してから、UDA がユーザー名を含む(たとえば ProdMgr:)ことを示す、UDA で使用された接頭辞を指定

ノート:

スペースも含めて、UDA の作成時に割り当てられたのと同じ接頭辞が指定されたことを確認します。たとえば、接頭辞とユーザー名の上にスペースがある場合(ProdMgr Kim)、ProdMgr の後にスペースがあることを確認します。

10. オプション: プランニング・ユニットの移動パスの変更に関するユーザーに対するメッセージを指定します:

- a. 次で、 をクリックします。
- **送信者メッセージ:** 移動パスの変更時にプランニング・ユニットを移動するユーザーに送信する電子メールのメッセージ・テキストを入力します。
 - **確認者メッセージ:** ルールの例外のためにプランニング・ユニットを受信して確認するユーザーに送信する電子メールのメッセージ・テキストを入力します。
- b. 「**OK**」をクリックし、メッセージを保存します。

入力したテキストは、プランニング・ユニットがステータスを変更する際に送信されるメッセージに追加されます。

11. 「OK」 をクリックして移動パス条件を保存し、データ検証規則の作成に戻ります。

プランニング・ユニットの移動パスのデータ検証規則の設計の考慮事項

プランニング・ユニットの移動パスに影響するルールを設計する場合、これらのルールが評価および適用される順序を理解する必要があります。データ検証規則の設計と予想される結果の詳細は、[データ検証の管理](#)を参照してください。

タスク・リストの管理

タスク・リストは、タスク、手順および終了日を一覧表示することで、ユーザーにプランニング・プロセスの手順を示します。管理者や対話型ユーザーはタスクやタスク・リストを作成、管理します。

タスク・リストを管理するには:

1. 「管理」、「管理」、「タスク・リスト」の順に選択します。
2. 「タスク・リストの管理」ページを使用し、タスク・リスト・フォルダを構成してタスク・リストを作成および管理します。

フォームに移動パス・ルールが含まれていれば、Validation Reports フォルダの検証レポートを表示できます。

タスク・リスト・フォルダの操作

タスク・リスト・フォルダを作成、名前変更、移動または削除するには:

1. 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、次のタスクを実行します:
 - タスク・リスト・フォルダを作成するには、タスク・リスト・フォルダを作成するフォルダを選択し、「作成」をクリックします。タスク・リストの名前を入力します。
 - タスク・リスト・フォルダを名前変更するには、名前変更するフォルダを選択し、「アクション」、「名前変更」の順に選択します。新規名を入力します。
 - タスク・リスト・フォルダを移動するには、移動するフォルダを選択し「タスク・リスト・フォルダ」領域の上で、「移動」をクリックします。宛先フォルダを選択します。
 - タスク・リスト・フォルダを削除するには、削除する空のフォルダを選択し、「削除」をクリックします。

ノート:

タスク・リスト・フォルダを移動または削除することはできません。追加のフォルダを含んでいるフォルダを削除しようとする、エラー・メッセージが表示されます。

3. 「OK」をクリックします。

タスク・リストの操作

タスク・リストはユーザーのためにタスクの組織グループを一覧表示します。タスクを作成する前に、タスク・リストを作成する必要があります。

タスク・リストを作成および名前変更するには:

1. 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、次のタスクを実行します:

タスク・リストを作成するには:

- a. タスク・リストを作成するフォルダを選択します。

b. 「タスク・リスト」領域で、「アクション」を選択し、「作成」を選択します。

c. タスク・リスト名を入力します。

タスク・リストの名前を変更するには:

3. 「OK」をクリックします。
4. タスク・リストを定義するには、次を参照してください:
 - [タスク・リストへの指示の追加](#).
 - [タスクの追加と定義](#).

タスク・リストへの指示の追加

タスク・リストへ指示を追加するには:

1. 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、変更するタスク・リストを含んでいるフォルダを選択し、タスク・リストを選択します。
3. 「タスク・リスト」で変更するタスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
4. 「タスク・リストの編集」、「指示」をクリックします。
5. タスク・リストの手順を入力します。
6. 「保存」と「閉じる」をクリックします。

タスクの追加と定義

タスク・リストを作成した後で、フォームでのデータの入力、必要なビジネス・ルールの実行など、タスクを追加、定義できます。[タスク・リストへのタスクの追加](#)を参照してください

タスク・リストへのタスクの追加

ユーザーが実行時に実行するタスクの完了日およびアラートを設定できます。また、たとえば、タスクが終了日までに完了しなかったことをユーザーに警告するように、電子メールのメッセージを設定することもできます。アラート・メッセージは設定した"アラート日"の後に送信され、タスクの終了日になるまで繰り返し送信されます。電子メール・サーバーを構成する必要があります。

タスク・リストへタスクを追加するには:

1. 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. タスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「タスク・リストの編集」を選択します。
3. 「アクション」を選択して、「子の追加」を選択します。
4. 「タスクの詳細」で、「タスク」にタスク名を入力します。

5. 「タイプ」には、次のいずれかを選択します:

- **URL:** 指定された URL を開きます
- **フォーム:** フォームを開きます。

ノート:

追加しているタスクに関連付けられているフォームのみを選択できます。フォーム・フォルダは選択できません。

- **ビジネス・ルール** - 指定したビジネス・ルールを起動します
 - **承認の管理** - 指定されたシナリオとバージョンでレビュー・プロセスを開始します
 - **ジョブ・コンソール** - 「ジョブ・コンソール」を開き、現在のユーザーについて、指定されたジョブ・ステータスとジョブ・タイプのジョブのリストを表示します
 - **バージョンのコピー** - 「バージョンのコピー」を使用して、指定されたソース・バージョンと宛先バージョンに関するサポート詳細、注釈、セル・テキスト、セル・ドキュメントなど現在のフォームのデータをコピーします
6. 次の表を使用して、タスク・タイプに必要な情報を指定します:

表 9-1 タスク情報

タスク・タイプ	アクション
URL	次のタスクを実行します: <ul style="list-style-type: none"> • 「URL」で、このタスクに関連付けるために、<code>http://www.company_name.com</code>などの完全修飾 URL を入力します。 • 「シングル・サインオンの使用」を選択して、シングル・サインオンを受け入れる別の製品の URL をユーザーが開くことができるようにします。Oracle Enterprise Performance Management System セキュリティ構成ガイドを参照してください。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で Oracle Hyperion Financial Reporting にリンクするには、シングル・サインオンは必要ありません。かわりに、リンクする ObjectID を含めてください(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace 管理者ガイドを参照)。 • ステップ 7 に進みます。

表 9-1 (続き) タスク情報

タスク・タイプ	アクション
フォーム	<p>ユーザーが完了するフォームを選択し、ステップ 7 に進みます。</p> <p>オプション: タスクを最初に開いたときデフォルトとして表示するメンバーを各ディメンションから選択するには、ページ・メンバーのデフォルト設定を選択します。このオプションを選択してから、ページ・ディメンションのメンバーを選択できます。デフォルトのページ・メンバーは、ユーザーがフォームを更新し、別のセッションでタスクに戻るまで適用されます。デフォルトのページ・メンバーが設定されている場合、各セッションで最後に使用された設定がこれらのデフォルトによって上書きされます。</p>
ビジネス・ルール	<p>次のタスクを実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「プラン・タイプ」から、実行するビジネス・ルールに関連付けられたプラン・タイプを選択します。 ・ 「ビジネス・ルール」から、実行するビジネス・ルールを選択します。 ・ ステップ 7 に進みます。
承認の管理	<p>ユーザーが承認プロセスを開始できるシナリオおよびバージョンを指定し、ステップ 7 に進みます。</p>
ジョブ・コンソール	<p>次のタスクを実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ジョブ・タイプ」で、コンソールに表示するジョブの種類(意思決定パッケージのコピーなど)を選択します。 ・ 「ステータス」で、コンソールに表示するタスクの状況(処理中やエラーなど)を選択します。 ・ ステップ 7 に進みます。
バージョンのコピー	<p>次の値を指定して、現在のフォームのデータのバージョンをコピーするタスクを作成してから、ステップ 7 に進みます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シナリオ ・ コピー元 ・ コピー先
7.	<p>タスクの終了日を入力するには、「終了日」を選択し、次を選択します:</p> <ol style="list-style-type: none"> a. 月、日、年。(日付の表示フォーマットは Oracle Hyperion Planning プリファレンスで変更できます。システム設定の指定を参照してください。) b. 時、分および AM または PM。
8.	<p>未完のタスクについて電子メールのメッセージを送信するには、「終了日」を選択して、次の手順を実行します:</p> <ol style="list-style-type: none"> a. 「次毎に繰り返す」を選択して、値を入力します。 b. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。

9. アラート日の後で終了日前に電子メールのメッセージを送信するには、「アラート」を選択して、次の手順を実行します:
 - a. 月、日、年、時、分および AM か PM を選択し、メッセージの送信を開始する日付と時間を設定します。
 - b. 「アラート」領域で「**次毎に繰り返す**」を選択して、値を入力します。
 - c. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
 10. タスクの完了をプライマリ・タスクの完了に依存させるには、「**依存関係**」を選択します。
 11. 「**手順**」をクリックして、タスクを完了する方法を説明する情報を入力します。
 12. 「**保存**」、「**OK**」の順にクリックします。
- タスク・リストへタスクを追加するには:

タスク・リストの編集

「タスク・リストの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、タスク・リストを更新できます。

タスクの編集

「タスクの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、タスクのタイプとその手順、終了日とアラート日、および電子メール通知メッセージを変更します。

タスクを編集するには:

1. 「**タスク・リストの管理**」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. タスク・リストを選択し、「**アクション**」を選択して、「**編集**」を選択します。
3. タスクを選択し、「**アクション**」を選択して、「**編集**」を選択します。
4. 「**タスクの編集**」で、次の操作を行います。
 - タスク名を変更します。
 - 別のタスク・タイプを選択します。使用可能なすべてのタイプの詳細は、[タスク・リストへのタスクの追加](#)を参照してください。
5. 「**手順**」で、タスクを完了するための手順を変更します。
6. **オプション**: タスクの終了日を入力するには、「**終了日**」を選択して、ユーザーがこのタスクを完了する期限の日時を入力します。
7. **オプション**: 終了日までにタスクが完了しない場合に電子メールでメッセージを送信するには、「**終了日**」を選択します。
 - a. 「**次毎に繰り返す**」を選択して、値を入力します。
 - b. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
8. **オプション**: アラート日と終了日の間に電子メールで通知するには、「**アラート**」を選択します:

- a. 月、日、年、時刻および午前(AM)または午後(PM)を指定します。
 - b. 「**次毎に繰り返し**」を選択して、値を入力します。
 - c. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
9. **オプション**: プライマリ・タスクの完了によって、このタスクを完了するには、「**依存**」を選択します。
10. **オプション**: タスク・プロパティを設定するには、「**プロパティ**」をクリックします。
11. 「**保存**」をクリックします。
12. 「**閉じる**」をクリックします。

タスクのコピーおよび移動

タスクをコピーまたは移動するには:

1. 「**タスク・リストの管理**」 ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 次のいずれかのアクションを行います:
タスクをコピーするには:
 - a. タスク・リストを選択し、「**アクション**」を選択して、「**編集**」を選択します。
 - b. コピーするタスクを選択し、「**名前を付けて保存**」をクリックします。
 - c. 新規タスク・リストの名前を入力します。
 - d. 「**OK**」をクリックします。タスクを移動するには:
タスクの切取りおよび貼付けをするには:
3. 「**閉じる**」をクリックします。

タスク・リストの移動および順序変更

タスク・リストを移動または順序変更するには:

1. 「**タスク・リストの管理**」 ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 次のタスクを実行します:
タスク・リストを移動するには:
 - a. 移動するタスク・リストを含むフォルダを選択します。
 - b. タスク・リストを選択し、「**移動**」をクリックします。
 - c. 宛先フォルダを選択します。

d. 「OK」をクリックします。

タスク・リストを並べ替えるには:

タスク・リストのクリア

タスク・リストの完了後、選択したタスク・リスト内のすべてのタスクの完了ステータス、終了日およびアラートをクリアできます。次以降のプランニング期間にタスクを再利用することができます。

アラートは、タスク・リストに終了日が含まれる場合のみ有効になります。タスク・リストをクリアすると、終了日のチェック・ボックスの選択が解除されて、アラートが無効になります。ただし、期限日は削除されません。

タスク・リストをクリアするには:

1. 「タスク・リストの管理」 ページを開きます。

[タスク・リストの管理](#)を参照してください。

2. クリアするタスク・リストを含むフォルダを選択し、タスク・リストを選択して、「編集」をクリックします。

3. 「クリア」 ドロップダウン・リストからオプションを選択します:

- **完了ステータス:** 完了ステータスのみをクリアします
- **終了日とアラート:** タスクに設定されている終了日に基づいて、有効になっているアラートをクリアします
- **両方:** 完了ステータス、終了日およびアラートをクリアします。

4. 「クリア」 ドロップダウン・リストの右側にある矢印をクリックします。

5. 「OK」をクリックします。

タスクおよびタスク・リストの削除

タスクおよびタスク・リストを削除するには:

1. 「タスク・リストの管理」 ページを開きます。

[タスク・リストの管理](#)を参照してください。

2. 次のタスクを実行します:

- タスクを削除するには、削除するタスクを含むフォルダとタスク・リストを選択し、「編集」をクリックします。削除するタスクを選択し、「アクション」を選択して、「削除」を選択します。
- タスク・リストを削除するには、削除するタスク・リストを含むフォルダを選択し、タスク・リストを選択します。「アクション」を選択して、「削除」を選択します。

3. 「OK」をクリックします。

Planning ページへのタスクのリンク

「リンクのコピー」を使用して、タスクを Oracle Hyperion Planning の各ページにリンクします。Planning アプリケーションのページからタスクの指示に、URL アドレスを

コピーおよび貼付けできます。タスク・リストのユーザーは、その場所から Planning ページにアクセスできます。

URL をタスクにコピーするには:

1. タスクをリンクする Planning アプリケーションのページにアクセスします。
2. 「ツール」、「リンクのコピー」の順に選択します。
3. タスク・リストを選択し、「タスク・リストの編集」を選択します。
4. タスクを選択し、「タスクの編集」を選択します。
5. 「タスク - 指示」で、ブラウザを使用して URL リンクを貼り付けます。たとえば、Microsoft Internet Explorer のメニューで、「編集」、「貼付け」の順に選択します。
6. 「保存」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の割当て

タスク・リストを表示および変更できるユーザーを判別できます。デフォルトでは、タスク・リストのアクセス権限の管理および割当てができるのは管理者です。

ノート:

タスク・リストに割り当てられるということは、タスク・リスト内のタスクにアクセスして実行できることを意味します。他のユーザーにタスクを割り当てることはできません。

タスク・リストへのアクセス権の追加

タスク・リストへアクセス権を割り当てるには:

1. 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 変更するタスク・リストを選択します。
3. 「タスク・リスト」領域で、「アクション」を選択し、「アクセス権の割当て」を選択します。
4. オプション: Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更されたアイデンティティや位置を Oracle Hyperion Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。
5. オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
6. 「アクセス権の追加」をクリックします。
7. タスク・リストにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。
 - 「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

- ユーザーとグループのページが複数におよぶ場合、ページ番号を「ページ」に入力して、「実行」をクリックします。
 - 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。
 - 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。
8. 「アクセス権タイプ」で、ユーザーやグループがどのようにタスク・リストを使用できるかを指定します:
- 割当て済: 表示および使用
 - 管理: 変更
 - 管理と割当て: 表示、使用、変更
 - なし: アクセスなし
9. 「追加」をクリックします。
10. 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の変更および削除

タスク・リストへのアクセス権を変更または削除するには:

1. 「タスク・リストの管理」 ページを開きます。
[タスク・リストの管理](#)を参照してください。
2. 変更するタスク・リストとフォルダを選択し、「アクセス権の割当て」をクリックします。
3. オプション: Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更されたアイデンティティや位置を Oracle Hyperion Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。
4. オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
5. 次のタスクを実行します:

タスク・リストへのアクセス権を変更するには:

- a. ユーザーまたはグループを選択して、「アクセス権の編集」をクリックします。
- b. 「アクセス権タイプ」で、次から選択します。
 - 割当て: 表示および使用
 - 管理: 変更
 - 管理と割当て: 表示、使用、変更
 - なし: アクセスなし

- c. 「設定」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権を除去するには:

6. 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストのインポートとエクスポート

管理者は、TaskListDefUtil.cmd (Windows)か、TaskListDefUtil.sh (UNIX)により、Oracle Hyperion Planning アプリケーション間で、タスク・リストの定義を移動できます。タスク・リストの定義を XML へエクスポートまたは XML からインポートできます。

TaskListDefUtil はコマンド・ライン・インタフェースを使用し、planning1 ディレクトリにインストールされます。planning1 の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

TaskListDefUtil ユーティリティを起動するには:

1. planning1 ディレクトリから、次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
TaskListDefUtil [-f:passwordFile] import|export FILE_NAME|
TASK_LIST_NAME|-all SERVER_NAME USER_NAME APPLICATION
```

パラメータ	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。	いいえ
<code>import export</code>	タスク・リストの定義をインポートまたはエクスポートします。	はい
<code>FILE_NAME TASK_LIST_NAME -all</code>	<code>import</code> で使用するときには、タスク・リスト定義を含む XML ファイルを指定します。 <code>export</code> で使用するときには、XML にエクスポートするタスク・リストを指定します。 <code>-all</code> を <code>import</code> または <code>export</code> で使用すると、現在のアプリケーションのすべての XML ファイルまたはタスク・リスト定義をインポートまたはエクスポートします。	はい(<code>-all</code> はオプション)
<code>SERVER_NAME</code>	Planning アプリケーションが存在するサーバー名。	はい
<code>USER_NAME</code>	管理者の名前。	はい
<code>APPLICATION</code>	<code>export</code> で使用する場合、エクスポートするタスク・リスト定義を含んでいる Planning アプリケーションの名前です。 <code>import</code> は、インポートするタスク・リストの定義の Planning アプリケーション名です。	はい

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

タスク・リストの定義をエクスポートする際、ユーティリティによって現在のディレクトリに XML ファイルが作成され、*EPM_ORACLE_INSTANCE* *EPM_ORACLE_INSTANCE* ディレクトリにある *TaskListDefUtil.log* にエラーが記録されます。このユーティリティを任意のディレクトリにコピーし、そこから起動することで、別のディレクトリにファイルを保存することができます。

例:

- 1つのファイルをインポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd import c:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1\TaskList1.xml localhost admin APP1
```
- 1つのファイルをエクスポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd export TaskList1 localhost admin APP1
```
- すべてのタスク・リストの定義をエクスポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd export -all localhost admin APP1
```
- すべてのタスク・リストの定義をインポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd import -all localhost admin APP1
```

データのコピー

プランは、あるディメンショナル交差から別のディメンショナル交差に、リレーション・データとサポート詳細を含めてコピーできます。たとえば、「予算、会計年度10、最終」を「予測、会計年度11、第1ドラフト」へコピーできます。

ノート:

- 「選択されたデータのコピー」の設定は、現在のセッションにしか保持されません。
- コピー済ディメンション・メンバーは、選択したプラン・タイプに表示される必要があります。
- データは、データを使用できる列にコピーする必要があります。データを読取り専用セルや動的セルにはコピーできません。
- 勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキストをコピーできます。プランニング・ユニットの注釈はコピーできません。
- この機能は属性とともに使用できないため、属性は選択しないでください。
- Oracle Essbase データは、「データ・オプションのコピー」の選択項目にかかわらずコピーされます。
- これは管理機能であるため、Oracle Hyperion Planning では、コピーするデータに対するすべてのアクセス権があると仮定されます。承認済のプランニング・ユニットをコピーできないということはありません。
- この機能でデータを計算できません。予測を5%増加させるなどの計算を実行するには、データをコピーした後、ビジネス・ルールを適用させてください。
- データをコピーするには、「シナリオ」、「勘定科目」、「期間」、「バージョン」ディメンションの少なくとも1つのメンバーを選択する必要があります。

データをコピーするには:

1. 「管理」、「管理」、「データのコピー」の順に選択します。
2. 「プラン・タイプ」でプランのタイプを選択し、「実行」をクリックします。
1回につきプラン・タイプを1つコピーできます。「実行」をクリックすると、選択したプラン・タイプ用のディメンションが表示されます。
3. 「静的ディメンション」では、データ交差のメンバーを入力します。
 - a. 「ディメンション」で、コピー元のディメンションを選択します。
 - b. 「メンバー」で「メンバー選択」をクリックし、コピー元のメンバーを選択します。メンバーは複数選択可能です。「シナリオ」、「勘定科目」、「エンティティ」、「期間」、「バージョン」ディメンションの少なくとも1つのメンバーを選択する必要があります。
4. オプション: 別の静的ディメンションをリストに加えるには、「ディメンションの追加」をクリックして、ディメンション・メンバーを入力します。(ディメンションを除去するには、「なし-ディメンションの選択」を選択します。選択したディメンションは、「ソースと宛先を持つディメンション」領域に移動されます。)
5. 「ディメンションおよびソース/宛先」で、データをコピーするディメンションを入力します:
 - a. 「ソース」で、「メンバー選択」をクリックします
 - b. 「宛先」で、「メンバー選択」をクリックします。
6. 「データ・オプションのコピー」で、コピーする情報のタイプを選択します。
7. 「データのコピー」をクリックします。
データは1つの交差から他の交差にコピーされます。データが正常にコピーされない場合、メッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。
8. 別のプラン・タイプのデータをコピーするには、ステップ2で別のプラン・タイプを選択して、手順を繰り返します。

ヒント:

「データのコピー」の実行ステータスを表示するには、*Oracle Hyperion Planning* ユーザー・ガイドのジョブ・ステータスの確認を参照してください。

セル詳細のクリア

プラン・タイプのセル詳細(サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメント)をクリアできます。勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメントの作成と表示の詳細は、*Oracle Hyperion Planning* ユーザー・ガイドを参照してください。

ノート:

- プランニング・ユニットの注釈は削除できません。
- この機能は管理者と対話型ユーザー向けであるため、*Oracle Hyperion Planning* では、削除する詳細へのすべてのアクセス権があると仮定されます。

- これを実行する前にアプリケーションのバックアップを行ってください。Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。
- また、SQL スクリプトでもセル詳細をクリアできます。SQL を使用してアプリケーション情報を削除を参照してください。

セル詳細をクリアするには:

1. 「管理」、「管理」、「セル詳細のクリア」の順に選択します。
2. 「プラン・タイプ」で、プランのタイプを選択し、「実行」をクリックします。
「実行」をクリックすると、このプラン・タイプ用のディメンションが選択可能になります。
3. データ交差のメンバーを選択します:
 - a. 「ディメンション」で、消去するディメンションを詳細とともに、少なくとも1つ選択します。
 - b. 表示されたディメンションで  をクリックします。「メンバー選択」ページで、削除する詳細のある選択項目を選択します。

ノート:

選択された各ディメンションに、少なくとも1つのメンバーを選択する必要があります。ディメンションが選択されないと、Planning では、セル詳細のクリアにすべてのメンバーが含まれてしまいます。

注意:

目的のデータをクリアするには、少なくとも1つの勘定科目メンバーを選択し、他のすべてのディメンションからメンバーを選択します。少なくとも1つの勘定科目メンバーを選択しないと、はい、値を#Missing に設定するオプションを選択した場合でも、データはクリアされません。他のディメンションからメンバーを選択しない場合、選択した勘定科目メンバーの全データは、他のすべてのディメンションにわたってクリアされます。

4. オプション: 追加するメンバーを指定して、データ交差をさらに定義するには:
 - 別のディメンションを選択してそのメンバーを選択するには、「ディメンションの追加」をクリックします。
 - プラン・タイプのすべてのディメンションを選択する場合は、「すべてのディメンションの追加」をクリックします。
表示されたディメンションのメンバーを選択します。
5. 「オプションのクリア」から少なくとも1つのオプションを選択して、削除する情報のタイプを指定します。
6. 「クリア」をクリックします。
確認ページに選択項目が表示されます。
7. 「終了」をクリックして次に進むか、「戻る」をクリックして選択項目を変更します。

セル詳細がクリアされたら、プラン・タイプからデータが削除されます。データが正常に削除されない場合、メッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。

8. **オプション:** 「セル詳細のクリア」の実行ステータスの表示および削除された情報のレビューを行うには、「ツール」、次に「ジョブ・コンソール」を選択します。

Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドのジョブ・ステータスの確認を参照してください。

9. 別のプラン・タイプのセル詳細をクリアするには、ステップ 2 で別のプラン・タイプを選択して、手順を繰り返します。

アプリケーションの操作

フォームとフォルダの管理

「フォームの管理」と「ビジネス・ルール・フォルダ」ページを使用して、フォルダとフォームを管理します。

タスク	トピック
フォルダの作成	フォルダの作成 を参照してください
フォルダの移動	フォルダの操作 を参照してください
フォルダの削除	フォルダの操作 を参照してください
フォルダ名の変更	フォルダの操作 を参照してください
フォームの作成	単一のフォームの作成 を参照してください
フォームとフォルダへのアクセス権の割当て	フォームとフォルダへのアクセス権の割当て を参照してください
フォームの移動	フォームの移動、削除および名前変更 を参照してください
フォームの削除	フォームの移動、削除および名前変更 を参照してください

Oracle Hyperion Calculation Manager フォルダのすべてのフォームまたはビジネス・ルールを表示するには、左側のフォルダ領域にあるフォルダ名をクリックします。すべてのフォームを選択するには、フォームのリストの上にあるチェック・ボックスを選択します。

フォルダの作成

フォルダを使用して、フォームおよび **Oracle Hyperion Calculation Manager** ビジネス・ルール・セキュリティを階層形式で整理します。階層内でフォルダを移動させることができ、フォルダが別の階層レベルにある場合は、同じ名前を付けることができます。次を行うことはできません:

- 空でないフォルダの削除
- 複数のフォルダの選択
- 「Forms」、「CalcMgrRules」と呼ばれる最上位レベルのフォルダの名前変更、移動または削除

フォルダを作成するには:

1. 次のいずれかのアクションを行います:
 - フォーム・フォルダ: 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
 - Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダ: 「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。
2. 作成先のフォルダを選択します。
3. フォルダ・リストの上の「作成」をクリックします。
4. フォルダ名を入力します。
5. 「OK」をクリックします。

フォルダの操作

フォルダを移動、削除または名前変更するには:

1. フォーム・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。

ビジネス・ルール・フォルダは、「管理」、次に「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。
2. 移動、削除または名前変更するフォルダを選択します。
3. 次のタスクを実行します:
 - 移動するには、「移動」をクリックします。選択したフォルダを移動する宛先フォルダを選択します。

ノート:

フォルダを移動するとき、すべてのネストされたフォルダ、フォームおよびそれらにある Oracle Hyperion Calculation Manager のビジネス・ルールも移動されます。

- 削除するには、「削除」をクリックします。
 - 名前を変更するには、「名前変更」をクリックしてから、新しい名前を入力します。
4. 「OK」をクリックします。

プリファレンスの設定について

「プリファレンス」ページで、すべてのユーザーは個別のプリファレンスを設定できます。管理者とアプリケーションの所有者はグローバル設定を指定できます。「プリファレンス」の選択項目は現在のアプリケーションに影響します。

「プリファレンス」のオプションはユーザー・タイプによって異なります。プランナと対話型ユーザー・タイプは「アプリケーション設定」と「表示オプション」にアクセスできます。Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照してください。

参照:

- [個人プリファレンスの設定](#)
- [アプリケーション・デフォルトの設定](#)
- [システム設定の指定](#)
- [メンテナンス中のアプリケーションの使用制限](#)
- [カスタム・ツールの指定](#)
- [表示オプションの設定](#)
- [印刷オプションの設定](#)

管理者は個人のプリファレンス、アプリケーション・デフォルト、システム設定で表示されるタブを制御できます。

表示オプション	説明
現在のアプリケーション・デフォルト	「アプリケーション設定」タブと「表示オプション」タブにアクセスします。これらのタブに設定された値は、アプリケーションのデフォルトになります。ユーザーはデフォルトの上書きとプリファレンス・タブにある「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択してデフォルトに戻すことができます。 <i>Oracle Hyperion Planning</i> ユーザー・ガイドを参照してください。
拡張設定	「システム設定」タブにアクセスします。 システム設定の指定 を参照してください。 「カスタム・ツール」タブにアクセスします。 カスタム・ツールの指定 を参照してください。

個人プリファレンスの設定

すべてのユーザーは、現在のアプリケーションの個人プリファレンスを設定できます。アプリケーション設定、表示オプション、印刷オプションの詳細は、*Oracle Hyperion Planning* ユーザー・ガイドを参照してください。

個人プリファレンスを設定するには:

1. 「ファイル」、「プリファレンス」の順に選択します。
2. 「Planning」をクリックして、次のアクションを実行します:
 - 「**アプリケーション設定**」を選択して、電子メール・オプションを設定し、別名表を選択し、メンバー選択および承認のオプションを設定します。
 - 「**表示オプション**」を選択して、数値のフォーマット、ページの選択、大きなフォームの警告、ページに表示するディメンションの数のオプションを設定します。
 - 「**印刷オプション**」を選択して、ページをどのように印刷するのかを指定します。
 - **ユーザー変数オプション**を選択して、ユーザー変数を設定し、フォームに表示するメンバー数を制限します。[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択すると、値が現在のアプリケーション・デフォルトにリセットされます。

アプリケーション・デフォルトの設定

管理者は、現在のアプリケーションのデフォルトを設定できます。これらのアプリケーションのデフォルトはプリファレンスを設定して上書きでき、「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択するとアプリケーション・デフォルトに戻すことができます。個々のアプリケーションの設定および表示オプションのデフォルトの詳細は、*Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド*を参照してください。

アプリケーション・デフォルトを設定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「現在のアプリケーション・デフォルト」を選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 「アプリケーション設定」を選択して、次のデフォルトを指定します。
 - タスク・リスト、承認およびジョブ・コンソールの電子メール通知

ノート:

承認電子メール通知は、アプリケーション作成者が有効にする必要があります。アプリケーション作成者がこれを有効にしない場合、管理者が承認通知を有効にしても、他のユーザーがプランニング・ユニットを移動したときや、プランニング・ユニットで他のアクションを実行したときに電子メール通知は送信されません。

- 電子メールでのアプリケーションの所有者のコピー
- 使用する別名表
- 「メンバー・セレクト」ダイアログ・ボックスで、メンバーの種類と表示する別名データ、たとえば名前と別名の両方など
- 別名としてのプランニング・ユニットの表示
- 起動されていないプランニング・ユニットの表示
- 属性ディメンション日付フォーマット
- 「表示オプション」を選択して、次のデフォルトを指定します。
 - 数値のフォーマット
 - 選択されたページのメンバーを記憶
 - ページが特定の数を越えた場合に検索を許可
 - メンバーのインデント
 - フェッチしてフォームに移入するグリッドの行と列の数
 - UI テーマ
 - 日付フォーマット

4. 「保存」をクリックします。

システム設定の指定

システム全体の設定を指定できるのは、管理者のみです。

電子メール・サーバーとパスワードを Oracle Essbase で同期できるのは、アプリケーションの所有者のみです。

システム設定を指定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「拡張設定」を選択します。
3. 「システム設定」を選択します。
4. オプションを設定します。

表 10-1 システム設定

オプション	説明
電子メールの文字セット	電子メール・メッセージの文字セット: <ul style="list-style-type: none"> ・ UTF-8 ・ 地域設定
ビジネス・ルール通知	(Oracle Hyperion Calculation Manager で通知に対して有効な)ルールが完了するか、エラーが発生した場合にユーザーまたはグループに通知するには、「はい」に設定します。
ユーザーに通知	「ビジネス・ルール通知」が有効な場合、通知するユーザーまたはグループを1つ選択します。
Shared Services の URL	Oracle Hyperion Shared Services サーバーの URL。「Shared Services の登録」をクリックして、アプリケーションをアプリケーション・グループに割り当てます(Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当てを参照)。
アプリケーションの使用可能	バックアップ中などのメンテナンス・モードのときに、ユーザーがアプリケーションにアクセスできるかどうかを判別します。メンテナンス中のアプリケーションの使用制限を参照してください。
代替変数の表示を使用可能にする	ユーザーが、ビジネス・ルールで実行時プロンプトへの応答時に「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに代替変数をどう表示させるかを次のように設定します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ すべて表示: すべての代替変数を表示する ・ 何も表示しない: 代替変数を表示しない ・ フィルタの使用可能: 実行時プロンプトに有効な代替変数のみを表示する バグ

表 10-1 (続き) システム設定

オプション	説明
ユーザーの選択	アプリケーションの所有権を別の管理者に割り当てます。
ユーザーのフル・ネームの表示	はい: フル・ネーム(たとえば、ヴィクトリア・ヘニングスなど)を表示します。 いいえ: フル・ネームを表示しません。ユーザー ID(たとえば、VHennings など)のみ表示されます。
計算モジュール	ビジネス・ルール作成、検証、デプロイおよび管理に使用されるモジュール。(選択できるのは Calculation Manager のみです。)
ユーザーの選択	管理者をアプリケーションの所有者として割り当てます。(デフォルトでは、アプリケーションを作成した人がアプリケーションの所有者です。所有者は、別の管理者に所有権を与えることができます。)

- 各アプリケーションのシステム設定を指定するには、これらのステップを繰り返してから、「保存」をクリックします。

Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て

Oracle Hyperion Planning アプリケーションを Oracle Hyperion Shared Services アプリケーション・グループに割り当てるには:

- 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
- 「実行」をクリックします。
- 「システム設定」を選択します。
- 「Shared Services の登録」をクリックして、「アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て」のオプションを 1 つ選択します:
 - 「新規アプリケーション・グループ」。テキスト・ボックスにアプリケーション・グループ名を入力します(Shared Services のプロジェクト・マネージャの役割がある場合のみ使用可能です)。
 - 「既存のアプリケーション・グループ」。現在のアプリケーションを割り当てるアプリケーション・グループを選択します。
- 「送信」、「保存」の順にクリックします。

メンテナンス中のアプリケーションの使用制限

管理者はメンテナンス中にアプリケーションへのアクセス権の付与と取消しができません。ユーザーがアプリケーションにログオンしているとき、管理者がアクセス権を取り消すと、ユーザーはシステムから退出させられます。

アプリケーションの使用を制限するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「拡張設定」、「システム設定」の順に選択します。
3. 「アプリケーション・メンテナンス・モード」で、「アプリケーションを使用可能にする」のオプションを選択します。
 - **すべてのユーザー:** アプリケーションへのアクセス権を持つすべてのユーザーが、アプリケーションにログオンしたり操作を続行できます。
 - **管理者:** 管理者のみがログオンできます。オプションが「すべてのユーザー」にリセットされるまで、他のユーザーは強制的に退出する必要があります、ログオンできません。
 - **所有者:** アプリケーションの所有者のみがログオンできます。他のすべてのユーザーはログオンできません。ログオン中のユーザーは、オプションが「すべてのユーザー」か「管理者」にリセットされるまで、システムから強制的に退出する必要があります。アプリケーションの所有者のみが、管理者によるアプリケーションの使用を制限できます。
4. 現在の設定より厳しい制限が選択された場合、「OK」をクリックします。
5. 「保存」をクリックします。

[MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限](#)も参照してください。

MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限

管理者はユーティリティ `MaintenanceMode.cmd` (Windows) または `MaintenanceMode.sh` (UNIX) を使用して、メンテナンス中にアプリケーションへのアクセス権を一時的に取り消すことができます。

MaintenanceMode ユーティリティを使用するには:

1. コマンド・ラインで、`planning1` ディレクトリに移動します。

`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。
2. このコマンドと 1 つのスペース、およびパラメータをスペースで区切って入力します。

```
MaintenanceMode
[-f:
passwordFile
], /A=
app, /U=
user, /P=
password,

/LL=
loginLevel
[ALL_USERS|ADMINISTRATORS|OWNER], [/DEBUG=[true|false]],
```

[/HELP=Y]

表 10-2 MaintenanceMode ユーティリティのパラメータ

パラメータ	説明	必須?
[-f: passwordFile]	<p>オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFileで指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。</p> <p>Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制を参照してください。</p>	いいえ
/A= app	アプリケーション名	はい
/U= user	ユーティリティを実行している管理者の名前	はい
/P= password	管理者のパスワード	はい
/LL= loginLevel [ALL_USERS ADMINISTRATORS OWNER]	<p>ユーティリティが影響を与えるユーザーを指定します:</p> <p>ALL_USERS: すべてのユーザーが、アプリケーションにログオンしたり操作を続行できます。</p> <p>ADMINISTRATORS: 他の管理者のみログオンできます。オプションがALL_USERSにリセットされるまで、他のユーザーは強制的に退出する必要があります、ログオンできません。</p> <p>OWNER: アプリケーションの所有者のみがログオンできます。他のすべてのユーザーはログオンできません。ログオン中のユーザーは、オプションがALL_USERSかADMINISTRATORSにリセットされるまで、システムから強制的に退出する必要があります。アプリケーションの所有者のみが、管理者によるアプリケーションの使用を制限できます。</p>	はい
/DEBUG=[true false]	ユーティリティをデバッグ・モードで実行するかどうかを指定します。デフォルトはfalseです。	いいえ
/HELP=Y	ユーティリティの構文をオンラインで表示します。	いいえ

たとえば、Windows システムでは、管理者を除くすべてのユーザーを"planapp"という名前のアプリケーションから強制的に退出させるには、次のように入力します。

```
MaintenanceMode.cmd /A=planapp, /U=admin, /P=password,
/LL=ADMINISTRATORS
```

カスタム・ツールの指定

管理者は、「ツール」ページで、ユーザーのカスタム・ツールやリンクを指定できます。リンクにアクセスできるユーザーは、「ツール」メニューからリンクをクリックして、セカンダリ・ブラウザ・ウィンドウでページを開くことができます。

カスタム・ツールを指定するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
3. 「実行」をクリックします。
4. 「カスタム・ツール」を選択します。
5. 各リンクについて:
 - 「名前」に、表示されたリンク名を入力します。
 - 「URL」に、http://接頭辞を含む完全修飾 URL を入力します。
 - 「ユーザー・タイプ」に、リンクにアクセスできるユーザーを選択します。
6. 「保存」をクリックします。

表示オプションの設定

管理者は、ディメンション・ページと「アクセス権の追加」ページに表示するアイテム数を設定できます。

表示するアイテム数を設定するには:

1. 「ファイル」、「プリファレンス」、「表示オプション」を選択します。
2. 値を入力します。
 - 「指定したメンバーを各ディメンションのページに表示」
 - 「指定したレコードを各アクセス権の割当てページに表示します」
3. 「保存」をクリックします。

印刷オプションの設定

印刷オプションを設定するには、[フォームの精度およびその他オプションの設定](#)を参照してください。

レポート用のアプリケーションのマッピング

次も参照:

[レポート・アプリケーションについて](#)

[レポート・アプリケーションの作成](#)

[レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング](#)

[アプリケーション・マッピングの定義](#)

[ディメンション・マッピングの定義](#)

[視点の設定](#)

[データ・オプションの設定](#)

[デフォルト・メンバーの検証ルール](#)

[データのプッシュ](#)

[マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能](#)

[マッピング・アプリケーションと代替変数](#)

[レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加](#)

[レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集](#)

[レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除](#)

レポート・アプリケーションについて

レポート・アプリケーションは、Oracle Hyperion Planning データを集約しレポートできるターゲット・アプリケーションです。主なユース・ケース:

- レポート・アプリケーションに、データ・ウェアハウスなどの任意のソースからのデータが含まれています。新規 Planning データをそこにプッシュし、そのデータに関してレポートする必要があります。
- Planning のスマート・リストに関してレポートする必要がありますが、Planning ではできません。

ソース Planning アプリケーションとレポート・アプリケーション間でディメンションをマップすることで、次のことができます:

- レポート・アプリケーションで Planning のデータをレポート
- スマート・リストで集約と問合せを行い、それをレポート・アプリケーションで通常のディメンションに変換
- Planning データを複数のレポート・アプリケーションにリンクして、各種の集計に利用

レポート・アプリケーションの作成

レポート・アプリケーションを作成するには:

1. 存在しない場合、ターゲット・レポート・アプリケーションを作成します。

レポート・アプリケーションには、ブロック・ストレージまたは集約ストレージを指定できます。

それぞれの特徴は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

2. レポート・アプリケーションで、レポートまたは集約するディメンションを作成します。

後でアプリケーションをマップする場合、Oracle Hyperion Planning は自動的に同じ名前のディメンションをマップします。スマート・リストでレポートまたは問合せを行うには、ソース Planning アプリケーションのスマート・リストにマップするレポート・アプリケーションにディメンションを作成します。

3. レポート・アプリケーションに、レポートまたは集約するメンバーをロードします。

[データとメタデータのインポートおよびエクスポート](#)を参照してください。

次:

- ソース Planning アプリケーションをターゲット・レポート・アプリケーションにマップします。
[レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング](#)を参照してください。
- データをソースからターゲット・アプリケーションにプッシュします。
[レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ](#)を参照してください。
- レポート・アプリケーションのデータをレポートします。

レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング

レポート・アプリケーションに Oracle Hyperion Planning アプリケーションをマップするには:

1. レポート・アプリケーションを作成します。
[レポート・アプリケーションの作成](#)を参照してください。
2. Planning で、「管理」、「レポート・アプリケーションのマップ」の順に選択します。
3. 「Reporting アプリケーション・マッピング」ページで、オプションを選択します:
 - マッピングを作成する場合は、「新規」をクリックします。
 - マッピングを更新する場合は、マッピングを選択して「編集」、「削除」または「名前変更」をクリックします。[アプリケーション・マッピングの定義](#)を参照してください。
 - レポート・アプリケーションからディメンションおよびメンバーをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。アプリケーション・マッピングの定義時に、「リフレッシュ」を行うことで、ターゲット・アプリケーション用のメンバー・セレクトアのディメンションナリティにその実際のディメンションナリティが確実に反映されます。
 - レポート・アプリケーションにデータをプッシュする場合は、「データのプッシュ」をクリックします。[レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ](#)を参照してください。
 - スマート・リストのマッピングを更新するには、[レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期](#)を参照してください。

アプリケーション・マッピングの定義

アプリケーション・マッピングを定義するには:

1. **新しいマッピングの場合:** 名前および説明を入力します。
2. 「ソース・アプリケーション」で、使用可能なプラン・タイプから現在のアプリケーションの「プラン・タイプ」を選択します。

プラン・タイプは、レポート・アプリケーションにプッシュされる情報に影響しません。

3. 「レポート・アプリケーション」でレポート・アプリケーションが存在する Oracle Essbase サーバーを選択し、ターゲットのレポート・アプリケーションを選択します。
4. オプション: 表示されている Essbase サーバーを追加、編集または削除するには、レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加、レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集またはレポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除を参照してください。
5. 「次」をクリックします。

[ディメンション・マッピングの定義](#)を参照してください。

ディメンション・マッピングの定義

「ディメンションのマッピング」タブで、左側にある Oracle Hyperion Planning のディメンションを右側のレポート・アプリケーション・メンバーにマップします。マッピングが正しければ、両方のアプリケーションのディメンションがマップされる時、またはレポート・アプリケーションでデータを格納する有効なデフォルト・メンバーがあるとき、データをプッシュできます([視点の設定](#)を参照)。

ディメンション・マッピングを定義するには:

1. 各 Planning ディメンションについて、「マッピング・タイプ」を選択します。
 - **ディメンションに対するディメンション:** Planning アプリケーションで使用可能な、まだマップされていないディメンションを表示します。データをプッシュするには、ディメンションとそのすべてのメンバーがソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの両方に存在する必要があります。Planning とレポート・アプリケーションで等しいディメンション(たとえば、シナリオとシナリオ)は、自動的にマップされます。
 - **ディメンションに対するスマート・リスト:** 使用可能なスマート・リストを表示します。スマート・リストを選択すると、関連付けられている勘定科目メンバーが表示されます。メンバーが 1 つのみの場合は、そのメンバーが自動的に選択されます。

ノート:

スマート・リスト・ラベルはレポート・アプリケーションでメンバー名またはメンバーの別名へのマッピングに使用されます。

2. 「ディメンション名/スマート・リスト名」で、ディメンションまたはスマート・リストの名前を選択します。

スマート・リストからディメンションへのマッピングでは、ソースのプラン・タイプに勘定科目の密ディメンションが含まれている必要があり、スマート・リストに少なくとも 1 つのメンバーが関連付けられている必要があります。

ノート:

スマート・リストをディメンションにマッピングする場合、スマート・リストを同期して、スマート・リストをマップするレポート・アプリケーションでディメンションを識別できます。またこれにより、選択したディメンションのレベル0のメンバーが選択したスマート・リストに新規スマート・リスト・エントリとして追加されます。[レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期](#)を参照してください。

3. 「メンバー選択」で、 をクリックしてメンバー名を選択します。

デフォルトでは、Lev0Descendants が選択されています。選択できるのは、レベル0のメンバーのみです。メンバーが1つのみの場合は、そのメンバーが自動的に選択されます。

4. 次のいずれかをクリックします:

- 視点を表示するには「次へ」をクリックします。[視点の設定](#)を参照してください。
- すべてのディメンションをマップし、POVの必要がない場合には「保存」をクリックします(この場合「次へ」ボタンはグレー表示になります)。

視点の設定

「視点」タブには、各アプリケーションでまだマップされていないディメンション、またはいずれかのアプリケーションに存在しないためPOVを指定できるディメンションが表示されます。POVディメンションはすべて、メンバーが1つだけ選択されている必要があります。

視点を設定するには:

1. 「視点」ページの最上部セクションで、まだマップされていない各 Oracle Hyperion Planning ディメンションのメンバーを指定します。次のいずれか:

- メンバー名を入力します。
- 表示されていないメンバーを選択するには、 をクリックしてから POV メンバーを選択します。

有効なデフォルト・メンバーに関するルールについては、[デフォルト・メンバーの検証ルール](#)を参照してください。

2. 下部セクションで、マップされていない各レポート・アプリケーションの POV メンバーに対しメンバーを選択します。次のいずれか:

- POV メンバー名を入力します。
- 表示されていないメンバーを選択するには、 をクリックしてから POV メンバーを選択します。

3. 「保存」をクリックします。

データ・オプションの設定

「データ・オプション」タブを使用して、データをプッシュする際にコメント、添付、サポート詳細などのリレーショナル・データをマージする方法を定義します。

データ・オプションを設定するには:

1. オプションを選択します:
 - **コピー禁止:** リレーショナル・データをコピーしません。
 - **複数のセルを1つのセルにマージする場合は無視:** 複数のセルが1つのセルを形成する場合はリレーショナル・データをコピーしません。
 - **複数のセルを1つのセルにマージする場合は上書き:** セルをマージする際に、既存のセルと添付を最新のサポート詳細データで置換します。
 - **複数のセル・データを1つのセルに追加:** 複数のセルを1つのセルにマージする場合に、サポート詳細を追加するか、すべてのソース・セルからターゲット・セルにマージします。
2. 「保存」、「終了」の順にクリックします。

デフォルト・メンバーの検証ルール

レポート・アプリケーションのデフォルト・メンバーには、ソースの Oracle Hyperion Planning アプリケーションからプッシュされたデータが格納されます。次のいずれかの制約が該当する場合、またはどちらかのアプリケーションのディメンションがマップされないために有効なデフォルト・メンバーがない場合、マッピングは無効となりエラー・メッセージが表示されます。

ルール:

- レポート・アプリケーションが集約ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはレベル 0 でなければなりません。
ブロックと集約ストレージ・アプリケーション・データベースの詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。
- レポート・アプリケーションがブロック・ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはデータの格納プロパティを持つ任意のメンバーにできます。
- Planning アプリケーションにディメンションからディメンションへのマッピングしかない場合、デフォルト・メンバーは任意のレベルまたはデータ・ストレージ・タイプにできます。
- Planning アプリケーションにスマート・リストからディメンションへのマッピングがある場合、デフォルト・メンバーはレベル 0 でなければなりません。また、ソース・プラン・タイプに勘定科目の密ディメンションが含まれている必要があり、スマート・リストに少なくとも1つのメンバーが関連付けられていなければなりません。
- マッピングで子孫(Acct_Default)が選択されている場合、レポート・アプリケーション内に Acct_Default メンバーが存在する必要があります。

ノート:

有効だったマッピングでも、ディメンション、メンバーまたはスマート・リストが名前変更、削除、追加された場合には無効になることがあります。ターゲット・プラン・タイプのディメンションに変更がある場合は、「**レポート・アプリケーションのマップ**」画面で対応するアプリケーション・マッピングを選択し、 をクリックしてデータをリフレッシュする必要があります。

データのプッシュ

レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ

アプリケーション・マッピングを設定した後、データをレポート・アプリケーションにプッシュできます。選択したアプリケーション・マッピングは **Oracle Hyperion Planning** で検証され、マップされた **Planning** ディメンション・データはレポート・アプリケーションのディメンションにプッシュされます。ジョブ・コンソールでジョブのステータスを確認することもできます。[レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング](#) を参照してください。

ノート:

ブロック・ストレージ・アプリケーションと集約ストレージ・アプリケーションの両方で親メンバーを動的な子に対して使用可能にし、動的メンバーを追加した場合、「**データのプッシュ**」を使用すると、データベースをリフレッシュせずにブロック・ストレージ・アプリケーションから集約ストレージ・アプリケーションにデータをプッシュできます。

ノート:

集約ストレージ・アプリケーションが **Planning** で使用される動的メンバーの名前に一致するメンバーを持つ **Planning** の外部で作成される場合、システムは **Oracle Essbase** バケット名を探すため、データのプッシュは失敗します。この問題は、集約ストレージ・データベースが **Planning** 内で作成されている場合には発生しません。

レポート・アプリケーションにデータをプッシュするには:

1. レポート・アプリケーションを作成します。
[レポート・アプリケーションの作成](#) を参照してください。
2. **Planning** で、「**管理**」、「**レポート・アプリケーションのマップ**」の順に選択します。
3. 「**Reporting アプリケーション・マッピング**」 ページで、「**データのプッシュ**」 をクリックします。
4. オプションを選択します:
 - **宛先のデータをクリアし、データをプッシュしてください:** データをプッシュする前にターゲット・レポート・アプリケーションのデータをクリアします
ターゲットが集約ストレージ・レポート・アプリケーションの場合は、「**宛先のデータをクリアし、データをプッシュしてください**」 オプションを使用する際に次の点に注意してください:

- ターゲット・レポート・アプリケーションで一致する名前のないメンバーは無視されます。
- このオプションはメンバー名にのみ機能し、メンバーの別名には機能しません。
- このオプションを使用すると、計算スクリプトの長さ制限を超える可能性があるため、アプリケーション・マッピングのメンバーを選択する場合は、(子などの)メンバー関係を使用する際に注意してください。
- メンバー関係を使用する場合、このオプションによりソース Planning アプリケーションのレベル 0 メンバーのリストが拡張されます。ソース・アプリケーションの少なくとも 1 つのメンバー名がレポート・アプリケーションのメンバーに一致すれば、このオプションはエラーなしで続行されます。メンバーが 1 つも一致しない場合は、オプションを続行できません。

ターゲットがブロック・ストレージ・レポート・アプリケーションの場合、正常に続行するには、「宛先のデータをクリアし、データをプッシュしてください」オプションに次の条件が要求されます:

- メンバー関係を使用する場合、ソース・アプリケーションのすべてのメンバー名が、レポート・アプリケーションのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストをディメンションにマップする場合、ソース・アプリケーションのすべてのスマート・リスト・エントリが、レポート・アプリケーションのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストをディメンションにマップする場合、ソース Planning アプリケーションのスマート・リスト・エントリ・ラベルが、レポート・アプリケーションのメンバー名に一致する必要があります。スマート・リスト・エントリ・ラベルがレポート・アプリケーションのメンバー名に一致しない場合は、スマート・リスト・エントリ名がレポート・アプリケーションのメンバー名に一致する必要があります。

これらの条件に一致しない場合、「宛先のデータをクリアし、データをプッシュしてください」オプションは続行されません。

- **データのプッシュ:** レポート・アプリケーションのデータをクリアせずにレポート・アプリケーションにデータをプッシュします。

スマート・リストをディメンションにマップする場合、スマート・リストのラベルはレポート・アプリケーションのメンバー名または別名に一致する必要があります。「データのプッシュ」は、スマート・リスト・エントリ名には使用できません。

5. 「OK」をクリックします。

ユーティリティを使用したデータのプッシュ

レポート・アプリケーションへのデータのプッシュには時間がかかることがあるので、管理者は PushData ユーティリティを使用してピークではない時間にデータをプッシュするようにスケジュールすることができます。このユーティリティは planning1 ディレクトリにインストールされます。planning1 の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

PushData ユーティリティを起動するには:

1. Oracle Hyperion Planning がインストールされたサーバー上の planning1 ディレクトリから、コマンド・プロンプトで次の構文を入力します:

```
PushData [ -f:passwordFile ] /U: username /A: sourceApplication /M:
applicationMapping [ /C ]
```

パラメータ	説明
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <i>passwordFile</i> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。
/U: <i>username</i>	Planning 管理者の名前
/A: <i>sourceApplication</i>	プッシュするデータのソース Planning アプリケーションの名前
/M: <i>applicationMapping</i>	プッシュ・データ範囲を定義するアプリケーション・マッピングの名前(レポート用のアプリケーションのマッピング を参照)
[/C]	オプション: データをプッシュする前にターゲット・レポート・アプリケーションのデータ範囲をクリアします

2. プロンプトが表示されたら、パスワードを入力します。

ノート:

ジョブ・コンソールで実行ステータスを確認できます。Planning の logs ディレクトリの PushData ログで結果を表示することもできます。完全なパスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

例:

```
PushData /U:admin /A:plnapp /M:LineItemsToExpenses /C
```

```
PushData -f: password.txt /U:admin /A:plnapp /
M:LineItemsToExpenses /C
```

```
PushData /U:admin /A:plnapp /M:LineItemsToExpenses
```

マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能

レポート・アプリケーションへのアプリケーションのマッピングでは、次はサポートされません:

- 重複メンバー使用可能オプションが選択された集約ストレージ・データベース・アウトライン
- ユーザー変数
- 属性ディメンション
- 属性メンバー選択

マッピング・アプリケーションと代替変数

代替変数を含むアプリケーションをマッピングする際には、次のことに注意してください:

- 代替変数が確認されるのは、アプリケーション・マッピングの定義時ではなく、「データのプッシュ」をクリックしたときです。
- 「**ディメンションのマッピング**」タブでのディメンション間マッピングの場合:
 - メンバー・セレクトタには、Oracle Hyperion Planning アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションに対してのみ定義された Oracle Essbase 代替変数が表示されます。
 - Planning アプリケーションの場合、選択または入力した変数名は、「データのプッシュ」をクリックしたときに、渡されて評価されます。
 - レポート・アプリケーションの場合、変数名が Planning アプリケーションに対して評価されてから、値がデータのクリア操作で使用されます。
- 「**視点**」タブの「視点」フィールドの場合:
 - Planning アプリケーションの場合、メンバー・セレクトタには、Planning アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションにのみ定義された Essbase 代替変数が表示されます。選択または入力した変数名は、「データのプッシュ」をクリックしたときに Essbase によって渡されて評価されます。
 - レポート・アプリケーションの場合、メンバー・セレクトタには、レポート・アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションにのみ定義された代替変数が表示されます。変数はレポート・アプリケーションに対して評価され、評価値は、メンバー関数ではなく単一メンバーについて各レポート・ディメンションに対して検証されます。
- レポート・アプリケーションのメタデータが変更されている場合、データを編集またはプッシュしてレポート・ディメンションおよびメンバーを Planning に同期する前に「**リフレッシュ**」をクリックします。たとえば、レポート・アプリケーションにディメンションまたはメンバーが追加されている場合、「リフレッシュ」をクリックすると、Planning にメンバーが表示されます。レポート・アプリケーションのメタデータの変更をリフレッシュすると、マッピングが無効になる可能性があります。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加

レポート・アプリケーション・データベースが存在している Oracle Essbase サーバーを追加するには、「**Essbase サーバーの追加**」ダイアログ・ボックスで、次のようにします:

1. 「**Essbase サーバー**」にサーバー名を入力します。

アクティブ-パッシブ・クラスタ・モードで Essbase のフェイルオーバーをサポートするようにデータ・ソースを構成するには、「**Essbase サーバー名**」の値を Essbase クラスタ名が続く APS URL で置き換えます。たとえば、APS URL が `http://hostname:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「**Essbase サーバー名**」フィールドの値は次のようになります:

`http://hostname:13090/aps/Essbase?clusterName=EssbaseCluster-1`

このリリースでは、APS URL なしで「**Essbase サーバー名**」フィールドに Essbase クラスタ名を入力することはできません。

2. 「**ユーザー名**」にユーザー名を入力します。
3. 「**パスワード**」にパスワードを入力します。

ユーザーの名前とパスワードは、今後のセッションで再入力が必要ないように格納されます。

4. **オプション**: Essbase サーバーへの接続をテストするには、「**接続の検証**」をクリックします。
5. 「**OK**」をクリックします。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集

「**Essbase サーバーの編集**」ダイアログ・ボックスを使用して、サーバー名やポート番号などのログイン資格証明と接続詳細を変更できます。デフォルトの Oracle Essbase サーバーでは、アプリケーションに関連付けられているデータ・ソースについて、「**データ・ソースの管理**」ダイアログ・ボックスで更新することができます。

ノート:

EPM System コンフィギュレータを使用して Essbase サーバーを変更する場合、Oracle Hyperion Planning 内でサーバー名を更新する必要があります。

ヒント:

Planning アップグレード・ウィザードを使用して、複数のレポート・アプリケーション用の Essbase サーバー情報を更新できます([レポート用 Essbase サーバーへの参照の更新](#)を参照してください)。

レポート・アプリケーション・データベース用に表示される Essbase サーバーを編集するには、「**Essbase サーバーの編集**」ダイアログ・ボックスで次を実行します:

1. 「**Essbase サーバー**」で、使用可能なサーバーのリストからサーバーを選択します。

アクティブ-パッシブ・クラスタ・モードで Essbase のフェイルオーバーをサポートするようにデータ・ソースを構成するには、「**Essbase サーバー名**」の値を Essbase クラスタ名が続く APS URL で置き換えます。たとえば、APS URL が `http://hostname:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「**Essbase サーバー名**」フィールドの値は次のようになります:

```
http://hostname:13090/aps/Essbase?clusterName=EssbaseCluster-1
```

このリリースでは、APS URL なしで「**Essbase サーバー名**」フィールドに Essbase クラスタ名を入力することはできません。

2. 「**サーバー名**」にサーバー名を入力します。
3. 「**ユーザー名**」にユーザー名を入力します。
4. 「**パスワード**」にパスワードを入力します。
5. **オプション**: Essbase サーバーへの接続をテストするには、「**接続の検証**」をクリックします。

6. 「OK」 をクリックします。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除

レポート・アプリケーション・データベース用に表示されている Oracle Essbase サーバーを削除するには、「Essbase サーバーの削除」ダイアログ・ボックスで、次のようにします:

1. サーバーを選択します。
現在の Oracle Hyperion Planning アプリケーションが存在しているデフォルトのサーバーは削除できません。
2. 「削除」 をクリックします。
3. プロンプトで、削除が間違いなければ「OK」 をクリックします。

SQL を使用してアプリケーション情報を削除

Oracle Hyperion Planning には、この情報を削除するための SQL ファイルが用意されています:

- 勘定科目注釈。 [勘定科目注釈の削除](#) を参照してください。
- シナリオに関するサポート詳細。 [シナリオに関するサポート詳細を削除](#) を参照してください。

セル詳細のクリア機能を使用して、勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメントをクリアできます。 [セル詳細のクリア](#) を参照してください。

勘定科目注釈の削除

sql ディレクトリにインストールされた aadelete.sql ファイルを使って、勘定科目注釈を削除できます。ファイルには、選択された勘定科目名の注釈を削除する SQL 問合せが含まれます。「セル詳細のクリア」機能を使用して勘定科目注釈をクリアするには、 [セル詳細のクリア](#) を参照してください。

勘定科目名に関連付けられた勘定科目注釈を削除するには:

1. Web アプリケーション・サーバーを停止します。
2. 削除する注釈の勘定科目名を置換して、使用しているリレーショナル・データベースのタイプに対応する aadelete.sql ファイルの SQL 問合せのセクションを更新します。
3. 使用しているリレーショナル・データベースに適切な aadelete.sql ファイルの問合せを実行します。

例: Account1 の勘定科目注釈を削除

```
DELETE
FROM HSP_ACCOUNT_DESC
WHERE ACCOUNT_ID=(SELECT OBJECT_ID FROM HSP_OBJECT
WHERE OBJECT_NAME='ACCOUNT1')
INSERT INTO HSP_ACTION
```

```
(FROM_ID, TO_ID, ACTION_ID, OBJECT_TYPE, MESSAGE, ACTION_TIME,  
PRIMARY_KEY) VALUES (0,0,2,18,NULL,GETDATE(),NULL)
```

シナリオに関するサポート詳細を削除

sql ディレクトリにインストールされた `sddelete.sql` ファイルを使って、シナリオに関連付けられたサポート詳細を削除できます。ファイルには、選択されたシナリオのサポート詳細を削除する SQL 問合せが含まれます。「セル詳細のクリア」機能を使用してサポート詳細をクリアするには、[セル詳細のクリア](#)を参照してください。

シナリオに関連付けられたサポート詳細を削除するには:

1. Web アプリケーション・サーバーを停止します。
2. 削除するサポート詳細のシナリオ名を置換して、使用しているリレーショナル・データベースのタイプに対応する `sddelete.sql` ファイルの SQL 問合せのセクションを更新します。
3. 使用しているリレーショナル・データベースに適切な `sddelete.sql` ファイルの問合せを実行します。
4. Web アプリケーション・サーバーを起動します。

例: シナリオに関連付けられたサポート詳細の削除

実績シナリオのサポート詳細が削除されます:

```
DELETE  
  
FROM HSP_COLUMN_DETAIL_ITEM  
  
WHERE DETAIL_ID IN  
  
    (SELECT DETAIL_ID  
     FROM HSP_COLUMN_DETAIL  
     WHERE DIM1 =  
  
        (SELECT OBJECT_ID  
         FROM HSP_OBJECT  
         WHERE OBJECT_NAME = 'ACTUAL')));  
  
DELETE  
  
FROM HSP_COLUMN_DETAIL  
  
WHERE DIM1 =  
  
    (SELECT OBJECT_ID  
     FROM HSP_OBJECT  
     WHERE object_name = 'Actual');
```


メニューの操作

メニューの作成と更新

管理者は、右クリック・メニューを作成して、それをフォームに関連付けることができます。それによって、ユーザーがフォームの行や列をクリックして、次を実行するメニュー・アイテムを選択することができます。

- 実行時プロンプトがあってもなくても、別のアプリケーション、URL またはビジネス・ルールを起動
- 別のフォームへの移動
- 「承認の管理」への事前定義済のシナリオとバージョンをともなった移動
- 「ジョブ・コンソール」または「バージョンのコピー」を開く

右クリックのコンテキストは、POV とページ、ユーザーがクリックしたメンバー、左のメンバー(行)や上(列)など、次のアクションへ送られます。

フォームの設計時に、「その他オプション」を使用して、フォームのメニュー・アイテム・タイプに可能なメニューを選択します。アプリケーションを更新するとき、それに適切なメニューが更新されます。たとえば、メニューで参照されているビジネス・ルールを削除する場合は、そのルールをメニューから削除します。

メニューを作成、編集、削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「メニュー」の順に選択します。
2. 次のいずれかの操作を実行します:
 - メニューを作成するには、「作成」をクリックして、メニューの名前を入力して「OK」をクリックします。
 - メニューを変更するには、そのメニューを選択して「編集」をクリックします。
 - メニューを削除するには、そのメニューを選択して「削除」をクリックして、「OK」をクリックします。

メニュー・アイテムの操作

「メニューの編集」には、現在のメニューの名前、ラベル、必要なディメンション、アイコン、タイプ(「URL」、「フォーム」、「ビジネス・ルール」、「承認の管理」、「メニュー・ヘッダー」、「ジョブ・コンソール」、「バージョンのコピー」)を含むメニュー・アイテムが表示されます。

メニュー・アイテムを操作するには:

1. 「管理」、「管理」、「メニュー」の順に選択します。

2. メニューを選択して、「**編集**」をクリックします。
3. **初回のみ**: メニューに初めてアイテムを追加するには、「**子の追加**」をクリックして、「**保存**」をクリックします。
4. メニュー・アイテムを選択して、次のことを実行できます。
 - 選択したメニュー・アイテムの下にメニュー・アイテムを追加するには、「**子の追加**」(メニューのタイプが「メニュー・ヘッダー」の場合)をクリックします。
 - 選択したメニュー・アイテムと同じレベルにメニュー・アイテムを追加するには、「**兄弟の追加**」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを編集するには、「**編集**」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを削除するには、「**削除**」をクリックします。
 - 同じレベル内でメニュー・アイテムの順番を変更するには、上向き矢印または下向き矢印をクリックします。複数のアイテムを移動できます。
「**メニュー・アイテムの編集**」を使って、メニュー・アイテムのプロパティを定義します。
5. 「**保存**」をクリックします。
「**名前を付けて保存**」をクリックして、新しいメニュー名の下にある現在の選択肢を保存します。

メニュー・アイテムの追加または変更

メニュー・アイテムを定義するには:

1. 「**管理**」、「**管理**」、「**メニュー**」の順に選択します。
2. メニューを選択してから「**編集**」をクリックします。
3. メニュー・アイテムを選択してから、「**編集**」または「**兄弟の追加**」をクリックします。
4. メニュー・アイテムを定義します:

表 11-1 メニュー・アイテム

アイテム	説明
メニュー・アイテム	特殊文字やスペースを入れずに、英数字とアンダースコア文字のみを含む一意の名前を入力します。
ラベル	メニューが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スペースおよび特殊文字を使用できます。メニュー・ラベルはユーザー・インタフェースに表示されます。ラベルはテキストか、名前のリソース変数から参照できるものにします。たとえば、メニューのラベルを「ファイル」と設定して、それを「ファイル」に直接設定するか、ローカライズ可能な、「ラベル_ファイル」のようなリソースの名前に設定します。

表 11-1 (続き) メニュー・アイテム

アイテム	説明
アイコン	<p>オプション: Oracle Hyperion Planning サーバーのコンテキストに、グラフィックへのパスとファイル名を入力して、メニューによって表示できるようにします。(つまり、参照されるグラフィックまたはイメージは、Planning Web アプリケーションのルート・フォルダ内に存在する必要があります。)例: Images/green.gif</p>
タイプ	<p>メニュー・タイプを選択して使用できるプロパティを決定します。「メニュー・ヘッダー」にプロパティは使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フォーム: 選択したフォームを起動します。ユーザーが、ソース・フォーム内で右クリックすると、メンバー、ページ、POV のメンバー選択のコンテキストが保持されます。ターゲット・フォームにページのこれらのディメンション・メンバーが含まれる場合、そのページはコンテキストが一致するよう設定されます。 ・ URL: 指定された URL にナビゲートします。 ・ ビジネス・ルール: 選択されたビジネス・ルールを起動します。 ・ 承認の管理: 「承認の管理」に移動してプランニング・ユニットで作業します ・ メニュー・ヘッダー: 子のメニュー・アイテムの作成先にメニューを作成します。このアイテムでメニューに区切り線を表示するには、「ラベル」にハイフンを1つ入力します。この場合、「必須ディメンション」リストは使用できません。 ・ 前のフォーム: ユーザーを前のフォームに戻すメニューを作成します。 ・ ジョブ・コンソール: 指定されたジョブ・タイプとステータスについて、現在のユーザーに対して「ジョブ・コンソール」を開いてジョブを表示するメニューを作成します。 ・ バージョンのコピー: 現在のフォームのデータをコピーできる「バージョンのコピー」ダイアログを開くメニューを作成します。

表 11-1 (続き) メニュー・アイテム

アイテム	説明
必須パラメータ	ディメンションを選択するか、メニュー・アイテムを表示するオプション(「視点」、「ページ」、「行」、「列」、「メンバーのみ」、「セルのみ」)を選択します。たとえば「勘定科目」を選択すると、ユーザーがフォームで勘定科目メンバーを右クリックしたときにメニューが表示されます。「行」を選択すると、ユーザーが行を右クリックしたときにメニューが表示されます。「なし」を選択すると、ユーザーがフォーム内の任意の場所を右クリックしたときにメニューが表示されます。

5. メニュー・アイテムのタイプごとに、異なるメニュー・アイテム・プロパティを定義します:

タイプ	オプション
フォーム	<ul style="list-style-type: none"> a. 「フォーム・フォルダ」で、宛先フォームを含むフォルダを選択します。 b. 「フォーム」で、フォームを選択します。
URL	<ul style="list-style-type: none"> a. 「URL」で、ユーザーがアクセスする完全な URL を入力します。例: <code>http://サーバー名/HFM/Logon/HsvLogon.asp</code> b. 「シングル・サインオンの使用」を選択して、URL に SSO トークンを追加します。 c. 「URL にコンテキストを含める」を選択して、コンテキストを含めます。

タイプ	オプション
ビジネス・ルール	<p>a. 「プラン・タイプ」で、ビジネス・ルールで使用できるプランのタイプを選択します。</p> <p>b. 「ビジネス・ルール」で、起動するビジネス・ルールを選択します。</p> <p>c. 「表示タイプ」で、実行時プロンプト・ページの表示方法を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ クラシック・ビュー: デフォルトの Planning ビューを使用 ・ ストリームライン・ビュー: 異なるラインで各実行時プロンプトを表示 <p>d. オプション: 「ウィンドウ・タイトル」で、実行時プロンプトのかわりに表示するタイトルを入力します。</p> <p>e. オプション: 「[OK] ボタン・ラベル」で、「OK」ボタンに表示するテキストを入力します。</p> <p>f. オプション: 「[取消] ボタン・ラベル」で、「取消」ボタンに表示するテキストを入力します。</p> <p>g. オプション: 「確認メッセージの起動」で、ビジネス・ルールが呼び出されて起動する前に表示するテキストを入力します。このオプションにより、管理者はビジネス・ルールの起動の結果についてプランナに意味のあるメッセージを表示することができます。</p>
承認の管理	シナリオとバージョンを選択してプランニング・ユニットを指定します。
前のフォーム	ユーザーを前のフォームに戻すメニュー・アイテムの名前を入力します。
バージョンのコピー	<p>エンド・ユーザーが「バージョンのコピー」を使用して、サポート詳細、注釈、セル・テキスト、セル・ドキュメントなど、現在のフォームのフォーム・データを他のバージョンにコピーできます。次のデフォルト値を選択します:</p> <p>a. 「シナリオ」で、コピー元とするシナリオを選択します。</p> <p>b. 「コピー元」で、コピーするデータを含むバージョンを選択します。</p> <p>c. 「コピー先」で、データのコピー先とするバージョンを選択します。</p>

タイプ	オプション
ジョブ・コンソール	エンド・ユーザーが、指定したジョブ・タイプおよびジョブの「ジョブ・コンソール」を表示できます。次のデフォルト値を選択します: <ul style="list-style-type: none">・ ジョブ・タイプ・ ステータス

6. 「保存」をクリックします。

Planning アプリケーション管理の操作

Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの作成について

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用して、アプリケーションを作成できます。Planning アプリケーション管理を使用するには、適切な役割を割り当てる必要があります。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイド*で説明されています。

Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用している場合は、Planning アプリケーション・ウィザードを使用してアプリケーションを作成および削除し、Oracle Hyperion Shared Services に登録します。

Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを設定するには:

1. 次のタスクを実行します:
 - Planning で、「管理」、「アプリケーション」、「管理アプリケーション」の順に選択します。
 - Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「Planning 管理」の順に選択します。
2. タスクを完了するには、次のトピックを参照してください:
 - [アプリケーションの管理](#)
 - [データ・ソースの管理](#)
 - [アップグレードの管理](#)

アプリケーションの管理

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用して Planning アプリケーションを作成、削除、登録するには、次を参照してください:

- [アプリケーションの作成](#)
- [アプリケーションの削除](#)
- [アプリケーションの登録](#)

アプリケーションの作成

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを作成および更新するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードを起動します([Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください)。
2. 「管理アプリケーション」で、「アクション」をクリックし、「作成」を選択します。
3. タブの情報を完成させてアプリケーションを定義します。参照:
 - [アプリケーション情報の選択](#)
 - [カレンダーの設定](#)
 - [通貨の設定](#)
 - [プラン・タイプの指定](#)
 - [アプリケーション情報のレビュー](#)

アプリケーション情報の選択

アプリケーション名および説明を指定し、Oracle Hyperion Shared Services でアプリケーションを登録後、データ・ソースを選択します。

Oracle Hyperion Planning をインストールして構成する際に、デフォルトのインスタンス(クラスタ)が設定されます。EPM System コンフィギュレータを使用してクラスタを更新するには、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドを参照してください。

アプリケーション情報を選択するには:

1. Planning のアプリケーション・ウィザードで「**アプリケーションの管理**」を選択し、「アクション」で「**作成**」を選択します。
[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。
2. 「**選択**」をクリックします。
3. データ・ソースを選択します。
[データ・ソースの管理](#)を参照してください。
4. アプリケーション名を入力します。
名前は最大 8 文字までです。既存の Oracle Essbase アプリケーションと同名にはできません。
5. アプリケーションの説明を入力します。
6. 「**アプリケーション・タイプ**」には、作成しているアプリケーションのタイプを選択します。Planning アプリケーションの場合、「**一般**」を選択します。
7. Shared Services アプリケーション・グループを選択します。

8. 「次」をクリックします。

カレンダーの設定

カレンダーで、アプリケーションの基本期間、最初の会計年月度、ならびに合計年数を確立させます。月の会計週数を基に、基本期間と月次配置パターンを選択します。基本期間のオプションは、アプリケーションの最下位レベルの基本期間です。週や日など、カスタム基本期間を作成できます。月次配置パターンを使用して、サマリー期間に入力したデータを、指定の基本期間にどう配置させ分散させるかを判別します。ユーザーは年または四半期などのサマリー期間にデータを入力することができます。Oracle Hyperion Planning により、要約期間を構成する基本期間全体で、これらの値が配分されます。

会計年度に対し、会計年度の最初の月を設定して、会計年度が同じカレンダー年または前のカレンダー年のどちらで開始するかを指定できます。数式を使用するなどにより、カレンダー年に基づく計算を後で設定できます。Planning アプリケーションに式を設定する場合、[TPDate]および[FirstDate]のような数式は、アプリケーションが同じカレンダー年に開始するかまたは前のカレンダー年に開始するかにより異なる結果が生成されます。数式の操作を参照してください。

次の表は、「会計開始年度」を 2012 と仮定して、「会計年度の最初の月」および「会計開始年度」オプションがアプリケーションのカレンダーに与える影響の例を示しています。

表 12-1 「会計年度の最初の月」および「会計開始年度」オプションの例

会計年度の最初の月	会計開始年度	期間 - 年	年ディメンション
1 月	同じカレンダー年	Jan-12 から Dec-12 ま で	FY12
7 月	同じカレンダー年	Jul-12 から Jun-13 ま で	FY12
7 月	前のカレンダー年	Jul-11 から Jun-12 ま で	FY12
2 月	同じカレンダー年	Feb-12 から Jan-13 ま で	FY12
2 月	前のカレンダー年	Feb-11 から Jan-12 ま で	FY12
12 月	同じカレンダー年	Dec-12 から Nov-13 まで	FY12
12 月	前のカレンダー年	Dec-11 から Nov-12 まで	FY12

カレンダーを設定するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「**カレンダー**」をクリックします。

Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定を参照してください。

2. カレンダーのロールアップ方法を設定するには、「**基本期間**」オプションを選択します。

- **12 か月:** 1 年に 4 回の四半期 - 月は親四半期に、四半期は年にロールアップ。

- **四半期:** 四半期は年にロールアップ。
 - **カスタム:** 週や日などのカスタム期間。
3. 「**最初の会計年度**」を選択します。
この選択によって、アプリケーションの会計開始年度が定義されます。アプリケーションの作成後はこれを変更することはできません。最初の会計年度を指定する前に、組織が履歴データをどの程度必要とするか検討してください。
 4. アプリケーションの「**会計年度の数**」を選択します。
この選択により、カレンダーの年数が定義されます。アプリケーションを作成した後に、カレンダーへ年数をさらに追加することができます。
 5. 「**会計年度の最初の月**」を選択します。
この選択はアプリケーションの会計年度の最初の月で、「最初の会計年度」オプションにより異なります。
 6. 「**会計年度の開始日**」を選択します:
 - 「**同じカレンダー年**」。会計年度が現在のカレンダー年で始まるように設定します。たとえば、開始期間が6月の2014年を選択すると、開始年がFY14として作成され、6月14日から5月15日までと定義されます。
 - 「**前のカレンダー年**」。年度が前のカレンダー年で始まるように設定します。たとえば、開始期間が6月の2013年を選択すると、開始年がFY13として作成され、6月12日から5月13日までと定義されます。

1月から開始するアプリケーションの場合、「**同じカレンダー年**」オプションだけが使用できます。
 7. 基本期間を **12 か月** に設定する場合、「**週次配分**」オプションとして、**均等**、**445**、**454** または **544** のいずれかを選択します。

週次配分により、月の会計週数に基づいて月次配分パターンが設定されます。この選択によって、サマリー期間のデータを基本期間内にどう分布させるかが判別されます。ユーザーが、四半期などのサマリー期間に、データを入力する際、サマリー期間内の基本期間に値が分散されます。

週次配分パターンを**均等**以外で設定すると、Planning は選択パターンに従って、13週に分かれて週が配分されたかのように四半期ごとの値が扱われます。たとえば、**5-4-4** を選択すると、四半期の最初の月は5週、最後の2か月は4週あることとなります。
 8. すべての年を含む「**すべての年**」親メンバーを作成するには、「**すべての年**」親で「**はい**」を選択します。

「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、親メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。
 9. 「**次**」をクリックします。

通貨の設定

アプリケーションのエンティティに対してデフォルト通貨を指定し、通貨換算をアプリケーションでサポートするかどうかを設定します。レベル0のメンバーは、基本通貨にかかわらず、複数通貨に対応(または通貨上書きとも呼ばれる)できます。

通貨を設定するには:

1. Oracle Hyperion Planning アプリケーション・ウィザードで、「通貨」をクリックします。

[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。

2. アプリケーションのエンティティにデフォルト通貨を選択します。
3. 複数通貨のアプリケーションには、「はい」を、単一通貨のアプリケーションには、「いいえ」を選択して、アプリケーションが複数の通貨をサポートするかどうかを指定します。

アプリケーションの作成後は、このオプションを変更できません。レベル0のメンバーは、基本通貨にかかわらず、複数通貨に対応できます。「はい」を選択すると、「通貨」および「HSP_Rates」の2つのディメンションが作成されます。

4. 「次」をクリックします。

プラン・タイプの指定

アプリケーションのプラン・タイプを3つまで指定します。各プラン・タイプに対し、個々に Oracle Essbase データベースが作成されます。アプリケーションを作成した後にプラン・タイプを削除またはプラン・タイプ名を変更することはできません。

アプリケーションの勘定科目、エンティティおよび他の要素を作成すると、それらがプラン・タイプに関連付けられるため、各プラン・タイプのデータベースは、そのプラン・タイプに関連のある情報のみが含まれます。これで、設計、サイズおよびパフォーマンスが最適化されます。

ノート:

アプリケーションの汎用的なプラン・タイプを3つまで指定できます。アプリケーションの作成中、1つのブロック・ストレージ・プラン・タイプを選択した場合、プラン・タイプ・エディタから2つのタイプを合計3つまで追加できます。

Oracle Hyperion Planning では、ブロック・ストレージ・データベースごとに3つまでの汎用プラン・タイプの合計と1つの集約ストレージ・データベース、さらに集計目的でもう1つの集約ストレージ・データベースが許可されます。

プラン・タイプを選択するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「プラン・タイプ」をクリックします。

[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。

2. アプリケーションの各プランの「プラン・タイプ」を選択し、プラン名を指定します。

Planning のプラン・タイプを少なくとも1つ選択する必要があります。Planning のプラン・タイプは、3つまで選択可能であり、最大8文字の名前を付けることができます。(1バイトおよび2バイトの文字で8文字以上入力することは可能ですが、Essbase データベースが作成される際、エラー・メッセージが表示されます。)

3. 集約ストレージ・プラン・タイプを作成する場合、ASO1 を選択してから、アプリケーション名を指定します。

ノート:

Essbase は、集約ストレージ・データベースごとに別々のアプリケーションを必要とします。

4. 「次へ」をクリックしてアプリケーション情報をレビューし、アプリケーションを作成します。

アプリケーション情報のレビュー

アプリケーションを作成または更新する前にアプリケーション情報をレビューするには:

1. Oracle Hyperion Planning アプリケーション・ウィザードで、「終了」をクリックします。
[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。
2. 選択した設定をレビューします。一部の設定は、アプリケーションの作成後に変更できません。
3. **オプション:** アプリケーション設定を変更するには、「前へ」をクリックしてアプリケーション情報を更新してから、「終了」をクリックして更新した設定を確認します。
4. アプリケーションを作成するには、「作成」をクリックします。

アプリケーションの削除

Oracle Hyperion Planning アプリケーション・ウィザードを使用すると、Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションを削除できます。

注意:

削除する前にアプリケーションのバックアップを行ってください。[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)を参照してください。

アプリケーションを削除するには:

1. アプリケーションをバックアップします。
2. Planning アプリケーション・ウィザードを起動します([Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください)。
3. 「管理アプリケーション」でアプリケーションを選択し、「アクション」をクリックして「削除」を選択します。
4. 削除を確認するメッセージが表示されたら、「OK」をクリックして削除を続行します。

アプリケーションの登録

Oracle Hyperion Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、アプリケーションの Oracle Hyperion Shared Services アプリケーション・グループを再登録できます。

アプリケーションを登録するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードを起動します([Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください)。
2. 「管理アプリケーション」でアプリケーションを選択し、「アクション」をクリックして「登録」を選択します。
3. In 「登録」で、「Shared Services プロジェクト」を選択し、「OK」をクリックします。

データ・ソースの管理

各 Oracle Hyperion Planning アプリケーションを独自のデータ・ソースに関連付ける必要があります、これによってリレーショナル・データベースと Oracle Essbase サーバーがリンクされます。Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、データ・ソースを作成、更新、テスト、削除できます。次を参照してください。

- [データ・ソースの作成](#)
- [データ・ソースの編集](#)
- [接続の確認](#)
- [データ・ソースの削除](#)

データ・ソースの作成

各 Oracle Hyperion Planning アプリケーションには、別のリレーショナル・データベースをポイントする独自のデータ・ソースが必要です。新規データ・ソースを作成し、別のアプリケーションで使用される既存のリレーショナル・スキーマに関連付ける場合、アプリケーション作成プロセスは以前に作成されたアプリケーションのリレーショナル表を上書きします。

アプリケーション管理のデータ・ソースを作成するには、データ・ソース名と説明を入力してリレーショナル・データベースを選択し、リレーショナル・データベースと Oracle Essbase サーバーの詳細を指定します。リレーショナル・データベースと Essbase サーバーのパスワード情報は暗号化されて保管されます。アプリケーションを Unicode モードに設定することもできます。Unicode モードのアプリケーションでは、複数の文字セットに対応しています。Essbase で Unicode モードのアプリケーションを操作する際、UTF-8 のエンコード・フォームで解釈されて文字テキストが保管されます。Unicode モード・アプリケーションの文字ベースのアーティファクト(メンバーおよび別名など)では、異なる言語から文字を含めることができます。詳細は、[Oracle Essbase データベース管理者ガイド](#)を参照してください。

アプリケーション管理のデータ・ソースを作成するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで「[データ・ソースの管理](#)」をクリックし、「アクション」で「作成」を選択します。[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。Planning で、「管理」、「データ・ソースの管理」の順に選択してから、「アクション」をクリックして「作成」を選択する方法もあります。

2. データ・ソース名と説明を入力します。
3. アプリケーション・データベースの詳細を指定します:
 - データベース - リレーショナル・データベース
 - サーバー - データベースをホストするサーバー
 - ポート - ポート(ポートの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照)
 - サービス名または SID - Oracle サービス名または SID (orcl など)
 - ユーザー - データベースのユーザー名
 - パスワード - データベース・パスワード
4. **上級ユーザーのみ:** 必要に応じて、「サーバー」および「ポート」フィールドの情報のかわりにカスタム URL を使用してデータ・ソースを作成します。「カスタム」をクリックしてから、データ・ソースの URL を「接続 URL」に入力します。

EPM System コンフィギュレータを使用したデータベースの構成の詳細と URL の例は、Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイドを参照してください。

カスタム URL を入力すると、サーバーとポートの前の接続設定が上書きされます。カスタム URL を削除し、サーバーとポートの前の設定に戻るには、「カスタム」チェック・ボックスをクリアします。Oracle RAC 構成が使用されている場合、Planning データ・ソースの作成中、RAC 詳細が「カスタム URL」に表示されません。

5. 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
6. 次の Essbase サーバーの詳細を指定します:
 - サーバー - サーバー名(構成中に Essbase エージェント・ポートのデフォルトのポート番号を変更した場合、Oracle Essbase サーバーは `ServerName:newPortNumber` のフォーマットである必要があります。たとえば、構成時にポート番号が 1400 に設定され、サーバーがローカルで実行されている場合、サーバー名はこのフォーマットを使用して `ServerName:1400.` となります)。
 - ユーザー - サーバーのユーザー名
 - パスワード - サーバーのパスワード
 - オプション - アプリケーションを Unicode モードに設定するには、「Unicode」を選択します。

詳細は、Oracle Essbase データベース管理者ガイドを参照してください。

7. 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
8. 「保存」をクリックします。

データ・ソースの編集

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理では、ウィザードを使用してデータ・ソース名、説明、リレーショナル・データベースおよびリレーショナル・データベースおよび Oracle Essbase サーバーの詳細を更新できます。

データ・ソースを編集するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「**データ・ソースの管理**」をクリックします。[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。Planning で、「**管理**」、「**データ・ソースの管理**」の順に選択することもできます。
2. データ・ソースを選択して「**アクション**」をクリックし、「**編集**」を選択します。
3. データ・ソース名と説明を更新します。
4. アプリケーション・データベースの詳細を指定します:
 - **サーバー**: データベースをホストするサーバー
 - **ポート**: ポート。デフォルトのポートおよびポートの変更方法の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要*』を参照してください。
 - **データベース**: データベース名
 - **ユーザー**: データベース・ユーザー名
 - **パスワード**: データベースのパスワード
5. **上級ユーザーのみ**: 必要に応じて、「**サーバー**」および「**ポート**」フィールドの情報のかわりにカスタム URL を使用してデータ・ソースを作成します。「**カスタム**」をクリックしてから、データ・ソースの URL を「**接続 URL**」に入力します。

EPM System コンフィギュレータを使用したデータベースの構成の詳細と URL の例は、『*Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド*』を参照してください。

カスタム URL を入力すると、サーバーとポートの前の接続設定が上書きされます。カスタム URL を削除し、サーバーとポートの前の設定に戻るには、「**カスタム**」チェック・ボックスをクリアします。
6. 「**検証**」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
7. Essbase サーバーの詳細を指定します:
 - **サーバー**: サーバー名
 - **ユーザー**: サーバー・ユーザー名
 - **パスワード**: サーバーのパスワード
8. **オプション**: アプリケーションを Unicode モードに設定するには、「**Unicode モード**」を選択します。

詳細は、『*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*』を参照してください。
9. 「**検証**」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
10. 「**保存**」をクリックします。
11. データ・ソースが正常に更新されたことを通知するメッセージが表示されたら、[X] をクリックしてメッセージを閉じます。

接続の確認

データベースまたは Oracle Essbase への接続テストができます。

接続を確認するには:

1. Oracle Hyperion Planning アプリケーション・ウィザードで、「**データ・ソースの管理**」をクリックします。

[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。

2. 接続をテストするには、「**検証**」をクリックします。
3. 接続が終了したことを通知するメッセージが表示されたら、[X]をクリックしてメッセージを閉じます。

データ・ソースの削除

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理では、Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、アプリケーションと関連付けられていないデータ・ソースを削除できます。

データ・ソースを削除するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「**データ・ソースの管理**」をクリックします。[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)を参照してください。Planning で、「**管理**」、「**データ・ソースの管理**」の順に選択することもできます。
2. 削除するデータ・ソースを選択し、「**アクション**」をクリックして、「**削除**」を選択します。
3. データ・ソースが正常に削除されたことを通知するメッセージが表示されたら、[X]をクリックしてメッセージを閉じます。

アップグレードの管理

Oracle Hyperion Planning アップグレード・ウィザードを使用して再ホストされたデータ・ソースへの参照を更新し、Planning アプリケーションをアップグレードします。たとえば、Oracle Essbase サーバー・ホストおよびポートが以前のリリースから変更されている場合、データ・ソースを更新し、Planning アプリケーションからレポート・アプリケーションへのマッピングを更新する必要があります。データ・ソースが変更されている場合、データ・ソースの接続を更新する必要があります。Planning アップグレード・ウィザードにより、複数のデータ・ソースおよび Reporting アプリケーションを同時に更新できます。

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションも、アップグレード・ウィザードでアップグレードします。

- 再ホストされたリレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーへの参照の更新については、[データ・ソースへの参照の更新](#)を参照してください。
- レポート・アプリケーションのある再ホストされた Essbase サーバーへの参照の更新については、[レポート用 Essbase サーバーへの参照の更新](#)を参照してください。
- Planning アプリケーション管理で作成された Planning アプリケーションのアップグレードについては、[アプリケーションのアップグレード](#)を参照してください。

データ・ソースへの参照の更新

Oracle Hyperion Planning アップグレード・ウィザードを使用して再ホストされたリレーショナル・データベースおよび Oracle Essbase サーバーへの参照を更新します。

ノート:

データ・ソースへの参照を更新する前に、Essbase サーバーおよびリレーショナル・データベースが実行していることを確認します。

データ・ソースへの参照を更新するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「**アップグレード・ウィザード**」をクリックします。
2. 「**データ・ソースの更新**」タブで、各 Planning データ・ソースのリレーショナル・データベース情報および Essbase サーバー情報を確認します。Essbase サーバー・ホストおよびポートがアップグレード中に変更された場合、またはリレーショナル・データベースが新しいホストに移動していた場合、情報を更新します。
 - 同じ情報で複数のリレーショナル・データベースを更新するには:
 - a. ページの下部で、リレーショナル・データベースの更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - b. **リレーショナル情報の更新**で、新しいデータベース情報を入力します。
 - c. **選択項目に適用**をクリックします。
 - 同じ情報で複数の Essbase サーバーを更新するには:
 - a. ページの下部で、Essbase 情報の更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - b. **Essbase 情報の更新**で、新しい Essbase サーバー情報を入力します。
 アクティブ・パッシブ・クラスタ・モードで Essbase のフェイルオーバーを使用する場合は、Essbase クラスタ名が続く APS URL を指定します。たとえば、APS URL が `http://<hostname>:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「Essbase サーバー名」フィールドの値は次のようになります:

```
http://<hostname>:13090/aps/Essbase?
clusterName=EssbaseCluster-1
```

 このリリースでは、APS URL なしで Essbase クラスタ名を入力することはできません。
 - c. **選択項目に適用**をクリックします。
- データ・ソースを個別に更新するには:
 - a. ページの下部で、更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - b. データ・ソースの新しい情報を入力します。
3. 「**アクション**」でオプションを選択します

- 「リセット」をクリックして更新を元に戻します。
 - 「検証」をクリックして、選択したデータ・ソースへの接続をテストし、示された問題があれば修正します。
 - 「保存」をクリックして、選択したデータ・ソースへの更新を保存します。
4. 「次へ」をクリックして、「アプリケーションのアップグレード」タブに進みます([アプリケーションのアップグレード](#)を参照)。

ノート:

Planning アプリケーションに更新が反映されていない場合、Planning サーバーを停止し、再起動します。

アプリケーションのアップグレード

Oracle Hyperion Planning アップグレード・ウィザードを使用して、Planning アプリケーション管理を使用して作成された Planning アプリケーションをアップグレードします。この手順に関する指示は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドを参照してください。

ノート:

アプリケーションをアップグレードする前に再ホストされたデータ・ソースへの参照を更新する必要があります。[データ・ソースへの参照の更新](#)および[レポート用 Essbase サーバーへの参照の更新](#)を参照してください。

Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザーはアップグレード後に追加のデータ移行タスクを実行する必要があります。既存のアプリケーション・メタデータおよびアーティファクトの移行に関する指示は、*Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting* ユーザー・ガイドの付録 B を参照してください。

Reporting Essbase サーバーへの参照の更新

Oracle Hyperion Planning アップグレード・ウィザードを使用して、レポート・アプリケーションで使用される Oracle Essbase サーバーへの参照を更新します。

ノート:

レポート用 Essbase サーバーへの参照を更新する前に、Essbase サーバーおよびリレーショナル・データベースが実行していることを確認します。

Reporting アプリケーションがある Essbase サーバーへの参照を更新するには:

1. Planning アプリケーション・ウィザードで、「アップグレード・ウィザード」をクリックします。
2. 「レポート用 Essbase サーバーの更新」タブで、レポート・アプリケーション用の Essbase サーバー情報を確認または更新します。

アップグレード済のアプリケーションおよび Essbase サーバー(デフォルトの Essbase サーバーを除く)でレポート・アプリケーションが作成済のアプリケーションのみがリストされます。

- 同じ情報で複数の Reporting アプリケーションを更新するには:
 - a. ページの下部で、更新を適用するアプリケーションを選択します。
 - b. 「レポート用 Essbase 情報の更新」で、新しい Essbase サーバー情報を入力します。
 - c. 選択項目に適用をクリックします。
 - Reporting アプリケーションを個別に更新するには:
 - a. ページの下部で、更新を適用する Reporting アプリケーションを選択します。
 - b. 各アプリケーション用の新しい Essbase サーバー情報を入力します。
3. 「アクション」でオプションを選択します:
- 「リセット」をクリックして更新を元に戻します。
 - 「検証」をクリックして、選択した Essbase サーバーへの接続をテストし、示された問題があれば修正します。
 - 「保存」をクリックして、選択した Essbase サーバーへの更新を保存します。
4. 「アプリケーションのアップグレード」タブに切り替える場合は、「戻る」をクリックします([アプリケーションのアップグレード](#)を参照)。

ノート:

Planning アプリケーションに更新が反映されていない場合、Planning サーバーを停止し、再起動します。

アプリケーション・モニターを使用したパフォーマンスのモニタリングおよび最適化について

アプリケーション・モニターによって、管理者は、設計時に、アプリケーションを本番環境に置く前に(さらに継続的に、アプリケーションが新しいメンバーを使用して発展し、データがアプリケーションに追加されるとともに)、およびエンド・ユーザーがアプリケーションを使用する前に、設計の不具合を特定および解決できます。管理者は、アプリケーション・モニターを使用して、次を評価できます:

- アプリケーション全体
- フォームおよびプランニング・ユニットなどのアーティファクトのタイプ
- 個々の選ばれたアーティファクト

アプリケーション・モニターによって、管理者は、設計時に、設計の不具合を含むアーティファクトを解決するために行う変更点を識別し、それらの変更に必要なエディタに簡単にアクセスできます。アーティファクトを変更する必要がある場合、内部プロセスは実行時にシステム要求を拒否するチェックを実行します。アプリケーション・モニターは、管理者が選択したユーザーに基づいて、アプリケーションおよびアーティファクトを評価します。これにより、分析の一部として個々のユーザーの変数およびセキュリティ・アクセスを考えて、実行時に発生する可能性がある問題を特定できます。

仮定

Oracle では、妥当なパフォーマンスを保証するためのアプリケーションおよびアーティファクトの設計方法に関する一般的なガイドラインのみを提供できます。アーティファクトおよび操作に対して正確な値の範囲を指定できません。

アプリケーション・モニターの機能

アプリケーション・モニターは次のようにアプリケーションを評価します:

- 設計時 - 発生する可能性があるすべての問題の観点で、アプリケーションまたは特定のアーティファクトを分析します。この考えられる最悪の状況を判断するには、抑制オプション(フォームで使用されるものなど)は無視されます。アプリケーション・モニターでは、発生する設計の不具合の修正方法に関する情報が提供されます。
- 実行時 - 内部ガバナーは、見つかった設計の不具合が解決されていない場合に、ユーザーが特定のアクションを実行しないようにするチェックを実行します。

アプリケーション・モニターを使用して、次を分析します:

- ブロック・ストレージ・プラン・タイプ
- ディメンション
- 単一のフォーム
- スタンドアロン・ビジネス・ルール
- プランニング・ユニット階層
- レポート・マッピング
- データのエクスポート機能

アプリケーションのユーザー操作性およびパフォーマンスを最適化するには、また、しきい値が最適な制限値の範囲を超える恐れがある場合にアプリケーション・モニターが警告するようにするには、前述のアーティファクトに対して適切なしきい値を設定する必要があります。選択するしきい値は、ハードウェアやユーザー数などの多くの要因に依存し、これらの数値は要件に基づいて変更されます。たとえば、アプリケーションを5年プランに制限する場合は、「年」のしきい値を5に設定します。このしきい値に違反した場合、アプリケーション・モニターが警告します。

アプリケーション・モニターでモニタリングされるアーティファクトのタイプはシステムに大きく影響します。これらのしきい値はユーザー受入れテスト中に決定された制限に基づいて設定する必要があります。[アプリケーション・モニターの警告およびエラーしきい値の制限の設定](#)を参照してください。

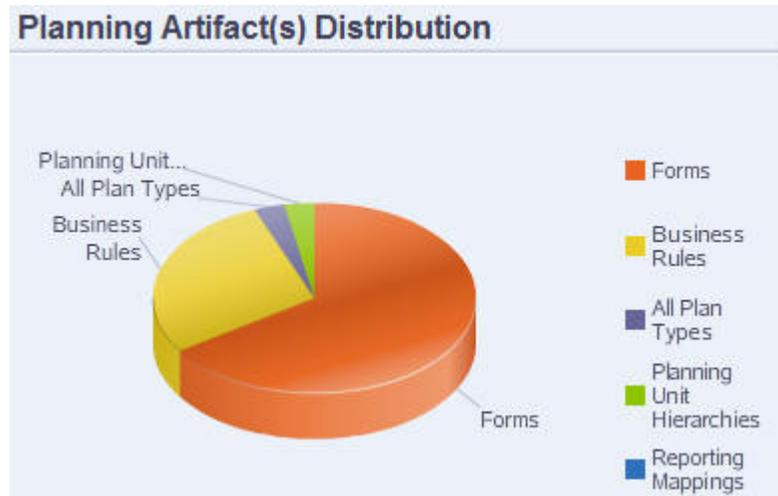
アプリケーション・モニター・グラフの使用

パフォーマンスの問題を引き起こす可能性があり変更する必要があるアーティファクトは黄色で、パフォーマンスの問題が発生し再設計する必要があるアーティファクトは赤で表示されます。次のように円グラフを使用します:

- **プランニング・アーティファクト分布** - アプリケーションがどのようなアーティファクト・タイプで構成されているかを示します。グラフの部分にマウスを置いて、各タイプのいくつかのアーティファクトがアプリケーション・モニターによって分析されたかを表示します。たとえば、フォームの上にマウスを置き、ポップアップ値が55の場合、55フォームが分析されました。グラフの各部分をクリックし

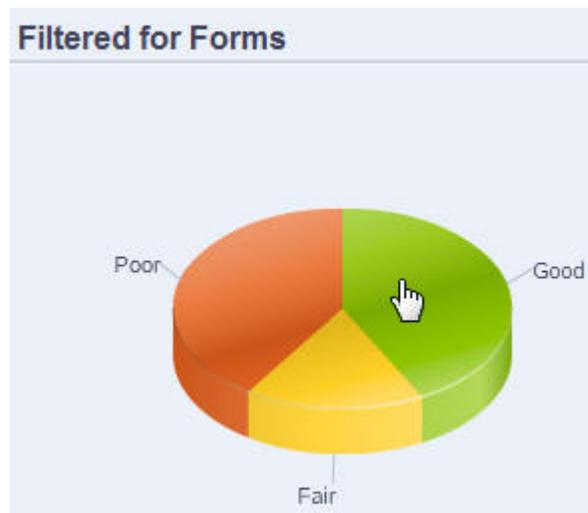
て、各アーティファクト・タイプの準備ステータスを表示します。ここでは、各タイプのいくつかのアーティファクトが許容、警告またはエラーのステータスであるかを表す別の円グラフを表示します。

アーティファクト分布グラフ:



- **フィルタ対象<アーティファクト>**- アーティファクトのステータスを表すグラフの部分をクリックして、特定のステータスのアーティファクトを表示およびドリルダウンします。たとえば、エラー・ステータスのプランニング・ユニット階層のみの情報を表示するには、グラフの赤い部分をクリックします。

フィルタ・グラフ:



アプリケーション・モニターの警告およびエラーしきい値の制限の設定

Oracle Hyperion Planning にはしきい値が含まれませんが、アプリケーション・プロパティを追加してアーティファクトに対する警告とエラーのしきい値を設定し、アプリケーション・モニターで効果的に分析できます。設定した警告しきい値を超えると、アプリケーション・モニターで警告が発行され、アーティファクトが黄色に変わり、

変更できます。設定したエラーしきい値を超えると、アプリケーション・モニターでアーティファクトが赤に変わり、実行時にシステム・リクエストが拒否されます。

アプリケーションの警告およびエラーのしきい値を設定するには、[アプリケーションのしきい値の制限の設定](#)を参照してください。

アプリケーション・モニターの起動

アプリケーション・モニターを起動するには:

1. ログインしたら、左側のペインで「**診断**」を選択します。
 2. 「**ユーザーの選択**」で、をクリックして、設定が分析の実行に使用するユーザーを選択し、をクリックします。
 3. 次のタスクを実行します:
 - すべてのアプリケーション・アーティファクトを分析およびトラブルシューティングするには、「**アプリケーション・モニター - すべてのアーティファクト**」を選択します。右側にある円グラフは、アプリケーション内のアーティファクトの分布を示しています。下部のグリッドは、すべてのアプリケーション・アーティファクトの整合性を表します。黄色と赤は最適なパフォーマンスのために変更する必要があるアーティファクトを示します。
 - 特定のタイプのアーティファクト(フォームやプランニング・ユニット階層など)を分析するには、「**診断**」でタイプを選択します。たとえば、ビジネス・ルールが適切に設計されパフォーマンスの問題が発生しないことを確認するには、「**診断**」でをクリックします。グラフの大部分が黄色または赤の場合は、ルールを変更する必要があります。そのタイプのすべてのアーティファクトに関する詳細は、下のグリッドに表示されます。
 - ある特定のアーティファクトを選び、分析するには、「**検索**」で名前、開始日、終了日およびタイプを指定して、アーティファクトを検索し、アーティファクトを選択してをクリックします。アーティファクトに関する情報は、下のグリッドに表示されます。
- ヒント:**
- 円グラフに表示されるもの、および詳細にアクセスするためのドリルダウン方法の詳細は、[アプリケーション・モニター・グラフの使用](#)を参照してください。
4. をクリックするか、「**アクション**」、「**アプリケーション・モニターの実行**」の順に選択します。
 5. 「**詳細の表示**」列がグリッドに表示されない場合、「**表示**」、「**列**」、「**詳細の表示**」の順に選択します。これにより、異なるタイプのアーティファクト・データを表示または非表示にすることもできます。
 6. アーティファクトを修正する方法に関する情報を表示するには、「**詳細の表示**」でをクリックします。次に、アーティファクトをクリックして、アーティファクトを変更できるエディタを起動します。

最適なパフォーマンスのためのアーティファクトの変更

アーティファクトを変更する方法を指示する、アプリケーション・モニターによって提供される詳細を確認した後で、次のように編集します:

- 単一のフォーム - フォームのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで「**フォーム・デザイナー**」が起動します。第6章「フォームの管理」の**フォームの管理**の説明に従って、フォームを編集します。
- ビジネス・ルール - ビジネス・ルール名をクリックすると、アクセス可能なすべてのアプリケーション・アーティファクトが表示される「**システム・ビュー**」が起動します。次のようなタスクを実行できます:
 - 上部の「**ルール・デザイナー**」を使用して、条件、コマンドおよびスクリプトなど、ルールの個別のコンポーネントを表示します。各コンポーネントをクリックして、ページの下部でそれを変更します。左側の**ルール・パレット**および「**既存のオブジェクト**」ペインからドラッグ・アンド・ドロップすることによって、式、システム・テンプレート、スクリプトなどのコンポーネントを挿入および削除することもできます。
 - 「**デザイナー**」から「**スクリプトの編集**」を選択して、関数の挿入、テンプレートの編集、変数の挿入、メンバー範囲の挿入、コメントの使用、および構文の検証などのタスクを実行することによって、スクリプトを変更およびフォーマットします。
 - アーティファクト、ページおよびその他のドキュメントを、作成、オープン、削除、およびリフレッシュします。
 - ビジネス・ルールおよびその他のオブジェクトをインポートおよびエクスポートします。
 - アーティファクトを使用する方法および場所を判別します。

*Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド*および**実行時プロンプトの理解**を参照してください。
- プランニング・ユニット階層 - プランニング・ユニット階層のアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで**プランニング・ユニット階層デザイナー**が起動します。**プランニング・ユニット階層の作成**の説明に従って、プランニング・ユニットを編集します。
- プラン・タイプ - プラン・タイプのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで、次元エディタの「**パフォーマンス設定**」タブが起動します。**ディメンションの操作**の説明に従って、ディメンション・アウトラインまたはディメンションの疎を編集します。
- レポート・マッピング - レポート・マッピングのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで**レポート・マッピング・デザイナー**が起動します。**レポート用のアプリケーションのマッピング**の説明に従って、レポート・マッピングを編集します。

別名表の操作

別名表の作成および更新、アプリケーションの別名表の設定ができます。**命名規則**の命名規則に従ってください。

別名表について

代替名(別名)を、Oracle Hyperion Planning 勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義のディメンション・メンバーに割り当てることができます。Planning では、ディメンション・メンバーごとに、デフォルトの別名を含めて、最大 10 個の別名を付けることができます。

Planning アプリケーションの作成の際、Oracle Essbase では、データベース・アウトラインに空白のデフォルトの別名表が作成されます。その他の別名表を作成しない場

合、すべての別名は、このデフォルトの表に保管されます。デフォルトの表は削除できません。

Essbase に最大 9 個の別名表を作成することができます。別名または別名表を追加または変更する場合は、アプリケーションをリフレッシュする必要があります。変更は、データベースが更新されるまで適用されません。データベース・アウトラインを表示するには、Administration Services Console を開き、「アウトライン」、「別名」、表の設定の順で選択し、別名表を選択します。Planning 内で作成した別名表のみ使用できます。Planning 以外で作成された別名表は、アプリケーションがリフレッシュしている間に削除されます。

たとえば、複数の別名表が次の言語の組合せをサポートしています:

- 英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語およびイタリア語
- 日本語と英語
- 韓国語と英語
- トルコ語と英語

ノート:

別名表のサポートは、これらの言語の組合せに限定されていません。

別名表を設定してアプリケーションのメンバーを表示できます。プランナは、プリファレンスの別名表を設定できます。

別名表の作成

別名表を作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「別名表」の順に選択します。
2. 「追加」をクリックします。
3. 「追加 - 別名表」で、名前を入力します。
4. 「OK」をクリックします。

別名表の編集または名前変更

別名表の編集または名前を変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「別名表」の順に選択します。
2. 別名表を選択します。
3. 「編集」をクリックします。
4. 「編集 - 別名表」に、名前を入力します。
5. 「OK」をクリックします。

別名表の削除

別名表を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「別名表」の順に選択します。
2. 別名表を選択します。
デフォルトの別名表は削除できません。
3. 「削除」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

別名表のクリア

別名表のコンテンツをクリアできます。

別名表をクリアするには:

1. 「管理」、「管理」、「別名表」の順に選択します。
2. クリアする別名表を選択します。
別名表をクリアすると、表の内容は削除されますが、表自体は削除されません。
3. 「値のクリア」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

別名表のコピー

別名表をコピーするには:

1. 「管理」、「管理」、「別名表」の順に選択します。
2. 別名表を選択します。
3. 「コピー」をクリックします。
4. 移行先の別名表を選択します。
移行先の別名表が存在している必要があります。コピーしても表は作成されません。
5. 「コピー」をクリックします。

デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定

勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義のディメンションとメンバーの別名で別名表を作成する場合、アプリケーション用デフォルトの別名表を選択できます。ユーザーは、一連の別名(別名表に保管済)でプリファレンスを設定し、メンバーおよびディメンション名の表示に使用できます。

アプリケーションのデフォルトの別名表を選択するには:

1. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
2. 「現在のアプリケーション・デフォルト」、「アプリケーション設定」の順に選択します。

3. 「別名表」で、デフォルトの別名表を選択します。
4. 「メンバー名/別名の表示」で、アプリケーション全体で「メンバー・セクタ」に表示するメンバー・データの種別を有効にするオプションを選択します:
 - デフォルト - フォーム、グリッドまたはディメンション設定によって判別されるデータ
 - メンバー名 - メンバー名のみ
 - 別名 - メンバーの別名のみ(定義されている場合)
 - メンバー名:別名 - 名前に続けて別名(定義されている場合)
 - 別名:メンバー名 - 別名(定義されている場合)に続けて名前
5. 「保存」または、「リセット」をクリックします。

ディメンションの操作

ディメンションの概要

ディメンションで、データ値が分類されます。Oracle Hyperion Planning には、7 個のディメンション(勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、期間、年、通貨)が含まれます。最大 13 個のユーザー定義のカスタム・ディメンションを作成できます。

ディメンションとメンバーについて

メンバーはディメンションのコンポーネントです。

疎ディメンションおよび密ディメンションについて

疎ディメンションには、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在しません。密ディメンションには、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在します。少なくとも 1 つの密ディメンションが必要です。カスタム属性を密ディメンションに割り当てることはできません。Oracle Hyperion Planning では、勘定科目および期間のディメンションは密となり、他のディメンションは疎となります。疎ディメンションのパフォーマンスを最適化するために、Planning は各ディメンションの組合せにあるデータ値のみを検索および計算します。これにより、計算時間が短縮し、ディスク使用を削減させることができます。この設定を変更することも可能です。[ディメンションの順序変更について](#)および[ディメンションの密度と順序の設定](#)を参照してください。

ディメンションの階層について

ディメンションの階層は、構造的および算術関係、さらにデータベースのメンバー間の連結を定義します。関係は、折りたたみ式の階層図式で表示されます。データベース名の下位にはディメンションが示され、各ディメンションの下位にはメンバーが示されます。

期間ディメンションに、メンバーの Q1、Q2、Q3、および Q4 を含む、メンバーの「年合計」を含めることができます。メンバーの Q1、Q2、Q3 および Q4 には、その年に追加した月の独自のメンバーを含みます。期間ディメンションのデータ値を集計するには、月次データ値をロール・アップして四半期ごとのデータ値を取得し、さらに四半期のデータ値をロール・アップして年次データ値を取得します。

同じディメンションまたはメンバーに属する同レベルのメンバーを兄弟と呼びます。たとえば、Q1、Q2、Q3 および Q4 は、階層の同一レベルにあるので兄弟であり、同じメンバーである年合計のメンバーです。

ディメンションのメンバーをディメンションの子と呼びます。メンバーに属するメンバーを、そのメンバーの子と呼びます。メンバーの年合計は、期間の子であり、Q1、Q2、Q3、Q4のメンバーは、年合計の子、さらに、1月、2月、3月はQ1の子と見なします。Q1は1月、2月、3月の親で、年合計はQ1、Q2、Q3、Q4の親、さらに期間は年合計の親と見なします。

ディメンション階層の操作

タスク	トピック
ディメンション・プロパティの指定または変更	「 編集 」をクリックします。
ディメンションの追加。	「 ディメンションの追加 」をクリックします。
ディメンション・メンバーの検索	ディメンションまたはメンバーの検索 を参照してください。
ディメンション階層の展開または縮小	「 展開 」または「 縮小 」をクリックします。
ディメンション・メンバーの追加または編集	「 子の追加 」または「 兄弟の追加 」をクリックします。
ディメンション・メンバーの移動	ディメンション階層内でのメンバーの移動 を参照してください。
ディメンション・メンバーの削除	メンバーの削除 を参照してください。
ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て	メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て を参照してください。
メンバーの祖先を表示	「 祖先の表示 」をクリックします。

ディメンション階層の展開および縮小

ディメンションまたはメンバーを展開するには:

1. 「**管理**」、「**管理**」、「**ディメンション**」の順に選択します。
2. 「**ディメンション**」で、展開するディメンションおよびメンバーを選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 「**展開**」をクリックします。
 -  をクリックします。
 - 閉じているフォルダをクリックします。

ディメンションまたはメンバーを縮小するには:

1. 「**管理**」、「**管理**」、「**ディメンション**」の順に選択します。
2. 「**ディメンション**」で、縮小するディメンションを選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 「**縮小**」をクリックします。
 - 左向き矢印キーを押します。

- をクリックします。
- 開いているフォルダをクリックします。

ディメンション階層の移動

- 上向き矢印キーを押して前のメンバーに移動します。
- 下向き矢印キーを押して次のメンバーに移動します。
- 「ページ」の位置で、表示させるページを入力し、「実行」をクリックするかまたは[Enter]キーを押します。
- 「開始」、「前へ」、「次へ」または「終了」をクリックして他のページを表示します。

デフォルトでは、1 ページに 14 個のメンバーが表示されます。表示する数を、「指定したメンバーを各ディメンションのページに表示」のプリファレンスで設定して変更できます。

プラン・タイプによるディメンション・ビューのフィルタ

プラン・タイプ別にディメンション・ビューをフィルタできます。プラン・タイプを選択すると、そのプラン・タイプで使用されているメンバーのみが「ディメンション」ページに表示されます。

プラン・タイプ別にディメンション・ビューをフィルタするには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「プラン・タイプ」で、プラン・タイプを選択します。

選択したプラン・タイプで使用されているメンバーのみが Oracle Hyperion Planning に表示されます。

ディメンションまたはメンバーの検索

ディメンション階層内のディメンション・メンバーを検索するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、メンバーのディメンションを選択します。
3. 「検索」で、名前、別名のどちらかまたは両方を選びます。
4. 検索するメンバーの名前、別名または文字列の一部を入力します。
5. 「下方向に検索」または「上方向に検索」をクリックします。

メンバーのソート

子または子孫による昇順または降順でメンバーをソートできます。メンバーのソートはアウトラインに影響を及ぼします。

メンバーをソートするには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。

2. 「ディメンション」で、メンバーのディメンションを選択します。
3. 「ディメンション」タブで、子または子孫をソートするメンバーを選択します。
4. 「ソート」で、子または子孫を選択します。

子でソートする場合は、選択したメンバーの真下のレベルにあるメンバーのみにソートがかかります。子孫でソートする場合は、選択したメンバーのすべての子孫にソートがかかります。

5. 昇順でソートする場合はを、降順でソートする場合はをクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、表示される順序のメンバーでアウトラインが生成されます。

ディメンション階層内でのメンバーの移動

1 個のメンバーまたは同一の分岐にあるメンバーのグループを移動できます。勘定科目メンバーを移動する場合、「プランのタイプに有効」が新しい親と異なる設定の勘定科目メンバーを移動させる場合、移動させたメンバーの設定は新しい親の設定に一致するよう変更されます。「ソース・プラン・タイプ」の設定が新しい親と異なるメンバーを移動する場合、移動したメンバーのソース・プラン・タイプは最初に有効なプラン・タイプに一致するよう変更されます。

メンバーまたは兄弟間の分岐を移動するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、移動するメンバーのディメンションを選択します。
3. 移動するメンバーまたは分岐を選択します。
4. 次のいずれかの操作を実行します:
 - メンバーを1つ上に移動するには、をクリックします。
 - メンバーを1つ下に移動するには、をクリックします。

親および子を含めてメンバーを移動するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、移動するメンバーのディメンションを選択します。
3. 移動するメンバーまたは分岐を選択します。

4. 「切取り」をクリックします。

ディメンションの追加や編集、別ページへのナビゲート、メンバーの削除または Oracle Hyperion Planning をログオフした後に、メンバーを切り取ることはできません。ルート・ディメンション・メンバーには使用できません。

5. メンバーの移動先のレベルをクリックします。
6. 「貼付け」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。
8. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

メンバーの祖先の表示

メンバーの祖先を表示するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内のメンバーを選択します。
4. 「祖先の表示」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックします。

アプリケーション内でメンバーが使用される場所の判別

アプリケーション内でメンバーが使用される場所を表示するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. メンバーの使用状況を表示するディメンションを選択します。
3. 「用途の表示」をクリックします。
4. 「メンバーの用途」ウィンドウの一番下で、メンバーの用途を表示するアプリケーションの場所を選択します。

選択したディメンション・メンバーに適切なオプションです。

5. 「実行」をクリックします。
6. 「閉じる」をクリックします。

カスタム・ディメンションについて

Oracle Hyperion Planning には、勘定科目およびエンティティの2つのカスタム・ディメンションが含まれています。これらのディメンションの名前を編集し、最大13のユーザー定義のディメンションを作成できます。勘定科目およびユーザー定義のディメンションは、プランナから収集するデータを指定するために使用します。エンティティは、組織内のプランニング情報のフローをモデリングして、プランのレビュー・パスを確立するために使用します。

集約オプション

集約オプションを使用して、ディメンション階層内に計算を定義できます。集約オプションで、親のメンバーに対する子のメンバーの値をどのように集約させるか判別します。

- + 加算
- - 減算
- * 乗算
- / 除算
- % パーセント

- ~ 無視
- なし(階層に関係なく集約しない)

ストレージ・オプション

表 12-2 ストレージ・オプション

オプション	影響
動的計算および保管	メンバーのデータ値および保管値を計算しません。
保管	メンバーの保管データ値
動的計算	メンバーのデータ値を計算し、値を無視しません。
共有しない	同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを禁止します。
共有	同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを許可します。
ラベルのみ	メンバーに関連付けられているデータはありません。

動的計算について

動的に計算されたメンバーを持つ Oracle Hyperion Planning では、メンバーのデータ値が計算され、これらの値が無視されます。動的計算の親の下の子数の制限は 100 です。メンバーのストレージを動的計算に変更すると、本来のデータの導出方法によっては、データが紛失する場合があります。アウトラインか計算のどちらかまたは両方を更新して動的に計算された値を取得することが必要な場合もあります。

「動的計算」と「動的計算および保管」の違い

たいいていの場合、疎ディメンションのメンバーを計算する際に「動的計算および保管」を使用するかわりに「動的計算」を使用して、計算を最適化し、ディスク容量を削減できます。複雑な式を持つ疎ディメンションのメンバーか、頻繁に取得するユーザーには「動的計算および保管」を使用します。

密ディメンションのメンバーには「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」で取得時間と通常の計算時間を多少削減させることはできますが、大幅なディスク容量の削減はできません。多くのユーザーが同時にアクセスするデータ値には、「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」と比べて、大幅な取得時間の削減が可能な場合があります。

ノート:

- ユーザーがデータを入力するベース・レベルのメンバーには「動的計算」を使用しないでください。
- ターゲット・バージョンのメンバーにデータを入力する場合は、親のメンバーには「動的計算」を使用しないでください。「動的計算」に設定した親のメンバーは、ターゲット・バージョンで読取り専用となります。
- 「動的計算」メンバーのデータ値は保存されません。

保管データ・ストレージについて

子が「動的計算」に設定されている場合は、親メンバーを「保管」に設定しないでください。この組合せの場合、ユーザーがフォームを保存したりリフレッシュしたりする際、親の新しい合計は計算されません。

共有データ・ストレージについて

「共有」を使用して、アプリケーション内で別のロールアップ構造を許可します。

共有しないデータ・ストレージについて

ユーザー定義のカスタム・ディメンションを追加する際、デフォルトのデータ・ストレージ・タイプは「共有しない」です。親に集約されている1つの子メンバーのみを持つ親に対して「共有しない」を使用し、子メンバーへのアクセスを適用できます。

ラベルのみデータ・ストレージについて

ラベルのみメンバーは、通常ナビゲーションで使用される仮想メンバーで、関連付けるデータはありません。ノート:

- レベル0のメンバーには、「ラベルのみ」を割り当てることはできません。
- ラベルのみメンバーは値を表示できます。
- ディメンションのメンバーをラベルのみにすると、ブロック・サイズが減少するためデータベース容量を最小化できます。
- ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることはできません。
- 複数通貨アプリケーション内では、ラベルのみのストレージをディメンション(エンティティ、バージョン、通貨、ユーザー定義のカスタム・ディメンション)のメンバーに適用できません。為替レートを保管するには、「共有しない」を使用します。
- ラベルのみの親の子に対するデータ・ストレージは、デフォルトで「共有しない」に設定されています。

注意:

最初の子メンバーにデータを保存できませんので、最初の子メンバーの後に続くラベルのみ親にフォームを設計しないでください。そのかわり、子の前に選択されたラベルのみ親でフォームを作成するか、フォームにラベルのみ親を選択しないようにしてください。

エンティティについて

エンティティは通常、地域、部署、部門など組織の構造に一致します。承認を受けるためにプランを提出するグループのメンバー・エンティティを作成します。エンティティ・メンバーは、予算の確認や承認の定義に役立ちます([予算編成プロセスの管理](#)を参照)。

たとえば、国の拠点の予算準備を行う地域センターを持つことができます。国の拠点は企業本部のプランを準備する場合があります。この構造を一致させるには、地域、国、本部のメンバーを作成します。地域を国メンバーの子として指定し、さらに国メンバーを本部の子として指定します。

フォームは1エンティティ当たり複数の通貨をサポートするので、複数通貨のデータ入力を使用可能にし、単一の通貨でレポートを作成できます。ただし、Oracle

Hyperion Planning では、各エンティティの基本エンティティをサポートします。定義した為替レートを持つ他の通貨に換算された、入力値の通貨を設定できます。

基本通貨

複数通貨アプリケーションの場合、各エンティティ・メンバーの基本通貨を指定します。エンティティ・メンバーのデフォルトの基本通貨は、アプリケーション作成時に指定された通貨です。たとえば、米国ドルがデフォルト通貨の場合でも、日本のエンティティには円を、米国のエンティティには米国ドルを指定できます。日本のエンティティの値を持つフォームを使用する際、表示する通貨が米国ドルに設定されている場合、為替レート表内のレートを使用して、値は米国ドルに換算されます(円を現地通貨、米国ドルをレポートの通貨と仮定)。

勘定科目について

勘定科目ディメンションのメンバーで予算プランナから必要な情報を指定します。予算管理者に予算アイテムのデータを入力する勘定科目の構造を作成します。勘定科目構造内の計算が定義できます。

勘定科目タイプ

勘定科目タイプで勘定科目のタイム・バランス(値が時間をフローする状態)が定義され、メンバー式で差異レポートへの勘定科目のサイン動作を決定します。

勘定科目タイプの使用例

表 12-3 勘定科目タイプの使用

勘定科目タイプ	目的
費用	ビジネスを行うコスト
収益	収益源
資産	会社のリソース
負債と資本	残余請求権または債権者への債務
保存された仮定	アプリケーションで一貫性を確保する集中管理されたプランニング仮定

勘定科目タイプのサマリー

表 12-4 勘定科目タイプのサマリー

勘定科目タイプ	タイム・バランス	差異レポート
収益	フロー	費用外
費用	フロー	費用
資産	残高	費用外
負債	残高	費用外
資本	残高	費用外
保存された仮定	ユーザー定義	ユーザー定義

差異レポートおよびタイム・バランスの設定はシステム定義ですが、保存された仮定は唯一ユーザー定義です。

タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランスで Oracle Hyperion Planning の要約期間の値の計算方法が指定されます。

表 12-5 タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランス・プロパティ	説明	例
フロー	期間合計としてのサマリー期間のすべての値の集約	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 45
最初	期間合計としてのサマリー期間内の最初の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 10
残高	期間合計としてのサマリー期間内の最後の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 20
Average	期間合計としてのサマリー期間内のすべての子値の平均	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
入力	親での値の設定は、その親のすべての祖先に入力されます。子の値が変更されると、デフォルト集約論理はその親に適用されます。 集計演算子およびメンバー式は、メンバーが再計算される際に入力値に上書きされます。	1月: 10、2月: 10、3月: 10、Q1: 30
加重された平均 - Actual_Actual	加重日平均は1年の実際の日数に基づいており、2月が29日までであるうるう年に対応しています。例では、Q1の平均は次のように計算されています: (1) Q1の各月の値に、月の日数を掛け合わせます。(2)これらの値の合計を出します。(3)出した合計をQ1の日数で割ります。うるう年と仮定した場合、 $(10*31+15*29+20*31)/91=15$ という計算になります。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
加重された平均-Actual_365	加重日平均は1年365日に基づき、2月を28日までと仮定しており、うるう年に対応していません。例では、Q1の平均は次のように計算されています: (1) Q1の各月の値に、月の日数を掛け合わせます。(2)これらの値の合計を出します。(3)出した合計をQ1の日数で割ります。うるう年ではない仮定した場合、 $(10*31+15*28+20*31)/90=15$ という計算になります。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15

「加重された平均-Actual_Actual」および「加重された平均-Actual_365」タイム・バランス・プロパティは、4つの四半期がロープアップされている標準月次カレンダーでのみ使用できます。Planningで異なる「タイム・バランス」設定のデータを計算および分散する方法の詳細は、Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照してください。

勘定科目タイプと差異レポート

勘定科目の差異レポートのプロパティにより、メンバー式に使用されるときに費用として扱われているかどうかのように決定されます:

- 費用: 実績値は予算値から引かれて、差異が計算されます。
- 費用外: 予算値は実績値から引かれて、差異が計算されます。

ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定

「最初」、「残高」、「平均」のタイム・バランス・プロパティで、データベース計算がスキップ・オプションのあるゼロと欠落した値の扱い方を指定します。

表 12-6 タイム・バランスに「最初」が設定されているときのスキップ・オプションの適用

スキップ・オプション	説明	例
なし	ゼロおよび#MISSING 値は、親の値 (デフォルト)を計算するときに考慮されます。例では、最初の子(1月)の値は0で、ゼロは親の値を計算するときに考慮されるので、Q1=0とみなされます。	1月:0 2月:20 3月:25 Q1:0
欠落	親の値を計算するときに#MISSING 値は除外されます。例では、最初の子(1月)の値は#MISSINGで、#MISSING 値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1=2番目の子(2月)、つまり20です。	1月:#MISSING 2月:20 3月:25 Q1:20
ゼロ	親の値を計算するときにゼロ値は除外されます。例では、最初の子(1月)が0で、ゼロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1=2番目の子(2月)、つまり20です。	1月:0 2月:20 3月:25 Q1:20
欠落およびゼロ	親の値を計算するときに#MISSING およびゼロ値は除外されます。例では、最初の子(1月)はゼロで、2番目の子(2月)は欠落しています。欠落した値とゼロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1=3番目の子(3月)、つまり25です。	1月:0 2月:#MISSING 3月:25 Q1:25

保存された仮定

保存された仮定を使用して、プランニング仮定を集中させ、主要なビジネス・ドライバを識別し、アプリケーションの一貫性を確実にさせます。タイム・バランスと差異レポートのプロパティを選択します。

- 差異レポートにより、予算データと実際のデータ間の差異を費用または費用外に判別します。
- タイム・バランスにより、サマリー期間の末尾の値が判別されます。

次に、タイム・バランスと差異レポートのプロパティが保存された仮定勘定科目メンバーでどう使用されるかについて例を示します。

- 人数に費やされた実際の金額は予算金額よりも少ないと仮定し、差異レポートに費用タイプの保存された仮定を作成します。Oracle Hyperion Planning では、予算金額から実際の金額が差し引かれて差異が決定されます。
- 期間の末尾の値を使用して、オフィスの床面積の値を判別します。
- 期間の最終時点での売上製品ユニットの数について仮定を作成します。期間中に売ったユニット数を集約して、サマリー期間の最後の値を判別します。

データ型と為替レート・タイプ

データ型と為替レート・タイプで、勘定科目メンバーにどのように値が保管され、為替レートが計算値にどのように使われるかが次のように判別されます。勘定科目メンバーの値の使用可能なデータ・タイプ:

- 通貨 - デフォルト通貨で保管および表示します。
- 通貨以外 - 数値として保管および表示します。
- パーセンテージ: 数値を保管し、パーセントとして表示します。
- 日付 - 日付として表示します。
- テキスト - テキストとして表示します。

通貨データ型を持つ勘定科目の場合、使用できる為替レート・タイプ(どの期間にも有効)は次のとおりです:

- 平均 - 平均為替レート
- 期末 - 期末の為替レート
- 履歴 - 為替レートは、たとえば、利益剰余金の勘定科目の収益が入ったか、固定資産の資産が購入されたときに有効です。

勘定科目、エンティティ、プラン・タイプ

エンティティおよび勘定科目メンバーにプラン・タイプを割り当てて、メンバーの子にアクセスさせるプラン・タイプを設定します。たとえば、売上合計勘定科目は収益と P&L に有効にできますが、固定資産勘定科目は貸借対照表のみに有効です。メンバーにプラン・タイプを割り当てないと、そのプラン・タイプにメンバーの子がアクセスできません。

メンバーを移動するとき、新しい親が別のプラン・タイプに有効な場合、メンバーは新しい親と共通のプラン・タイプにのみ有効です。勘定科目メンバーの新しい親が別のソース・プラン・タイプを有する場合、メンバーのソース・プラン・タイプは、そのメンバーの最初に有効な新規プランに設定されます。

エンティティおよびプラン・タイプ

通常、エンティティ・メンバーは異なるプランを準備します。エンティティ・メンバーを定義する際、メンバーに有効なプラン・タイプを指定します。フォームはプラン・タイプに関連付けられているので、各プラン・タイプにデータを入力できるエンティティ・メンバーを制御できます。

勘定科目およびプラン・タイプ

勘定科目が複数のプラン・タイプに有効な場合、ソース・プラン・タイプを指定して、勘定科目の値を保管するプラン・タイプのデータベースを決定します。

ユーザー定義のカスタム・ディメンションについて

ユーザー定義のカスタム・ディメンションは最大 13 個まで追加できます。たとえば、各プロジェクトに、営業費用の予算を立てるための「プロジェクト」と呼ばれるディメンションを追加できます。名前、別名、プラン・タイプ、セキュリティ、属性、属性値などのプロパティを定義します。

注意:

カスタム・ディメンションは、一度作成すると削除できません。

ユーザー定義のカスタム・ディメンションは、メンバー・レベルでなく、ディメンション・レベルで割り当てられた有効なプラン・タイプのエンティティおよび勘定科目のディメンションと異なります。ユーザー定義のカスタム・ディメンションのすべてのメンバーは、ディメンション・レベルで割り当てられたプラン・タイプに有効です。

ユーザー定義カスタム・ディメンションの追加または編集

ユーザー定義のカスタム・ディメンションは、[命名規則](#)に記載されているガイドラインに従っている必要があります。

表 12-7 ユーザー定義カスタム・ディメンションのプロパティ

プロパティ	値
ディメンション	ディメンション全体で一意である名前を入力します。
別名	オプション: 別名表を選択します。ディメンションに付ける一意の代替名を入力します。
説明	オプション: 説明を入力します。
プラン・タイプに有効	有効なディメンションにプラン・タイプを選択します。このオプションをクリアすると、ディメンションのすべてのメンバーは選択しないプラン・タイプに無効になります。
セキュリティの適用	ディメンション・メンバーにセキュリティの設定を行います。ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。そうしない場合、ディメンションにセキュリティがかからないため、ユーザーは無制限にメンバーをアクセスさせることができます。
データ・ストレージ	データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「共有しない」です。

ユーザー定義のディメンションを追加または変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
 2.  をクリックするか、既存のディメンションを選択して  をクリックします。
 3. 前述のプロパティのいずれかを指定します。
 4. 「保存」をクリックします。
 5. 「OK」をクリックします。
- 「リフレッシュ」をクリックすると、前の値に戻されます。ページは開いたままです。

ディメンション・プロパティの設定

ディメンション・プロパティは、[命名規則](#)にあるガイドラインに適合させてください。

表 12-8 ディメンション・プロパティ

プロパティ	値
ディメンション	ディメンション名を入力します。
別名	オプション: 別名表を選択し、代替名を最大 80 文字で入力します。ディメンションの命名規則に従ってください。
説明	オプション: 説明を入力します。
プラン・タイプに有効	有効なディメンションにプラン・タイプを選択します。エンティティや勘定科目ディメンションには使用できません。
セキュリティの適用	ディメンション・メンバーにセキュリティの設定を行います。このオプションを選択しないと、ディメンションにはセキュリティが設定されず、ユーザーはそのメンバーに制限なしにアクセスできます。ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。
データ・ストレージ	データ・ストレージ・オプションを選択します。
表示オプション	「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。
カスタム属性の表示の使用可能	関連付けられた属性で、使用可能で選択されたディメンションの属性を表示します。カスタム属性を属性で表示可能にします。

ディメンションの密度と順序の設定

「パフォーマンス設定」タブで、ディメンションを疎または密に設定し、その優先順位を設定できます。

パフォーマンス設定を管理するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「パフォーマンス設定」を選択します。
3. 各ディメンションに対し、「密度」を「密」または「疎」に設定します。
疎ディメンションおよび密ディメンションについてを参照してください。
4. ディメンションを選択し、またはをクリックして、優先順位を設定します。
ディメンションの順序変更についてを参照してください。

評価順序の設定

「評価順」タブで、データ交差にデータ・タイプの競合がある場合に優先されるデータ・タイプを指定できます。たとえば、勘定科目メンバーが通貨データ・タイプに設定され、製品メンバーがスマート・リスト・データ・タイプに設定されている場合、通貨またはスマート・リスト・データ・タイプのどちらが交差時に優先かを設定できます。

評価順序を設定するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「評価順」を選択します。
3. プラン・タイプを選択して「実行」をクリックします。
4. 「使用可能なディメンション」からディメンションを選択し、これらを「選択したディメンション」に移動します。
 -  は、選択したディメンションを移動します
 -  は、すべてのディメンションを移動します
 -  は、選択したディメンションを削除します
 -  は、すべてのディメンションを削除します

メンバーが特定のデータ・タイプを持つディメンションのみを選択する必要があります(つまり、そのデータ・タイプは「未指定」ではありません)。データ・タイプ「未指定」は他のデータ・タイプと競合しません。
5. 複数のディメンションを選択した場合、またはをクリックして優先順序を設定します。
6. 「保存」をクリックします。

メンバーの操作

メンバーへのアクセス権の割当て、ディメンション・メンバー階層の変更、エンティティ、勘定科目およびユーザー定義のカスタム・ディメンションの共有ができます。

動的メンバーについて

動的メンバーとは、ユーザーがビジネス・ルールの操作時に作成できるメンバーです。"オンザフライ・メンバー"と呼ばれることもあります。管理者はエンド・ユーザーが親メンバーの下に動的メンバーを作成できるようにし、データベースをリフレッシュして必要なプレースホルダを Oracle Essbase 内に作成する必要があります。実行時プロンプトのあるビジネス・ルールでは、ユーザーは実行時プロンプトで目的のメンバー名を入力して、メンバーを作成できます。それ以降にデータベースをリフレッシュすると、使用されている動的な子の名前がエンド・ユーザーによって指定された名前に変更され、必要なプレースホルダが Essbase 内に再作成されます。ビジネス・ルールと動的メンバーの操作の詳細は、*Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド*を参照してください。

(この項で説明されているように)親メンバーが動的な子を追加できるようになっている場合、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規のメンバーを作成できます。

親メンバーが動的な子を追加できるようにするには:

1. 親メンバーを編集し、オプション「動的な子に対して使用可能」を選択します([メンバーの追加または編集](#)を参照)。
 - オプション: メンバー・プロパティ「**使用可能な動的な子の数**」を設定します(デフォルトは 10 です)。この設定は、メンバーを親の下に動的に追加またはロードするために作成されたプレースホルダの名前を決定します。すべてのプレースホルダが使用されている場合、以降に追加される子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。
 - オプション: メンバー・プロパティ「**メンバー作成者に付与されたアクセス権**」を設定します(デフォルトは「継承」です)。
2. データベースをリフレッシュして、メンバーを使用するプラン・タイプに対して、データベース内の動的メンバーのプレースホルダを作成します。
3. Oracle Hyperion Calculation Manager では:
 - a. (変数タイプが「メンバー」の)実行時プロンプトを含むビジネス・ルールを作成します。「動的メンバーの親」列で、「メンバー・セレクタ」を使用して、Oracle Hyperion Planning で動的な子に対して有効な親メンバーを選択します。
 - b. オプション「動的メンバーの作成」を選択します。
 - c. ビジネス・ルールをデプロイします。

ビジネス・ルールの操作の詳細は、*Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド*を参照してください。

ノート:

- Calculation Manager で、「動的メンバーの作成」オプションと「動的メンバーの削除」オプションの両方を選択すると、一時的な動的メンバーを計算用に作成できるようになり、それらの一時的な動的メンバーはビジネス・ルールの完了後に削除されます。
- 「動的メンバーの削除」オプションのみを選択すると、エンド・ユーザーには実行時プロンプトで「メンバー・セレクタ」が表示され、(メンバーへの書込みアクセス権を持っていれば)親の下に動的に作成したメンバーを削除できます。これにより、エンド・ユーザーは親の下のメンバーのクリーンアップおよび管理を完全に制御できます。重要なのは、要件に応じた適切な設計を行い、「メン

バー作成者に付与されたアクセス権 メンバー・プロパティを使用して動的な子に適切なアクセス権を設定することです。

前述のすべての条件が満たされた場合、ユーザーは、実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを実行するときに、動的なメンバーの名前を入力して、「**起動**」をクリックします。ビジネス・ルールが正常に実行されると、ディメンション階層内の動的メンバーの親の下にメンバーが作成されます。

動的な子に対して使用可能になっている親メンバーの下にインポートした子メンバーは、Essbase内に動的メンバー・プレースホルダが存在している場合、動的な子メンバーとして追加されます。プレースホルダがいっぱいになると、残りの子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。

ノート:

動的な子に対して使用可能になっている親メンバーおよびその子メンバーを同じインポート時にロードすると、子メンバーは通常のメンバーとしてロードされます。これは、Essbaseにプレースホルダを作成するためにデータベースのリフレッシュが必要なためです。

メンバーの追加または編集

メンバーは、**命名規則**に記載されているガイドラインに従っている必要があります。共有メンバーは、**共有メンバーの操作**に沿っている必要があります。

表 12-9 メンバーのプロパティ

プロパティ	値
名前	ディメンション・メンバー全体で一意である名前を入力します。
説明	オプション: 説明を入力します。
別名表	オプション: 別名表を選択し、別名を保管します。メンバーの代替の名前を入力します。
勘定科目メンバーのみ: 勘定科目タイプ	勘定科目タイプを選択します。
勘定科目メンバーのみ: 差異レポート	勘定科目タイプが「保存された仮定」の場合は、「差異レポート」に「費用」または「費用外」を選択します。保存された仮定を、収益、資産、負債、資本の勘定科目に指定します。
勘定科目メンバーのみ: タイム・バランス	「タイム・バランス」で、「フロー」、「期首」、「残高」、「平均」、「入力」、「加重された平均-Actual_Actual」または「加重された平均-Actual_365」を選択します。詳細は、 タイム・バランス・プロパティ を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: スキップ	勘定科目タイプが「資産」、「資本」および「負債」の場合、「なし」、「欠落」、「ゼロ」または「欠落およびゼロ」を選択します。詳細は、 ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定 を参照してください。

表 12-9 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
勘定科目メンバーのみ: 為替レート・タイプ	「為替レート・タイプ」で、オプションを1つ選択します。
勘定科目メンバーのみ: データ型	「データ型」で、データ型を選択します。
配分	週次配分を設定します。アプリケーションの作成時に、このオプションが選択済で基本期間が12か月の場合、リーフ勘定科目メンバーに使用できます。
階層タイプ	「階層タイプ」は、集約ストレージ・プラン・タイプにバインドされるディメンションに使用できます。集約ストレージ・ディメンションは、複数階層をサポートするために自動的に有効になります。複数階層のディメンションの最初の階層は保管階層である必要があります。
<hr/> <p>ノート: 保管階層タイプのメンバーに対して有効なプラン・タイプ集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。保管階層で、最初のメンバーを「加算」に設定する必要があります。動的階層タイプのすべてのメンバーについては、すべてのプラン・タイプ集約オプションが有効です。「ラベルのみ」メンバーの子ではない保管階層では、集計演算子として「加算」を指定する必要があります。「ラベルのみ」メンバーの子は「無視」に設定できます。</p> <hr/>	
データ・ストレージ	データ・ストレージのプロパティを選択します。新規カスタム・ディメンション・メンバー(ルート・メンバー以外)に対して、デフォルトは「共有しない」です。
2パス計算	親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。
エンティティ・メンバーのみ: 基本通貨	エンティティ・メンバーの基本通貨を選択します。

表 12-9 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
表示オプション	<p>「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。</p>
プラン・タイプ	<p>有効なメンバーにプラン・タイプを選択します。</p>
<p>ノート: メンバーは、集約ストレージとブロック・ストレージの両方のプラン・タイプに属することができます。</p>	
<p>選択された各プラン・タイプに集約オプションを選択します。複数のプラン・タイプがメンバーに有効な場合は、ソース・プランのみを選択できます。メンバーの親に有効なプラン・タイプと集約オプションのみが使用できます。親がプラン・タイプまたは集約オプションに有効でない場合は子も同様に有効になりません。勘定科目またはエンティティの親メンバーのプラン・タイプの選択を解除すると、その親のすべての子孫への選択も解除されます。保管階層タイプのメンバーに対して有効な集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。</p>	
<p>注意: アプリケーションにデータを入力した後でディメンション・メンバーのプラン・タイプを選択解除すると、アプリケーションのリフレッシュ時にデータが失われる場合があります。勘定科目メンバーについては、選択解除されたプラン・タイプがソース・プラン・タイプの場合、データは失われます。</p>	
<p>カスタム・ディメンションのメンバーは、勘定科目ディメンションやエンティティ・ディメンションと同様、プラン・タイプ別に使用方法を設定できます。</p>	
エンティティ・メンバーのみ: 基本通貨	<p>エンティティ・メンバーの基本通貨を選択します。</p>

表 12-9 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
勘定科目メンバーのみ: ソース・プラン・タイプ	メンバーのソース・プラン・タイプを選択します。共有メンバーは基本メンバーへのポイントで、保管されません。これは共有メンバーに無効です。共有メンバーに適用されないため、「ソース・プラン」フィールドは使用できませんが、共有の勘定科目メンバーのソース・プラン・タイプは基本メンバーのソース・プラン・タイプと一致します。
スマート・リスト	オプション: スマート・リストを選択してメンバーに関連付けます。
動的な子に対して使用可能	ユーザーが、動的な親メンバーを使用するように構成されたビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー名を入力することにより、このメンバーの子を作成できるようになります(動的メンバーについて を参照)。
使用可能な動的な子の数	このオプションは、「動的な子に対して使用可能」が選択されている場合のみ使用可能です。ユーザーが作成できる、動的に追加する最大メンバー数を入力します。デフォルトは 10 です。

表 12-9 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
メンバー作成者に付与されたアクセス権	<p>このオプションは、「動的な子に対して使用可能」が選択されている場合のみ使用可能です。メンバー作成者が実行時プロンプトで作成する動的メンバーに対して持つ権限を判別します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 継承 - メンバー作成者は、新しく作成したメンバーに対する最も近い親のアクセス権を継承します。 ・ なし - メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへのアクセス権は割り当てられません。(管理者は、後でメンバー作成者にメンバーへのアクセス権を割り当てることができます。) ・ 読取り - メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの読取りアクセス権が割り当てられます。 ・ 書込み - メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの書込みアクセス権が割り当てられます。
<p>ノート: 管理者がこれらの設定を変更した場合、その変更は将来の動的メンバーにのみ適用され、遡って動的メンバーに適用されることはありません。</p>	

ユーザーを追加または編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. ディメンションを選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 子メンバーを追加するには、メンバーを追加する親レベルのディメンション階層を選択し、「子の追加」をクリックします。
 - 兄弟を追加するには、兄弟を追加するレベルのディメンション階層を選択し、「兄弟の追加」をクリックします。
 - メンバーを編集するには、そのメンバーをディメンション階層から選択して、**[Enter]**を押すか、「編集」をクリックします。

ノート:

「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、「年」ディメンションを選択してから「すべての年」をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、「すべての年」メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。

4. 「メンバーのプロパティ」で、上の表で説明したメンバー・プロパティを設定または変更します。
現在のページに新規メンバーが表示されないときは、「次へ」をクリックします。
5. 「保存」をクリックして、リレーショナル・データベースに新しい情報を保存し、変更がディメンション階層に反映されることを確認します。
6. データベースをリフレッシュすると、データを入力するプランナに編集したメンバーが表示されます。
7. ディメンション・メンバーを作成した後、通常は、次のタスクを完了させます。
 - アクセス権を割り当てます。 [メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て](#)を参照してください。
 - 属性を指定します。

メンバーの削除

各データ値は、一連のディメンション・メンバー値とプラン・タイプで識別されます。ディメンション・メンバーの削除やプラン・タイプの選択解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュするときにデータが失われます。エンティティ・メンバーを削除すると、エンティティ・メンバーに関連付けられたすべてのプランニング・ユニット(データを含む)が削除されます。

注意:

この操作を行う前に、バックアップを実行してください。 [アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)および [Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド](#)を参照してください。

メンバーを削除する前に、メンバーが使用されているアプリケーション(フォーム、プランニング・ユニット、為替レートなど)の場所を、「使用状況の表示」で確認します。

エンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に **Oracle Hyperion Planning** 全体にわたってエンティティ・メンバーを削除する必要があります。たとえば、エンティティ・メンバーがフォームで使用されている場合には、そのエンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に、フォームから削除する必要があります。

エンティティのサブツリーを多数削除するとき、すべてのシナリオとバージョンのサブツリー(ルート・メンバーを除いて)のプランニング・ユニットを最初に削除するとパフォーマンスを向上させることができます。 [レビュー・プロセス](#)を参照してください。

メンバーを削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 削除するメンバーのディメンションを選択します。
3. ディメンション階層から、削除するエンティティ・メンバーを選択します。
4. 「削除」をクリックします。
基本メンバーを削除すると、その共有メンバーも削除されます。
5. 「OK」をクリックします。
6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

親メンバーの削除

データ値は、一連のディメンション・メンバー値とプラン・タイプで識別されます。ディメンション・メンバーの削除やプラン・タイプの選択解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュするときにデータが失われます。

注意:

この操作を行う前に、バックアップを実行してください。 [アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#) および [Oracle Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド](#) を参照してください。

ディメンション階層から親メンバーとそのすべての子孫を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 削除するメンバーと子孫のディメンションを選択します。
3. 削除する分岐を持つメンバーを選択します。
4. 「削除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

フォームからのメンバーのプロパティの表示

フォームからメンバーのプロパティを表示するには:

1. フォームで、行または列番号を選択し、右クリックします。
2. 「メンバーをアウトラインに表示」を選択します。
「ディメンション」ページに、階層内にハイライトされたメンバーが表示されます。
3. オプション: 「編集」を選択し、メンバーのプロパティを表示してから「取消し」をクリックします。

共有メンバーの操作

メンバーを共有すると、Oracle Hyperion Planning アプリケーション内でロールアップ構造の入替えが行えます。共有メンバーを作成する前に基本メンバーが存在する必要があります。基本メンバーに複数の共有メンバーを作成できます。共有メンバーを上から下まで位置づける前に基本メンバーを表示させてください。

共有メンバーは、エンティティ、勘定科目、ユーザー定義のカスタム・ディメンションに使用できます。アウトラインをロールアップする際、共有メンバーの値を無視して二重計算を防ぐことができます。

共有メンバーは、メンバーに有効なメンバー名、別名、基本通貨、プラン・タイプなどのプロパティの定義をいくつか共有します。共有メンバーには、一意の親メンバーおよび異なるロールアップの集約を設定させる必要があります。カスタム属性、カスタム属性値およびメンバー式を共有メンバーに使用することはできません。基本メンバーの名前を変更すると、すべての共有メンバーの名前も変更されます。

共有メンバーを別の親メンバーに移動させることはできません。移動させる場合、共有メンバーを削除してから、別の親メンバーの下に再度作成します。共有メンバーは階層の最下位レベル(レベル 0)である必要があります。子を持つことはできません。基本メンバーをレベル・ゼロにする必要はありません。共有メンバーにデータを入力し、値を基本メンバーと共に保管できます。

共有メンバーは基本メンバーと同様に、Oracle Smart View for Office のメンバー選択のディメンション階層に表示されます。

共有メンバーの作成

共有メンバーを、他のメンバーと同じ方法で作成できますが、次のように異なる点があります。

- 基本メンバーは、共有メンバーの親にはなれません。
- 共有メンバーを兄弟として基本メンバーに追加できません。
- 共有メンバーの名前は、基本メンバーと同じにする必要があります。共有メンバーに別の説明を付けることはできます。
- 共有メンバーのデータ・ストレージ・オプションは、「共有」にする必要があります。

属性の操作

グループ・メンバーに同じ条件で属性を使用します。疎ディメンションのメンバーのみに属性を割り当てることができます。ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることができません。属性ディメンションは、親が動的に計算されるため、集約プロパティを持っていません。

勘定科目のディメンションは通常、密として定義されますので、すべてのプラン・タイプのディメンションを疎に変更しないかぎり、属性を割り当てることができません。ディメンションを疎から密に変更する場合、変更するディメンションのすべての属性および属性の値は自動的に削除されます。

[属性のデータ型の理解](#)に記載されているように、属性は、テキスト、日付、ブール式、数値のデータ型を持つことができます。属性名は、[命名規則](#)にあるガイドラインに適合させてください。属性が定義されると、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用し、「等しい」や「以上」などの属性関数を選択できます。

属性、属性値、別名を作成または変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 定義する属性、属性値または別名に疎ディメンションを選択します。
疎ディメンションのみが属性を持つことができます。
3. ディメンション階層の最上位を選択し、「編集」をクリックします。
4. 「ディメンション・プロパティ」ダイアログ・ボックス内で「カスタム属性」をクリックします。

ディメンションが疎ディメンションではない場合、「カスタム属性」は使用できません。

5. オプションを選択します。

- 属性を作成するには、「作成」をクリックします。属性の名前を入力し、「テキスト」、「日付」、「ブール」または「数値」のデータ型を選択します。属性のデータ型の理解を参照してください。属性が一度作成されると、データ型を変更することができなくなります。

プラン・タイプのオプションは、エンティティのディメンション属性のみに使用できます。属性が一度作成されると、この設定を変更することができなくなります。

- 属性を変更するには、「変更」をクリックし、属性の名前を更新します。
- 属性に別名を設定するには、属性と属性値を選択し、「別名」をクリックします。別名表を選択して別名を入力してから、「閉じる」をクリックします。

6. 「閉じる」をクリックします。

「閉じる」をクリックすると、階層が検証され、問題が検知されるとエラーが表示されます。たとえば、日付の属性値は正しいフォーマットで入力される必要があります。数値と日付のディメンションには、少なくとも1つの定義された属性値が必要です。

7. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

属性のデータ型の理解

属性ディメンションは、数値、ブール式または日付のデータ型を持つことができます。これにより、グルーピングに異なる関数テキストの使用、選択を可能にするかまたはデータの計算を可能にします。属性タイプは属性ディメンションのレベル0のメンバーにのみ適用します。

- テキストの属性で、計算における基本の属性メンバー選択と属性の比較ができます。このような比較を実行すると、文字が比較されます。たとえば、パッケージ・タイプの「Bottle」はパッケージ・タイプの「Can」より小さいということになります。アルファベットではBはCの前にくるからです。
- 数値の属性ディメンションでレベル0のメンバーの名前に数の値が使用されます。計算には数値の属性ディメンションのメンバーの名前(値)を含めることができます。たとえば、オンスの属性に指定されたオンスの数を使用して、各プロジェクトのオンスごとの収益を計算することができます。さらに、市場人口のグループ化による製品売上げの分析など、数値の属性を基本ディメンションの値の範囲に関連付けることができます。
- データベース内のブール式の属性ディメンションには、2つのメンバーのみが含まれています。Planningにブール式の属性ディメンションが追加されると、2つの属性値、すなわちTRUEおよびFALSEが、この属性ディメンションにデフォルトで作成されます。勘定科目やエンティティなどの基本ディメンションを、1つだけのブール式データ型属性ディメンションに関連付けることができます。
- 日付の属性で、月-日-年または日-月-年という日付フォーマット、およびそれに応じたシーケンス情報を指定できます。計算にも日付の属性を使用できます。たとえば、12-22-1998からの製品売上げを選択する計算で日付を比較できます。ユーザーは「アプリケーション設定」プリファレンスの「属性ディメンション日付フォーマット」のオプションを1つ選択して日付フォーマットを設定できます。

属性および属性値の詳細は、Oracle Essbase データベース管理者ガイドを参照してください。

属性の削除

属性を削除すると、その属性に関連付けられたすべての属性値も削除されます。属性値は割り当てられたメンバーから除去され、属性は割り当てられたディメンションから除去されます。

属性を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 属性を削除する疎ディメンションを選択し、「編集」をクリックします。
3. 「カスタム属性」をクリックします。
4. 削除する属性を選択します。
5. 「属性」列の上で、「削除」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。
7. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

属性値の操作

属性値には、フォームの使用の際、ディメンション・メンバーを選択する別の方法があります。属性値のデータ値は動的に計算されますが保管されません。

属性値の作成

通常、エンティティとユーザー定義のカスタム・ディメンションの疎ディメンションに、属性値を定義できます。ディメンションの属性値を定義した後、その属性値をそのディメンションのメンバーに割り当てることができます。

属性値を作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 属性値を作成する疎ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内の最上位レベルを選択します。
4. 「カスタム属性」をクリックします。
5. 「属性と値の管理」 ページで、値を指定する属性値を選択します。
6. 「属性値」列の上で、「作成」をクリックします。オプションが使用できる場合は「子の追加」または「兄弟の追加」をクリックできます。
7. 「属性値の作成」で、「名前」に名前を入力します。
8. [Enter]または「保存」を押します。
9. 「取消」をクリックします。

メンバーへの属性値の割当て

すべてのプラン・タイプに疎と定義されるディメンションの属性値メンバーを割り当てることができます。属性値は同レベルの疎ディメンション・メンバーへ割り当ててください。そうしないと、リフレッシュ中にエラーが表示されます。

メンバーへ属性値を割り当てるには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 属性値を割り当てるメンバーの疎ディメンションを選択します。
3. 「ディメンション」階層で、属性値を割り当てるメンバーを選択します。
4. 「編集」をクリックします。
属性値を割り当てられたメンバーについては、「表示」をクリックしてメンバーの属性値を変更します。
5. 「属性値」を選択します。
6. 属性値を選択してメンバーへ割り当てます。
7. 次のいずれかのアクションを行います:
 - 選択したメンバーへ値を割り当てるには、をクリックします。
 - 選択したメンバーから値を除去するには、除去する値を選択し、をクリックします。
 - 選択したメンバーからすべての値を除去するには、をクリックします。
8. 「保存」をクリックします。

属性値の変更

属性値を変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 変更する属性値の疎ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内の最上位レベルを選択します。
4. 「カスタム属性」をクリックします。
5. 「属性」で、変更する値を含む属性を選択します。
6. 「属性値」で、属性値を選択します。
7. 「属性値」の上の、「変更」をクリックします。
8. 「属性値の変更」の「名前」で名前を入力します。
9. 「保存」をクリックします。

属性値の削除

属性値を削除すると、属性値が割り当てられていたすべてのカスタム・ディメンションから、属性値が除去されます。

属性値を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 削除する値の属性を含む疎ディメンションを選択します。

3. ディメンション階層内の最上位レベルを選択します。
4. 「カスタム属性」をクリックします。
5. 「属性」で、削除する属性値を含む属性を選択します。
6. 「属性値」で、削除する属性値を選択します。
削除する属性値をすべて選択するには、「属性値」を選択します。
7. 「属性値」列の上で、「削除」をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。
9. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

カレンダーのカスタマイズ

期間ディメンションを使用して、月次カレンダーのロールアップ構造体を操作できます。アプリケーションの作成時に、管理者は Oracle Hyperion Planning のデータベースにスパンする基本期間を指定しています。年ディメンションを使用して、カレンダーに年を追加します。

表 12-10 カレンダー・タスク

タスク	トピックを参照
年をロールアップする方法を定義します。	カレンダーのロールアップ方法の定義
要約期間を作成、編集します。	サマリー期間の作成と編集
要約期間を削除します。	サマリー期間の削除
会計年度と期間階層を操作します。	年ディメンションの操作

カレンダーのロールアップ方法の定義

表 12-11 カレンダーのロールアップ

基本期間	ロール・アップ
12 か月	年ごとに 4 つの四半期が作成されます。月は親の四半期にロールアップされ、四半期は年にロールアップされます。
四半期	四半期は年にロールアップされます。
カスタム	デフォルトのロールアップ構造はありません。カスタム基本期間の固定リストが表示されます。

アプリケーションのカレンダーが一度作成されると、カレンダーの基本期間を変更したり、年数を減らしたりすることはできなくなります。管理者は、階層内の名前、説明、別名、サマリー期間を変更できます。

サマリー期間の作成と編集

名前、説明、別名、開始期間、終了期間などを変更できます。ただし、基本期間の順序を変更したり基本期間をスキップすることはできません。現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。

サマリー期間を作成する際、階層の上位から下位へ操作する必要があります(その操作をしないと、Oracle Hyperion Planning では、ロールアップ構造を非対称で表示するため、継続できなくなります。)サマリー期間は、選択されたアイテムの親として、階層内を表示します。バランスのとれた階層にするには、すべての基本メンバーをルートから同じレベル数にする必要があります。

サマリー期間の作成または編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「期間」を選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 期間を追加するには、期間を追加するディメンション階層の上のレベルを選択し、「追加」をクリックします。
 - 期間を編集するには、期間を選択して「編集」をクリックします。
4. 「名前」で、サマリー期間の名前を入力するか変更します。
5. オプション: 「説明」で、説明を入力します。
6. オプション: 「別名」で、使用する別名表を選択します。別名を入力します。
1つ選択しないと、デフォルトの表が使用されます。
7. 「開始期間」で、開始する期間を選択します。

現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。サマリー期間には、「開始期間」に最初の子が表示されるか、その上の兄弟の最初の子を除く、すべての子が表示されます。

8. 「終了期間」で、期末を選択します。

サマリー期間には、「終了期間」に最後の子が表示されるか、最後の子を除く、開始期間から次の兄弟の子までのすべての子が表示されます。

9. 「保存」をクリックします。

サマリー期間の削除

階層からサマリー期間を除去すると、その子は次に示すように別のサマリー期間に移動されます。

- 階層で最初のサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の次の兄弟に移動されます。
- 階層で最後のサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の前の兄弟に移動されます。
- 階層の中段からサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の前の兄弟に移動されます。

サマリー期間を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「期間」を選択します。
3. 「期間」階層で、削除する要約期間を選択します。
基本期間は削除できません。
4. 「削除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

年ディメンションの操作

年ディメンションを使用して、カレンダーの年を操作します。

表 12-12 年タスク

タスク	トピックを参照
年をカレンダーに追加します。	年のカレンダーへの追加 .
年の説明および別名を追加または更新します。	年情報の編集 .
会計年度を設定し、年を操作します。	会計年度の設定 .
「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加します(「年なし」メンバー(存在する場合)を除く)。	メンバーの追加または編集

年のカレンダーへの追加

年数をカレンダーに追加できますが、データベースの作成をせずにカレンダーの年数を減らすことはできません。

年をカレンダーに追加するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「年」を選択します。
3. 「年の追加」をクリックします。
4. 「追加する年数」で、カレンダーに追加する年数を入力します。
5. 「年の追加」をクリックします。

ノート:

「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、「すべての年」をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。(この親メンバーには「年なし」メンバー(存在する場合)は含まれません)

会計年度の設定

期間または現在の年を変更できます。

現在の年または期間を変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「年」または「期間」を選択します。
3. 「オプション」をクリックします。
4. 「現在の期間と年の設定」で、「現在の年」から、現在の年を選択します。

現在の月と現在の年は、シナリオが作成される時点の月と年にデフォルトが設定されます。たとえば、現在の年が FY08 に設定され、現在の月が 8 月に設定される場合、ユーザーがシナリオを作成すると、これらの値が、「開始年」、「開始期間」、「終了年」、「終了期間」フィールドにデフォルトとして表示されます。

5. 「現在の期間」で、現在の期間を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

年情報の編集

年の説明および別名を追加または更新できます。

年を編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「年」を選択します。
3. 「編集」をクリックします。
4. 年の説明を入力します。
5. 「別名表」で、使用する別名表を選択し、別名を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

期間名の変更

ルート・レベル、基本期間、ユーザー定義のサマリー期間の名前を変更できます。

別名のサマリー期間への割当て

基本期間およびサマリー期間への別名の割り当てや変更を行えます。

別名を割り当てまたは変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「期間」を選択します。
3. サマリー期間を選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. 「別名表」で、使用する別名表を選択します。
6. 別名を入力します。
7. 「保存」をクリックします。

BegBalance メンバーの編集

期間ディメンションの「BegBalance」メンバーを編集できます。アプリケーションの最初の期間として、新規アプリケーション、会計年度、カレンダーの年を開始するときの開始データの入力には BegBalance メンバーが便利です。BegBalance の名前変更や説明、ならびに別名も付けることができます。

BegBalance メンバーを編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. 最初のメンバーである **BegBalance** を選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. 「期間の編集」で、次の操作を行います。
 - 名前を入力します。
 - 説明を入力します。
 - BegBalance メンバーに使用する別名表を選択し、別名を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

通貨の設定

1 つ以上の通貨の財務情報をプランし、予測し、分析することができます。通貨の作成、編集、削除ができます。管理者は次を制御します:

- アプリケーションが使用する通貨(レポート作成も含む)
- レポートやフォームでの通貨の表示方法
- 他の通貨への換算方法
- トライアングレーション通貨を通貨に換算させるかどうか
- 通貨の換算を行うタイミングの指定

複数通貨の有効化

アプリケーションが複数通貨をサポートする場合、フォームのエンティティごとに複数通貨を使用可能にできます。[フォーム・レイアウトの設定](#)を参照してください。フォームにビジネス・ルールを選択すると、「通貨の計算」ビジネス・ルールを選択し、使用可能な通貨の値に換算できます。[ビジネス・ルールの選択](#)を参照してください。

複数通貨の操作

複数通貨を使用可能にすると、ユーザーは現地通貨からレポートの通貨に換算された値を表示し、セルの基本通貨を上書きできます。

ノート:

- フォームに現地通貨が選択されると、保管されるデフォルトとセルに表示される通貨は、(指定した)エンティティの基本通貨です。ユーザーはデータ値を現地通貨メンバーにのみ入力できます。現地通貨メンバーが選択されると、アプリケーションに指定されたすべての通貨は入力タイプとして使用可能になります。

- 「通貨の編集」ダイアログ・ボックスで各通貨にディメンション・プロパティを設定できます。プリファレンスで、ユーザーはさまざまな表示オプションを選択することや、「通貨設定」を選択して管理者が設定したプロパティを適用することができます。
- 通貨はレポート通貨のみに換算されます。ユーザーはレポート通貨に表示されるセルにデータを入力できません。アプリケーションの主要通貨は、デフォルトによってレポート通貨です。レポートの通貨にする通貨を変更することができます。
- Oracle Essbase アダプタを使用して、値をレポートの通貨にロードし、値を直接 Essbase に移入します。
- アプリケーションに定義された通貨はデータ入力に有効な通貨です。データ入力に有効な通貨は、ユーザーがデータ入力中に通貨リンクをクリックしてアクセスできるリストに表示されます。
- 有用な結果を得るため、1つの共通のレポートの通貨にロールアップします。小計のメンバーが混在する通貨を持っている場合、通貨タイプは空白になり、通貨記号は表示されません。たとえば、10 米国ドルと 10 円を足しても、20 の数値にはなりません。
- 500 の期間を持ったアプリケーションは、期間がデフォルト名の TP1 から 500 の場合にのみ、通貨換算計算スクリプトを正常に実行できます。それ以外の場合は、作成しようとする換算スクリプトはその制限サイズの 64K を超えてしまいます。
- データベースが作成されるかリフレッシュされるときに作成されたユーザー定義の通貨換算計算スクリプトは、ユーザーのアクセスに応じて Oracle Smart View for Office で使用できる場合があります。ユーザー定義の通貨換算計算スクリプトを使用する場合、フォームの計算の前に、通貨換算計算スクリプトを最初にくるよう順序を変更することが推奨されています。
- 入力値に関連付けられている通貨コードは数値として保管されます。このコードはディメンション式、計算スクリプト、ビジネス・ルールで計算されます。この通貨コードの計算された値が正しくない、または無効な換算コードに換算される場合があります。混在する通貨で子がいる場所では、上位レベルで計算結果をレビューするようにします。
- 親が複数の子を持つ場合は、その中の1つの子のみが書き換えられた通貨を持ち、親は書き換えられた通貨コードを継承します(これはフォームに表示されません)。
- 選択した通貨に換算を試みようとすると、親のエンティティが#MISSING と表示される場合があります。通貨レートが現地通貨の各組合せに入力され、フォームかレポートに通貨が選択されるようにします。通貨の組合せはすべての混在する通貨の子エンティティと親メンバーに存在させる必要があります。
- Smart View では、1つのエンティティへの複数の通貨の入力はサポートされていません。混在する通貨タイプを含むワークシートの場合、ユーザーが間違っただ通貨に値を入れてしまうこともあり得ます。

「通貨の計算」 ビジネス・ルールについて

「通貨の計算」 ビジネス・ルールは、フォームのディメンションとメンバーに基づいています。これにより、為替レート換算を適用して、データを現地通貨からフォーム上で指定されたレポートの通貨に換算されます。これは:

- 小計を計算しません。値の小計を出すには、通貨を換算した後に「フォームの計算」 ビジネス・ルール(または、集約を含むカスタマイズされたビジネス・ルール)を実行します。
- #MISSING 値を無視します。

- フォーム設計中に、フォームに関連付ける、または関連付けを解除することでオンまたはオフにできます。
- デフォルトで、データの保存中には実行しないように設定されています。

為替レート・タイプ

為替レートは、履歴、平均、最終の通貨に関連付けられます。各勘定科目の為替レート・タイプは、「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスで指定します。平均および最終のレート・タイプには、すべての期間の値を入力します。履歴のレート・タイプには、期首残高期間を含む、すべての期間に使用されるレート値を1つ入力します。期首残高期間には、平均および最終のレート・タイプの期間に使用されるレート値を1つ入力します。

Oracle Hyperion Planning は、トライアングレーション通貨での三角換算法による通貨換算に対応しています。

スケーリング

特定の通貨で表示するときの単位データ値を指定できます。たとえば、円を千に単位設定し、通貨ディメンションに選択されている現地メンバーで、フォーム上に日本のエンティティの値として10,000を入力できます。フォームの通貨メンバーとして円を指定すると、単位が適用され、日本の値として10が表示されます。

数値のフォーマット

次のように、フォームに通貨以外および通貨のデータ型数値の初期表示を決定できます:

- 3桁ごとの区切り文字:
 - なし: 1000
 - カンマ: 1,000
 - ドット: 1.000
 - スペース: 1 000
- 小数点:
 - ドット: 1000.00
 - カンマ: 1000,00
- 負数の符号:
 - 先頭のマイナス: -1000
 - 末尾のマイナス: 1000-
 - 括弧: (1000)
- 負数の色:
 - 黒
 - 赤

レポートの通貨

レポートの通貨は会社が準備する財務諸表の通貨です。Oracle Hyperion Planning は、現地通貨から1つ以上のレポートの通貨への通貨換算に対応しています。換算されたレポートの通貨の値は、すべてのユーザーに読取り専用で保管されます。アプリケーションのデフォルトの通貨はデフォルトのレポート通貨です。通貨をレポートの通貨として無効にすることもできます。

通貨の使用方法の確認

アプリケーションによる通貨の使用方法を表示できます: 通貨が、デフォルトであるか、トライアンギュレーション通貨として使用されるのか、エンティティによって使用されるのか、あるいは他の通貨との換算や為替の関係があるのかなどが表示されます。

通貨の使用方法を表示するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「通貨」を選択します。
3. 情報を表示させる通貨を選択します。
4. 「用途の表示」をクリックします。

通貨の作成

事前定義済みリストを選択するか、独自で作成することができます。次の設定を指定できます。

- 3文字のコード
- 記号
- 256文字までの説明文
- 値が表示されるときに使用するスケーリング係数
- 通貨換算に使用するトライアンギュレーション通貨
- 別名を表示させる別名表
- 3桁ごとの区切り文字、小数点、負数の符号、負数の色など、数値のフォーマット
- レポートの通貨かどうか

通貨を作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「通貨」を選択します。
3. 「追加」をクリックします。
4. 「通貨の作成」から:
 - 事前定義された通貨を追加するには、「標準通貨の選択」を選択します。
 - 通貨を作成するには、「新規通貨の作成」を選択し、プロパティを指定します:

- 「コード」で、3文字までの略語または識別子を入力します。
 - オプション: 「説明」で、日本円など、名前を入力します。
 - 「記号」で、記号を入力するか、リストから記号を選択します。
 - オプション: 「スケール」で、通貨の入力方法と表示方法を選択します。たとえば、スケールが千に設定された場合、3円は3000円を意味します。
 - オプション: 「トライアングュレーション通貨」で、換算される3番目の共通通貨として使用する通貨を選択します。
 - オプション: 「別名表」で、使用する別名表を選択します。
 - オプション: 「別名」で、通貨の別名の名前を入力します。
5. オプション: 「レポートの通貨」を選択します([複数通貨の操作](#)を参照)。
 6. オプション: 「3桁ごとの区切り文字」で、3桁ごとの区切り文字をどのように表示させるかを選択します(小数点と異なる必要があります)。
 7. オプション: 「小数点」で、表示する数字を小数点の値でどのように表示させるかを選択します(3桁ごとの区切り文字と異なる必要があります)。
 8. オプション: 「負数の符号」で、負数を表示する方法を選択します:
 - 先頭のマイナス: -1000。
 - 末尾のマイナス: 1000-
 - 括弧: (1000)
 9. オプション: 「負数の色」で、表示する色を選択します。
 10. オプション: 「データ・ストレージ」のタイプを選択します。
 11. オプション: 「2パス計算」を選択します。
 12. オプション: 「データ型」を選択します。
 13. オプション: 「スマート・リスト」を選択します。
 14. 「保存」をクリックします。

通貨の編集

通貨を編集するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「通貨」を選択します。
3. 編集する通貨を選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. プロパティを変更します。

- 事前定義された記号から選択するには、「事前定義の記号から選択」ドロップダウン・リストから1つを選択します。
- 通貨記号を変更するには、「記号」で、入力するか、記号を選択します。
- 「スケール」で、通貨の入力および表示方法を設定します。
- 通貨精度を設定するために、「精度」ドロップダウン・リストから1から10までの数字を1つを選択します。
「なし」がデフォルトです。

ノート:

管理者はフォームのこの設定を上書きできます。[フォームの精度およびその他オプションの設定](#)を参照してください。

- 通貨をレポートの通貨として指定するには、「レポートの通貨」を選択します。
[複数通貨の操作](#)を参照してください。
- 「3桁ごとの区切り文字」で、3桁ごとの区切り文字をどのように表示させるかを選択します(小数点と異なる必要があります)。
- 「小数点」で、表示する数字を小数点の値でどのように表示させるかを選択します(3桁ごとの区切り文字と異なる必要があります)。
- 「負数の符号」で、負の数字をどのように表示させるかを選択します:
 - 先頭のマイナス: -1000。
 - 末尾のマイナス: 1000-
 - 括弧: (1000)
 - デフォルト設定を使用: 通貨の表示設定を適用します([通貨の作成](#)を参照)。
- 「負数の色」で表示色を選択します。

6. 「保存」をクリックします。

通貨の削除

デフォルトの通貨は削除できません。

通貨を削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、「通貨」を選択します。
3. 「通貨」で、削除する通貨を選択します。
4. 「用途の表示」をクリックして、通貨がデフォルト通貨であるか、トライアングュレーション通貨であるか、エンティティに関連付けられているかを判別します。この条件に合った通貨は削除できません。

為替レート表で定義した通貨を削除する場合は、通貨はその表からも削除されません。

5. 「閉じる」、「OK」、「削除」、「OK」の順にクリックします。
6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

為替レートの指定

為替レートを使って、ある通貨から別の通貨に換算します。次を行えます:

- 様々な国で予算管理して他の通貨でプランを作成できるようにします。
- 通貨でサマリー・レポート・データを表示します。
- 複数の通貨から1つの通貨に値を集計します。

たとえば、基本通貨を日本のエンティティには円を指定し、アメリカ合衆国のエンティティには米国ドルを指定するとします。日本のエンティティの値を持つフォームを表示する際、フォームの表示通貨が米国ドルに設定されている場合、円の為替レートにより日本の値が米国ドルに換算されます。表示通貨が円に設定されると、米国ドルの為替レートは米国エンティティの値が円に換算されます。

為替レートを指定するには、アプリケーションの作成時に複数通貨を設定する必要があります。

為替レート表について

各アプリケーションには、アプリケーションが作成されるときに指定されたデフォルトの通貨があります。為替レート表を指定すると、デフォルト通貨ならびにトライアンギュレーション通貨のみが、対象となる通貨として使用可能になります。ソース通貨から為替レートをデフォルト通貨またはトライアンギュレーション通貨に入力できます。

複数の為替レート表を作成できます。各表は通常、複数のシナリオに関連付けられていますが、各シナリオは1つの為替レート表にしか関連付けられません。シナリオを作成する際、換算する通貨の為替レート表を選択します。

デフォルト通貨と「為替レート」ページで定義された通貨との間の換算値を入力します。為替レート表は、すべてのアプリケーション期間に渡るため、すべてのシナリオに為替レートを適用可能です。為替レート表を作成または変更する際、アプリケーションをリフレッシュしてプラン・タイプに保管する必要があります。[アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ](#)を参照してください。

Hsp_Rates ディメンション

複数通貨アプリケーションには、為替レートを保管するための **Hsp_Rates** ディメンションが含まれます。このアプリケーションには、通貨レートを保管するメンバーと次のものが含まれます。

- **Hsp_InputValue**: データ値を格納
- **Hsp_InputCurrency**: データ値の通貨タイプを格納

レポートを生成したりデータをロードする際、**Hsp_InputValue** メンバーを参照してください。データのロード時は、現地通貨に対してデータをロードします。

Hsp_InputCurrency メンバーを参照する必要はありません。

デフォルトでは、**Hsp_Rates** ディメンションは「疎」に設定されます。これは変更できます([ディメンションの密度と順序の設定](#)を参照)。

トライアンギュレーション

Oracle Hyperion Planning は、トライアンギュレーション通貨と呼ばれる中間通貨を紹介する三角換算法による通貨換算に対応しています。通貨のトライアンギュレーション通貨を変更する場合、トライアンギュレーション通貨プロパティの為替レートを再

入力し、為替レートを転送および保管するためにアプリケーションをリフレッシュしなければなりません。アプリケーションのデフォルト通貨にトライアングレーション通貨を選択することはできません。

計算方法

通貨間で換算するときの為替レートを入力する場合、「乗算」または「除算」の計算方法を選択することができます。たとえば、英国ポンドを米国ドルに換算するレートとして1.5を選択すると、1 英国ポンドが 1.5 米国ドルに換算されます。

シナリオの設定

各シナリオとバージョンの組合せには、勘定科目のデータと各エンティティの他のディメンションが含まれます。ユーザーはシナリオとバージョンのエンティティにデータを入力した後、他のユーザーがレビューおよび承認を行えるようにエンティティのデータを送信したり上位に移動したりできます。

タスク	トピック
シナリオを作成します。	シナリオの作成 を参照してください。
シナリオを編集します。	シナリオの編集 を参照してください。
シナリオを削除します。	シナリオの削除 を参照してください。
シナリオをコピーします。	シナリオのコピー を参照してください。
シナリオに関するサポート詳細を削除します。	シナリオに関するサポート詳細を削除 を参照してください。

シナリオについて

シナリオを次のように使用できます。

- 別のプランニング方法を適用します。
- 予測を作成します。
- シナリオにデータを入力します。
- シナリオを異なる期間や為替レートに関連付けます。
- シナリオによってユーザーにアクセス権を割り当てます。
- シナリオでレポートします。
- シナリオを比較および分析します。

それぞれのレビュー・サイクルでアプリケーションを複数のプランにグループ化できます。異なる期間にシナリオの範囲を広げられます。

期間

各シナリオを年範囲および期間に割り当て、期首残高期間を指定します。ユーザーがフォームへアクセスすると、範囲内で年と期間のみをシナリオに入れることができます。範囲外の年と期間は読取り専用として表示されます。時間範囲は変更可能です。

為替レート表

アプリケーションが通貨換算をする場合、為替レート表をシナリオへ割り当てます。シナリオへ別の為替レート表を割り当てることにより、通貨レート仮定の適用のひな型を作ることができます。

アクセス権限

グループまたはユーザーのシナリオ・ディメンション・メンバーにアクセス権限を指定して、どのグループまたはユーザーがデータを表示または変更できるかを判別します。ユーザーまたはグループにつき、読取り、書込み、なしのいずれか1つのアクセス権限を持つことができます。ユーザーのアクセス権限はユーザーが属するグループに基づいて組み合わせられます。

シナリオの作成

シナリオを作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「シナリオ」を選択します。
3. 「子の追加」をクリックします。
4. 「シナリオ」で、名前を入力します。
5. オプション: 「説明」で、説明を入力します。
6. 「開始年度」、「開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
7. オプション: 「為替レート表」で、シナリオに関連付ける為替レート表を選択します。

アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート表に関連付けて通貨換算を可能にします。

8. オプション: 「別名」で、シナリオに関連付ける別名表を選択し、説明を入力します。
9. オプション: 「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
10. オプション: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのシナリオを含めます。
11. 「保存」をクリックします。

シナリオの編集

シナリオを変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「ディメンション」で、「シナリオ」を選択します。
3. 編集するシナリオを選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. オプション: 「シナリオ」で、名前を入力します。
6. オプション: 「説明」で、説明を入力します。

7. 「開始年度」、「開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
8. オプション: 「為替レート表」で、シナリオに関連付ける為替レート表を選択します。
アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート表に関連付けて通貨換算を可能にします。
9. オプション: 「別名」で、シナリオに関連付ける別名表を選択し、説明を入力します。
10. オプション: 「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
11. オプション: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認でこのシナリオを使用します。
12. 「保存」をクリックします。

シナリオの削除

シナリオを削除すると、シナリオ(データを含む)を使用するすべてのプランニング・ユニットが削除されます。フォームで起動済または軸へ割当て済のプランニング・ユニットに使用されたシナリオは削除できません。フォームからシナリオへの参照をまず除去してから別のシナリオを割り当ててください。

シナリオを削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「シナリオ」を選択します。
3. 削除するシナリオを選択します。少なくとも1つのシナリオをアプリケーションに残す必要があります。
4. 「削除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。
6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

シナリオのコピー

シナリオ・プロパティのみがコピーされます。シナリオに関連付けられたデータ値とアクセス権は、新しいシナリオにコピーされません。

シナリオをコピーするには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「シナリオ」を選択します。
3. コピーするシナリオを選択します。
4. 「シナリオのコピー」をクリックします。
5. 「シナリオにコピー」で、名前を入力します。
6. オプション: 「説明」で、説明を入力します。

7. 「開始年度」、「開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
8. オプション: 「為替レート表」で、シナリオに関連付ける為替レート表を選択します。
アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート表に関連付けて通貨換算を可能にします。
9. オプション: 「別名表」で、シナリオに関連付ける別名表を選択し、説明を入力します。
10. オプション: 「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
11. オプション: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのシナリオを含めます。
12. 「保存」をクリックします。

バージョンの指定

バージョンを使用して、アプリケーションで使用されるデータをグループ化します。

タスク	トピック
バージョンを作成します。	バージョンの作成 を参照してください。
バージョンを編集します。	バージョンの編集 を参照してください。
バージョンを削除します。	バージョンの削除 を参照してください。

バージョンについて

シナリオとバージョンのディメンションを使用して、レビューおよび承認の対象となるプランを作成します。各シナリオとバージョンの組合せには、勘定科目のデータと各エンティティの他のディメンションが含まれます。ユーザーはシナリオとバージョンのエンティティにデータを入力した後、他のユーザーがレビューおよび承認を行えるようにエンティティのデータを送信したり上位に移動したりできます。バージョンを使用する目的は次のとおりです。

- プランの複数反復を許可
- 異なる仮定に基づいた起こりうる結果のモデル化
- プラン・データの普及管理
- 目標設定の簡素化

ターゲットおよびボトムアップ・バージョン

ターゲットおよびボトムアップ・バージョンを作成できます。ボトムアップ・バージョンで、データを最下位レベルのメンバーに入力すると、親レベルのメンバーは表示専用となりデータ入力に許可されなくなります。親メンバーの値は最下位レベルのメンバーから集約されます。

ターゲット・バージョンでは、階層内のどのレベルのメンバーにもデータを入力できます。ビジネス・ルールを使用して親メンバーからその祖先まで値を均等配分することができます。ターゲット・バージョンを使って、プランの高レベルのターゲットに設定できます。ボトムアップ・バージョンで操作するプランナは、プラン・データを入力する際、このターゲットを参照できます。

ターゲット・バージョンでは、トップダウンの予算編成を使用します。「承認の管理」タスクは許可されません。ターゲット・メンバーの子を空白(例: #MISSING)にして、最上位レベルにデータを入力できるようにしてください。ターゲット・メンバーは「保管」に設定してください(動的計算により、子の合計でデータ入力が入力されます)。

バージョンの作成

バージョンを作成するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「バージョン」を選択します。
3. 「子の追加」をクリックします。
4. 「バージョン」で、アプリケーションに追加するバージョンの名前を入力します。
5. 「タイプ」で、アプリケーションに表示するバージョンのタイプを選択します。
 - 標準ターゲット - 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 標準ボトムアップ - 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。
6. オプション: 「説明」で、説明を入力します。
7. オプション: 「別名表」で、シナリオに関連付ける別名表を選択し、説明を入力します。
8. オプション: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのバージョンを含めます。

このオプションは、ターゲット・バージョンには使用できません。
9. オプション: このメンバーをサンドボックスに使用できるように、「サンドボックスに対して使用可能」を選択します。
10. 「保存」をクリックします。

バージョンの編集

バージョン名とアクセス権を変更できます。

バージョンを変更するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「バージョン」を選択します。
3. 編集するバージョンを選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. オプション: 「バージョン」で、バージョンの名前を変更します。
6. オプション: 「タイプリスト」で、アプリケーションに表示するバージョンのタイプを変更します。
 - 標準ターゲット - 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 標準ボトムアップ - 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。

7. オプション: 「説明」で、説明を入力します。
8. オプション: 「別名表」で、シナリオに関連付ける別名表を選択し、説明を入力します。
9. オプション: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのバージョンを含めます。

このオプションは、ターゲット・バージョンには使用できません。

10. オプション: このメンバーをサンドボックスに使用できるように、「サンドボックスに対して使用可能」を選択します。
11. 「保存」をクリックします。
12. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

バージョンの削除

フォームで起動済または軸へ割当て済のプランニング・ユニットに使用されたバージョンは削除できません。フォームからバージョンへの参照をまず除去してから別のバージョンを軸に割り当ててください。少なくとも1つのバージョンがアプリケーションに残っている必要があります。

バージョンを削除するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「バージョン」を選択します。
3. 削除するバージョンを選択します。
4. 「削除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

プランニング・ユニットが起動されると、それに関連付けられたバージョンを削除できません。

6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

バージョンの表示

バージョンを表示するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「バージョン」を選択します。
3. 「表示」で、表示するバージョン・タイプを選択します。
 - 標準ターゲット: 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 標準ボトムアップ: 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。

バージョンとシナリオ・メンバーのソート

バージョンとシナリオ・メンバーを昇順や降順にソートできます。メンバーのソートはアウトライン自体に影響を及ぼします。

バージョンとシナリオ・メンバーをソートするには:

1. 「**ディメンション**」タブで、シナリオかバージョンを選択します。
2. 「**ソート**」で、次のように行います。
 - 昇順にソートするには、をクリックします。
 - 降順にソートするには、をクリックします。
3. 「**OK**」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、「ディメンション」タブと同じ順序で表示されるメンバーでアウトラインが生成されます。

ディメンション階層内でシナリオとバージョン・メンバーを移動

ディメンション階層内のシナリオとバージョン・メンバーの順序を変更できます。

ディメンション階層内のメンバーの位置を移動するには:

1. 「**ディメンション**」タブで、シナリオかバージョンを選択します。
2. 次のいずれかの操作を実行します:
 - メンバーを上へ移動するには、をクリックします。
 - メンバーを下へ移動するには、をクリックします。
3. 「**OK**」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、「ディメンション」タブで表示されるのと同じ順序で表示されるメンバーでアウトラインが生成されます。

Planning アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加

Oracle Hyperion Planning の管理者は、Planning アプリケーション管理を使用して集約ストレージ・アウトラインを追加できます。

集約ストレージについて

集約ストレージとは、多数の潜在的に大きなディメンションに分類されている大規模な疎に分散したデータをサポートする、データベース・ストレージ・モデルです。選択されたデータ値は集約および保管され、一般的に集約時間が改善されます。ストレージのタイプには、この集約ストレージの他にブロック・ストレージ(密/疎構成)があります。

集約ストレージとブロック・ストレージの大きな違いは、Oracle Hyperion Planning が集約ストレージ・データベースごとに別々のアプリケーションを必要とすることです。これに対し、ブロック・ストレージ・アウトライン・アプリケーションはアプリケーションごとに複数のデータベースを持つことができます。

集約ストレージの詳細は、*Oracle Essbase Administration Services* オンライン・ヘルプの集約ストレージの管理を参照してください。

集約ストレージ・アウトラインのプラン・タイプの特徴

- Oracle Hyperion Planning で集約ストレージ・データベース上に XREF は生成されません。XREF は、ブロック・ストレージ・データベースでのみ生成できます。
- Planning では、集約ストレージ・データベースですべての基本ディメンションを必要としないため、承認ディメンションが欠落している場合、承認は集約ストレージ・データベースに適用されません。この場合は、通常のセキュリティが適用されます。
- 動的時系列のメンバーは、集約ストレージ・アプリケーションの期間ディメンションには適用できません。
- セキュリティ・フィルタの作成およびリフレッシュは、集約ストレージ・データベースに適用できません。
- 集約ストレージ機能を Planning で使用するには、適切な使用ライセンスが必要です。

Planning アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するプロセス

Oracle Hyperion Planning アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するには:

1. 集約ストレージ・プラン・タイプを作成します。次のいずれかのタスクを実行します。
 - アプリケーションの作成時に、集約ストレージ・プラン・タイプを作成します。
[アプリケーションの作成](#)を参照してください。
 - プラン・タイプ・エディタを使用して新規プラン・タイプを追加します。
2. 集約ストレージ・プラン・タイプにディメンションを追加します。[ディメンションの操作](#)を参照してください。

ノート:

通貨、年、シナリオまたはバージョンのディメンションが集約ストレージ・プラン・タイプに対して有効な場合、ディメンション・メンバーも集約ストレージ・プラン・タイプに対して有効です。

3. ディメンション・メンバーを追加します。[メンバーの操作](#)を参照してください。
4. Planning アプリケーションのアウトラインをリフレッシュします。[アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ](#)を参照してください。
5. 集約ストレージ・データベースに関連付けられたディメンションを使用してフォームを作成します。[フォームの管理](#)を参照してください。

プラン・タイプの追加

プラン・タイプを追加するには、「管理」、「管理」、「プラン・タイプ」の順に選択します。

表 12-13 許可されるプラン・タイプの数

アプリケーション	汎用ブロック・ストレージ・プラン・タイプ	モジュール・ブロック・ストレージ・プラン・タイプ	集約ストレージ・プラン・タイプ ¹	合計プラン・タイプ
コア Oracle Hyperion Planning	3	NA	4	7
Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting	3	1	5	9

¹ 各ブロック・ストレージ・プラン・タイプに1つの集約ストレージ・プラン・タイプおよび1つの連結集約ストレージ・プラン・タイプ

プラン・タイプは追加された後に、他の Planning プラン・タイプと同様に動作します。プラン・タイプが集約ストレージ・データベースにマップする場合、集約ストレージの制限が適用されます。

プラン・タイプ・エディタを使用してプラン・タイプを追加するには:

1. Planning から、「管理」、「管理」、「プラン・タイプ」の順に選択します。
2. 「プラン・タイプの追加」をクリックして、プラン・タイプの詳細をすべて指定します。

ノート:

集約ストレージ・プラン・タイプの場合、集約ストレージ・データベースは独自のアプリケーションに存在する必要があるため、データベースを含めるアプリケーション名を指定する必要があります。集約ストレージ・プラン・タイプを作成する管理者は、すべての集約ストレージ・アプリケーションが企業内で一意であることを確認する必要があります。

3. 「保存」をクリックします。

動的時系列メンバーの設定

動的時系列(DTS)メンバーを使用して四半期累計費用などの期間累計データを表示するレポートが作成できます。DTS メンバーは、アプリケーション作成時に自動的に作成され、期間ディメンションのメンバーと一緒に使用できます。DTS を設定するには、事前定義済みの DTS メンバーを使用可能にし、世代番号(そして、オプションとして別名表および別名)に割り当てます。たとえば、四半期累計値を算出する場合、Q-T-D メンバーを使用可能にし、世代番号 2 へ割り当てます。その後、Q-T-D DTS メンバーを使用して、その四半期における本月までの月次値を算出できます。

ノート:

集約ストレージ・アプリケーションでは、期間ディメンションとして DTS はサポートされていません。

Oracle Hyperion Planning では 8 つの事前定義済 DTS メンバーを提供します。

- H-T-D: 累計

- Y-T-D: 年次累計
- S-T-D: 季節累計
- P-T-D: 期間累計
- Q-T-D: 四半期累計
- M-T-D: 月次累計
- W-T-D: 週次累計
- D-T-D: 日次累計

注意:

Oracle では、DTS 機能を使用する前にバックアップを実施することをお勧めします。アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップを参照してください。Y-T-D メンバーまたは P-T-D メンバーを使用している場合、年ディメンションまたは期間ディメンションの名前を変更して、予約済の動的時系列で生成された名前の年および期間と競合しないようにする必要があります。Y-T-D を使用する前に年ディメンションの名前を変更し、P-T-D を使用する前に期間の名前を変更します。名前変更後、メンバー式やビジネス・ルール、名前によるディメンションを参照するあらゆるレポートなど、変更によって影響を受けるすべてのアプリケーションのアーティファクトを更新する必要があります。

DTS メンバーは期間累計レポートの 8 レベルまでを提供します。データおよびデータベースのアウトラインでどのメンバーが使用できるかを判別できます。たとえば、データベースに 1 時間、1 週間、1 ヶ月、四半期および 1 年ごとのデータが含まれる場合、日次累計(D-T-D)、週次累計(W-T-D)、月次累計(M-T-D)、四半期累計(Q-T-D)および年次累計(Y-T-D)の情報をレポートできます。データベースに過去 5 年間の月次データが含まれる場合、特定年までの年次累計(Y-T-D)および累計(H-T-D)の情報をレポートできます。データベースが季節ごとのデータを記録する場合は、期間累計(P-T-D)または季節累計(S-T-D)の情報をレポートできます。

動的時系列の計算でメンバーを使用する予定がある場合、タイム・バランス・プロパティ(「最初」、「平均」など)を動的計算に予定されているメンバーに割り当てないことをお勧めします。割り当ててしまうと、勘定科目ディメンションの親メンバーの値に誤りが生じる場合があります。

詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

動的時系列メンバーを設定するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. 「期間ディメンション」を選択し、「DTS」をクリックします。
3. 「H-T-D」、「Y-T-D」、「S-T-D」、「P-T-D」、「Q-T-D」、「M-T-D」、「W-T-D」または「D-T-D」を使用するには、DTS 系列の「使用可能」を選択します。
4. 「世代」を選択します。

表示される世代数は、時間ディメンションの世代数によって異なります。DTS メンバーは一番高い世代(ディメンション・ルート)と関連付けることはできません。

ノート:

Oracle Essbase では Planning の期間ディメンションは世代 1 とみなされるため、動的時系列メンバーを設定するときこのことを考慮します。

5. **オプション:** 別名表を選択して別名を入力します(必要に応じてウィンドウのサイズを変更してフィールドを表示させます)。

[別名表の操作](#)を参照してください。

6. 「保存」をクリックします。

サポートされる追加の Planning アプリケーションの機能

Oracle Hyperion Planning アプリケーションの追加の機能が Planning ディメンションをサポートできるようになりました。シナリオ、バージョンおよび期間ディメンションに子および兄弟を追加できるとともに、切り取り、貼付け、展開および縮小機能を使用してディメンション階層を操作できます([ディメンション階層の操作](#)を参照)。このディメンションには共有メンバーを使用することもでき、すべてのディメンションにおいてルート・レベルで 2 パス計算を設定できます。たとえば、次のようなことができます。

機能	詳細情報
シナリオおよびバージョンのディメンションで、階層を作成し、共有メンバーを使用します。子をボトムアップ・バージョンへ割り当てる場合、このバージョンはフォーム上では読取り専用の親として表示されます。	シナリオの設定 および バージョンの指定 を参照してください。
期間ディメンションで、代替階層を作成し、共有子孫を使用します。すべての期間のデータ・ストレージは、有効なデータ・ストレージ値に設定できます。BegBalance を含むすべての期間の集計演算子は、有効な集計演算子に設定できます。たとえば、~(無視)のかわりに+に設定できます。	年ディメンションの操作 、 BegBalance メンバーの編集 および 為替レート表の編集 を参照してください。
たとえば、勘定科目のルート・レベルの 2 パス計算をオンにします。	メンバーの追加または編集 を参照してください。
<p>注意: 2 パス計算は、動的計算に設定されていない非勘定科目メンバーでは無視されます。この設定を使用する場合は、通貨換算スクリプトへの影響を考慮してください。</p>	
属性には階層を作成し、別名を割り当てます。	属性の操作 を参照してください。

ノート:

複数通貨アプリケーションの場合、組み込み済の通貨換算計算スクリプトは、任意のシナリオ、バージョン、期間または年メンバー、または特定のディメンション・ルート(エンティティ、バージョン、通貨、カスタム・ディメンションなど)でデータ・ストレージを動的に変更した場合、適切に機能しません。データ・ストレージを変更する場合は、通貨換算スクリプトに対する影響を考慮してください。

期間ディメンションの代替階層の考慮事項

「期間」ディメンションで代替階層を作成する場合、代替階層はアウトラインの年合計メンバーに従う必要があります。

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作

Oracle Hyperion Shared Services ディメンション・エディタおよび Planning アプリケーション作成者の役割が割り当てられている場合は、Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションを作成および更新できます。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System ユーザー・セキュリティ管理ガイドを参照してください。

ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュする

CubeRefresh ユーティリティはデータベースを作成またはリフレッシュします。**CubeRefresh** ユーティリティを実行する前に、アプリケーションがロックされていないことを確認します。実行中は、データベースでメタデータが更新される際にアプリケーションはロックされます。たとえば、ユーザーがアクセス権を割り当てる場合、「アプリケーションがリフレッシュ中です。要求を処理することができません。」というメッセージが表示されます。このユーティリティは、リモート・サーバーではなく、Oracle Hyperion Planning サーバーと同じコンピュータ上で実行される必要があります。

注意:

Oracle では、作成またはリフレッシュの前に、アプリケーションをバックアップすることをお勧めします。[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)を参照してください。これらのステップに従うと、データベースのデータに影響を与えます。「作成」または「リフレッシュ」オプションを使用する場合、データは置き換えられるか、消去され、Planning プラン・タイプが再構築される可能性があります。重要な情報は、[Essbase の操作の考慮事項](#)を参照してください。

ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュするには:

1. アプリケーションをバックアップします。[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)を参照してください。
2. CubeRefresh ユーティリティを見つけます。

このユーティリティは `planning1` ディレクトリにあります。`planning1` の完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

3. コマンドラインに次のコマンドとパラメータを入力し、`planning1` ディレクトリから `CubeRefresh` を起動します:

```
Windows: CubeRefresh.cmd [-f:passwordFile] /
A:application_name /U:user_name [/C|/R] /D [/F[S|V]][/
RMIPORT:rmi_port] [/L] [/DEBUG]
```

```
UNIX: CubeRefresh.sh [-f:passwordFile] /A:application_name /
U:user_name [/C|/R] /D [/F[S|V]][/RMIPORT:rmi_port] [/L] [/
DEBUG]
```

- **オプション:** 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されており、`passwordFile` が完全なファイル・パスで、パスワード・ファイルの名前である場合、コマンド・ラインに最初のパラメータとして `[-f:passwordFile]` を指定できます。[Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制](#)を参照してください。
 - `application_name`: 作成またはリフレッシュを実行する Planning アプリケーションの名前です。
 - `user_name`: アプリケーションを作成またはリフレッシュする権利を持ったユーザーです。
 - `/C` または `/R`: アプリケーションで実行する関数です。
 - `/C`: データベース・アウトラインを作成します。
 - `/R`: データベース・アウトラインをリフレッシュします。
 - `/D`: 作成またはリフレッシュ時にデータベースを指定します。
 - `/F`: アプリケーションのすべてのユーザーに対してセキュリティ・フィルタを使用します。オプションで `S`、`V` または `SV` と使用します。
 - `/FS`: 共有メンバーのセキュリティ・フィルタを生成します。
 - `/FV`: セキュリティ・フィルタを検証しますが、フィルタは保存しません。
 - `/FSV`: 共有メンバーのセキュリティ・フィルタを検証します。
 - `/RMIPORT`: 現在の値 11333 とは別の RMI ポート番号を指定します。
 - `/-L`: デフォルトのオプションで、ローカルもしくはリモート・コンピュータ上のアプリケーション・サーバーへ接続することで作成またはリフレッシュします(アプリケーションが実行中でない場合などには、`/L` を使用してアプリケーション・サーバーへ接続しないで作成またはリフレッシュできます)。
 - `/DEBUG`: 詳細のエラー・メッセージを指定します。
4. プロンプト表示があればパスワードを入力します。
5. エラーを含むアプリケーションのリフレッシュ結果を表示します。完了ステータスがコンソール上に表示されます。

この例では、指定したアプリケーションへログオンしたすべてのユーザーに対するデータベースをリフレッシュするのに使用したコマンド・ラインを表示します。デフォルトの RMI ポートが使用され、共有メンバーのセキュリティ・フィルタが含まれます。

```
Windows: CubeRefresh.cmd /A:appl /U:admin /R /D /FS
```

```
UNIX: CubeRefresh.sh /A:appl /U:admin /R /D /FS
```

レベル 0 メンバーが動的計算に設定されたデータベースのリフレッシュ

データベース・アウトラインのレベル 0 メンバーが「動的計算」または「動的計算および保管」に設定されている場合、メンバーがメンバー式に関連付けられていなくても、Oracle Hyperion Planning は作成またはリフレッシュを成功させます。Planning は、現在メンバー式のないメンバーに対し、プレースホルダ式を追加します。

Essbase パーティションの操作

Oracle Essbase パーティションを使用する場合、パーティションは、別のアプリケーションまたはサーバーのデータベース間で共有されたデータへアクセスできます。パーティションの詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

Oracle Hyperion Planning でアプリケーション・データベースをリフレッシュする前に、Essbase パーティション定義を除去してください。これは Essbase パーティションの上書きや、Essbase データベースの破損を防止します。Essbase パーティションは、リフレッシュ後に定義できます。

複製パーティションを使用している場合、複製時にパーティション定義を作成し、パーティションを実行して、パーティション定義を削除できます。パーティション定義は、パーティション実行時に作成されるので、リフレッシュ時に除去する必要はありません。

ユーティリティを使用してメンバーをソート

Oracle Hyperion Planning の SortMember ユーティリティを使用してディメンション・メンバーをソートできます。SortMember.cmd は、Planning の「ディメンション」タブでのソートと類似します。エンティティ、勘定科目、シナリオ、バージョン、ユーザー定義のカスタム・ディメンションをソートできます。期間、年または通貨のディメンション・メンバーはソートできません。このユーティリティは、メンバーを Planning ヘロードした後にディメンション・メンバーをソートするのに便利です。SortMember.cmd ユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用します。管理者のみが実行できます。

SortMember.cmd ユーティリティを起動するには:

1. Planning がインストールされたサーバー上の planning1 ディレクトリから、次の構文を入力します:

```
SortMember [-f:passwordFile] servername username application member
children|descendants ascend|descend
```

planning1 ディレクトリの完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

表 12-14 SortMember ユーティリティのパラメータ

パラメータ	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。

表 12-14 (続き) SortMember ユーティリティのパラメータ

パラメータ	説明
<i>servername</i>	Planning アプリケーションがあるサーバー名
<i>username</i>	Planning 管理者の名前
<i>application</i>	ソートするディメンション・メンバーを含む Planning アプリケーションの名前
<i>member</i>	ソートする子または子孫がある親メンバー
<i>children descendants</i>	子または子孫でソートします。子でソートする場合は指定したメンバーのすぐ下のレベルのメンバーのみに影響し、子孫でソートする場合は、指定したメンバーの子孫すべてに影響します。
<i>ascend descend</i>	昇順または降順でソートします。

例:

```
SortMember localhost admin BUDGET account200 descendants
ascend
```

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。

SortMember ユーティリティの起動時にアプリケーション・サーバーまたは RMI サービスが実行している場合、`java.rmi` または"ポートの使用"エラーが発生する可能性があります。ユーティリティの機能に影響することはありません。

ユーティリティを使用して共有子孫を削除

メンバーの子孫である共有ディメンション・メンバーを削除するには `DeleteSharedDescendant` ユーティリティを使用します。共有エンティティ、勘定科目、ユーザー定義のディメンション・メンバーを削除できます。指定メンバーの直属の子のみではなく、すべての共有子孫メンバーが削除されます。

管理者がコマンド・ライン・インタフェースを使用してこのユーティリティを実行します。ユーティリティの起動時にアプリケーション・サーバーまたは Oracle RMI サービスが実行している場合、`java.rmi` または"ポートの使用"エラーが発生する可能性があります。ユーティリティの機能に影響することはありません。

`DeleteSharedDescendants` ユーティリティを使用するには:

1. 次の構文を使用して、Oracle Hyperion Planning がインストールされたサーバーの `planning1` ディレクトリから `DeleteSharedDescendants.cmd` ファイルを起動します:

```
DeleteSharedDescendants [-f:passwordFile] servername username
application member
```

`planning1` ディレクトリの完全パスは、[EPM Oracle インスタンスについて](#)を参照してください。

表 12-15 DeleteSharedDescendants ユーティリティのパラメータ

変数	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 を参照してください。
<code>servername</code>	Planning アプリケーションがあるサーバー名
<code>username</code>	Planning 管理者の名前
<code>application</code>	削除する共有ディメンションを含む Planning アプリケーションの名前
<code>member</code>	共有子孫を削除するメンバーです。メンバー名にスペースが含まれる場合、引用符で囲みます("Member One"など)。共有メンバーそのものがコマンド・ラインで指定されている場合、「 <code>member_name</code> の共有子孫が見つかりませんでした」というメッセージが表示されます。

例:

```
DeleteSharedDescendants localhost admin BUDGET account200
```

2. プロンプト表示があればパスワードを入力します。
3. ユーティリティ実行の結果を表示するには、`EPM_ORACLE_INSTANCE / diagnostics/logs/planning` ディレクトリで生成されたログ・ファイルを確認します:
 - `DeleteSharedDescendants.log`: ステータス・メッセージが含まれます。
 - `DeleteSharedDescendantsExceptions.log`: エラー・メッセージが含まれます。

「データベースの管理」タスクが開いている間にこのユーティリティを実行する場合、エラー・メッセージは表示されませんが、メンバーは削除されません。`EPM_ORACLE_INSTANCE /diagnostics/logs/planning` ディレクトリの LOG および CMD ファイルでは、見つかった共有メンバーは 1、削除された共有メンバーは 0 と表示されます。

スマート・リスト、UDA およびメンバー式の使用

Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの場合、スマート・リスト、UDA およびメンバー式を作成および更新できます。

スマート・リストの操作

管理者は、スマート・リストを使用して、フォーム・セルからユーザーがアクセスするカスタムのドロップダウン・リストを作成します。スマート・リスト(メンバー・プロパティとして)に関連するメンバーのセルをクリックする場合、ユーザーは、データ

を入力するかわりに、ドロップダウン・リストからアイテムを選択します。スマート・リストを含むセルには入力できません。スマート・リストは、セルには下矢印で表示され、ユーザーがセルをクリックすると展開されます。

次のタスクを実行してスマート・リストを作成し、管理します。

- スマート・リストを定義し、説明してください。
- メンバーにスマート・リストを関連付けます。
- スマート・リストを表示するディメンションを選択します。
- オプション:
 - メンバー式でスマート・リストの値を使用します。
 - スマート・リストに関連付けられた#MISSING セルのフォームでの表示方法を設定します。
 - レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期します

スマート・リストを作成または操作するには:

1. 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。

2. 次のいずれかの操作を実行します:

- スマート・リストを作成するには、「作成」をクリックして名前を入力し、「OK」をクリックします。
- スマート・リストを変更するには、そのスマート・リストを選択して「編集」をクリックします。
- スマート・リストを削除するには、「削除」、「OK」の順にクリックします。スマート・リストを削除すると、ディメンション・メンバーおよびレポート・アプリケーションと関連付けられたマッピングも削除されます。
データ・セルは1つのスマート・リストのみに表示できます。複数のスマート・リストがセルで交差する場合、どちらを優先させるかを設定します。
- オプション: 「同期」をクリックして、Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理とレポート・アプリケーションを使用するアプリケーションの間でスマート・リストを同期します。レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期を参照してください。

レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期

レポート・アプリケーションでスマート・リストをディメンションにマップする Oracle Hyperion Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションでは、Planning アプリケーションでスマート・リストを同期できます。それによって、スマート・リストをマップするレポート・アプリケーションでディメンションが識別され、選択したディメンションのレベル0のメンバーが選択したスマート・リストに新規スマート・リストとして追加されます。レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピングを参照してください。

レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期するには:

1. アプリケーション・データベースをリフレッシュします。アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュを参照してください。

2. レポート・アプリケーション・マッピングをリフレッシュします。 [レポート用のアプリケーションのマッピング](#)を参照してください。
3. 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。
4. 「同期」をクリックし、「OK」をクリックします。

同期の際には、適切なスマート・リスト内の最後のスマート・リスト・アイテムの後で既存のすべてのマッピングのレポート・アプリケーションの値が追加されます。スマート・リストが2つのディメンションにマップされている場合、最初のマッピングからのメンバーがすべて挿入されてから、2番目のマッピングからのメンバーが挿入されます。メンバーがスマート・リストにすでに存在する場合は、再追加されません。レポート・アプリケーション上の対応するディメンション・メンバーが削除された場合でも、Planning スマート・リスト内のスマート・リスト・メンバーは削除されません。

ノート:

勘定科目がスマート・リストとしてディメンションにマップされている場合、勘定科目ディメンションのすべてのレベル0メンバーはスマート・リストが同期される時にスマート・リスト・エン트리として入れられます。たとえば、スマート・リストはHSP_AverageやHSP_Endingのようなエントリを含みます。この場合、余分なエントリをスマート・リストから削除します。[スマート・リスト・エントリの追加と変更](#)を参照してください。

5. スマート・リストのアイテムが複数のディメンションにマップされている場合には、新しい名前で作成してから、関連データを手動で転送します。

ノート:

スマート・リスト名にスペースを含めることはできません。レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期する場合は、新しいメンバーの名前にスペースが含まれていないことを確認してください。

スマート・リスト・プロパティの追加と変更

「スマート・リスト・プロパティの編集」タブを使って、スマート・リストのプロパティを設定します。

スマート・リストのプロパティを設定するには:

1. 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。
2. スマート・リストを選択し、「編集」をクリックします。
3. 「プロパティ」でスマート・リストのプロパティを定義します。

表 12-16 スマート・リストのプロパティ

プロパティ	説明
スマート・リスト	英数字およびアンダースコア(Position など)、特殊文字またはスペースなしの文字のみを含む一意の名前を入力します。スマート・リスト名は数式で参照できます。

表 12-16 (続き) スマート・リストのプロパティ

プロパティ	説明
ラベル	<p>スマート・リストが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スペースおよび特殊文字を使用できます。</p> <p>スマート・リスト・ラベルは様々な言語に翻訳することができるリソースを参照させることができます。テキスト、色および画像のカスタマイズについてを参照してください。</p>
表示順	<p>スマート・リストのドロップダウン・リストを、ID 順、名前順、ラベル順のいずれでソートするのかを指定します。</p>
#Missing ドロップ・ダウン・ラベル	<p>値が#MISSING のスマート・リストのエントリに表示するラベル(No Justification など)を入力します。</p> <p>ノート:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スマート・リストのドロップダウンに最初の項目として表示されるので、フォームの中で#MISSING を値として選択できます。 ・ セルがフォーカスされていないときは、次のオプションで「ドロップ・ダウン設定」を選択した場合にのみ、このラベルが表示されます。それ以外の場合は、フォームについて選択した「欠落値を空白で表示」の設定に応じて、#MISSING または空白のセルが表示されます。 ・ #MISSING ラベルは、#MISSING データをセルに表示するかどうかを判別するのみです。格納された値は、#MISSING のままです。
#Missing フォーム・ラベル	<p>スマート・リストに関連付けられたセルにおける、#MISSING 値の表現形式を指定します。オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ドロップ・ダウン設定: 「#Missing ドロップ・ダウン・ラベル」で設定されたラベルを表示します。 ・ フォーム設定: フォームについて選択した「欠落値を空白で表示」の設定に応じて、#MISSING を表示するか、セルを空白のままにします。この選択は、フォーカスではない場合に何がセルに表示されるかを判別します。セルがフォーカスにある場合、ドロップダウンから選択されたスマート・リストのアイテムが表示されます。
自動的に ID を生成	<p>各スマート・リストのエントリに対して数字の ID を生成します。このオプションを選択しない場合は、スマート・リストの ID 値をカスタマイズできます。</p>

4. 「保存」をクリックします。

5. 「**エントリ**」を選択します。

「エントリ」タブを使用して、スマート・リストの選択肢を定義します。

スマート・リスト・エントリの追加と変更

スマート・リスト・エントリの編集/追加タブを使用して、スマート・リストの選択肢を定義します。

スマート・リストのエントリを定義するには:

1. 「**管理**」、「**管理**」、「**スマート・リスト**」の順に選択します。
2. スマート・リストを選択し、「**編集**」をクリックします。
3. 「**エントリ**」でドロップダウン・リストのアイテムを定義します。
 - **最初のアイテムのみ:** 最初の行に情報を入力します。
 - アイテムを追加するには、「**追加**」をクリックして、情報を入力します。
 - アイテムを削除するには、そのアイテムを選択して、「**削除**」をクリックします。
 - アイテムを編集するには、行の中の情報を変更します。

表 12-17 スマート・リストのエントリ

エントリ・プロパティ	説明
ID	エントリを表示する順番を決める一意の数です。「プロパティ」タブで「 自動的にIDを生成 」が選択されていない場合にのみ、カスタマイズ可能です。
名前	英数字およびアンダースコア (Customer_Feedback など)で、特殊文字やスペースのない一意の英数字名です。
ラベル	ドロップダウン・リストのスマート・リストのエントリに表示されるテキスト (Customer Feedback など)です。

赤で強調表示されるアイテムは、重複しています。

4. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 「**保存**」をクリックします。
 - 「**プレビュー**」を選択します。

スマート・リストのプレビュー

定義済のスマート・リストを「プレビュー」タブでプレビューします。タブは、スマート・リストをドロップダウン・リストまたは表で表示されるように表示します。

スマート・リストで#Missing を表示

管理者は、データがセルにない場合を含めて、スマート・リストおよびデータ・セルで表示される値を設定します。セルでは、値なし、#MISSING または(スマート・リストに関連するセルの)指定値を表示させることができます。

このオプションを使用して、セルがフォーカスにない場合の#MISSING の表示を制御します。

オプション	ガイドライン
空白	フォームを設計する場合、「 欠落値を空白で表示 」を選択します。 スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 フォーム設定 」を選択します。
#MISSING	フォームを設計する場合、「 欠落値を空白で表示 」を選択しないでください。 スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 フォーム設定 」を選択します。
「変更なし」などのカスタム・ラベル	スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 #MISSING ドロップダウン・ラベル 」フィールドにカスタム・ラベル(変更なしなど)を入力します。「 ドロップ・ダウン設定 」を選択します。

UDA の操作

ユーザー定義の属性(UDA)、記述的な語やフレーズは、計算スクリプト、メンバー式およびレポートで使用できます。UDA は UDA に関連したメンバーのリストを戻します。例:

- HSP_UDF UDA を使用して、アプリケーションをリフレッシュする際の式の上書きを防止できます。Planning アプリケーションに関連する各データベースにログオンし、UDA を使ったメンバー式を作成する必要があります。この UDA の構文は、(UDAs: HSP_UDF)です。
- @XREF 関数を使用して、別のデータベースのデータ値を検索し、現在のデータベースから値を計算する場合、HSP_NOLINK UDA をメンバーに追加して、@XREF 関数が、そのメンバー用として選択されたソース・プラン・タイプではないすべてのプラン・タイプで作成されるのを防ぐことができます。
- 数種類の製品メンバーのついた製品ディメンションでは、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、製品ディメンションの階層にある新製品へ割り当てることができます。その後、指定した新製品における特定の計算を基にすることができます。
- 予算レビュー・プロセスでは、製品ラインの各所有者に対しデータ検証ルールを作成するのではなく(製品によっては数百の所有者がいるものもあります)、プランニング・ユニット階層を使用してメンバーに適用する、ユーザー名を含む UDA を作成できます。次に、データ検証ルールに、現在のメンバーに対する UDA に保存されたユーザー名を戻す検索関数を入力できます。たとえば、移動パスの各ユーザー用の UDA を作成し、その UDA 名に接頭辞を割り当てます(たとえば ProdMgr:Kim)。

UDA の作成および使用の詳細は、[Essbase の操作の考慮事項](#)および [Oracle Essbase データベース管理者ガイド](#)を参照してください。

UDA はディメンションによって特定されます。たとえば、勘定科目メンバーの UDA を作成すると、共有していない勘定科目メンバーに使用できます。UDA を削除すると、すべての勘定科目メンバーの UDA が除去されます。UDA を複数のディメンションに使用可能にするには、複数のディメンションに同じ UDA を作成します。たとえ

ば、「新規」という UDA を勘定科目ディメンションとエンティティ・ディメンションに作成し、それを勘定科目メンバーとエンティティ・メンバーに使用できます。

特定のメンバー用の UDA を選択するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. メンバーを UDA に関連付けるディメンションを選択します。
3. ディメンションの階層から、メンバーを選択して「編集」をクリックします。
4. 「UDA」を選択します。
5. オプション: UDA を作成するには、「作成」をクリックします。
6. メンバーの UDA を「選択した UDA」に移動して「保存」をクリックし、選択します。
 -  は、選択済 UDA を移動します
 -  は、選択済 UDA を除去します
 -  は、すべての UDA を除去します

UDA の作成

UDA を作成するには:

1. 「UDA」タブへナビゲートします。
2. 「UDA」で、「作成」をクリックします。
3. 名前を入力して、「保存」をクリックします。

ノート:

承認用の UDA を作成する場合、その名前の最初に接頭辞を割り当てます(たとえば、ProdMgr:Name)。接頭辞は UDA がユーザー名を含むことを示し、データ検証ルールがユーザーを検索できるようにします。すべての承認 UDA に同じ接頭辞を使用します。

UDA の変更

UDA を変更するには:

1. 「UDA」タブへナビゲートします。
2. 「UDA」で、UDA を選択して「編集」をクリックします。
3. 名前を変更して「保存」をクリックします。

UDA の削除

UDA を削除すると、すべてのディメンションから UDA が除去されます。

UDA を削除するには:

1. 「UDA」タブへナビゲートします。
2. UDA を選択して、「削除」をクリックします。

UDA を削除した場合は、それを参照していたすべてのメンバー式、計算スクリプト、レポートを更新する必要があります。

メンバー式の操作

演算子、計算関数、ディメンション名、メンバー名および数値定数を組み合わせてメンバー式を定義することによって、メンバーの計算を実行できます。メンバー式には次も含まれます。

- 式で許可される演算子タイプ、関数、値、メンバー名、UDA など。
*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。
- 式に展開するスマート・リスト値またはデータベースのリフレッシュにおける値を含む事前定義済の数式。

メンバー式を定義するには:

1. 「管理」、「管理」、「ディメンション」の順に選択します。
2. メンバーの式を追加または変更するディメンションを選択します。
3. メンバーを選択し、「編集」をクリックします。
4. 「メンバー式」タブを選択します。
5. 次のフィールドのオプションを選択します:

- **プラン・タイプ**

ノート:

デフォルトのプラン・タイプに入力された式は、特定のプラン・タイプに入力された別の式によって上書きされないかぎり、すべてのプラン・タイプに適用されます。

- **データ・ストレージ**-データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「保管」です。

ノート:

プラン・タイプ固有のデータ・ストレージ・フィールドには、「共有」または「ラベルのみ」オプションは表示されません。これは、あるプラン・タイプで別のプラン・タイプではない「共有」または「ラベルのみ」にメンバーを設定できないためです。

- **解決順**-集約ストレージ・プラン・タイプに対してのみ、解決順は、式が評価される順序を指定します。0 から 100000 の間の整数を入力します(または矢印を使用して数を増減します)。指定された解決順を持つメンバーの式は、低い解決順から高い解決順に計算されます。デフォルトは 0 です。
6. テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。

Oracle Essbase 式の構文、ルールおよび使用方法は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

7. **オプション**: メンバー式が有効かどうかを確認するには、「**検証**」をクリックします。
8. 「**保存**」をクリックします。
「**保存**」をクリックする前に、「**リセット**」をクリックして、前にあったメンバー式情報を復元します。

式の検証結果の表示

メンバー式の検証結果を表示するには:

1. 「**メンバー式**」で、「**検証**」をクリックします。
2. メンバー式が有効ではないと表示されたら、「**詳細の表示**」をクリックします。
メンバー式が有効な場合は、「**詳細の表示**」は選択できません。
3. 「**保存**」をクリックします。

数式の操作

Oracle Hyperion Planning メンバー式は、データベースがリフレッシュされる際に Oracle Essbase ネイティブ式および評価され Essbase コード・ブロックへ展開される Planning 数式をサポートします。こうした式では、Planning が計算で数値に置き換えるスマート・リストを名前アドレス指定できます。

「**メンバー式**」タブのテキスト・ボックスに、メンバー式内の事前定義済の数式を含めて、「**検証**」ボタンを使用してテストします。また、ロードすることもできます。

アウトラインに頼っているビジネス・ルールや計算スクリプトを更新することなくディメンションのアウトラインを更新できます。計算はアウトライン内で特定数よりさらに孤立します。スマート・リストは計算でオブジェクトとして使用できます。数式を使用しても、データベースのリフレッシュ時にのみ実行されるので、パフォーマンスが低下することはありません。

メンバー式で数式を使うには:

1. 「**管理**」、「**管理**」、「**ディメンション**」の順に選択します。
2. メンバーの式を追加または変更するディメンションを選択します。
3. メンバーを選択し、「**編集**」をクリックします。
4. **メンバー式**を選択します。
5. 次のフィールドのオプションを選択します:
 - **プラン・タイプ**

ノート:

デフォルトのプラン・タイプに入力された式は、特定のプラン・タイプに入力された別の式によって上書きされないかぎり、すべてのプラン・タイプに適用されます。

- **データ・ストレージ** - データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「**保管**」です。

ノート:

プラン・タイプ固有のデータ・ストレージ・フィールドには、「**共有**」または「**ラベルのみ**」オプションは表示されません。これは、あるプラン・タイプで別のプラン・タイプではない「共有」または「ラベルのみ」にメンバーを設定できないためです。

- **解決順** - 集約ストレージ・プラン・タイプに対してのみ、解決順は、式が評価される順序を指定します。0 から 100000 の間の整数を入力します(または矢印を使用して数を増減します)。指定された解決順を持つメンバーの式は、低い解決順から高い解決順に計算されます。デフォルトは 0 です。

6. テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。

Planning 数式および Essbase ネイティブ式をメンバー式に含ませることができます。Essbase ネイティブ式の構文、ルールおよび使用方法は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

Planning は、メンバー式で使用できる事前定義の数式を提供します。独自の数式を編集したり作成することはできません。

7. **オプション**: メンバー式が有効かどうかを確認するには、「**検証**」をクリックします。
8. **オプション**: メンバー式にエラーがある場合は、「**詳細の表示**」をクリックするとエラーの理由が表示されます。
9. **オプション**: メンバー式の変更を保存しない場合は、「**リセット**」をクリックして、前のメンバー式を復元できます。
10. 「**保存**」をクリックします。

前提条件

メンバー式で数式を使用する前に、Oracle Essbase 式、計算およびアプリケーションのアウトラインを理解する必要があります。*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

構文

メンバー計算数式は関数および変数をサポートします。計算数式を作成する場合には、次の関数および変数の構文ルールに従ってください。

- 変数やプロパティは大カッコ([])で囲みます。大カッコを省略すると、変数はネイティブ変数として扱われます。
- メンバー名を引用符で囲みます。
- 変数では大文字と小文字は区別されますが、余計なスペースや、アンダースコア(_)のような文字は使用できません。
- 式には他の関数へのサブコールも含めることができます。
- 数字が必要な箇所には、テキストは入力できません。
- アウトラインの順番は、メンバー式では重要になります。まだ計算されていない値を参照しないでください。

スマート・リスト変数を変数として含める

スマート・リストは、変数として"Status"=[Status.Departed]などの数式に含めることができます

"Status"はメンバー名であり、Status はスマート・リスト名、Departed はスマート・リストのエントリです。Departed に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、メンバー式で Status.Departed を 2 に置き換えます(Oracle Hyperion Planning はスマート・リストを数字として扱います)。Departed に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、計算に 2 をおき、データベースに 2 を保管します。

スマート・リストを次のフォーマットで記述します。[SmartListName.SmartListEntry]

数式

Oracle Hyperion Planning 数式には、これらの事前定義済の変数および関数を含めることができます。

表 12-18 数式内の変数

変数	説明
OpenInputValueBlock	Planning アプリケーションが複数通貨アプリケーションである場合は IF 文を生成し、単一通貨アプリケーションである場合は空の文字列を生成します。ClosedInputValueBlock とともに使用されます。
CloseInputValueBlock	Planning アプリケーションが複数通貨アプリケーションである場合は End IF 文を生成し、単一通貨アプリケーションである場合は空の文字列を生成します。OpenInputValueBlock とともに使用されます。
NumberOfPeriodsInYear	年内の期間を戻します。
NumberOfYears	アプリケーション内の年数を戻します。

表 12-19 数式内の関数

関数	説明
Dimension(dimTag)	事前定義済のディメンションの名前を戻します。dimtag は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ・ DIM_NAME_PERIOD ・ DIM_NAME_YEAR] ・ DIM_NAME_ACCOUNT ・ DIM_NAME_ENTITY ・ DIM_NAME_SCENARIO ・ DIM_NAME_VERSION ・ DIM_NAME_CURRENCY

表 12-19 (続き) 数式内の関数

関数	説明
Period(periodName)	指定した期間を戻します。periodName オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ・ FIRST_QTR_PERIOD ・ SECOND_QTR_PERIOD ・ THIRD_QTR_PERIOD ・ FOURTH_QTR_PERIOD ・ FIRST_PERIOD ・ LAST_PERIOD
CrossRef(accountName)	勘定科目の相互参照を生成します。
CrossRef(accountName, prefix)	勘定科目に対する相互参照を生成します。勘定科目名には定義した接頭辞が含まれます。デフォルトの接頭辞は No で、その後空白スペース、勘定科目名が続き、たとえば「No Salary」となります。
getCalendarTPIndex()	期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。暦年に基づくインデックスです。
getFiscalTPIndex()	期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。年度に基づくインデックスです。
CYTD(memberName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式を生成します。
CYTD(memberName, calTpIndexName, fiscalTpIndexName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式と、暦年および会計年を基にした期間インデックスを生成します。メンバーの名前が変更する場合に使用します。デフォルトのメンバー名は「暦期間-インデックス」および「会計期間-インデックス」です。

一般的なエラー

構文のルールに注意して従います。数式構文にエラーが含まれる場合、メンバー式を検証した後にエラー・メッセージが戻されます。エラー・メッセージの情報を得るには、「メンバー式」タブの「詳細の表示」をクリックします。最も一般的なエラー・メッセージは「実行に失敗しました。」です。これは、式でパラメータを不正に使用すると発生します。次のアクションが「実行に失敗しました。」のエラー・メッセージの原因となります。

- 数式でパラメータの数を間違えて入力
- メンバー名、関数または変数名のスペルミス
- メンバー名を引用符で囲んでいない
- 文字列が必要な箇所へ数字を含ませる

Planning Web クライアントのカスタマイズ

レポートのカスタマイズ

Oracle Hyperion Planning には、フォームの PDF レポートのレイアウトおよびコンテンツ、フォームの定義、タスク・リストおよびプランニング・ユニットを制御するテンプレートが含まれています。テンプレートはそのまま使用できます。また、カスタマイズして会社のロゴ、網掛けや、ページ・サイズ、向き、フォント、フォント・サイズ、ヘッダー、ヘッダー用に使用するページの割合、1 ページ当たりのデータ列数および精度などの機能に対する特別なフォーマットもカスタマイズできます。

レポートをカスタマイズするには、Microsoft Office Word 2000 以降および Oracle Business Intelligence Publisher デスクトップをインストールし、構成する必要があります。そうすると、Word の BI Publisher メニューでサンプル.XML ファイルを使用してレポートの情報を更新できるようになります。また、Word 機能を使用してフォーマットをカスタマイズできます。.RTF ファイルに適切な名前を付けて保存し、それをクラスパスまたは HspJS.jar ファイルに入れることでテンプレートを使用可能にすることができます。

対応するサンプルやテンプレート・ファイルを使用して 4 つのレポート・ファイルをカスタマイズできます。レポートの作成に関する情報は、関連トピックを参照してください。

レポート・タイプ	サンプル・ファイル名	テンプレート名	関連トピック
フォーム	PlanningFormSample.xml	PlanningFormTemplate.rtf	単一のフォームの作成を参照してください。
フォームの定義	PlanningFormDefinitionSample.xml	PlanningFormDefinitionTemplate.rtf	フォーム定義の印刷を参照してください。
タスク・リスト	PlanningTaskListSample.xml	PlanningTaskListTemplate.rtf	Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照してください。
プランニング・ユニットの注釈	PlanningPUAnnotationSample.xml	PlanningPUAnnotationTemplate.rtf	プランニング・ユニットの注釈の印刷を参照してください。

このトピックでは一般的な手順を提供します。手順の詳細は、Word および BI Publisher でインストールされたマニュアルを参照してください。BI Publisher インストール・ガイドおよびユーザー・ガイドは次の場所にあります。

http://download.oracle.com/docs/cd/E10091_01/welcome.html

BI Publisher デスクトップをインストールするには:

1. 次の場所から最新バージョンの BI Publisher デスクトップをダウンロードします。
<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-publisher/overview/index.html>
 レポートをカスタマイズするには、BI Publisher デスクトップのみをインストールする必要があります。BI Publisher は必要ありません。
2. ZIP ファイルをドライブに保存して、「フォルダ名を使用」を選択して抽出します。
3. すべての Microsoft Office アプリケーションを閉じます。
4. ZIP ファイルを抽出したディレクトリへナビゲートし、setup.exe アプリケーションをダブルクリックします。
5. BI Publisher のインストール・ウィザードの手順に従い、デフォルトの設定で基本インストールを実行します。

レポートをカスタマイズするには:

1. デフォルトで products/planning/lib にインストールされた Planning HspJS.jar ファイルを開き、サンプル・ファイルおよび対応するテンプレート・ファイルを抽出します。
 たとえば、タスク・リストのレポートをカスタマイズする場合には、PlanningTaskListSample.xml および PlanningTaskListTemplate.rtf を抽出します。
2. サンプルおよびテンプレート・ファイルを後で開く場所へ保存します。
3. Microsoft Word で、カスタマイズするレポートの.RTF テンプレート・ファイルを開きます。
 たとえば、タスク・リストのレポートなら PlanningTaskListTemplate.rtf テンプレート・ファイルを開きます。
4. Microsoft Word の **Oracle BI Publisher** メニューから、「データ」、「サンプル XML データのロード」と選択し、レポート用のサンプル・ファイルを開きます。
 タスク・リストのレポートの場合は、PlanningTaskListSample.xml サンプル・ファイルを開きます。
 Word で BI Publisher メニューが表示されない場合は、**テンプレート・ビルダー・ツールバー**を選択します。(たとえば、「表示」、「ツールバー」、**テンプレート・ビルダー**の順に選択します。)Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイドを参照してください。
5. Word メニューを使用してテンプレートをカスタマイズします。
 たとえば、グラフィックや更新したフォントが使用できます。こうしたタスクに関するサポートは Word マニュアルを参照してください。
6. **オプション:** レポートのフィールドを更新するには、Word の BI Publisher メニューを使用してサンプル・ファイルからフィールドを追加します。
 たとえば、「Oracle BI Publisher」、「挿入」、「フィールド」の順に選択し、「フィールド」ダイアログ・ボックスのフィールドをクリックして、テンプレートへフィールドをドラッグします。
 こうしたタスクに関するサポートは、BI Publisher マニュアルを参照してください (Word では、「Oracle BI Publisher」、「ヘルプ」の順に選択します。BI Publisher では、「ヘルプ」をクリックしてオンライン・ヘルプを表示します。)

7. カスタマイズが終了したら、「**Oracle BI Publisher**」、「**テンプレートのプレビュー**」の順に選択し、変更内容をプレビューするためのフォーマットを選択します。あらゆるフォーマットでプレビューできます。クローズ・ボックスをクリックしてプレビュー・ファイルを閉じます。
8. テンプレート・ファイルで「**名前を付けて保存**」を選択し、テンプレートを表から適切なファイル名を付けて.RTF ファイルで保存します。
たとえば、タスク・リストのレポートをカスタマイズしている場合は、ファイルを `PlanningTaskListTemplate_Custom.rtf` として保存します。

テンプレート・タイプ	ファイル名
すべてのフォーム	<code>PlanningFormTemplate_Custom.rtf</code>
特定のフォーム	<code>PlanningFormTemplate_Data_Form_Name</code> たとえば、「収益」と名付けたフォームへテンプレートを適用させるには、 <code>PlanningFormTemplate_Income.rtf</code> としてテンプレートを保存します。
フォームの定義	<code>PlanningFormDefTemplate_Custom.rtf</code>
タスク・リストのステータス・レポート	<code>PlanningTaskListTemplate_Custom.rtf</code>
プランニング・ユニットの注釈レポート	<code>PlanningPUAnnotationTemplate_Custom.rtf</code>

テンプレート・ファイルは、Web アプリケーション・サーバーで利用できるように、クラスパスの場所に保存する必要があります。テンプレート・ファイルをルート・レベルの `HspJS.jar` ファイルに挿入します(テンプレート・ファイルと同じレベル)。

9. ユーザーが **Planning** で PDF レポートを作成する場合、カスタム・テンプレートが利用できるようにアプリケーション・サーバーを再起動します。

Planning ツール・ページのカスタマイズ

管理者は、プランニング・データの分析、追跡およびレポートに一般的によく使用されるツールへのリンクを追加することで **Oracle Hyperion Planning ツール・ページ** をカスタマイズできます。**Planning** ユーザーはその後、「ツール」メニューから **Planning** リンクを開き、リンクをクリックしてブラウザの 2 番目のウィンドウでページを開くことができます。[カスタム・ツールの指定](#)を参照してください。

カスケード・スタイルシートのカスタマイズ

Oracle Hyperion Planning では、**Planning** の外観を制御するユーザー・インタフェース(UI)テーマを定義するときにカスケード・スタイル・シートが役立ちます。**Planning** カスケード・スタイル・シートをカスタマイズしてニーズを満たすことができます。一般的なスタイル・シートのカスタマイズには次のものがあります。

- 強調や色分けのためのフォント色の変更
- 特定の UI 要素のバックグラウンド色の調整

- 企業のロゴを挿入

カスケード・スタイル・シートをカスタマイズする前に、カスケード・スタイル・シートの基本知識とスタイル・シートのエディタ・ツールに精通している必要があります。設定の一部は製品の表示に必要なになります。

カスケード・スタイル・シートへの変更は Web アプリケーション・サーバー上で実行されるので、接続しているすべてのユーザーに影響します。スタイル・シートはデフォルトのディレクトリではなく、Web アプリケーション・サーバーによって実行時にファイルが一時的な場所に抽出されます。Web アプリケーション・サーバーのどこでこれらのファイルを探すかの詳細は、[カスケード・スタイルシート・ファイルの場所](#)を参照してください。

Planning では、2つのカスケード・スタイル・シートが主に使用され、1つは複数の Oracle 製品に共通する Web UI 要素を定義するグローバル・シート、もう1つは Planning 専用のシートです。グローバル・カスケード・スタイル・シートは `global.css` という名前です。次の表では `global.css` ファイルの主なセクションをリストし、Oracle がカスタマイズしないように推奨しているセクションを表示します。

表 13-1 `global.css` ファイルの主なセクション

カスタマイズ可能なセクション	カスタマイズしないように推奨しているセクション
非ナビゲーション・スタイル	Tadpole メニューバー Tadpole メニュー・アイテム メニュー・スタイル(順序も重要です)
Tadpole マストヘッド	Tadpole 最小化したマストヘッド
Tadpole コンテンツ領域	Tadpole ツールバー
Tadpole ログオン・スタイル	Tadpole ビュー・ペイン
タブ	Tadpole ツリー
タブ・アンカー・タグ	
タブ本体	
タスク・タブ	
タスク・タブ本体	
Groupbox	
Groupbox アンカー・タブ	
ボタン	
HTML でのボタン描画	
ボタン・タグの使用	
インプット・タグの使用	

カスケード・スタイルシートをカスタマイズするには:

1. `HyperionPlanning.ear` ファイル、`HyperionPlanning.war` ファイルの順に一時的な場所に抽出します。

[カスケード・スタイルシート・ファイルの場所](#)を参照してください。

2. HspCustom.css ファイル(HyperionPlanning.war が抽出された一時的な場所の custom ディレクトリの下)を探します。
3. HspCustom.css をカスタマイズし、HyperionPlanning.ear に保存します。
4. 変更が適用されるようにするには、再デプロイする必要があります。

すべての PlanningWeb ページは、HspCustom.css ファイルを参照し、ここで設定された設定内容は global.css および planning.css の設定を上書きします。

行軸または列軸内でのメンバーの階層位置を反映するようにフォームのスタイルをカスタマイズするには、[フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ](#)を参照してください。

カスケード・スタイルシート・ファイルの場所

Oracle Hyperion Planning のカスケード・スタイル・シートは、WebLogic によって実行時に一時的な場所に抽出されます。これらのファイルを変更するユーザーは、更新を行う前に HyperionPlanning.ear ファイル、HyperionPlanning.war ファイルの順に一時的な場所に抽出する必要があります。スタイル・シートに加えられた変更を HyperionPlanning.war ファイル(HyperionPlanning.ear の一部)に再度追加してから、HyperionPlanning.ear を再デプロイする必要があります。

カスケード・スタイル・シートの変更

Oracle カスケード・スタイル・シートを操作する場合:

- 変更前にオリジナル・バージョンをコピーしてすぐにアクセスできるようにします。
- 複数製品に使用できる一般的なスタイルは global.css にあります。
- 独自のスタイルが要求される製品用のスタイルは *productname*.css にあります。
- ユーザー・インタフェース・コントロールの一部はサードパーティ製のコンポーネントです。サードパーティ・コントロールのスタイル変更にはすべての関連ファイルの変更が要求されます。
- パディング、枠線、テキスト、垂直整列、位置および余白を含むレイアウトに影響を与えるスタイルの変更は避けます。
- 色の変更はフォントの色に影響します。背景の変更はボタンなどの要素の色に影響します。
- ハイパーリンクのテキストの色を変更する場合は、ハイパーリンク・スタイル (「a:link」、「a:hover」および「a:visited」)を使用します。
- ツールバーのボタンの変更は製品のすべてのボタンの変更が要求される場合があります。
- ツールバーのボタンは紺色の背景で正確に表示されます。

カスタマイズの例

この項では一般的なカスタマイズについて説明します。

コンテンツ領域の色を変更

global.css ファイルの Tadpole Logon Styles セクションを編集することで、ページ右側のコンテンツ領域の背景色を変更できます。次の表では、デフォルトの色を白に変更するためのファイルの編集方法を表示しています。

表 13-2 コンテンツ領域の色を変更

コンテンツ領域のデフォルト背景	コンテンツ領域の白の背景
<pre>.content table.content { background: #e5eaeef ; }</pre>	<pre>.content table.content { background: #ffffff ; }</pre>

ハイパーリンクとアクセスしたハイパーリンクの色を変更

global.css ファイルの Non-Navigation Styles セクションを編集することでハイパーリンクの色を変更できます。次の表ではデフォルトの色を赤に変更するための編集方法を表示しています。

表 13-3 ハイパーリンクとアクセスしたハイパーリンクの色を変更

黒いハイパーリンクと参照したハイパーリンク	赤いハイパーリンクと参照したハイパーリンク
<pre>a:link, a:visited { color: #000000 ; }</pre>	<pre>.content table.content { background: #ff0000 ; }</pre>

フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ

Oracle Hyperion Planning カスケード・スタイルシートをカスタマイズすることによって、行や列のメンバーの各レベルについて、フォーム内でのその階層位置に応じて、様々なスタイルのフォームを表示できます。

ノート:

- ADF モードでは、planning.css を変更しても何も影響しません。
- カスタマイズされたスタイルはフォームに表示されたディメンションに関係なく適用されます。
- 行のテキスト配列はサポートされていません。
- スタイルはメンバーの表示される階層レベルに基づき、これは必ずしも Oracle Essbase の関係ではありません。
- 行に大きなフォント・サイズを設定すると行の配列に影響を及ぼします。
- カスタマイズされたスタイルは、フォームが PDF ファイルへ印刷される場合には反映されません。

行および列メンバーのスタイルをカスタマイズするには:

1. [カスケード・スタイルシートのカスタマイズ](#)の手順に従って planning.css ファイルを変更します。

2. `planning.css` ファイルで、次のヘッダー・タグをカスタマイズします。

表 13-4 Planning.css ファイルのヘッダー・タグ

行	列
<code>rowHeader_0</code>	<code>columnHeader_0</code>
<code>rowHeader_1</code>	<code>columnHeader_1</code>
<code>rowHeader_2</code>	<code>columnHeader_2</code>
<code>rowHeader_3</code>	<code>columnHeader_3</code>
<code>rowHeader_4</code>	<code>columnHeader_4</code>

タグ「`rowHeader_0`」および「`columnHeader_0`」は一番低いレベルのクラスに影響します。タグ「`rowHeader_4`」および「`columnHeader_4`」は一番高いレベルのクラスに影響します。レベル 4 以上のメンバーはレベル 4 スタイルで表示されます。

フォームでのヘッダー・セルのスタイルのカスタマイズ

すべてのフォームへの太字の適用

すべてのフォームに太字スタイルを適用するには:

1. `HyperionPlanning.war\custom` から、`HspCustom.css` を開きます。
2. 次のクラス・コードを挿入します: `customheaderStyle Font-family:; Font-size:<size>; Font-weight:bold;`
3. 同じコード部分でフォントとフォント・サイズも変更できます。

たとえば、太字の `Garamond 14` をヘッダー・セルのスタイルとして使用する場合は、次のように指定します:

```
customheaderStyle Font-family:garamond; Font-size:14; Font-weight:bold;
```

4. [カスタマイズしたスキンの登録](#)で、タスクを実行します。

1つのフォームへの太字の適用

1つのフォームに太字を適用するには:

1. 次の問合せを実行して、カスタマイズするフォームの ID を決定します。ここで、`<FORM_NAME>` がフォームの名前です: `Select object_id AS FORM_ID,object_name AS FORM_NAME from hsp_object where object_name like '<FORM_NAME>'`

たとえば、「1.30 Per Payor - Metrics」というフォームを変更する場合は、次の問合せを実行します: `Select object_id AS FORM_ID,object_name AS FORM_NAME from hsp_object where object_name like "1.30 Per Payor-Metrics"`

2. ID が戻されたら、次のフォーマットで **HspCustom.css** に **css** クラスを作成します:
`"customheaderStyle_<FORM_ID>"`
3. 次に示すように、**customheaderStyle** で **font-weight** を **bold** に設定します。フォントとフォント・サイズをコードと同じ部分に変更することもできます。
`customheaderStyle Font-family:customheaderStyle Font-family:;
Font-size:<size>; Font-weight:bold;`
4. 個々のフォームに異なるスタイルを使用するには、各フォームの CSS クラスを作成します。
5. [カスタマイズしたスキンの登録](#)で、タスクを実行します。

スキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加

既存のスキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加するには:

1. `trinidad-skins.xml` という名前でファイルを作成し、次のコードを挿入します:

```
<skins xmlns="http://myfaces.apache.org/trinidad/  
skin"><skin><id>HspCustom.desktop/</id><family>HspCustom</  
family><extends>blafplus-rich.desktop</extends><render-kit-  
id>org.apache.myfaces.trinidad.desktop</render-kit-  
id><style-sheet-name>custom/HspCustom.css</style-sheet-  
name></skin></skins>
```
2. このコードで次のように指定します:
 - `family` - 新しいスキンの名前
 - `style-sheet-name` - スタイル・セレクタを含むカスタム css ファイル
 - `extends` - 変更中のスキン
3. 必要なスタイル・セレクタを上書きします。
4. [カスタマイズしたスキンの登録](#)で、タスクを実行します。

カスタマイズしたスキンの登録

変更したスキンをアプリケーションに登録するには:

1. 更新したスキン・ファイルを **HyperionPlanning.ear** に追加します。
2. `trinidad-skins.xml` を **HyperionPlanning.war\WEB-INF**に置きます。
3. 新しい **HspCustom.css** を **HyperionPlanning.war\custom** にコピーし、既存の css ファイルを置き換えます。
4. 更新した.ear ファイルを **EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer\InstallableApps** にコピーします。
5. アプリケーション・サーバーに再デプロイします。
6. アプリケーション・サーバーを再起動し、ブラウザキャッシュをクリアします。
7. Planning で、「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
8. **SKIN_FAMILY** という新しいアプリケーション・プロパティを作成します。

9. HspCustom など、カスタム・スキンを参照するようにプロパティ値を設定します。
10. ログアウトした後に再びログインします。

ADF コンポーネントのカスタマイズについて

ADF でコンポーネント・スキンのスタイル・セレクタを使用すると、UI コンポーネントの表示形式をカスタマイズできます。スタイルシート・ルールには、要素を指定するスタイル・セレクタと、コンポーネントの表示形式を指定する一連のスタイル・プロパティが含まれます。ADF Faces コンポーネントには、次のカテゴリのスキン・スタイル・セレクタがあります:

- グローバル・セレクタ: 複数の ADF Faces コンポーネントのスタイル・プロパティを決定します
- コンポーネント・セレクタ: コンポーネント固有のセレクタはスキンを特定の ADF Faces コンポーネントに適用できるセレクタです

スタイル・セレクタの詳細は、次を参照してください:

- http://docs.oracle.com/cd/E23943_01/apirefs.1111/e25378/toc.htm
- <http://www.oracle.com/technetwork/developer-tools/jdev/index-092146.html>
- http://docs.oracle.com/cd/E16764_01/web.1111/b31973/af_skin.htm

テキスト、色および画像のカスタマイズについて

Oracle Hyperion Planning Web インタフェースでは、テキスト、色および画像をカスタマイズすることができ、テキストをローカライズすることもできます。

- [テキスト、色および画像のカスタマイズ](#)
- [非ラテン言語でテキストをカスタマイズ](#)
- [カスタマイズされたメッセージで制限されている文字](#)

テキスト、色および画像のカスタマイズ

Oracle Hyperion Planning Web インタフェースでは、これらのアイテムのテキスト、色および画像をカスタマイズすることができます:

- HspCustomMsgs_en.template を使用するラベルとメッセージ
- HspCustomImgs_en.template を使用するカスタマイズ可能な色と画像

ラベルを追加する場合は、HspCustomMsgs リソース・ファイルへラベルを追加する必要があります。たとえば、スマート・リスト・エントリやメニュー・アイテムを追加する場合、ラベルをリソース・ファイルに含めます。アプリケーションがローカライズされている場合は、対応するリソース・ファイルを更新します。たとえば、アプリケーションを 3 言語にローカライズするには、ラベルを 3 つのローカライズされた HspCustomMsg ファイル(各言語コードがそれぞれのファイル名に付けられる)すべてに追加し、翻訳された語句を含めます。ノート:

- テキストやメッセージをカスタマイズする場合は特定の文字を避ける必要があります。[カスタマイズされたメッセージで制限されている文字](#)を参照してください。

- 色によっては名前があるものと、16進法やRGB値で表されるものがあります。
- Webアプリケーション・サーバーやオペレーティング・システムの種類によっては、画像ファイルの名前とImagesディレクトリの名前で使用する大文字と小文字が区別される場合があります。
- Webインタフェースに追加された画像は、ImagesディレクトリのHspCustomImgs_en.propertiesを使用して保管する必要があります。
- WebLogic 8.1 が実行するサイレント・デプロイメントはEARおよびWARアーカイブからファイルを抽出しません。カスタマイズ・ファイルは手動で抽出、変更およびアーカイブする必要があります。
- その他のタイプの画像をカスタマイズするには、[カスケード・スタイルシートのカスタマイズ](#)を参照してください。
- 手順では、HspCustomMsgs_en ファイルの英語メッセージのカスタマイズについて説明しています。アプリケーションをローカライズする際に、ファイルを適切な言語に更新してください。

テキスト、色、画像をカスタマイズするには:

1. HyperionPlanning.ear ファイルを一時的な場所に抽出した後、HspCustomMsgs_en.template ファイルおよびHspCustomImgs_en.template ファイルを探します。

これらのテンプレート・ファイルは、HyperionPlanning.war ファイルが抽出された custom ディレクトリにあります。
2. HspCustomMsgs_en.template および HspCustomImgs_en.template をコピーし、一時的な場所へ貼り付けます。
3. HspCustomMsgs_en.properties および HspCustomImgs_en.properties ファイルの名前を変更します。
4. HspCustomMsgs_en.properties および HspCustomImgs_en.properties のコンテンツを更新します。

HspCustomMsgs_en.properties の各ラインはカスタマイズ可能なテキスト・リソースを示しています。HspCustomImgs_en.properties の各ラインはカスタマイズ可能な色または画像リソースを示しています。

ラインはリソース、等号およびカスタマイズ可能なリソースの名前で始まります。ラインの最後に句読点を含める必要はありません。改行はリソースの最後を示しています。

たとえば、HspCustomMsgs_en.properties ファイルの次のラインを変更することで、ツール・メニューのラベルを「Tools: Analyze and Report」から「Tools: Additional Resources」へ変更できます:

```
LABEL_HOME_TOOLS=ツール: 分析とレポート
```

変更後:

```
LABEL_HOME_TOOLS=ツール: 追加リソース
```

5. 更新されたファイルを保存して HyperionPlanning.ear に追加し、そのファイルを次の場所にコピーして、変更が適用されるように再デプロイを実行します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer  
\InstallableApps\Common\HyperionPlanning.ear  
\HyperionPlanning.war\WEB-INF\classes\
```

6. Web アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

HspCustomMsgs ファイルのビジネス・ルールの計算に関するエラー・メッセージのカスタマイズの詳細は、[エラー・メッセージのカスタマイズ](#)を参照してください。

非ラテン言語でテキストをカスタマイズ

Oracle Hyperion Planning Web インタフェースのテキストを非ラテン言語にカスタマイズするには、HspCustomMsgs_en.template ファイルを更新します。この例では、ファイルをロシア語に更新する方法を示します。

HspCustomMsgs_en.template をカスタマイズするには:

1. /custom ディレクトリで HspCustomMsgs_en.template を探します。
2. ロシア語など、特定の言語にラベルをカスタマイズしている場合は、HspCustomMsgs_ru.source など、.source 拡張子を使用するようにテンプレート・ファイルの名前を変更します。
3. HspCustomMsgs_ru.source など、その言語のソース・ファイルをレビューして、ファイルのどのラベルをカスタマイズする必要があるかを判断します。そのラベルの翻訳を .source ファイルに追加し、その他のすべてのラベルを除去し、ファイルを保存します(カスタマイズが必要なのは、このファイル内のラベルのみです)。
4. 次のいずれかの操作を実行します:
 - ロシア語、日本語、韓国語、トルコ語、簡体字中国語、繁体字中国語などの言語では、ステップ 5 に進んで、Java プロパティ・ファイルを作成します。
 - デンマーク語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ブラジル・ポルトガル語、スウェーデン語などの Latin1 言語では、.source ファイル (HspCustomMsgs_ru.source など)を .properties 拡張子付きで保存して (HspCustomMsgs_ru.properties など)手動でプロパティ・ファイルを作成します。
5. このステップを完了して、native2ascii プログラムを使用し、ソース文字列を Unicode 文字列に変換し、HspCustomMsgs_ru.properties など、その言語用のカスタム・プロパティ・ファイルを作成します。このプログラムを使用するには、ロシア語用の Cp1251 など、その言語用のエンコードを入力する必要があります。使用方法:

```
native2ascii [-encoding language_encoding]
[inputfile_name[outputfile_name]]
```

表 13-5 言語エンコード・パラメータの例

言語	エンコード・パラメータ
ロシア語	Cp1251
トルコ語	Cp1254
日本語	SJIS
簡体字中国語	EUC_CN
繁体字中国語	Big5
韓国語	EUC_KR

- a. Sun JDK に含まれている `native2ascii` プログラムがインストールされていることを確認し、このプログラムへのインストール・パスを記録します。一部のアプリケーション・サーバーは、このプログラムを自動的にインストールします。このプログラムがインストールされていない場合は、JDK をインストールできます。
- b. コマンド・プロンプトを開きます。
- c. `native2ascii` プログラムへのパス、言語エンコード・パラメータ、作成するソースおよびターゲット・ファイルの名前を順に入力します。例:

```
C:\j2sdk1.4.2_15\bin\native2ascii -encoding Cp1251
HspCustomMsgs_ru.source HspCustomMsgs_ru.properties
```

6. `HyperionPlanning.ear` ファイルを一時的な場所に抽出します。
7. プロパティ・ファイル(`HspCustomMsgs_ru.properties` など)を、`HyperionPlanning.war` が抽出された `custom` ディレクトリにコピーします。
8. `HyperionPlanning.ear` を再作成し、`ear` ファイルを `EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer\InstallableApps\Common` に配置します
9. 抽出元の `\HyperionPlanning` を一時的な場所から削除します。
10. `Planning` を再起動します。
11. Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

カスタマイズされたメッセージで制限されている文字

ビジネス・ニーズに合わせてテキスト文字列を変更できます。テキスト文字列の使用方法によってまたは文字列が Java もしくは JavaScript で生成される場合などによっては、カスタム・メッセージにエラーが生じる可能性のある文字の使用は避けてください(ほとんどの場合、テキスト・メッセージは Java によって生成され、ポップアップ・ボックスおよびボタンの一部は JavaScript によって生成されています)。たとえば、次の文字列を JavaScript のコール内に追加すると、JavaScript は二重引用符を解析できないことから、エラーが生じます。

```
someJavaScript("<%= HspMsgs.SOME_RESOURCE %>");
```

カスタム・メッセージでは次の文字を使用しないことをお勧めします。

- 一重引用符
- 二重引用符
- 円記号(バックスラッシュ)
- スラッシュ

プロセス・ステータス用に色、状態、アクションをカスタマイズ

次のカスタマイズの手順では、リレーショナル・データベースの管理および操作方法の知識が必要になります。

- [色のカスタマイズ](#)
- [状態のカスタマイズ](#)

- [アクションのカスタマイズ](#)

色のカスタマイズ

デフォルトでは、プランニング・ユニットのステータス(「レビュー中」や「初回パス」など)は黒で表示されます。各ステータスの状態はカスタマイズして別の色で表示できます。使用可能な色は、ブラウザで認識されるすべての名前付きの色です。サポートされる名前付きの色は、[Microsoft Web サイト](#)を参照してください。

プロセス・ステータスの状態の色についての情報は、「COLOR」列内の「HSP_PM_STATES」表にあります。リレーショナル・データベースに対して、色値を変更する文を実行する必要があります。

色のカスタマイズが終了したら、Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

例: SQL リレーショナル・データベース

次の問合せを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスの状態と現在の色設定をリストします:`select * from hsp_pm_states`

これにより、`state_id`、プロセス・ステータスの状態および色が戻されます。デフォルトの色値は、黒に変換される<NULL>になっています。

変更するプロセス・ステータスの状態の `state_id` をメモしてから、次の問合せを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET COLOR = 'new color' WHERE STATE_ID = state_id
```

次の SQL 文を実行し、「初回パス」プロセス・ステータスの状態色を緑に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET COLOR='GREEN' WHERE STATE_ID=1
```

ノート:

Oracle リレーショナル・データベースには、`COMMIT;` コマンドを発行しトランザクションをコミットします。

状態のカスタマイズ

次のプロセス・ステータスの状態のプリセットをカスタマイズできます。

- 未開始
- 初回パス
- レビュー中
- 凍結済
- 配分済
- サインオフ済
- 未サインオフ
- 承認済

プロセス・ステータスの状態についての情報は、「HSP_PM_STATES」表内の「NAME」列にあります。リレーショナル・データベースに対して、状態値を変更する文を実行する必要があります。

例: SQL リレーショナル・データベース

次の問合せを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスの状態と現在の名前をリストします:

```
select * from hsp_pm_states
```

これにより、state_id、プロセス・ステータスの状態および色が戻されます。

変更するプロセス・ステータスの状態の state_id をメモしてから、次の問合せを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET NAME = 'NewName' WHERE STATE_ID =  
state_id
```

次の SQL 文を実行し、「承認済」プロセス・ステータス状態名を移動済に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET NAME='PROMOTED' WHERE STATE_ID=1
```

ノート:

Oracle リレーショナル・データベースには、COMMIT; コマンドを発行しトランザクションをコミットします。

アクションのカスタマイズ

次のプロセス・ステータス・アクションのプリセットをカスタマイズできます。

- 作成
- 開始
- 上位へ移動
- 送信、最上位に送信
- 除外
- 却下
- 承認
- 委任
- 所有権の取得
- 凍結、凍結解除
- 配分、子の配分、所有者の配分
- サインオフ
- 再度開く

プロセス・ステータス・アクションについての情報は、「HSP_PM_ACTIONS」表内の「NAME」列にあります。リレーショナル・データベースに対してアクション値を変更する文を実行する必要があります。

例: SQL リレーショナル・データベース

次の問合せを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスのアクションと現在の名前をリストします:

```
select * from hsp_pm_actions
```

これにより、action_id およびプロセス・ステータス・アクションの名前が戻されます。

変更するプロセス・ステータスのアクションの state_id をメモしてから、次の問合せを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_ACTIONS SET NAME = 'NewName' WHERE ACTION_ID =
action_id
```

次の SQL 文を実行し、「承認」プロセス・ステータス・アクション名を「承認」に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_ACTIONS SET NAME='ACCEPT' WHERE ACTION_ID=1
```

ノート:

Oracle リレーショナル・データベースには、COMMIT; コマンドを発行してトランザクションをコミットします。

分散パターンの作成

SQL を理解している管理者は、HSP_SPREAD_PATTERN データベース表へ追加することで「グリッド分散」および「一括割当て」ダイアログ・ボックスからアクセスできるカスタム分散パターンを作成できます。

カスタム分散パターンを追加するには:

1. HSP_SPREAD_PATTERN データベース表を開きます。
2. 名前に行値を入力し親セルから値をどのように分散するか示します。

表 13-6 HSP_SPREAD_PATTERN 表

列	説明
NAME - VARCHAR (80) UNIQUE NOT NULL	内部名(非表示)
LABEL - VARCHAR (80) NOT NULL	ユーザー・インタフェースに表示されるリソース・ファイルの文字列 ID を参照します。文字列リソースが作成されていない場合、LABEL 文字列識別子がかわりに表示されま す("Label_Spread_445"など)。

表 13-6 (続き) HSP_SPREAD_PATTERN 表

列	説明
PATTERN VARCHAR (255) NOT NULL	<p>スペース区切り、1 つ以上の要素、255 文字まで:</p> <ul style="list-style-type: none"> 数字: たとえば、親値を均等に子に分割するように指定する場合は 1 を指定します。 !: ロック。パターン要素として"!"が付いているセルの値は変更しないでください。 P: 親値が分散されます。子は親が受け取る値と同じ値を受け取ります。 *: 後に続く要素を繰り返します。すべてのセルで 1 を繰り返すには 1* を使用し、適用パターンの残りスペースを埋めます。パターン内で要素の一部として*がない場合、特定要素のかわりにすべてのパターンがそのまま繰り返されます。パターンには*のみを含ませることはできません。また、1 つの要素のみに*が付けられます。たとえば、12*3 は許可されますが、12*3* は許可されません。

3. 表を保存して閉じます。

新しいパターンは、分散オプションとして「グリッド分散」および「一括割当て」ダイアログ・ボックスに表示されます。

Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドおよび[分散パターンの例](#)も参照してください。

分散パターンの例

3 つの子セルが分散に影響されているフォーム・セルと仮定します。パターンがどのように 3 つの子値に適用されるかの例をあげます。

表 13-7 適用された分散パターンの例

パターン	セル 1	セル 2	セル 3	説明
445	4	4	5	<p>新しい値は 445 パターンを使用してレベル 0 メンバーに分散されました。たとえば Q1 から 13 を設定する場合、値は次のように分散されます。</p> <p>1 月= 4 2 月= 4 3 月= 5</p>

表 13-7 (続き) 適用された分散パターンの例

パターン	セル 1	セル 2	セル 3	説明
1	1	1	1	1 は 1*と同じです。このフロー分散タイプでは値がない場合に、フローがどのように分散を比例させるかを表します。親値は子セルの数である 3 で分割され、それぞれの子セルに均等に分散されます。
P	P	P	P	各子セルは親の値を受け取ります。これは分散というよりもパターンのコピーです。
!*P	!	!	P	BALANCE タイプの分散に等しくなります。
P!*	P	!	!	FIRST タイプの分散に等しくなります。
1 2 1	1	2	1	曲線面タイプの分散に類似します。
0 1 0	0	1	0	最初と最後の子セルは分散値 0 を受け取り、真中の子セルは親値を受け取ります。

プランナのための指示の作成

Oracle Hyperion Planning の機能を使用して、管理者はプランナの作業ガイドとなる独自の指示を作成することができます。

- フォームを作成する際「説明」テキスト・ボックスに明示的な指示を作成します。たとえば「収益所得を予測するにはこのフォームを選択します」などです。[フォームの編集](#)を参照してください。
- タスク・リストおよび個々のタスクに関する明示的な指示を指定します。たとえば、「一般費用を配賦するにはこのタスク・リストを使用します」または「電話代を配賦するにはこのタスクを選択します」などです。

- フォームのオプションを設定する際に、「セル・レベルのドキュメントの使用可能」オプション(フォーム・レイアウトの設定を参照)を選択し、セルを Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace のドキュメントにリンクします。このドキュメントには、Web サイトでも任意のファイル・タイプでも指定できます(.XLS や.PDF ファイルなど)。たとえば、組織における 1 月の電話代について仮定を説明するドキュメントをセルに関連付けることができます。Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドを参照してください。
- 次のタイプのタスクを作成します。
 - URL—URL を開きます。たとえば、最新の予測に関する仮定を示している経理部門の内部 Web サイトにリンクします。
 - 記述的—指示を表示します。たとえば、「この期間に出張がある場合、財務担当者に連絡番号を報告してください」などです。
- 実行時プロンプトの説明的なテキストを作成します。「プロジェクトを選択」、「四半期に予想される顧客訪問数を入力」、「次月に予想される収益の変化率は？」のように具体的で、必要なデータの種類をユーザーに伝える内容にします。ビジネス・ルールのプロパティの設定を参照してください。
- ブロードキャスト・メッセージを使用して、現在アプリケーションにログオンしている全プランナに指示を送信します。たとえば、「予測の改訂はすべて週末が期限です」などのメッセージをブロードキャストします。ブロードキャスト・メッセージの使用を参照してください。

トラブルシューティング

トラブルシューティングの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成 *トラブルシューティング・ガイド* を参照してください。

計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎる

シナリオ:

「通貨換算の管理」ページを使用して、Web から起動し通貨換算するアプリケーション全体の計算スクリプトを生成します。計算スクリプトを生成する際に、次のエラーが表示される場合、計算スクリプトは 64K 制限を超えています。計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎます。アプリケーションの通貨換算計算スクリプトに多数の期間(500 など)がある場合、このエラーが生じます。

解決策:

この問題に対処するには:

1. 計算スクリプトを 1 つのシナリオに制限します。
計算スクリプトの生成が成功した場合、最後のステップにスキップします。
2. それでもエラー表示がある場合、計算スクリプトを 1 つのレポートの通貨に制限します。
計算スクリプトの生成が成功した場合、2 つのレポートの通貨を選択してみます。成功したらエラーが表示されるまでレポートの通貨を追加していきます。そして最後のステップにスキップします。計算スクリプトが 1 つのレポートの通貨で生成されない場合、アプリケーションから通貨の一部を除去します。
3. 「通貨換算の管理」ページを使用して、その他の小さな通貨換算計算スクリプトを必要に応じて生成し、シナリオ、レポートの通貨、バージョンを含めます。
期間には非常に短い名前を付けることもできます。

メンバーが見つからない

シナリオ:

データベースのリフレッシュ中にエラー・メッセージ「メンバー x が見つかりません。」が表示されます。

解決策:

「データベースのリフレッシュ」ページから完全なデータベース・リフレッシュを(増分のリフレッシュのかわりに)実行します。

要求を処理できない

シナリオ:

エラー・メッセージ「アプリケーションがリフレッシュ中です。要求を処理することができません。」がアプリケーション・ユーザーに表示されます。アプリケーション・データベースの作成中またはリフレッシュ中は、アプリケーションの一部がロックされ、ユーザーは次の事項が変更できなくなります。

- ディメンションまたはメンバー
- ユーザー
- グループ
- セキュリティ
- 別名
- 別名表
- 為替レート
- 年
- 期間

解決策:

データベースの作成またはリフレッシュが終了するのを待ちます。

ユーザーによる変更の競合

シナリオ:

データを変更する際に、エラー・メッセージ「別のサーバーでユーザーによって変更されたデータを変更しようとしています。」が表示されます。

解決策:

データは現在別のサーバーのユーザーにより変更されています。しばらく待ってから再実行します。メッセージが引き続き表示される場合、ページを閉じて再び開いてみます。それでもエラーになる場合は Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

バージョンのコピー・エラー

シナリオ:

多数のメンバーを選択して「バージョンのコピー」を使用した後、「指定の計算スクリプトの実行中にエラーが発生しました。詳細を確認してください。」というエラー・メッセージが表示されます。Web アプリケーション・サーバーのログにメッセージ「com.hyperion.planning.olap.HspOlapException: 計算スクリプトの長さが許可された最大長を超えています。」が含まれます。

解決策:

バージョンのコピーには計算スクリプトが使用され、Oracle Essbase は計算スクリプトのサイズを 64K までに制限しています。多数のメンバーをコピーしている間に制限に達する場合、バージョンのコピーは失敗する場合があります。これを回避するには、

バージョンのコピーでコピーするメンバーを少なく選択します。Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイドおよび Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドを参照してください。

バージョンのコピーの失敗を回避するには、正常にコピーできるメンバー数を予測します。スクリプトはメンバー名を使用するため、メンバー数およびメンバー名の長さを考慮する必要があります。各メンバーが平均 10 文字だとすると、6,400 より少ないメンバーをコピーできます。また、スクリプトには計算スクリプト・コマンドや各メンバー名に対するカンマなどの構文文字が含まれます。500 文字の長さの計算スクリプト・コマンドと仮定する場合、次の式が使用できます:

$$(\text{メンバー数} * \text{メンバー名の長さの平均}) + \text{メンバー数} + 500 \leq 64,000$$

通貨換算計算スクリプトの失敗

シナリオ:

計算スクリプトを確認する際、計算スクリプトのシナリオ、バージョン、メンバーまたは通貨が動的計算メンバーの場合や、すべての勘定科目メンバーが動的の場合に、エラー・メッセージ「FIX 文に動的計算メンバーを含めることはできません。」が表示されます。

解決策:

「データベースの管理」ページで通貨換算計算スクリプトのシナリオ、バージョンおよび通貨を選択する際に、動的計算メンバーを選択しないでください。また、少なくとも 1 つの勘定科目を「保管」に設定する必要があります。

フォームのエラー・メッセージ

シナリオ:

Oracle Essbase がタイムアウトした後で最初に Oracle Hyperion Planning を使用するユーザーは、フォームを開けなかったことを示すエラーを受け取ることがあります。

解決策:

ユーザーは、「リフレッシュ」をクリックして Planning と Essbase 間の接続を復元させます。

データベースが別の管理者によってロックされる

シナリオ:

時々、Oracle Hyperion Planning アプリケーションがロックされることがあります。これは、不正にアプリケーションを閉じることが原因である場合があります。

解決策:

[アプリケーションのロック解除](#)を参照してください。

500 エラー・メッセージ

シナリオ:

ページのメンバー数(セキュリティ・フィルタを適用した後の、異なる製品のディメンションの組合せ)で Java の実行にメモリー不足が発生すると、フォームで 500 ERROR メッセージが表示されます。

解決策:

ページ上の異なる製品のディメンションの組合せの数をできるだけ削減することをお勧めします。Java にはデフォルトで 128MB のメモリーが配分されていますが、サーバーには使用可能なメモリーがさらにあるので、Java が使用できるメモリー量を増大させる必要があります。一般的なルールとして、サーバーが Oracle Hyperion Planning のために設けられている場合、サーバー RAM の 75% を Java に配分し、そうではない場合、25% から 50% の RAM を Java へ配分します。最小メモリー設定は 128MB にしてください。

手順は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド* の JVM メモリー割当ての増加の項を参照してください。

暗黙的な共有の問題

シナリオ:

暗黙的な共有関係のあるメンバーの場合、親と子が同じ Oracle Hyperion Planning フォームに表示されると、親に入力された値のみが保持されます。次の例では、親と子の値は常に同じなため、Planning により Parent A と Child 1 間に暗黙の共有関係が作成されます。これらの例ではすべてのメンバーが「保管」データ・タイプに設定されているものとします。

例 1:

```
Parent A
  Child 1 (+)
```

例 2:

```
Parent A
  Child 1 (+)
  Child 2 (~)
  Child 3 (~)
```

ほとんどの Planning アプリケーションはボトムアップ・アプリケーションなので、通常、親は読取り専用なため、データは子に入力されます。イベントの典型的なシーケンス:

1. フォームに子が、通常、親の上に表示されます。
2. 子に対し新規データが入力されます。
3. フォームが保存されます。保存操作では、フォームは左から右へ、上から下へ読み取られるので、子は最初に保存されます。
4. 次に、保存操作はグリッド内の最後の値(一番下で一番右の値)を取り出しますが、暗黙的な共有のため、それにより子の値は上書きされます。子に入力されたデータは破棄されます。

解決策:

Planning フォームの要件に応じて、これらの方法を使用して、暗黙的な共有を避けることができます。

- 親と子が同じフォームにある場合: 集約の子としてダミーのメンバーを追加します。ダミーのメンバーはアウトラインに含まれますが、フォームでは使用されません。暗黙的な共有は親が集約の子のみを持つ場合には使用できません。
- ラベルのみの親の場合: 存在する集約の子の数にかかわらず、最初の子メンバーを含む暗黙的な共有が存在します。この状況で暗黙的な共有を使用不可にするに

は、「ラベルのみ」ストレージ・タイプを変更するか、または同じフォームに親と子を含めないようにします。

- 「共有しない」に設定できる親の場合: アプリケーションで必要な場合、親メンバーを「共有しない」ストレージ設定に設定できます。「共有しない」親は、複数の集約の子を持つ「保管」親と同様に動作します。ただし、「保管」親とは異なり、「共有しない」親は集約の実行後に、その子の集約された値のみを表示します。

ノート:

1つの子を持つ親の場合、デフォルトのストレージ・タイプの「保管」の使用(暗黙的な共有関係を保持)は通常有利です。それにより、作成されるブロック数、データベース・サイズ、計算時間および集約時間が削減されるからです。必要な場合にのみ、「共有しない」を使用してください。

暗黙的な共有の詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*を参照してください。

データベースの管理エラー

シナリオ:

データベースの管理エラーは 8.3 命名ルールが使用されない場合に発生します。アプリケーション・データベースが作成またはリフレッシュされる場合、エラー・メッセージ「データベースの管理エラーが検出されました(開始 1060044)。アウトラインを開きませんでした -2147218904」が表示される場合があります。

解決策:

データベースの管理エラーを解決するには、オペレーティング・システムの変数をリダイレクトする必要がある場合があります。Oracle Essbase では、オペレーティング・システムの Temp および Tmp 環境変数に対し 8.3 文字の命名ルールが必要です。次の手順に従って命名ルールを確認し、必要に応じて変数を再び割り当てます。

ファイルの命名ルール

変更を行う前に、Oracle Hyperion Planning サーバーにログオンしていることを確認します。

Windows 2000 の環境変数をチェックするには:

1. Planning を閉じます。
2. Essbase を閉じます。
3. Windows のデスクトップで「マイ・コンピュータ」を右クリックします。
4. 「プロパティ」を選択します。
5. 「詳細」を選択します。
6. 「環境変数」を選択します。
7. ユーザー変数の Temp と Tmp の設定を、8.3 命名ルールに変更します。

例: C:\Temp

8. 開いて、アウトラインを開きます。
9. 閉じて Planning を再起動します。
10. 「データベースの管理」 ページでデータベースの作成またはリフレッシュを試行します。エラーが生じた場合、その前のステップを繰り返しますが、今度は C:\tmp と呼ばれるフォルダも作成し、システム環境変数 **Temp** および **Tmp** を C:\tmp へ設定します。

エラーが続く場合、C:\tmp に Temp フォルダを作成します。前のステップを繰り返し、ユーザーの最初の変数、そしてシステム変数を C:\tmp\tmp へリダイレクトします。それでもエラーが続く場合は、環境変数を C:\tmp へリダイレクトします。

ノート:

ユーザー変数およびシステム変数の Temp と Tmp の設定は独自のものである必要があります。ユーザー変数およびシステム変数を同じフォルダへ設定しないでください。

最大数のアプリケーションがすでに接続されているか、データベースがロックされている

シナリオ:

リレーショナル・データベースとして DB2 を使用しており、データベースを作成またはリフレッシュしようとする次のメッセージのどちらかが表示されます。

- 「最大数のアプリケーションがすでに接続されています。」
- 「データベースがロックされています...」

MAXAPPLS パラメータの値はデフォルトで 40 に設定されています。

解決策:

MAXAPPLS パラメータの値を大きくして、許可されるアプリケーションの数を増やします。

MAXAPPLS パラメータの値を増やすには:

1. 「コントロール・センター」でデータベースを右クリックし、「パラメータの構成」を選択します。

または、DB2 ウィンドウからもパラメータを設定できます。

2. 次のフォーマットを使用して MAXAPPLS パラメータを設定します。

```
db2 -v update db cfg for database name using MAXAPPLS n
```

```
db2 -v terminate
```

database name はリレーショナル・データベースの名前で、*n* は同時に接続できるアプリケーションの数になります。たとえば、「Business」という名前のデータベースに対し同時に接続できるアプリケーションの最大数を 100 にする場合は次のように指定します。

```
db2 -v update db cfg for Business using MAXAPPLS 100
```

```
db2 -v terminate
```

WebLogic Server パラメータの最適化

シナリオ:

以下の状況がお使いの環境に当てはまる場合は、解決策に記載されている WebLogic Server の設定を確認します。

- アプリケーションのパフォーマンスが低下している。
- [パフォーマンスの最適化](#)の解決策を試した。
- アプリケーションで WebLogic Server を使用している。

解決策:

WebLogic Server のパフォーマンス設定を調整するには:

1. WebLogic Server 管理コンソールを開きます。
2. デプロイ済の Oracle Hyperion Planning アプリケーション、「構成」タブ、「チューニング」タブを選択し、次の値を設定します:

- **サーブレット・リロード・チェック: -1**

このオプションは、サーブレットが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、リロードするのに必要な秒数を設定します。値-1は確認しません。

- **リソース・リロード・チェック: -1**

このオプションは、リソースが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、リロードするのに必要な秒数を設定します。

- **JSP ページ・チェック: -1**

このオプションは、JSP ファイルが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、再コンパイルするのに必要な秒数を設定します。

3. サーバーのプロパティを開き、**調整**タブ、**ネイティブ IO の使用可能**の順に選択します。

このオプションを選択すると、WebLogic Server がネイティブ・パフォーマンス・パックを確実に使用します。デフォルトでは、プロダクション・モードの場合、ネイティブ・パフォーマンス・パッケージは config.xml で使用可能です。

4. HTTP のアクセス・ログを無効にするには、サーバーのプロパティを開き、**ロギング**・タブ、「HTTP」タブを選択し、**HTTP アクセス・ログ・ファイル使用可能**をクリアします。

デフォルトでは、WebLogic Server は HTTP アクセス・ログを使用可能にします。Web Server はすでに HTTP アクセス・ログを作成しているため、このステップで無効にします。

注意:

HTTP アクセス・ログ・ファイルは要求の数に比例して増大します。ログの循環を適切に設定しないと、アクセス・ログ・ファイルは非常に増大し、ディスクを満杯にして、アプリケーションおよびオペレーティング・システムの停止を引き起こす可能性があります。このような状況が発生したら、ログ・ファイルを削除するために、アプリケーション・サーバーを停止し、再起動する必要があります。

Windows ネットワーク・パラメータの最適化

シナリオ

Windows システムでネットワークのパフォーマンスが低下している。

解決策

Windows オペレーティング・システムを調整してネットワーク・パフォーマンスを最適化します。

Windows パフォーマンスを最適化するには:

1. Windows のレジストリを開き、TcpTimedWaitDelay パラメータを 30 に設定します。

このステップはオペレーティング・システムが閉じたポートを再利用するための時間をデフォルトの設定の 4 分(240 秒)から減らします。このパラメータは HKLM \System\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters にあります。

パラメータ名: TcpTimedWaitDelay

2. MaxUserPort パラメータを 65534 に設定します。

このステップは、アプリケーションで開くことのできるポートの数をデフォルトの 5,000 から増加させます。このパラメータは HKLM\System\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters にあります。

パラメータ名: MaxUserPort

Planning での復元アプリケーションの登録

シナリオ:

Oracle Hyperion Planning アプリケーションを復元しましたが、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で選択することはできません。

解決策:

Planning から Oracle Hyperion Shared Services にアプリケーションを登録します。

復元済の Planning アプリケーションを、Planning から Shared Services に登録するには:

1. ブラウザで、EPM Workspace の「ログオン」ページの URL を入力します

2. EPM Workspace で、「ナビゲート」、「アプリケーション」、「Planning」の順に選択します。Planning アプリケーションを選択します。プロンプト表示された場合は、ログオン情報を入力します。
3. 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
4. 「表示」で「拡張設定」を選択し、「実行」をクリックします。
5. 「Shared Services の登録」をクリックします。

セッションのタイムアウト

シナリオ:

ユーザーがログオフするのではなく、ブラウザを閉じてセッションを終了すると、一定期間を経てセッションがタイムアウトになり、ユーザー名が統計ページから除去されます。セッションがタイムアウトになる前に、Web アプリケーション・サーバーでタイムアウト設定を修正することにより分数を変更できます。HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルを変更します。

解決策:

セッションのタイムアウト設定を変更するには:

1. HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルを開きます。
2. タイムアウト設定を変更し、変更を保存します。
たとえば、session-timeout 設定の数字 60 を使用する分単位の時間に変更します。
タイムアウト設定を変更するには、Web アプリケーション・サーバーのドキュメントを参照してください。

ダイアルアップ接続でフォームを開くとパフォーマンスが低下する

シナリオ:

速度の遅いネットワーク接続(モデムなど)を使用してフォームを開くときに時間がかかります。

解決策:

フォームを開く場合、web.xml ファイルを変更することにより、ネットワーク帯域幅を増加できます。これで、Oracle Hyperion Planning サーバーからクライアントに送信されるデータ・ストリームが約 90%圧縮されます。

ノート:

WebLogic (サポート対象のすべてのバージョン) Web アプリケーション・サーバーを使用する場合、WebLogic 特有の 2 番目の手順を完了します。他の Web アプリケーション・サーバーを使用する場合は、最初の手順を完了します。

WebLogic 以外の Web アプリケーション・サーバーのパフォーマンスを向上させるには:

1. HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. タグ</description>とタグ<listener>の間に、次の行を挿入します。

```
<filter>

<filter-name>HspCompressionFilter</filter-name> <filter-
class>com.hyperion.planning.HspCompressionFilter</filter-
class>

  <init-param>
    <param-name>compressionThreshold</param-name>
    <param-value>2048</param-value>
  </init-param>
  <init-param>
<param-name>debug</param-name> <param-value>1</param-value>
  </init-param>
</filter>

<filter-mapping>
  <filter-name>HspCompressionFilter</filter-name>
  <url-pattern>/EnterData.jsp</url-pattern>
</filter-mapping>
```

3. web.xml ファイルを保存します。

WebLogic を使用する場合、.ear ファイルを手動で変更し、Web アプリケーション・サーバーにデプロイしなおす必要があります。

WebLogic アプリケーション・サーバーでパフォーマンスを改善するには:

1. HyperionPlanning.ear ファイルを、たとえば/ear で解凍します。
2. /ear の Hyperion.war から/war に解凍します。
3. テキスト・エディタで、/war/WEB-INF/web.xml を開き、前の手順のステップ 2 の指示に従って変更します。
4. /war のコンテンツを/ear/HyperionPlanning.war に圧縮します。
5. /ear のコンテンツを、/ear/HyperionPlanning.ear に圧縮します。
6. 新しい HyperionPlanning.ear を WebLogic Web アプリケーション・サーバーにデプロイします。

「アプリケーションを作成できません」エラー

シナリオ:

Oracle Hyperion Planning にアプリケーションを作成しようとする、次のエラー・メッセージが表示されることがあります。「アプリケーション名のアプリケーションを作成できません。エラー番号: -2147160060」。

解決策:

いくつかの原因が考えられます。この問題を解決するには、次の条件が満たされていることを確認します。

- Oracle Essbase が実行されている。
- 上級ユーザー権限がローカル・コンピュータで構成されている。
- 管理者ユーザーが HsxServer と HspDataSource で構成されている。
- Essbase スーパーバイザ・ユーザー名が Planning 管理者ユーザー名と一致する場合、パスワードが同じである。
- ローカル認証を使用する場合、コンピュータ名はユーザー名と異なる必要がある。
- Planning アプリケーション名と Essbase アプリケーション名が同じではない。
- DB2 を使用している場合、データベースが正しく構成されていないことをエラー・メッセージが示す可能性があります。これには、監査表が正しく構成されていないなど、様々な原因が考えられます。

アプリケーション・エラーがリフレッシュできない

シナリオ:

DB2 データベースを使用中、Oracle Hyperion Planning のアプリケーションをリフレッシュすると、エラーが表示されます。

解決策:

ログ・ファイルに十分な容量が割り当てられていないため、DB2 でトランザクション・ログのリフレッシュまたは正しい作成が行われませんでした。(Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドを参照してください。)この問題を解決するには、次の手順を実行してください:

DB2 のトランザクション・ログに十分なスペースを割り当てます:

1. DB2 コマンド・センターで、「ツール」、「ウィザード」、「データベースの構成ロギング・ウィザード」の順に選択します。
2. データベースに接続し、「循環ロギング」が選択されていることを確認します。
3. 次の画面で、最初のログ・ファイル数(たとえば 20)と 2 番目のログ・ファイル数(たとえば 10)を増やします。
4. 各ログ・ファイルのサイズを増やします(たとえば 2000)。
5. 「次へ」をクリックし、すべてのデフォルト値を受け入れます。
6. 「要約」で、ユーザー名とパスワードを入力します。

7. 「終了」をクリックします。
8. DB2 を再起動します。
9. データベースをリフレッシュします。

アプリケーションの変更をすべて終わってからまとめてリフレッシュするのではなく、いくつかの変更を終えるたびにデータベースを頻繁にリフレッシュするようにします。

ログオンできない

シナリオ:

Oracle Hyperion Planning Web クライアントにログオンすると、次のようなエラーが表示されます: ログインに失敗しました。再試行してください。

解決策:

ユーザー名とパスワードが有効であることを確認します。

Oracle Essbase サーバーと Oracle Hyperion Shared Services が実行されていることを確認します。

エラー・ログをレビューします。(Oracle Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドを参照してください。)

ログオン時にログオン・ボタンが表示されない場合は、Web ブラウザでセキュリティ・設定を調整し、Planning サーバー名を「信頼されたサイト」として追加します。たとえば、インターネットエクスプローラで「ツール」、「インターネット・オプション」、「セキュリティ」、「信頼されたサイト」、「サイト」の順に選択し、http:// サーバー名を信頼されたサイト・ゾーンとして追加します。

アプリケーションとデータベースの命名規則

アプリケーションを命名する場合は、次のルールに従います:

- アプリケーションの名前には、8文字まで使用できます。
- スペースは使用しないでください。
- 次の特殊文字は使用できません。
 - アスタリスク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大カッコ
 - コロン
 - カンマ
 - 等号
 - 大なり記号
 - 小なり記号
 - 期間
 - プラス符号
 - 疑問符
 - 引用符(二重および単一)
 - セミコロン
 - スラッシュ
 - タブ
 - 垂直棒
- リレーショナル・データベース環境のアプリケーション名には、拡張文字は使用できません(アンダースコアを除く)。
- 集約ストレージ・データベースでは、アプリケーション名に DEFAULT、LOG、METADATA または TEMP を使用できません。

名前には大文字小文字のどちらでも使用できます。アプリケーション名は、入力した通りに作成されます。

Oracle Essbase アプリケーションおよびデータベース作成の詳細は、Essbase 製品ドキュメントを参照してください。

ディメンション、メンバー、別名、フォームの命名規則

ディメンション、メンバーおよび別名を命名する場合は、次のルールに従います。

- Unicode モード以外のディメンション、メンバーまたは別名の場合は 80 バイトまでとします。Unicode モードのディメンション、メンバーまたは別名の場合は、シングル・バイト換算で 80 文字までとします。
- メンバー名、ディメンション名、別名、説明では、HTML タグは使わないでください。
- 引用符、大カッコ、円記号(バックスラッシュ)またはタブは使用できません。大カッコは認められていますが、ブロック・ストレージ・アウトラインでは推奨されていません。これは、集約ストレージ・アウトラインに変換する場合にエラーの原因となることがあるためです。
- ディメンションまたはメンバーの名前の最初の文字にはこれらの文字を使用できません。
 - アット・マーク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大カッコ
 - カンマ
 - ダッシュ、ハイフンまたはマイナス符号
 - 等号
 - 小なり記号
 - 丸カッコ
 - ピリオド
 - プラス符号
 - 引用符
 - アンダースコア
 - 縦棒
- 名前の最初または最後には、スペースを挿入しないでください。そのスペースは無視されます。
- メンバー名ではスラッシュ(/)は使わないでください。
- カスタム・カレンダーの期間で、接頭辞にスペースは使用できません。
- ディメンション名またはメンバー名に、次の語を使用しないでください。
 - 計算スクリプト・コマンド、演算子およびキーワード。

コマンドのリストについては、Oracle Essbase の製品ドキュメントを参照してください。

- Report Writer のコマンドについては、Oracle Essbase テクニカル・リファレンスを参照してください。
- 関数名と関数引数。
- 他のディメンションの名前、他のメンバーの名前(メンバーが共有でない場合)、世代名、レベル名およびデータベースでの別名。
- 動的時系列が使用可能な場合、履歴、年、季、期間、四半期、月、週または日は使用しません。

- 次の語:

- * ALL
- * AND
- * ASSIGN
- * AVERAGE
- * CALC
- * CALCMBR
- * COPYFORWARD
- * CROSSDIM
- * CURMBRNAME
- * DIM
- * DIMNAME
- * DIV
- * DYNAMIC
- * EMPTYPARM
- * EQ
- * EQOP
- * EXCEPT
- * EXP
- * EXPERROR
- * FLOAT
- * FUNCTION
- * GE
- * GEN

- * GENRANGE
- * GROUP
- * GT
- * ID
- * IDERROR
- * INTEGER
- * LE
- * LEVELRANGE
- * LOCAL
- * LOOPBLOCK
- * LOOPPARMS
- * LT
- * MBR
- * MBRNAME
- * MBRONLY
- * MINUS
- * MISSING
- * MUL
- * MULOP
- * NE
- * NON
- * NONINPUT
- * NOT
- * OR
- * PAREN
- * PARENPARM
- * PERCENT
- * PLUS
- * RELOP
- * SET
- * SKIPBOTH
- * SKIPMISSING

- * SKIPNONE
- * SKIPZERO
- * STATUS
- * TO
- * TOLOCALRATE
- * TRAILMISSING
- * TRAILSUM
- * TYPE
- * UMINUS
- * UPPER
- * VARORXMBR
- * XMBRONLY
- * \$\$UNIVERSE\$\$
- * #MISSING
- * #MI

計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値でのディメンションとメンバー名

メンバー名を代替変数の値、計算スクリプト、レポート・スクリプト、フィルタ定義、パーティション定義または式で使用する場合は、MDX 文では大カッコ (()) で囲む必要があります。また次の状況ではブロック・ストレージ・データベースで使用するために、二重引用符 (") で囲む必要があります。

- 名前が 1 つまたは複数の数字で始まる場合(たとえば、100)
- 名前にはスペースまたは次の文字が含まれます。

文字	説明	文字	説明
&	アンパサンド	>	大なり記号
*	アスタリスク	<	小なり記号
@	アット・マーク	()	丸カッコ
\	円記号(バックスラッシュ)	%	パーセント記号
{ }	中カッコ	.	ピリオド
:	コロンの	+	プラス記号
,	カンマ	;	セミコロン

文字	説明	文字	説明
-	ダッシュ、ハイフン / またはマイナス		スラッシュ
!	感嘆符	~	チルダ
=	等号		

計算スクリプトと式では、Oracle Essbase キーワードでもあるメンバー名を含む場合、ブロック・ストレージ・データベースでは引用符(" ")、集約ストレージ・データベースでは大カッコ([])でメンバー名を囲む必要があります。

BEGIN DOUBLE ELSE END FUNCTION GLOBAL IF
MACRO MEMBER RANGE RETURN STRING THEN

計算スクリプト、レポート・スクリプトまたは式で、スペースまたは次の文字を含む名前、またはスペースまたは次の文字で始まる名前を引用符で囲みます: +、-、*、/、()、コロン、カンマ、@、セミコロン、}、[]、<

数字で始まる名前も引用符で囲みます。例:

```
@SUM(ac1, "12345");
```

ユーザー名の命名規則

ユーザー名には最大 80 文字まで使用できます。

フォームの式関数

式および式の関数の使用

式の行または列を作成したら、「セグメント・プロパティ」ペインを使用して式を定義します。式には、グリッド参照、算術演算子、およびオプションで算術関数を指定します。完全なリストは、[式の関数](#)を参照してください。

ノート:

Oracle Hyperion Planning にはメンバー式を持つ動的計算のレベル 0 メンバーが必要です。式を持たない動的計算メンバーの場合、リフレッシュ時に Planning によりセミコロン(;)が挿入されます。セミコロンは Oracle Essbase の「式」フィールドに表示されます。

式の作成

式を作成するには:

1. 式に関連付ける行または列を選択します。
2. 自動的に展開されない場合は、「セグメント・プロパティ」を選択します。
3. 「式」に式の名前を入力し、 をクリックします。
4. 「式」ボックスが表示されたら、COUNT()、MAX()、IfThen()など、その式が実行する演算または関数を選択します。[式の関数](#)を参照してください。
5. 式にエラーがないことを確認するには、「検証」をクリックします。

式の編集

式を編集するには:

1. 式の行または列のあるフォームを開きます。
2. 「レイアウト」で、番号の付いた式の行または列を選択します。
3. 「セグメント・プロパティ」を使用して、式のプロパティを変更します。
4.  をクリックして、実行する演算または関数を変更します。
5. フォームを保存します。

式の削除

式を削除するには:

1. 式の行または列を選択します。
2. 「削除」ボタンをクリックします。
3. 式の削除を確認するには:
 - a. 式バーのチェックマークをクリックします。
 - b. グリッドの別のセルをクリックして、式バーをリセットします。
 - c. 式を削除したセルをクリックして、削除を確認します。

式の関数

この項では、フォームの式の行および列に式を作成できる算術関数を定義します。式の行および列をフォームに挿入するには、[式の行と列の追加](#)を参照してください。

算術関数の構文:

```
FunctionName(arguments)
```

表 B-1 算術関数の構文

変数	説明
<i>FunctionName</i>	算術関数の名前
<i>arguments</i>	数値、または行、列、セルの参照、あるいは埋め込まれた関数

表 B-2 算術関数

関数	説明
Abs	数値または参照先の絶対値を返します
Average	数値や参照先の集合の平均を返します
AverageA	数値や参照先の集合の平均を返します。抑制されていない行または列についてのみ、計算に#Missing セルが含まれます。
Count	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します
CountA	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します。抑制されていない行または列についてのみ、計算に#Missing セルが含まれます。
Difference	数値または参照先と、別の数値または参照先との差の絶対値を返します
Eval	式を評価します。Eval は、式を関数の引数として埋め込むために使用します

表 B-2 (続き) 算術関数

関数	説明
IfThen、If	指定した条件が真の場合と偽の場合で異なる値を返します
Max	数値や参照先の集合の最大値を返します
Min	数値や参照先の集合の最小値を返します
Mod	除算した余り(モジュラス)を返します
PercentOfTotal	数値または参照先を、別の数値または参照で割った結果を 100 倍した値を返します
Pi	15 桁の円周率の値(3.14159265358979)を返します
Product	すべての数値または参照先の積を返します
Random	0.0 と 1.0 の間の乱数を返します
Rank	指定した列または行の最大値または最小値を返します
Round	数値を指定した桁数に切り上げまたは切り下げます
Sqrt	数値、行、列、セルの値の平方根を返します
Sum	数値や参照先の集合の合計を返します
Truncate/Trunc	数値の指定した桁数を除去します
Variance/Var	現在の勘定科目に基づいて、指定された値の差を求めます
VariancePercent/VarPer	現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて、指定された値のパーセントの差を求めます

引数

算術関数では、数値、行、列、セルの参照、埋込み関数を引数として使用します。引数には、次の 4 つのタイプがあります:

- 数値
- プロパティ
- 行、列またはセルの参照
- 埋込み関数

数値引数

数値引数の構文は次のとおりです:

(numeral1, numeral2, ... numeraln)

ここで、数値 1 から n は、小数および負数を含む任意の数字です。たとえば、Average(10,20,30)は、値 20 を戻します。

行、列、セルの参照引数

行、列、セルの参照引数では、グリッド内の行、列またはセルを指定します。構文:

```
FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].Property)
```

表 B-3 引数のコンポーネント

引数	説明
<i>GridName</i>	<p>フォームの名前。例:</p> <p>Difference (grid1.row[5], grid1.row[6])は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を戻します。</p> <p>オプション。GridName を指定しない場合、デフォルトは現在のフォームの名前になります。</p>
<i>GridElement</i>	<p>キーワード row、col、column、または cell のうちのいずれかです。</p> <p>たとえば、Max(row[1], row[2], row[3])は、これらの 3 行の最大値を戻します。GridElement はオプションです。ただし、セル参照には、行および列のセグメント ID が必要です。たとえば、cell[2, A]と[2, A]は両方とも、行 2 と列 A の交差であるセルを参照します。キーワード cell は、オプションです。セルの参照には、[row, col]構文または[col, row]構文を使用できます。</p> <p>オプション。GridElement が指定されていない場合、文字は列を、数字は行を示します。たとえば、Max ([1, A], [2, A], [3, A])という構文は、列 A の行 1、2 および 3 を参照します。</p>
<i>segment</i>	<p>行、列またはセル参照の番号。展開される行または列に対しては、セグメントを指定する必要があります。たとえば、row[2]は、行セグメント 2 を指します。セグメントは、角カッコ []で囲んで示します。</p> <p>必須。</p>

表 B-3 (続き) 引数のコンポーネント

引数	説明
<i>range</i>	<p>指定されたセグメントから展開される行、列またはセル。範囲が指定されている場合は、指定された範囲のみを指定して式が計算されます。たとえば、row[2(3:5)]では、展開されたセグメント 2 の 3 番目から 5 番目までの行のみが使用されます。</p> <p>オプション。範囲が指定されていない場合、展開されるセルのすべてが使用されます。</p> <hr/> <p>ノート: セグメントが 1 行または 1 列のみの場合は、範囲引数を使用しないでください。</p> <hr/>
<i>property</i>	<p>キーワード average、averageA、count、countA、max、min、product または sum のいずれかです。プロパティにより、指定済の展開される行、列またはセルを集約する方法を指定します。</p> <p>参照が引数の場合にはプロパティを指定しないことをお勧めします。プロパティを指定しないと、関数による参照の計算が最適な方法で実行されます。たとえば、次の式は、行 1 と行 2 にあるセルの平均を戻します:</p> <p>Average(row[1], row[2])</p> <p>一方、次の式は、最初に row[1]の平均を計算してから row[2]の平均を計算し、次にこれらの 2 つの値を足して 2 で割ります:</p> <p>Average(row[1].average, row[2].average)</p> <p>行、列またはセル参照のデフォルトのプロパティは、sum プロパティです。たとえば、row[2]は Sum(row[2])と等価です。</p>

セグメントのみが参照の必須コンポーネントなので、次の参照は同じになります:

```
Grid1.row[1].sum
```

```
[1]
```

AverageA と CountA の計算には、#Missing セルも含まれます。たとえば、行 1 が、Qtr1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開するセグメント行の場合、次の関数は 4 という結果を戻します:

```
row[1].CountA
```

これ以外のすべての関数は、#Missing データ・セルを計算から除外します。たとえば、前述の Qtr 1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開する行 1 で、次の例は 3 という結果を返します:

```
row[1].Count
```

プロパティ引数

プロパティ引数は、展開される参照を 1 つの値に集計します。この集計値は、後に計算で使用されます。プロパティ引数は、集約行、列、またはセルでの計算に使用できます。プロパティ引数には、次の 2 つのタイプがあります:

- 集約プロパティ引数(集約プロパティ引数を参照)
- 参照プロパティ引数(参照プロパティ引数を参照)

集約プロパティ引数

集約行、集約列、集約セルは、それぞれ複数の行、列、セルを含んでいます。

集約プロパティ引数は、次の算術関数の構文の最後にある引数です。

```
FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].property)
```

次の集約プロパティを行、列またはセルの参照に適用します。

表 B-4 集約プロパティ

プロパティ	説明
Average	行、列またはセルの平均を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
AverageA	行、列またはセルの平均を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値が含まれます。
Count	行、列またはセル内の値の数を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
CountA	行、列またはセル内の値の数を返します。計算では、#MISSING 値と#ERROR 値をゼロ(0)として処理します。
Max	行、列またはセルの最大値を返します
Min	行、列またはセルの最小値を返します
Product	行または列の積を返します
Sum	行、列またはセルの合計を返します

算術関数引数として使用される場合は、プロパティのデフォルトはその関数と同じになります。次の例では、デフォルトのプロパティは Average です。

```
Average(row[2])
```

算術関数引数として使用されない場合は、プロパティのデフォルトは **sum** になります。次の例では、デフォルトのプロパティは集約行の **sum** です。

```
row[2]
```

参照プロパティ引数

参照プロパティ引数は、式の参照結果の処理方法を指定します。この引数は、他のプロパティとともに使用します。

参照プロパティ引数には、IfNonNumber/IFFNがあります。

IfNonNumber は、#MISSING 値および#ERROR 値のかわりに使用する特定の数値を指定します。構文:

```
AXIS[segment(range)].IfNonNumber(arg).AggregateProperty
```

引数	説明
AXIS	キーワード row 、 column または cell のいずれかです オプション
セグメント(範囲)	行番号、列の文字などの軸の有効な参照を示します
IfNonNumber	軸の参照先にデータがない場合やエラーの場合の処理方法を示します
(引数)	AxisRef の欠落データやエラー・データのかわりに使用する数値を示します
AggregateProperty	集約関数は、集約セグメントで使用されます オプション

例:

`cell[1,A] = 3`、かつ

`cell[1,B] = #MISSING` のときに、

式:

```
cell[1,A] / cell[1,B]
```

は、#ERROR を戻します。

式:

```
cell[1,A] / cell[1,B].ifNonnumber(1)
```

は、`cell[1,B]` を 1 に置換し、3 を戻します。

ノート:

グリッドの#MISSING を抑制しており、グリッドの行や列に IfNonNumber プロパティを含む式がある場合は、#MISSING は抑制されたままになります。

引数への関数の埋込み

関数の引数に、関数を埋め込むことができます。

例:

次の例では、Average 関数を Sum 関数の中に埋め込んでいます:

```
sum(row[3:5], avg(row[4:6], 40, 50), row[7:9], 70, 80)
```

- 行セグメント 3、4 および 5
- 行セグメント 4、5、6 と、数値 40 と 50 の平均
- 行セグメント 7 および 9
- 数値 70 および 80

Abs

Abs は、数値、行、列、またはセルの絶対値を戻す算術関数です。数値の絶対値は、符号に関係なく数値そのものです。正数は変更されませんが、負数は正数に変化します。関数の構文:

```
Abs  
(argument)
```

ここで、*argument* は、次のいずれかです:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Abs (-20) は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できません。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。 参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数

例:

次の式は、引数に数値を取り、30 という値を戻します。

```
Abs ( -30 )
```

次の例は、行 1 の値の絶対値を戻します。

```
Abs(row[1])
```

次の例は、列 E の合計の絶対値を戻します。

```
Abs( column[E].sum )
```

次の例は、フォーム **Grid1** のデザイン・セグメント 3 の展開された行 1 から 3 を示します:

```
Abs( Grid1.row[3(1:3)])
```

Average

Average は、数値、行、列またはセルの集合の平均を戻す算術関数です。**Average** では、平均を求めるときに **#MISSING** および **#ERROR** のセルは除外されます。

ノート:

欠落している値は、その値が抑制されるかどうかにかかわらず計算には含まれません。

関数の構文:

```
Average(arguments) or Avg(arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Average (10, 20, 30) は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。 参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> たとえば、 Avg(Grid1.row[4(3:5)]) は、フォーム grid1 、行 4、3 から 5 までの範囲の平均値を戻します。
関数	埋込み関数

例:

次の式は、20 という値を戻します。

```
Avg( 10, 30, 20)
```

次の例は、3 つの集約行に含まれるすべての数値の平均を戻します。

```
Average( row[1], row[6], row[8] )
```

次の例では、3 つの集約列 E、G、I の平均値を求めます。まず、各列の平均値を求め、その 3 つの値を平均します。

```
Avg(column[E].avg, column[G].avg, column[I].avg)
```

次の例は、集約行 3 の平均値を求め、その値を 100 で割ります:

```
Avg(row[3])/100
```

AverageA

AverageA は、数値、行、列またはセルの集合の平均を戻す算術関数です。AverageA の計算には、#MISSING および#ERROR のセルも含まれます。これらのセルは、平均を求める際にゼロ値として処理されます。

ノート:

#MISSING のセルと#ERROR のセルは、抑制されていない行や列の場合にのみ、計算に含まれます。

関数の構文:

AverageA(arguments) or AvgA(arguments)

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、AverageA (10, 20, 30) は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property たとえば、AvgA(Grid1.row[4(3:5)]) は、フォーム grid1、行セグメント 4、3 から 5 までの範囲の平均値を戻します。
関数	埋込み関数

例

次の例では、グリッドに値 10、20、30 および#ERROR がある 4 行が含まれます。5 行目にある次の式は、値 15 を戻します:

```
AverageA([1:4])
```

Count

Count は、数値、行、列またはセルの集合にある値の個数を戻す算術関数です。Count では、個数の取得時に#MISSING 値および#ERROR 値は除外されます。関数の構文:

Count (arguments)

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Count(10, 20, 30)</code> は、値 3 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

次の例は、3つの行 1、6、8にある値の個数を返します。

```
Count(row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、3つの列にある値の個数を返します。

```
Count(column[E], column[G], column[I])
```

次の例は、行 4 と列 D が交差するセルにある値の個数を返します。

```
Count(cell[D,4])
```

次の例は、グリッド 5 の集約行 3 にある値の個数を返します。

```
Count(grid1.row[3])
```

CountA

CountA は、数値、行、列またはセルの集合内の値の個数を返す算術関数です。個数の取得時には、**CountA** では、抑制されていない行または列の **#MISSING** セルおよび **#ERROR** セル内の値のみの個数を返します。関数の構文:

```
CountA(arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>CountA(10, 20, 30, 50)</code> は、値 4 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>CountA(GridName.GridElement[segment(range)]).property</code>

引数	説明
関数	埋込み関数

例

次の例は、グリッドに値 10、20、30 および#ERROR がある 4 行が含まれる場合です。5 行目にある次の式は、これらの 4 行にある値の個数を戻します:

```
CountA([1:4])
```

次の例は、4 つの行にある値の個数を戻します:

```
CountA(row[1], row[6], row[8] row[where data yields #ERROR])
```

Difference

Difference は、数値、行または列から別の数値、行または列を減算した差異の絶対値を戻す算術関数です。この関数は、Variance と呼ばれます。関数の構文:

Difference(arg1, arg2)

arg1 から arg2 が減算されます。これらの引数は、次の 1 つ以上の値を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Difference (3, 5) は、絶対値 2 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property 次の例は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を戻します: Difference(grid1.row[1],grid1.row[6])
関数	埋込み関数

ノート:

Difference 関数は、arg2 から arg1 を差し引いた値の絶対値を戻します。引数のマイナス符号は、負数を示します。

例:

次の例は、絶対値 8 を戻します。

```
Difference(3, -5)
```

次の例は、2 つの集約列の差を戻します。

```
Difference( column[E], column[G] )
```

ノート:

テキスト・ラベルには、"Difference"と"Variance"のいずれでも入力できます。

Eval

Eval は、式を評価する算術関数です。Eval を埋込み関数の引数として使用して 1 つの式に複数の式を結合できます。関数の構文:

Eval(式)

ここで、式は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポイント。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数
演算子	サポートされている算術演算子(+、-、*、/、^、%など)。

例

次の例は、行 1 を行 2 で割り、その値を 4 桁に丸めます:

```
Round(Eval([1]/[2]),4)
```

IfThen、If

IfThen 関数は、条件が真であるか偽であるかに応じて異なる値を戻す条件関数です。

関数の構文:

```
IfThen(Condition, TrueParameter, FalseParameter)
```

- **条件**は、true または false を評価する論理式です。ブール演算子(And、Not、および Or)と同様に、完全な条件論理を使用できます。条件は、#MISSING 値および #ERROR 値に対するテストの実行にも使用できます。有効な条件演算子のリストは、次の表を参照してください。
- **TrueParameter** と **FalseParameter** は、条件の結果に基づいて評価される任意の有効な式です。

次の表に、完全にサポートされている条件演算子の説明を示します。条件演算子によってサポートされている代替構文がある場合は、その構文がリストされています。

表 B-5 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
次と等しい	式 = 式	<p>左の式が右の式に等しいかどうかを調べます。</p> <hr/> <p>ノート: この条件を評価するルーチンは、丸め処理を考慮しません。丸め処理が必要な場合は、Round 関数を使用します。</p> <hr/> <p>例:</p> <pre> 1 = 4 F a l s e を戻します </pre>
次より大きい	式 > 式	<p>左の式が右の式より大きいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <pre> 1 > 4 F a l s e を戻します </pre>

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
次と等しいか大きい	式 >= 式	<p>左の式が右の式より大きい、または等しいかどうかを調べます。</p> <hr/> <p>ノート: 正しい構文は">="です。構文">"はサポートされていません。</p> <hr/> <p>例:</p> <pre>1 > = 4 F a l s e を戻します</pre>
次より小さい	式 < 式	<p>左の式が右の式より小さいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <pre>1 < 4 T r u e を戻します</pre>

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
次より小さい、または次と等しい	式 <= 式	左の式が右の式より小さい、または等しいかどうかを調べます。

ノート:
正しい構文は"<="です。構文"<"はサポートされていません。

例:

```
1  
<  
=  
4
```

True を戻します

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
次と等しくない	式 <> 式 式 != 式	左の式が右の式に等しくないかどうかを調べます。
<p>ノート: この条件を評価するルーチンは、丸め処理を考慮しません。丸め処理が必要な場合は、Round 関数を使用します。</p>		
<p>例:</p> <pre> 1 < > 4 T r u e を 戻 し ま す 1 ! = 4 T r u e を 戻 し ま す </pre>		

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
IsMissing	IsMissing (参照) IsMiss (参照)	参照先に#MISSING の値があるかどうかを調べます。

ノート:

展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#MISSING である必要があります。

例:

```

I
S
M
i
s
s
i
n
g(
[
1
]
)

```

行 1 の値が #MISSING のときに、True を

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
-------	----	------

戻
し
ま
す
。

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
IsError	IsError (参照) IsErr (参照)	参照先に#ERROR の値があるかどうかを調べます。

ノート:

展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#ERROR である必要があります。式行および式列のみ結果として#ERROR を戻すことができます。

例:

I
S
E
r
r
o
r(
[
2
])
行
2
の
値
が

E
R
R
O
R
の
と
き
に
、
T
r
u
e
を
戻
し
ま

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
-------	----	------

す
。

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
IsNonNumeric	IsNN (参照) IsNonNumeric (参照) IfNN (参照) IfNonNumber (参照)	参照先に、#MISSING または #ERROR の結果が含まれているかどうかを調べます。 <hr/> ノート: 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が #Error または #Missing である必要があります。

例:

I
 S
 N
 N(
 [
 3
]
)

 行
 3
 の
 値
 が
 #
 M
 I
 S
 S
 I
 N
 G
 か
 #
 E
 R
 R
 O
 R
 の
 と
 き
 に
 、
 T
 r
 u

表 B-5 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
		e を 戻 し ま す 。
カッコ	(条件)	条件をグループ化するために使用します。多くの場合、視覚的にわかりやすくするために使用します。 例: (1 > 4) F a l s e を 戻 し ま す

表 B-6 条件演算子

複合条件	構文	ロジック
And	(条件 AND 条件) (条件 & 条件)	2つの条件を比較するために使用される複合条件。すべての条件が True の場合に True を戻します。 例: (1 > 4 A N D 5 > 2) F a l s e を戻します

表 B-6 (続き) 条件演算子

複合条件	構文	ロジック
Not	NOT (条件) !(条件)	条件の結果を逆転(否定)します。 例: N o t (1 > 4) T r u e を 戻 し ま す
Or	(条件 OR 条件) (条件 条件)	2つの条件を比較するために使用される複合条件。いずれかの条件が True の場合に True を戻します。 例: (1 > 4 O R 5 > 2) T r u e を 戻 し ま す

条件文に関するノート

- 式- 任意の有効な数式。式には、定数(整数または実数)の任意の組合せ、参照、またはそれ以外の関数を使用できます。
- 参照- 任意の有効な参照。つまり、IFNN 参照プロパティを参照の一部として使用できます。
- 条件- 複合条件 And、Not、および Or に適用される任意の有効な条件。これらの演算子は、埋込み条件を持つことができます。

ノート:

And、Not、および Or 演算子は、カッコで囲まれている必要があります。

- 条件内の式のいずれかが#MISSING 値または#ERROR 値を戻す場合、If 関数は#MISSING または#ERROR を戻します。ただし、IsMissing 条件、IsError 条件または IsNonNumeric 条件を使用している場合にはこの規則は適用されません。

複合条件

複合条件 And、Or および Not は完全にサポートされています。ただし、カッコで囲まれている必要があります。

有効な例:

```
If ( ([A] > [B] and [A] > 1000), [A], [B])
```

無効な例:

```
If ( [A] > [B] and [A] > 1000, [A], [B])
```

Max

Max 関数は、数値、行、列またはセルの集合内の最大値を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Max (arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Max (10, 20, 30)は、値 30 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数

例:

次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最大値を戻します。

```
Max(row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、集約行の合計の最大値を戻します。

```
Max(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Min

Min 関数は、数値、行、列またはセルの集合の最小値を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Min (arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Min (10, 20, 30) は、値 10 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最小値を戻します。

```
Min (row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、集約行の合計の最小値を戻します。

```
Min(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Mod

Mod 関数は、除算した余り(モジュラス)を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Mod ( 引数1 , 引数2 )
```

ここで、*引数2* は、*引数1* の除数です。*引数1* と *引数2* は次の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Mod (6, 4) は、値 2 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。

引数	説明
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

次の例は、10 を 5 で割った余り 0 を戻します。

```
Mod (10,5) = 0
```

PercentOfTotal

PercentOfTotal は、ある数値、行、列またはセルを、別の数値、行、列またはセルで割った値に 100 を掛けた値を戻す算術関数です。関数の構文:

```
PercentOfTotal (arg1, arg2)
```

- ここで、*引数1* は、現在高(*引数2*)のコンポーネントです。通常、この引数は、行または列を参照します。
- ここで、*引数2* は、*引数1* に対する現在高です。通常、この引数は、総計を含むセル参照です。
- 引数1* は、*引数2* で除算され、その結果に 100 が掛けられます。*引数1* および *引数2* は、次に示す 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 PercentOfTotal (100, 20) は、値 500 を戻します。 数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

ノート:

この関数には、2 つの引数が必要です。

例:

次の例は、値 5% を戻します。

`PercentofTotal(20, 400)`

次の例では、列 A の各セルの値をセル A5 の「市場合計」の値で割り、100 を掛けた結果 `PercentOfTotal` を列 B に示します。式:

`PercentOfTotal ([A], [A,5]),`

次の表に、前述の例を使用した `PercentOfTotal` の結果を列 B に示します。

		A	B
1		Sales	% Total
2	Mkt1	60	20%
3	Mkt2	120	40%
4	Mkt3	120	40%
5	Total Mkt	300	100%

ヒント:

列 B のヘッダーをクリックし、式バーを使用して式を挿入します。

Pi

Pi は、算術定数 3.14159265358979 を 15 桁で戻す算術関数です。Pi(π)は、円周の直径に対する比率です。関数の構文:

`PI()`

例:

次の例は、行 3 を、 π と 2 の積で割った値を戻します。

`row[3] / (PI() * 2)`

Product

`Product` は、すべての数値または参照の積を戻す算術関数です。関数の構文:

Product(arguments)

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Product(2, 20)</code> は、値 40 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例:

次の例は、40 という値を戻します。

`Product(2, 20)`

Random

Random は、0.0 と 1.0 の間の乱数を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Random()
```

例:

次の例は、0.0 と 1.0 の間の乱数を戻し、それに 1000 を掛けます。

```
Random() * 1000
```

Rank

Rank は、指定された範囲内の値に対するランク値を算出する財務関数です。Rank 関数は、Oracle Hyperion Financial Reporting で処理され、データベース接続には依存しません。関数の構文:

Rank([参照], 順序)

Rank([参照], 順序, 一意)

引数	説明
参照	<p>列を識別する文字と行を識別する数字を使用して、ランク付けするセル、行または列の範囲を示します。たとえば、列 A の行 1 から行 5 の値をランク付けするには、[A,1:5]と指定します。</p> <p>セル範囲のある.ifNN プロパティを使用して、非数値の値を持つ任意のセルに数値を割り当ててランク付けできます。たとえば、ifNN(-1)を指定すると、値の欠落したセルすべてに値-1を割り当てます。</p>

引数	説明
順序	<p>値をランク付けする順序を示します。昇順でランク付けする場合の最小値は 1 です。昇順でランク付けする場合の最小値は 1 です。順序は、次のキーワードまたは値のいずれかで表します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Ascending Descending Asc Des Desc 1 (数値 1 は"昇順"と同義) 0 (ゼロは"降順"と同義) <p>キーワードの大文字と小文字は区別されません。</p> <hr/> <p>ノート: 順序を指定する数値やキーワードは、引用符で囲みません。</p> <hr/>
一意(オプション)	<p>オプション。参照パラメータで次のように同等の値を処理する方法を示すブール・キーワード。</p> <ul style="list-style-type: none"> false (または省略) - 同等の値には、同じランクが付けられます。ランク付けの結果が重複する場合があります true - 同等の値には個別のランクが付けられ、ランクは重複しません。参照パラメータの値は、出現順にランク付けされます。たとえば、行 2 と行 5 の値が同じ場合には、行 2 の値が行 5 の値より先にランク付けされます。

例

列 B の式は、列 A の行 1 から行 5 にある値を降順でランク付けします。

`Rank([A,1:5], descending)`

次のような結果になります。

Product	東部	Rank
コーラ	16	2
ジュース類	23	1
ビール	16	2
低カロリー	欠落	欠落

Product	東部	Rank
ルート・ビール	0	4

2つの値が同じ場合、同じランク値が付けられます。上の例では、コーラとビールが同じ値であるため、同じランク値が付けられます。

次の列 B の式は、数値でないものに-1 という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending)
```

次のように、欠落値のランクは5になります。

Product	東部	Rank
コーラ	16	2
ジュース類	23	1
ビール	16	2
低カロリー	欠落	5
ルート・ビール	0	4

例:

次の例では、前述の例の結果に一意パラメータがどのように影響するかを示します:

次の列 B の式は、非数値に-1 という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。また、ランクはそれぞれ一意であることも示しています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending, true)
```

次の結果では、欠落値に5のランクが割り当てられ、コーラと同じデータ値であってもビールには3のランクが割り当てられています。

Product	東部	Rank
コーラ	16	2
ジュース類	23	1
ビール	16	3
低カロリー	欠落	5
ルート・ビール	0	4

Round

Round は、指定された桁数で数値を切り上げまたは切り下げる算術関数です。関数の構文:

Round (引数1, 整数)

ここで、*引数1* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Round(81.3987,3)</code> は、値 81.399 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

整数は、数値を丸める桁数を指定します。

- 整数がゼロより大きい場合、小数点以下の指定した桁数に丸められます。
- 整数がゼロの場合は、最も近い整数に丸められます。
- 整数がゼロより小さい場合は、小数点より左側の桁数に丸められます。

例:

次の例は、小数点以下 3 桁に丸められます:

```
Round(3594.5567,3) = 3594.557
```

次の例は、最も近い整数の桁数に丸められます。

```
Round(3594.5567,0) = 3595
```

次の例は、1000 の桁に丸められます。スケールとも呼ばれます。

```
Round(3594.5567,-3) = 4000
```

Sqrt

`Sqrt` は、数値、行、列またはセルの平方根を戻す算術関数です。`Sqrt` 関数の構文:

```
Sqrt (
    argument
)
```

ここで、*argument* は、次のいずれかの引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Sqrt(100)</code> は、値 10 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。

引数	説明
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例

次の例は、値 4 を戻します。

```
Sqrt(16)
```

Sum

Sum は、数値、または行、列、セルにある値の和を戻す算術関数です。

Sum 関数の構文:

Sum (arguments)

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Sum(10, 20, 30)</code> は、値 60 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、30 という値を戻します。

```
sum(10,20)
```

- 次の例は、3 つの行の和を戻します。

```
sum(row[1],row[6],row[8])
```

- 次の例は、3 つの集約列の和を戻します。

```
sum(column[E], column[G], column[I])
```

式の行に `IDESC` が含まれている場合、合計には親とその子孫がすべて含まれます。

たとえば、フォームは、次の行(および各メンバーの子)で作成されます:

```
IDESC("Mem1"), IDESC("Mem2"), IDESC("Mem3"), IDESC("Mem4")
```

式の行が次の式で追加される場合:

```
SUM(ROW[1],ROW[2],ROW[3],ROW[4])
```

フォームがデータ・エントリのために開かれたとき、式の行によりすべての親とその子の合計が戻されます。

Truncate/Trunc

Truncate は、指定した桁で数値を除去する算術関数です。

構文:

```
Trunc (arg1, integer)
```

- ここで、*引数1* は、次のいずれかの引数を取ります:

引数	説明
数値	数値(例: 234.567)。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

- ここで、*整数*には、除去する桁数を指定します。
 - 正の整数は、小数点の右側の有効桁数を決定します。
 - 整数にゼロ(0)を指定すると、小数点の左側にある整数を戻します。
 - 負の整数は、小数点の左側の切り捨てられた有効桁数を示します。

例:

次の文では、正の整数 2 を指定しています。小数点以下 2 桁で除去されます。

```
Trunc(234.567, 2) = 234.56
```

次の文ではゼロ(0)を整数値として指定しています。小数点以下の数字はすべて除去されます。

```
Trunc(234.567, 0) = 234
```

次の文では、負の整数-2 を指定しています。小数点以下の数字はすべて除去され、整数の最後の 2 桁は切り捨てられます。

```
Trunc(234.567, -2) = 200
```

ノート:

セル、列または行に事前に適用されているフォーマットは、**Trunc** 関数を使用した場合でも維持されます。たとえば、事前に小数点以下3桁まで表示するようにフォーマットされているセルで **Trunc** 関数を使用すると、**Trunc(234.567, 0) = 234.000** のようになります。

Variance/Var

Variance は、現在の勘定科目の種別に基づいて、指定された値の差異を評価する財務関数です。たとえば、費用または負債勘定科目での正の結果は減少を示すので、負数として表示されます。この関数は、UDA 勘定科目タイプ(資産、負債、資本、収益および費用)で使用できます。

構文:

Var (*reference1*, *reference2*)

reference1 と *reference2* は、差異を計算するための、同じ勘定科目ディメンションのメンバーの行、列またはセルの参照です。

計算結果

次の表は、勘定科目で **Variance** 関数を使用した場合の計算結果を示しています。

表 B-7 Variance 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	正の値を戻します	負の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
費用	費用	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Variance の動作

- **Variance** 関数は、同じ勘定科目の種別での比較を要求します。販売と費用など、2つの異なる勘定科目の種別を比較する場合、**Variance** 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

販売	費用	結果
-400	100	-500

- **Variance** 関数を勘定科目タイプ以外のディメンションに適用すると、実行時に **#ERROR** を戻します。
- **#MISSING** のセルは、**IfNonNumber** プロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。

例

Variance 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

構文	例
列を参照する構文の例:	Var ([A], [B])
行を参照する構文の例:	Var ([3], [4])
セルを参照する構文の例:	Var (Cell [3,A], [3,B])

次に、列 A (実績) と列 B (予算) の差異を計算する例を示します:

Var([A],[B])

この例では、次のレポートが作成されます:

	Year	Product	Market
	Actual	Budget	Variance
	=====	=====	=====
Sales (Income)	400,855	373,080	27,775
COGS (Expense)	179,336	158,940	-20,396

VariancePercent/VarPer

VariancePercent は、現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて指定された値の差異をパーセントで評価する財務関数です。収益、フロー、資産、または残高の勘定科目では、正の結果は増加を示すため、正数で表示されます。費用または負債の勘定科目では、正の結果は減少を示すため、負数で表示されます。

構文:

VarPer (reference1, reference2)

ここで、reference1 と reference2 は、VariancePercent 関数の結果を計算する勘定科目ディメンションと同じディメンションのメンバーである行、列またはセルへの参照です。

計算結果

次の表に、UDA の勘定科目を、VariancePercent 関数で計算した結果を示します。

表 B-8 VariancePercent 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer ([A], [B])>0	VaPer ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	負の値を戻します	正の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します

表 B-8 (続き) VariancePercent 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer ([A], [B])>0	VaPer ([A], [B])<0
費用	費用	0	負の値を戻します	正の値を戻します

VariancePercent の動作

- VariancePercent 関数は、同じ勘定科目の種別間での比較を要求します。販売と費用など、2 つの勘定科目の種別間で比較すると、VariancePercent 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

販売	費用	結果
-400	100	-5.

- VariancePercent 関数を勘定科目タイプ以外のディメンションに適用すると、実行時に#ERROR を戻します。
- #MISSING のセルは、Ifnonnumber プロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。

例:

VariancePercent 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

構文	例
列を参照する構文の例	VarPer ([A], [B])
行を参照する構文の例	VarPer ([3], [4])
セルを参照する構文の例	VarPer (Cell [3,A], [3,B])

次に、列 A (実績)と列 B (予算)の VariancePercent を計算する例を示します:

VarPer([A],[B])

この例では、次のレポートが作成されます:

	Year Actual	Product Budget	Market VariancePercent
Sales (Income)	400,855	373,080	7%
COGS (Expense)	179,336	158,940	-13%

カスタム定義関数

@HspNumToString

この関数は、指定された数値の文字列タイプ値を戻します。

構文

```
@HspNumToString(NumericInput)
```

パラメータ	説明
NumericInput	文字列に変換する数値

ノート

戻り値は `string` 型です。

例

この例は、`@return` 文を使用してログに出力できるように 1000 を文字列に変換します。

```
@return(@hspnumtostring(1000),error);
```

1000 がログに出力されます。

@HspDateDiff

この関数は、渡される日付を含む 2 つの日付間の差(日数)を戻します。

構文

```
@HspDateDiff (fromDate,toDate)
```

パラメータ	説明
fromDate	日付の比較の開始日
toDate	日付の比較の終了日

ノート

戻り値は整数です。fromDate および toDate パラメータには、`yyyymmdd` フォーマットの日付、実際の日付値または変数を使用できます。

例

この例は、11-11-2010 から 01-01-2012 までの日数(461)を戻します。

```
@return(@hspnumtostring(@HspDateDiff (20101111,20120101)),Error);
```

@HspDateRoll

この関数は、noOfPeriods を startDate に加算した結果として翌日の日付を戻します。

構文

```
@HspDateRoll(startDate,noOfPeriods,periodType)
```

パラメータ	説明
startDate	日付をローリングする開始日。date 型である必要があります。
noOfPeriods	期間の数。負の値を指定した場合、日付は後方にローリングされます。これは整数である必要があります。
periodType	期間タイプは次の整数です: <ul style="list-style-type: none">・ 1: 日単位での日付のローリング・ 2: 月単位での日付のローリング・ 3: 四半期単位での日付のローリング・ 4: 半年単位での日付のローリング・ 5: 年単位での日付のローリング

ノート

戻り値は YYYYMMDD フォーマットの日付です。

開始日には YYYYMMDD フォーマットの日付、変数または実際の日付値を使用できません

例

この例では、日付を 1 か月前方にローリングします。

```
@HspDateRoll(20100101,1,2)
```

これは 20100201 を戻します。

例

この例は、20101001 の 1 四半期前の日付を取得します。

```
@HspDateRoll(20100101,-1,3)
```

@HspDateToString

この関数は、DD/MM/YYYY フォーマットで string 型の日付を戻します。

構文

```
@HspDateToString(NumericDateInput)
```

パラメータ	説明
NumericDateInput	日付は数値である必要があります。

例

この例は、20100101 を文字列に変換します。

```
@return(@hspdatetostring(20100101),error);
```

これは 01/01/2010 を戻します。

@HspGetMbrCount

この関数は、指定された範囲のメンバー数を戻します。

構文

```
@HspGetMbrCount(StringArray)
```

パラメータ	説明
StringArray	文字列値の配列

ノート

戻り値は数値です。

例

この例は、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーション HCP プラン・タイプの Budget Item ディメンションの"Element Changes"親のメンバー数を戻します。

```
@return(@Hspnumtostring(@HspGetMbrCount(@name(@DESC("Element Changes")))),error);
```

"Element Changes"には 25 個の子があるため、これは 25 を戻します。

@HspGetMbrIndex

この関数は、アウトラインの順序に基づいてディメンションのメンバーの位置を戻します。

構文

```
@HspGetMbrIndex(String[], String)
```

パラメータ	説明
String[]	文字列値の配列。特定の文字列の位置を報告する必要のある配列。
String	String[]内での位置を見つける必要のある実際の文字列。

ノート

戻り値は数値です。

例

この例は、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーション HCP プラン・タイプの Budget Item ディメンションの"Element Changes"親の下の"2nd Element Change"の位置を戻します。

```
@return(@HspNumtoString(@HspMbrIndex(@Name(@DESC("Element Changes")),@name("2nd Element Change"))),error);
```

これは 2 を戻します。

@HspNthMbr

この関数は、指定された範囲内の n 番目のメンバーを戻します。

構文

```
@HspNthMbr(MemberRange, PosIndex)
```

パラメータ	説明
MemberRange	文字列値の配列
PosIndex	ロケーションの数値

ノート

戻り値は文字列です。

例

この例は、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーション HCP プラン・タイプの Budget Item ディメンションの"Element Changes"親の 6 番目のメンバーを戻します。

```
@return(@name(@HspNthMbr(@name(@DESC("Element Changes")),6)),error);
```

これは"6th Element Change"を戻します。

@HspStringCompare

この関数は、2つの文字列を比較し、両方の文字列が同じである場合に"true"を戻します。

構文

```
@HspStringCompare(SrcString, TrgtStr)
```

パラメータ	説明
SrcString	ソース文字列。
trgtStr	ターゲット文字列。

ノート

この関数はブール値を戻します。

@HspOffsetIdx

この関数は、n 番目の異なる値であるポインタ・データ(n はそのデータに対するオフセット)を戻し、データ配列に基づいて関連する行を取得します。

このカスタム関数は、特定の目的に Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションを使用します。

構文

```
@HspOffsetIdx(DataList, StartDateList, EndDateList, BaseValue, OffSet, BaseDate)
```

パラメータ

DataList

StartDateList

EndDateList

BaseValue

OffSet

BaseDate

@HspStringCompareArray

この関数は、文字列を比較し、次に示す条件を満たす場合に次の数値(1、2、3)を戻します。

- 1: ソース文字列がターゲット文字列に存在する場合
- 2: ソース文字列がターゲット文字列に存在しない場合
- 3: ソース文字列またはターゲット文字列が NULL の場合

構文

```
@HspStringCompareArray(SrcString, trgtStr[])
```

パラメータ

説明

SrcString

ソース文字列。

trgtStr[]

ターゲット文字列配列。

例

この例は、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーション HCP プラン・タイプの Element ディメンションの"Salary Grades"親の子孫に "Unspecified Element"が存在するかどうかを確認します。

```
@HspStringCompareArray(@name("Unspecified Element"),@name(@DESC("Salary Grades")));
```

"Unspecified Element"は"Salary Grades"に存在しないため、これは2を戻します。

@HspConcat

この関数は、渡される値を連結して単一の文字列を戻します。

構文

```
@HspConcat (StringArray)
```

パラメータ	説明
StringArray	文字列の配列。

ノート

戻り値は1つの文字列です。

例

この例は、ログ内の"Element Changes"のすべての子を取得します。

```
@return(@HspConcat(@name(@list("1st Element Change",",", "2nd Element Change"))));
```

これは("1st Element Change","2nd Element Change")を戻します。

Smart View を使用した Planning メタデータの のインポートおよび編集

ノート:

この付録で説明するすべての手順は、Oracle Smart View for Office アプリケーション内で実行します。この機能を使用するには、プランニング管理拡張機能をインストールします。プランニング管理拡張機能をインストールするには、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドの EPM Workspace からの EPM System クライアントのインストールを参照してください。

Smart View アプリケーションを使用すると、Oracle Hyperion Planning メタデータに対して迅速にいくつかのタスクを実行できます:

- [Smart View](#) での Planning ディメンションのインポート
- [Smart View](#) でのメンバーの編集
- [Smart View](#) での Planning メンバーの追加
- [Smart View](#) でのメンバーの移動
- [Smart View](#) での共有メンバーの指定
- [Smart View](#) でのキューブの作成およびリフレッシュ

Smart View へのアクセスと、Smart View の機能およびコマンドの詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*を参照してください。

Smart View での Planning ディメンションのインポート

Oracle Hyperion Planning ディメンションを Oracle Smart View for Office にインポートすると、ディメンションのメンバーを簡単に追加、編集および移動できます。

Smart View でのディメンションとメンバーの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のディメンションおよびメンバーに関する項を参照してください。

- [Smart View](#) でのディメンションのインポート
- [Smart View](#) グリッドの使用

Smart View のディメンションのインポート

ノート:

Oracle Smart View for Office でディメンションをインポートするには管理者権限が必要です。

Oracle Hyperion Planning ディメンションを Smart View グリッドにインポートするには:

1. Smart View のリボンで、「**パネル**」をクリックします。
2. Smart View パネルから、「**Planning**」を選択します。
3. フォルダで「**ディメンション**」を右クリックします。フォルダの Planning ディメンションが表示されます。

ノート:

期間と属性のディメンションは表示されません。

4. ディメンション名を右クリックして「**ディメンションの編集**」を選択します。

Smart View グリッドの使用

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、迅速に Planning ディメンションのメンバーを追加、編集および移動できます。

- [Smart View グリッドの概要](#)
- [Smart View グリッドの表示](#)
- [Smart View グリッドの使用のガイドライン](#)

Smart View グリッドの概要

Oracle Smart View for Office グリッドは、2つのディメンションで構成されます。

- 一方の軸に Oracle Hyperion Planning ディメンション
- もう一方の軸にメタデータ・ディメンション

メタデータ・ディメンションは、メタデータ・メンバーのフラット・リストを表します。メタデータ・ディメンションの各メンバーは、対応する Planning ディメンションに対して有効な特定のメンバー・プロパティに対応します。メタデータのグリッド・データ・セルには、数値ではなく対応する特定のプロパティ値が保持されます。

Smart View グリッドの表示

Oracle Smart View for Office グリッドには、メンバー名を行、メンバー・プロパティを列として、Oracle Hyperion Planning ディメンションが表示されます。

Smart View グリッドで操作を実行する際のガイドラインは、[Smart View グリッドの使用のガイドライン](#)を参照してください。

ここに表示されるリボンは、従来の(Planning ではない) Smart View グリッドに類似していますが、含まれるオプションが少なくなっています。

「Smart View」リボンの詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のアド・ホック分析を参照してください。

Smart View グリッドの使用のガイドライン

Oracle Smart View for Office グリッドを使用して Oracle Hyperion Planning メタデータを編集する際には、次のガイドラインを参考にしてください。

- 次の機能は、Planning メタデータを使用する Smart View グリッドでは使用できません:
 - ピボット
 - POV にピボット
 - セル・テキスト
 - セル・ノート
 - サポート詳細
- データ・セルの値は、テキスト、数値または列挙です。
- 「親メンバー」を使用して、親/子の関係を指定または変更します。
- グリッドにおけるメンバーの位置は、アウトラインにおける兄弟の実際の位置を表しているとはかぎりません。
- 各メタデータ・グリッドを、対応する Planning ディメンションにリンクする必要があります。
- 各 Planning ディメンションの列は、Planning ディメンション・エディタで使用できるメンバー・プロパティのうち、対応するセットに基づいています。
- メタデータ・グリッドを開くと、異なるディメンションに再リンクできません。
- 対応する有効なメタデータ・メンバーのセットは、各ディメンションに固有です。
- Planning ディメンション・メンバーは、対応するディメンションにのみ有効です。

Smart View でのメンバーの編集

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、Oracle Hyperion Planning ディメンションのメンバーのプロパティをすばやく編集できます。

ノート:

メタデータ・グリッドの間合せは Planning ビジネス・レイヤーに対して実行され、Oracle Essbase との対話を必要としません。

Smart View でのディメンションとメンバーの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のディメンションおよびメンバーに関する項を参照してください。

Smart View でメンバーのプロパティを編集するには:

1. Smart View 内で、Planning ディメンションを Smart View グリッドにインポートします([Smart View でのディメンションのインポート](#)を参照)。

2. グリッドでメンバーのプロパティをハイライトします。
3. ドロップダウン・メニューで、値を選択します。

ノート:

変更されたセルは異なる色で表示されます。

4. 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

ノート:

複数のメンバーとプロパティに対する変更を、同じ「データの送信」操作で保存できます。「データの送信」操作が1つのメンバーに対して失敗した場合、Planning サーバーで操作が停止し、変更は保存されません。

Smart View での Planning メンバーの追加

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、Oracle Hyperion Planning デイメンションにメンバーをすばやく追加できます。

Smart View でのデイメンションとメンバーの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のデイメンションおよびメンバーに関する項を参照してください。

- [Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択](#)
- [Smart View でのメンバーの追加](#)
- [Smart View でのメンバーの追加のガイドライン](#)

Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択

新しいメンバーを Oracle Smart View for Office グリッドに追加するには、2種類のモードがあります:

- 「デイメンション編集者」モード
- リフレッシュせずに送信モード

「デイメンション編集者」モードでは、メンバーがデイメンションに追加されるたびに「リフレッシュ」を実行する必要がありますが、通常はリフレッシュせずに送信モードより高いパフォーマンスを得られます。また、「デイメンション編集者」モードを使用すると、リフレッシュの実行後に、グリッドで新規メンバーにアスタリスク(*)のマークが付けられます。リフレッシュせずに送信モードではリフレッシュを必要としませんが、通常はパフォーマンスが低く、新しいメンバーがマークされません。

ノート:

デフォルトでは、「リフレッシュ」を実行すると、新規メンバーにグリッドでアスタリスク(*)のマークが付けられます。Oracle Hyperion Planning アプリケーション・プロパティで SMART_VIEW_DIMENSION_EDITOR_NEW_MEMBER_SUFFIX を追加することによって、異なる記号を使用できます。

使用される個々のモードは Smart View 管理者によって制御されます。モードの選択は Planning アプリケーション・プロパティで決定されます。

Planning の「アプリケーション・プロパティ」で、Smart View グリッドにメンバーを追加するときのモードを選択するには:

1. **EPM Workspace** にログオンし、Planning にアクセスします。

(EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセスを参照してください。)

2. **Planning Web UI** の「アプリケーション・プロパティ」ページにアクセスします。
3. **SMART_VIEW_DIMENSION_EDITOR_PARITY_MODE** の値を **False** に設定します。

SMART_VIEW_DIMENSION_EDITOR_PARITY_MODE のデフォルト値は **False** です。値を **True** に変更すると、リフレッシュせずに送信モードになります。

4. Planning からログアウトします。
5. Planning に再びログインします。

ノート:

SMART_VIEW_DIMENSION_EDITOR_PARITY_MODE の値を変更した後、Planning サーバーを再起動する必要はありませんが、変更を反映するにはログアウトしてから再度ログインする必要があります。

Smart View でのメンバーの追加

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、Oracle Hyperion Planning デイメンションにメンバーをすばやく追加できます。

Smart View でのディメンションとメンバーの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のディメンションおよびメンバーに関する項を参照してください。

Smart View でメンバーを追加するには:

1. Smart View 内で、Planning デイメンションを Smart View グリッドにインポートします([Smart View でのディメンションのインポート](#)を参照)。
2. 新しいメンバーの名前を名前の列に入力します。

ノート:

数値の名前を持つメンバーを追加するには、その数値がデータでなくメンバー名であることをシステムに通知するために、数値メンバー名の前に単一引用符 (')を配置します。たとえば、123 という名前のメンバーを追加する場合、'123 と入力します。

3. 「リフレッシュ」をクリックします。

ノート:

管理者が、メンバー追加モードを「ディメンション編集者」に設定している場合は、メンバーを追加してから「リフレッシュ」を実行する必要があります。メンバー追加モードがリフレッシュせずに送信の場合、リフレッシュを実行する必要はありません。Smart View アプリケーションがどのモードを使用しているか確定できない場合には、管理者に問い合わせてください。

「リフレッシュ」を実行すると、新規メンバーにはグリッドでアスタリスク(*)のマークが付けられます。デフォルトのプロパティ・セットが、新しいメンバーに自動的に適用されます。デフォルトの「親メンバー」はディメンションのルート・メンバーです。

4. **オプション:** 任意のプロパティをデフォルト値(ルート・メンバー)から変更するには、グリッドで適切なセルをハイライトし、ドロップダウン・メニューから別の値を選択します。(Smart View でのメンバーの編集を参照してください。)

ノート:

「リフレッシュ」は、新しいメンバーでプロパティを変更する前に実行してください。「リフレッシュ」操作を行うと、変更した値があってもサーバーからのデフォルト値に置き換えられます。

5. 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

次の点に注意してください。

- 新しいメンバーのプロパティを変更するには、Smart View でのメンバーの編集を参照してください。
- メンバー名などのメンバー・プロパティは、Smart View のアプリケーションで設定され特定のロケールに基づいてローカライズできます。

Smart View でのメンバーの追加のガイドライン

- 新しいメンバーは、指定した親の下に最後の兄弟として追加されます。
- 親子の関係は、「親の名前」列のプロパティによって決まります。
- グリッドにおける新規メンバーの相対位置には影響されません。
- グリッドでの新しいメンバーの相対位置を、「データの送信」操作の実行後に変更することはできません。アド・ホック・グリッドに反映されたアウトラインで、新しいメンバーの実際の位置を確認するには、「ズーム・アウト」と「ズーム・イン」を続けて実行します。
- 無効な文字のチェックや重複する名前の確認など、新しいメンバー名の完全な有効性チェックは、「データの送信」操作中に実行されます。
- デフォルトのプロパティは、Oracle Hyperion Planning によって自動的に新しいメンバーに適用されます。特定のデフォルト・プロパティは、ディメンションのプロパティに基づいています。

Smart View でのメンバーの移動

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、ディメンション内の親から別の親にメンバーを迅速に移動できます。

Smart View でのディメンションとメンバーの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*のディメンションおよびメンバーに関する項を参照してください。

Smart View でメンバーを移動するには:

1. Smart View 内で、Oracle Hyperion Planning ディメンションを Smart View グリッドにインポートします([Smart View でのディメンションのインポート](#)を参照)。
2. グリッドの「親メンバー」列でメンバーをハイライトします。

ノート:

「親メンバー」プロパティを空にすると、「親メンバー」の値はデフォルトでルート・メンバーになります。

3. メンバー名と「親」列の交差に親の名前を入力します。
4. 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

ノート:

同じ「データの送信」操作で、複数のメンバーまたはサブツリーの移動を保存できます。「データの送信」操作が1つのメンバーに対して失敗した場合、Planning サーバーで操作が停止し、変更は保存されません。

Smart View でのメンバーの移動のガイドライン

- グリッドで空の親メンバーは、ディメンションのルート・メンバーを表します。
- 親メンバーの値は、Oracle Smart View for Office で使用されるメタデータ・ロード・ファイル内の対応する値に適用されるルールに従います。

Smart View での共有メンバーの指定

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、ディメンション内で共有するメンバーを簡単に指定できます。

ノート:

共有データ・ストレージ・オプションは、Smart View の通貨ディメンションのメンバーに使用できません。

Smart View で共有メンバーを指定するには:

1. 基本メンバーが存在していることを確認します。

2. グリッドの「**親メンバー**」列で基本メンバーをハイライトします。
3. 基本メンバーの親の名前の値を変更します。
4. 「**データ・ストレージ**」列で基本メンバーをハイライトします。
5. ドロップダウン・メニューで、「**共有**」を選択します。
6. 「**データの送信**」をクリックして、データを保存します。

「データの送信」操作によって、元の親メンバーおよびデータ・ストレージのプロパティで基本メンバーがリフレッシュされます。共有メンバーは、サーバー上で指定した親の下に追加されます。

ノート:

新しい共有メンバーは、Smart View グリッドに自動的に追加されません。グリッドに表示されるメンバーのリストは変更されません。

Smart View でのキューブのリフレッシュと作成

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、キューブのリフレッシュも新しいキューブの作成も簡単です。

Smart View でキューブをリフレッシュまたは作成するには:

1. Smart View のリボンで、「**パネル**」をクリックします。
2. Smart View パネルから、「**Planning**」を選択します。
3. フォルダ名を右クリックし、フォルダで「**ディメンション**」を選択します。フォルダにある「Oracle Hyperion Planning」ディメンションが表示されます。

ノート:

期間と属性のディメンションは表示されません。

4. ルート・ディメンションを右クリックし、「**データベースのリフレッシュ**」または「**データベースの作成**」を選択します。Smart View で、「データベースのリフレッシュ」ダイアログ・ボックスまたは「データベースの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「**リフレッシュ**」または「**作成**」を選択します。進行状況バーが表示され、リフレッシュや作成で完了したステップの割合が示されます。